


奈良県^{ごせ}御所市

條ウル神古墳

－範囲確認発掘調査報告－

平成31年(2019年)3月
御所市教育委員会

例 言

- 1 本書は、御所市教育委員会が実施した、御所市條に所在する條ウル神古墳の範囲確認発掘調査の成果報告書である。
- 2 本書には、1次調査および3～6次調査の成果を掲載した。
- 3 現地調査に際しては、地権者の方々はもとより、條地区の皆様にも多くのご協力をいただいた。記して深く感謝申し上げます。
- 4 現地での写真撮影は、1次調査については主に藤田和尊が行い、横穴式石室内部の全景等撮影は植田英介氏に依頼した。3～6次調査については現地での写真撮影を金澤雄太が行った。遺物の撮影は後藤愛弓・金澤が行った。
- 5 本書の執筆分担は目次に示し、全体の編集は金澤が行った。
- 6 本発掘調査に関わる記録類および出土遺物は、御所市教育委員会文化財課にて保管している。
- 7 本書における座標は世界測地系に基づき、標高は東京湾平均海面（T.P.）からの値である。
- 8 本書掲載の土層断面図は、地山をグレー、シルトブロックをドットで表した。
- 9 本書掲載の土器等実測図の断面は、須恵器を黒塗り、瓦器をグレー、土師器ほかを白抜きで表し、内外面の赤彩の範囲は朱塗り、黒斑の範囲はグレー、煤の範囲は  で表した。また、石器実測図の欠損部は黒塗りで、鉄器実測図の断面有機質はグレーで表した。
- 10 條ウル神古墳の調査成果の一部については、現地説明会や御所市教育委員会編 2003『古代葛城とヤマト政権』学生社などにおいて既に報告されているところもあるが、その後の調査成果を踏まえて検討した本書の内容をもって、現時点での認識とする。

目 次

例 言

第1章 地理的・歴史的環境	(金澤)	1
第1節 地理的環境		1
第2節 歴史的環境		1
第2章 調査の経緯と経過		5
第1節 條ウル神古墳の調査略史		5
第2節 調査に至る経緯と墳丘の現況		6
第3節 調査の経過		8
第4節 発掘調査・整理作業		14
第3章 横穴式石室の調査		16
第1節 石室内の堆積状況		16
第2節 横穴式石室		17
第3節 前庭部	(藤田)	26
第4節 出土遺物	(金澤)	26
第5節 横穴式石室小結		38
第4章 墳丘の調査		39
第1節 基本層序		39
第2節 横穴式石室の墳丘		39
第3節 横穴式石室南側の墳丘		53
第4節 墳丘小結		111
第5章 自然科学分析		112
第1節 横穴式石室及び家形石棺の使用石材	(奥田尚)	112
第2節 出土石材及び金属製品の材質調査	(奥山誠義・柳田明進)	117
第3節 出土ガラス玉の材質調査	(柳田・奥山)	122
第4節 條ウル神古墳出土のガラス玉類	(大賀克彦・田村朋美)	126
第6章 総 括	(金澤)	138
第1節 墳丘復元の可能性		138
第2節 横穴式石室の評価と築造時期		141
第3節 條ウル神古墳築造の歴史的意義		146
第4節 今後の課題		148
第5節 條ウル神古墳の保存と活用		149

図 版

報告書抄録

挿図 目次

図 1	條ウル神古墳の位置	1
図 2	周辺の主要遺跡分布図	3
図 3	條ウル神古墳見取図	5
図 4	條ウル神古墳石室略測図	5
図 5	條ウル神古墳周辺地形測量図	7
図 6	條ウル神古墳トレンチ配置図	9
図 7	石室床面堆積土土層断面図	16
図 8	横穴式石室実測図	19-20
図 9	家形石棺実測図	22
図 10	石棺蓋・身の遺物取り上げ区画と出土状況図	24
図 11	前庭部土層断面図	27-28
図 12	1次調査出土遺物実測図(1)	31
図 13	1次調査出土遺物実測図(2)	33
図 14	1次調査出土ガラス玉実測図(1)	36
図 15	1次調査出土ガラス玉実測図(2)	37
図 16	1トレンチ平面図	40
図 17	1トレンチ土層断面図	41
図 18	1トレンチ第1遺構面 遺構断面図	42
図 19	1トレンチ出土遺物実測図	43
図 20	2トレンチ平・土層断面図	43
図 21	5トレンチ平面・土層断面図	44
図 22	5トレンチ延長部平面・土層断面図	47-48
図 23	10トレンチ平面・土層断面図	49
図 24	10トレンチ第1遺構面 遺構断面図	50
図 25	10トレンチ北側サブトレンチ土器出土状況図	50
図 26	10トレンチ出土遺物実測図(1)	51
図 27	10トレンチ出土遺物実測図(2)	52
図 28	6トレンチ平面図	53
図 29	6トレンチ北壁土層断面図	55
図 30	6トレンチ北側サブトレンチ土器出土状況図	56
図 31	6トレンチ出土遺物実測図(1)	57
図 32	6トレンチ出土遺物実測図(2)	58
図 33	6トレンチ南・北拡張区第1遺構面 平面・遺構断面図	59-60
図 34	6トレンチ南・北拡張区第2遺構(墳丘)面 平面図	51-62
図 35	6トレンチ南・北拡張区土層断面図	63-64
図 36	6トレンチ拡張区出土遺物実測図(1)	67
図 37	6トレンチ拡張区出土遺物実測図(2)	68
図 38	7トレンチ平面・土層断面図	70
図 39	7トレンチ遺構断面図	71
図 40	7トレンチ遺構平面・断面図	71
図 41	7トレンチ出土遺物実測図	73
図 42	9トレンチ平面・土層断面図	75-76
図 43	9トレンチ遺構断面図	77
図 44	9トレンチ出土遺物実測図(1)	78
図 45	9トレンチ出土遺物実測図(2)	79
図 46	9トレンチ拡張区平面・遺構断面図	81-82

図 47	9 トレンチ拡張区土層断面図 (1)	83-84
図 48	9 トレンチ拡張区土層断面図 (2)	85
図 49	9 トレンチ拡張区出土遺物実測図 (1)	86
図 50	9 トレンチ拡張区出土遺物実測図 (2)	87
図 51	11 トレンチ平面図	88
図 52	11 トレンチ土層断面図	89
図 53	11 トレンチ遺構断面図	89
図 54	11 トレンチ遺構平面・断面図	90
図 55	11 トレンチ出土遺物実測図	92
図 56	8 トレンチ平面・土層断面図	93
図 57	8 トレンチ出土遺物実測図	94
図 58	3 トレンチ平面図	95
図 59	3 トレンチ土層断面図	96
図 60	3 トレンチ第 1 遺構面 遺構断面図	97
図 61	3 トレンチ出土遺物実測図	97
図 62	4 トレンチ平面・土層断面図	98
図 63	4 トレンチ出土遺物実測図	98
図 64	12 トレンチ平面・土層断面図	101-102
図 65	13 トレンチ平面・土層断面図	103-104
図 66	13 トレンチ出土遺物実測図 (1)	105
図 67	13 トレンチ出土遺物実測図 (2)	106
図 68	13 トレンチ出土遺物実測図 (3)	108
図 69	13 トレンチ出土石材実測図	109
図 70	H13 墳丘トレンチ西壁土層断面図	110
図 71	條ウル神古墳の石室材の石種	113
図 72	13 トレンチ落ち込み検出石材の石種	115
図 73	No.15 歩揺金具 (表面)	119
図 74	No.9 空玉片①	119
図 75	No.15 金糸	119
図 76	No.11 金銅板 (表面)	119
図 77	No.11 鉄刀片 (足金具) (表面)	119
図 78	No.13 螺旋状銀製品 (破断面)	119
図 79	No.11 銀板 (刀装具か) (表面)	120
図 80	No.9 銀箔	120
図 81	No.24 青銅鏡片 (破断面)	120
図 82	No.22 顔料付着土塊 (赤色顔料)	120
図 83	集石取上番号なし (赤色顔料) (左: XRF 結果、右: SEM 像)	120
図 84	No.15 平織布 (左: IR スペクトル、右: 繊維断面の SEM 像)	120
図 85	No.15 平織布のラミノグラフィ像 (スライス画像: 右は左図の拡大)	121
図 86	No.11 平織布 (左: IR スペクトル、右: 繊維断面の SEM 像)	121
図 87	No.11 平織布の SEM 画像	121
図 88	ガラス小玉の X 線透過撮影像	125
図 89	ガラス小玉 (抽出資料) の X 線透過撮影像	126
図 90	ガラス小玉の材質と分類 (1)	129
図 91	ガラス小玉の材質と分類 (2)	132
図 92	ガラス小玉の材質とストロンチウム同位対比	134
図 93	調査成果と想定墳丘盛土範囲	139
図 94	墳丘盛土と地山の関係模式図	140
図 95	大和の大型横穴式石室 (1)	143

図 96	大和の大型横穴式石室（2）	144
図 97	大和の大型横穴式石室（3）	145

挿表 目次

表 1	1次調査石室内出土遺物一覧	29-30
表 2	ガラス玉集計表	35
表 3	石室材の石種とみかけの長径	112
表 4	材質分析の結果（資料の種類ごとに配列）	118
表 5	調査対象のガラス玉	122
表 6	蛍光 X 線分析の測定条件	123
表 7	ガラス小玉の成分	123
表 8	ストロンチウム同位体比の分析結果	134
表 9	大和の大型横穴式石室一覧	142

図版 目次

図版 1	1. 條ウル神古墳と金剛・葛城山（東から） 2. 條ウル神古墳の現況（3次調査時、南西から）
図版 2	玄室と家形石棺
図版 3	1. 玄室玄門部 2. 玄室奥壁
図版 4	1. 玄室奥壁と右側壁 下半 2. 玄室奥壁と左側壁 下半
図版 5	1. 玄室左側壁（奥壁端）上半 2. 同下半 3. 玄室左側壁（奥壁寄り）上半 4. 同下半
図版 6	1. 玄室左側壁（中央部）上半 2. 同下半 3. 玄室左側壁（玄門寄り）上半 4. 同下半
図版 7	1. 玄室左側壁と前壁 2. 前壁 3. 玄室右側壁と前壁
図版 8	1. 玄室右側壁（玄門端）上半 2. 同下半 3. 玄室右側壁（玄門寄り）上半 4. 同下半
図版 9	1. 玄室右側壁（中央部）上半 2. 同下半 3. 玄室右側壁（奥壁寄り）上半 4. 同下半
図版 10	閉塞部（東から）
図版 11	家形石棺
図版 12	1. 家形石棺 正面（玄門から） 2. 家形石棺 蓋上堆積状況（玄門から）
図版 13	1. 家形石棺 正面（奥壁から） 2. 家形石棺 蓋 北西隅
図版 14	1. 家形石棺内部（奥壁側から） 2. 家形石棺内南東隅拡大（奥壁側から）
図版 15	1. 家形石棺玄門側短側面試掘坑内遺物検出状況（上が石棺） 2. 前庭部東西アゼ北壁土層断面

- 図版 16 1. 1 トレンチ第 1 遺構面 (北から)
 2. 同第 2 遺構面 (北から)
 3. 同第 3 遺構面 (北から)
- 図版 17 1. 1 トレンチ第 1 遺構面 SK1 ~ 3 (東から)
 2. 1 トレンチ a - a' 土層断面 (北から)
 3. 2 トレンチ完掘 (北西から)
- 図版 18 1. 5 トレンチ完掘 (南から)
 2. 5 トレンチ延長部完掘 (南西から)
 3. 5 トレンチ延長部墳丘盛土土層断面 1
 4. 同 2
- 図版 19 1. 10 トレンチ第 1 遺構面 (東から)
 2. 同第 2 遺構面 (東から)
 3. 同サブトレ内須恵器出土状況 (南東から)
 4. 同サブトレ内須恵器出土状況 (南上から)
- 図版 20 1. 10 トレンチ北壁土層断面 1
 2. 同 2
 3. 同 3
- 図版 21 1. 6 トレンチ第 1 遺構面 (東から)
 2. 同第 2 遺構面 (南東から)
 3. 同北壁土層断面 (盛土東端)
- 図版 22 1. 6 トレンチ北壁墳丘盛土土層断面 1
 2. 同 2
 3. 同 3
 4. 同 4
 5. 同 5
 6. 6 トレンチ南壁土層断面
 7. 6 トレンチ 12 層瓦器出土状況 (南西から)
 8. 6 トレンチ 55 層土器出土状況 (東から)
- 図版 23 1. 6 トレンチ拡張区墳丘盛土上面検出状況 (南から)
 2. 同 (北から)
 3. 6 トレンチ第 2 北拡張区第 1 遺構面 (北東から)
- 図版 24 1. 6 トレンチ第 2 北拡張区第 2 遺構面 (南東から)
 2. 同南壁土層断面
 3. 同南壁墳丘盛土土層断面東半
 4. 同南壁墳丘盛土土層断面西半
- 図版 25 1. 6 トレンチ第 2 北拡張区サブトレンチ北壁土層断面
 2. 同サブトレンチ北壁墳丘盛土土層断面西半
 3. 同サブトレンチ北壁墳丘盛土土層断面東半
 4. 同北壁土層断面
- 図版 26 1. 6 トレンチ南拡張区南壁土層断面
 2. 7 トレンチ第 1 遺構面 (東から)
 3. 同第 2 遺構面 (東から)
- 図版 27 1. 7 トレンチ第 2 遺構面 (北東から)
 2. 同 SD12 土器出土状況 (南から)
 3. 同 SD14 土層断面 (南東から)
- 図版 28 1. 9 トレンチ第 1 遺構面 (東から)
 2. 同第 2 遺構面 隍 (南東から)
 3. 同東壁墳丘盛土土層断面 (南東から)
- 図版 29 1. 9 トレンチ 隍埋土 (南西から)
 2. 9 トレンチ拡張区第 1 遺構面 (南東から)
 3. 同第 2 遺構面 (南東から)
- 図版 30 1. 9 トレンチ拡張区第 2 遺構面 (南西から)
 2. 同 A' - A'' 墳丘盛土土層断面 (南から)
 3. 同 A' - A'' 墳丘盛土土層断面 1
 4. 同 2
- 図版 31 1. 9 トレンチ拡張区 A' - A'' 墳丘盛土土層断面 3
 2. 同 4
 3. 同 A'' - A''' 墳丘盛土土層断面 1

4. 同2
 5. 同墳丘盛土上遺物出土状況（東から）
 6. 同墳丘盛土内（B-B' サブトレ）遺物出土状況（南から）
- 図版 32
1. 11 トレンチ第1 遺構面（東から）
 2. 同第1 遺構面西半（南東から）
 3. 同第2 遺構面（南東から）
- 図版 33
1. 11 トレンチ第2 遺構面（南から）
 2. 同第3 遺構面（南東から）
 3. 同SD15 土器検出状況（南東から）
- 図版 34
1. 8 トレンチ完掘（南東から）
 2. 3 トレンチ第1 遺構面（南から）
 3. 同第1 遺構面拡張後（南東から）
- 図版 35
1. 3 トレンチ第2 遺構面（南から）
 2. 同SD21 断面（南から）
- 図版 36
1. 4 トレンチ完掘（北西から）
 2. 12 トレンチ西半完掘（南西から）
 3. 同東半完掘（北東から）
- 図版 37
1. 12 トレンチ南壁墳丘盛土土層断面 1
 2. 同2
 3. 同3
 4. 同4
 5. 同5
 6. 同6
- 図版 38
1. 13 トレンチ西半完掘（南西から）
 2. 同東半完掘（北東から）
 3. 同落ち込み検出状況（東から）
- 図版 39
1. 13 トレンチ落ち込み検出状況（北東から）
 2. 13 トレンチ北壁墳丘盛土土層断面 1
 3. 同2
 4. 同3
 5. 同4
- 図版 40 H13 墳丘トレンチ完掘（南から）
- 図版 41 1次調査出土遺物（1）（S ≒ 1/ 1）
- 図版 42 13 トレンチ落ち込み出土石材（S ≒ 1/ 6）
- 図版 43 1次調査出土遺物（2）（S ≒ 土器・埴輪 1/ 3、鉄器 1/ 2）
- 図版 44
1. 1 トレンチ出土遺物（S ≒ 1/ 3）
 2. 10 トレンチ出土遺物（1）（S ≒ 土器・埴輪 1/ 3、石器 1/ 1）
- 図版 45 10 トレンチ出土遺物（2）（S ≒ 1/ 3）
- 図版 46 6 トレンチ出土遺物（1）（S ≒ 1/ 3）
- 図版 47
1. 6 トレンチ出土遺物（2）（S ≒ 1/ 3）
 2. 6 トレンチ拡張区出土遺物（1）（S ≒ 土器・埴輪 1/ 3、石器 1/ 1）
- 図版 48
1. 6 トレンチ拡張区出土遺物（2）（S ≒ 土器 1/ 3、石器 1/ 1）
 2. 7 トレンチ出土遺物（S ≒ 土器 1/ 3、石器 1/ 1）
- 図版 49 9 トレンチ出土遺物（S ≒ 1/ 3）
- 図版 50 9 トレンチ拡張区出土遺物（S ≒ 1/ 3）
- 図版 51
1. 11 トレンチ出土遺物（S ≒ 土器 1/ 3、石器 1/ 1）
 2. 3・4・8 トレンチ出土遺物（S ≒ 1/ 3）
- 図版 52 13 トレンチ出土遺物（S ≒ 土器 1/ 3、鉄器 1/ 2）
- 図版 53 出土鉄製品 X線透過撮影像
- 図版 54 ガラス小玉のデジタルマイクロスコープ画像（1）
- 図版 55 ガラス小玉のデジタルマイクロスコープ画像（2）
- 図版 56 ガラス小玉の分類

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境 (図1)

御所市の位置 御所市は奈良県の中部に位置する面積 60.58km² の都市であり、北は葛城市・大和高田市、西は大阪府千早赤阪村、南は五條市、東は橿原市・高取町・大淀町に接している。市域の北部は低平な奈良盆地の西南端に位置し、西部には金剛・葛城山がそびえ、南東部には竜門山地西端にあたる巨勢山などの丘陵に跨る。地形的には、市の南に中央構造線がはしる、内帯と外帯の接する地域といえ、自然景のみならず人々の生活や風習等において奈良盆地と吉野山地との漸移・連結地帯をなしている (堀井 1965)。また、盆地各所への利便性もさることながら、西は金剛・葛城山の間にある水越峠を通じて大阪方面へつながり、南は風の森峠を越えて五條・吉野・和歌山方面へ至る、交通の結節地としても重要な役割を果たしている。

條ウル神古墳の立地 今回調査を行った條ウル神古墳は、広くは奈良盆地の南東端、領下花崗岩を基盤とする巨勢山丘陵から北に伸びる尾根上に位置する。

條ウル神古墳の南側に隣接し東西に伸びる市道室・出走線は、現在の国道 309 号線が敷設される以前の東西主要道であり、古墳の東約 300 m を南北に伸びる市道秋津 102 号線も国道 309 号線が敷設される前の南北主要道であることから、当地が古くから交通の要衝地であったことが知られる。加えて、古墳の南東にある大口峠は、紀路や巨勢路とも呼ばれる中街道から奈良盆地へ入る玄関口となっていることも、條ウル神古墳の立地上重要な要素といえる。

第2節 歴史的環境 (図2)

縄文時代 御所市域では旧石器時代の遺跡は現状で確認されておらず、縄文時代になって初めて人類の痕跡を見出すことができる。明確な遺構が確認されている遺跡はそれほど多くないが、観音寺本馬遺跡において後期の竪穴式住居や土壙墓、晩期の平地式住居や水場遺構、土器棺墓群 (本村 2009、岡田編 2013、木許・西村編 2015)、玉手遺跡において晩期の平地式住居や土器棺墓群が検出されており (木許ほか編 2017)、近接する橿原市曲川遺跡なども含めて具体的な集落の様相について議論できる下地が整ってきている。またこれら遺跡では、前者で半裁柱、後者で漆塗糸玉といった北陸地域でみられる遺構・遺物が多く確認されており、当時の交流の一端が窺われる。加えて、伏見遺跡では中期末～後期中葉 (廣岡・十文字 2005)、南郷遺跡地藏谷地区では中期末～後期初頭

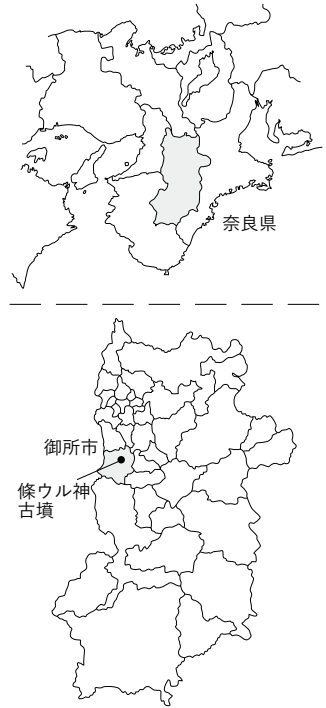


図1 條ウル神古墳の位置

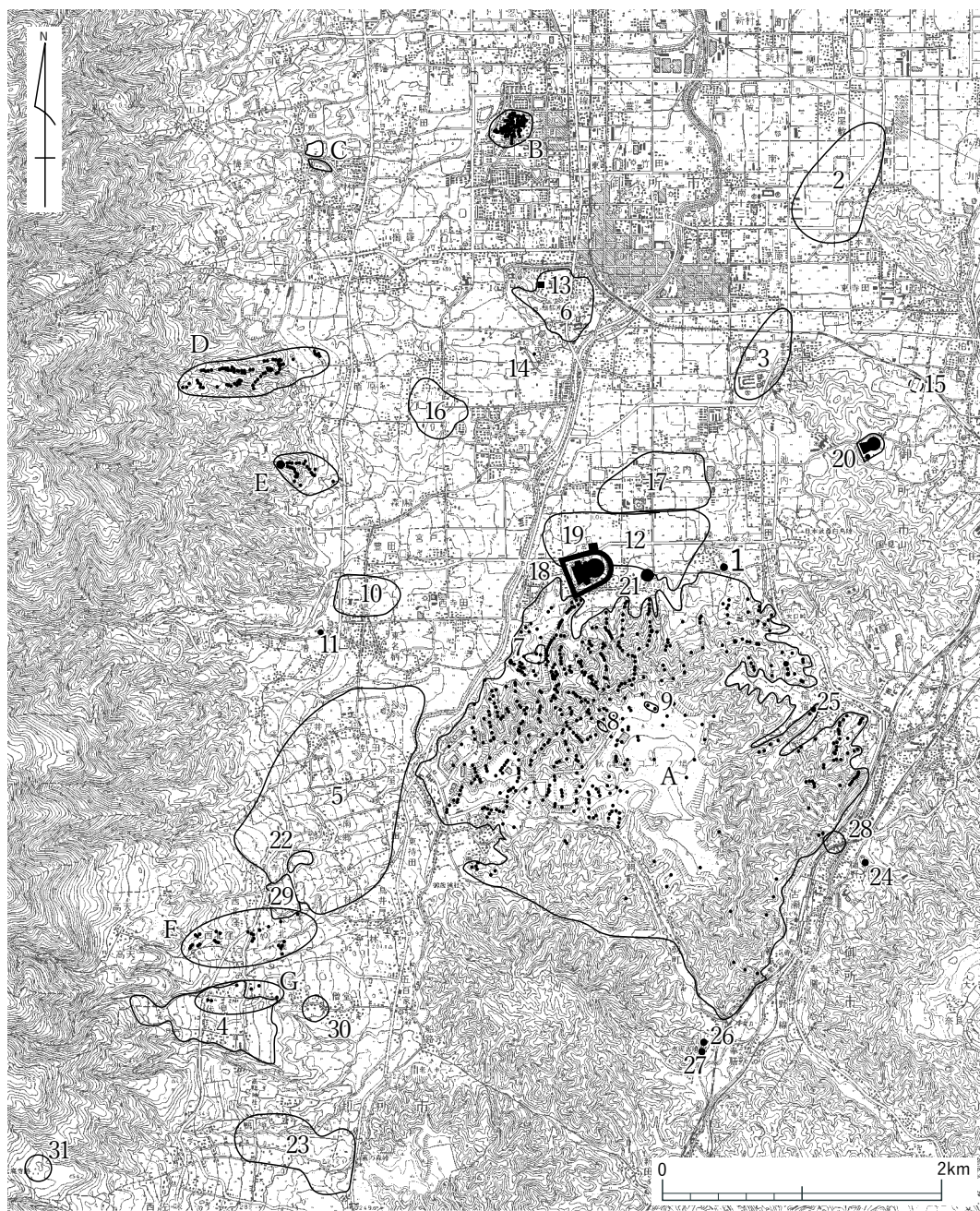
の土器が多く出土しており（坂編 2000）、付近に集落の存在が想定できる。縄文時代の遺物の出土は山麓部を中心に比較的多く認められ、後期～晩期のものが多い中で前期に遡るものも少数ではあるが玉手遺跡などで確認されている（松田 1997）。

弥生時代 弥生時代の代表的な遺跡には鴨都波遺跡があり、遺構や遺物の豊富さから弥生時代を通じて営まれた拠点的大集落と考えられる（木許編 1992、藤田・尼子編 1992 ほか）。高地性集落では、巨勢山丘陵上に巨勢山境谷遺跡（藤田編 1985、木許編 2007 ほか）、巨勢山中谷遺跡（御所市教育委員会 1989）、巨勢山八伏遺跡（御所市教育委員会 1990）などが後期になって営まれることが知られている。また、名柄遺跡よりやや南西のところでは外縁付鈕Ⅱ式の銅鐸と多鈕細文鏡が発見されており、青銅器埋納地として古くから著名である（高橋 1919）。近年の発掘調査では、観音寺本馬遺跡において方形周溝墓群が検出され墓域の様相が（鈴木編 2014）、秋津・中西遺跡において広大な水田遺構や埋没林が検出され生産域の様相が、それぞれ明らかとなっている（松岡 2011、岡田・松岡 2012、本村・中野 2013、岡田ほか 2013、岡田・木村 2015、岡田・中野 2015、絹島 2015）。後者については、全国でも最大規模のものであり、秋津・中西遺跡周辺が有数の穀倉地帯であったことを示していると考えられる。

古墳時代 古墳時代に入ると、前期では鴨都波 1 号墳が著名である（藤田・木許編 2001）。一辺約 20 m の小規模な方墳ながら、4 面の三角縁神獸鏡や方形板革綴短甲、漆塗靴といった豊富な副葬品が出土した。墳丘と副葬品に見られる格差は当該期の南葛城地域を考える上で重要な視点となる。その他にも西浦古墳（梅原 1922）やオサカケ古墳（島本 1938）、巨勢山 419 号墳（藤田編 2002）などが前期の古墳として知られているが、資料状況が良くないこともあり、鴨都波 1 号墳との関係を含めて十分に検討が及んでいない。

集落に関しては鴨都波遺跡において若干様相がわかっているものの（豊岡 1989、藤田・尼子編 1992）、その他の遺跡に関しては顕著な遺構は認められず、梶原遺跡において土坑からまとまった土器が出土している程度であった（藤田編 1994）。しかし近年の発掘調査によって、秋津・中西遺跡から前期前半の方形区画施設や独立棟持柱をもつものを含む多数の掘立柱建物、竪穴式住居が検出され（米川・菊井 2010、岡田 2011、岡田・松岡 2012、岡田・中野 2015）、名柄遺跡から前期前半の住居や良好な土器群が検出される（佐々木 2012）など、重要な成果があがってきている。

中期になると、突如として墳長 238 m を誇る大前方後円墳の室宮山古墳が築造される（秋山・網干 1959、木許編 1996、藤田・木許編 1999）。北側の周堤に接するネコ塚古墳という陪冢をもち（梅原 1922、関川 1989）、埋葬施設には長持形石棺を納めた竪穴式石室を有するなど南葛城地域の中でも隔絶した内容であり、その出現に対する歴史的評価は今後も慎重に議論していく必要がある。その後は、やや規模を縮小させながらも墳長 149 m の前方後円墳である掖上籬子塚古墳が築造されるが（楠元編 1978 ほか）、その立地が曾我川流域へと移る点は先行する室宮山古墳との関係を考える上で注意が必要である。また、室宮山古墳の東側に位置する径約 50 m の円墳であるみやす



1. 條ウル神古墳 2. 観音寺本馬遺跡 3. 玉手遺跡 4. 伏見遺跡 5. 南郷遺跡 6. 鴨都波遺跡 7. 巨勢山境谷遺跡
 8. 巨勢山中谷遺跡 9. 巨勢山八伏遺跡 10. 名柄遺跡 11. 名柄銅鐸・銅鏡出土地 12. 中西遺跡 13. 鴨都波1号墳
 14. 西浦古墳 15. オサカケ古墳 16. 橋原遺跡 17. 秋津遺跡 18. 室宮山古墳 19. ネコ塚古墳 20. 掖上罐子塚古墳
 21. みやす塚古墳 22. 極楽寺ヒビキ遺跡 23. 鴨神遺跡 24. 権現堂古墳 25. 新宮山古墳 26. 水泥北古墳 27. 水泥南古墳
 28. 巨勢寺 29. 二光寺廃寺 30. 朝妻廃寺 31. 高宮廃寺跡
 A. 巨勢山古墳群 B. 石光山古墳群 C. 小林古墳群 D. 石川古墳群 E. 吐田平古墳群 F. 北窪古墳群
 G. ドンド垣内古墳群

図2 周辺の主要遺跡分布図

塚古墳も、室宮山古墳との前後関係が難しいが興味深い存在である（網干 1959）。

中期の集落としては、金剛山東麓の扇状地上に広がる南郷遺跡が特筆されよう（坂編 1996 ほか）。広い範囲に居住・生産・祭祀の要素が散在しているとともに、渡来系要素の強い集落であり、葛城氏の支配拠点と考えられている。南郷遺跡内に所在する極楽寺ヒビキ遺跡では、室宮山古墳で出土した家形埴輪に類似する構造の建物跡が検出され、古墳の被葬者と集落との関係を考える上でこの上ない成果といえる（北中編 2007）。その他にも、名柄遺跡で首長居館と考えられる遺構が（藤田 1991）、鴨神遺跡において中期後半と考えられる道路遺構が確認されている（近江編 1993）。

後期は大型古墳の分布が変化し、巨勢谷に大型の横穴式石室墳が築造されるようになる。主要なものとして、樋野権現堂古墳（佐藤 1916、河上 2001）、新宮山古墳（奈良県教育委員会 1980 ほか）、水泥北古墳、水泥南古墳（網干 1961b ほか）があげられ、高取町域の市尾墓山古墳（河上編 1984 ほか）、市尾宮塚古墳（木場編 2018）なども含めて巨勢氏との関連が想定されている。本書で報告する條ウル神古墳は、それらと地理的にはやや離れているが、横穴式石室の形態が巨勢谷のものと類似するとの指摘があり、その破格の規模とともに注目されてきた（御所市教育委員会編 2003、金澤 2015）。條ウル神古墳との関連では、正報告の刊行が待たれるものとして、条池北・南古墳が存在する（田中 1984）。特に条池南古墳については、條ウル神古墳と同様、横穴式石室の平面形が巨勢谷の例と類似し、家形石棺においても石枕を作り付ける点で樋野権現堂古墳と共通点がある。條ウル神古墳の周辺地域と巨勢谷とのつながりを考える上で外すことのできない古墳といえよう。

群集墳に関しては、総数 700 基を超える巨勢山古墳群（藤田編 1987）や葛城山東方の独立丘陵上に立地する石光山古墳群（河上ほか編 1976）、葛城山東側斜面の尾根上に位置する小林古墳群（藤田 1987）や石川古墳群（白石 1974）、吐田平古墳群（網干 1961a）、金剛山の東側斜面尾根上に位置する北窪古墳群（末永 1932、廣岡 2002 ほか）やドンド垣内古墳群（十文字編 2007 ほか）などが存在する。これらの古墳群はおおむね古墳時代後期を中心とするものであるが、中期に築造が開始されるものや終末期にまで築造が続くものも存在している。このような状況から、金剛・葛城山東麓部は後期を中心に墓域として広く利用されていたと考えられ、それらの築造主体や古墳群間の関係等については今後の調査・検討が待たれる。

後期の集落については情報が少ないが、鴨都波遺跡や南郷遺跡で竪穴式住居などの遺構が確認できており、集落が継続して存在していたことがわかる（藤田・尼子編 1992、阪本編 2002 ほか）。ただし、集落の規模などはよくわかっていないため、今後の調査成果に期待するところが大きい。

古 代 古代には寺院の造営が盛んに行われている。伽藍配置が復元できるものは巨勢寺に限られるが（河上・木下編 2004）、近年の調査で新たに検出された二光寺廃寺（廣岡 2006）では、金堂と考えられる礎石建物の一部が検出されるとともに、その周囲から多量の埴輪や瓦が出土し、大きな成果が上がっている。その出土瓦の中には、近隣の朝妻廃寺（前園ほか 1978、前園 1981）、高宮廃寺（松田ほか 1993）の瓦と同範のものがあり、密接な関連を有する可能性が考えられる。

第2章 調査の経緯と経過

第1節 條ウル神古墳の調査略史

既出の資料において、條ウル神古墳について最初に触れたものは、明治26年の野淵龍潜による『大和國古墳墓取調書』である(図3、秋山編1985)。この中で記された見取図には、「第四五一號 葛上郡秋津村大字富田字ウル神 第三百十八番 古墳反別壺畝七歩 官有地」と記述されている。富田という大字は條の東に隣接しているため錯誤かと思われるが、墳丘の大きさは、約122㎡、高さ約1.8m、根廻り約41.8mであり、現在大蔵省の所有地となっている墳頂部の一角のみと認識していたようである。図中に埋葬施設に関する描写はなされておらず、調査が行われた当時は横穴式石室が開口していなかったのかもしれない。

取調書には、「村人ノ傳フル所ニ依レハ塚底ニハ石棺三筒ヲ埋ミアリテ其一筒ハ棺蓋ノ処ニ錠ヲ下シアリ七八年前開墾ヲ試シモノノ説ナリト然ルニ其開墾者ハ幾何モナク病死シ遂ニ其家断絶シタリ是レ開墾の祟リナリトテ其後里人恐レテ一步モ入レスト他ニ一モ資クルベキ材料ナシ」と記述されており、石棺が3つあるような記述になっている点

には注意を要する。

その後、大正5年に刊行された『奈良縣史跡勝地調査会報告書』では、條ウル神古墳の墳丘や横穴式石室の詳細な観察所見が、西崎辰之助によって報告されている(図4、西崎1916)。その報告によれば、墳丘は段築のある前方後円形で、規模は南北約2町(220m)、東西約1町(110m)、南を除く3方に濠の痕跡があるとする。また、後円部には花崗岩を用いた東向きに開口する両袖式横穴式石室があ

第四五一號
葛上郡秋津村大字富田
字ウル神
第三百十八番
古墳反別壺畝七歩
官有地

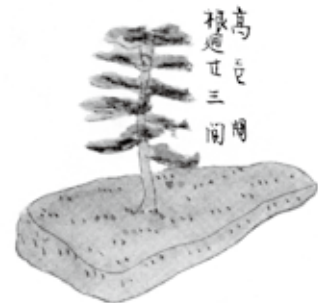


図3

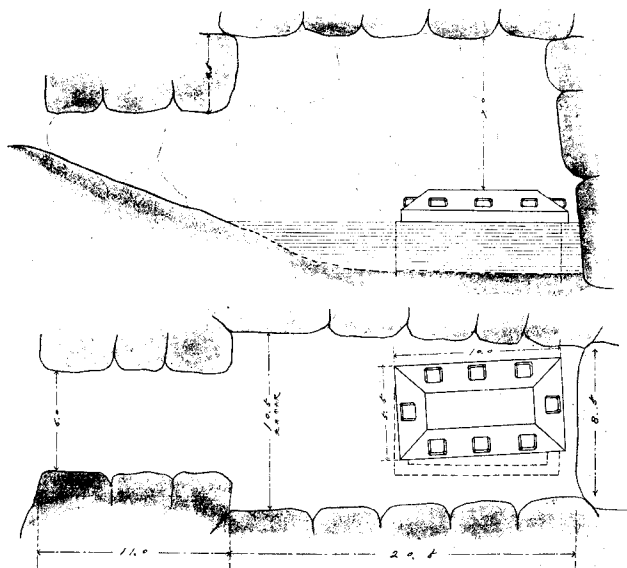


図4 條ウル神古墳石室略測図(西崎1916)

り、玄室には縄掛突起を8つ有する砂岩質の石棺蓋があり、棺上には腐蝕した鍍金銅片や瑯玕質の小玉が散乱しているとされている。略測図に記された寸法は、玄室長20.5尺(約6.2m)、玄室幅8.5～10.5尺(約2.6～3.2m)、玄室天井幅6.0尺(約1.8m)、石棺蓋から玄室天井までの高さ9.0尺(約2.7m)、前壁高4.5尺(約1.4m)、羨道長11.0尺(約3.3m)、羨道幅6.0尺(約1.8m)、石棺蓋は長辺10.0尺(約3.0m)、短辺5.5尺(約1.7m)であった。

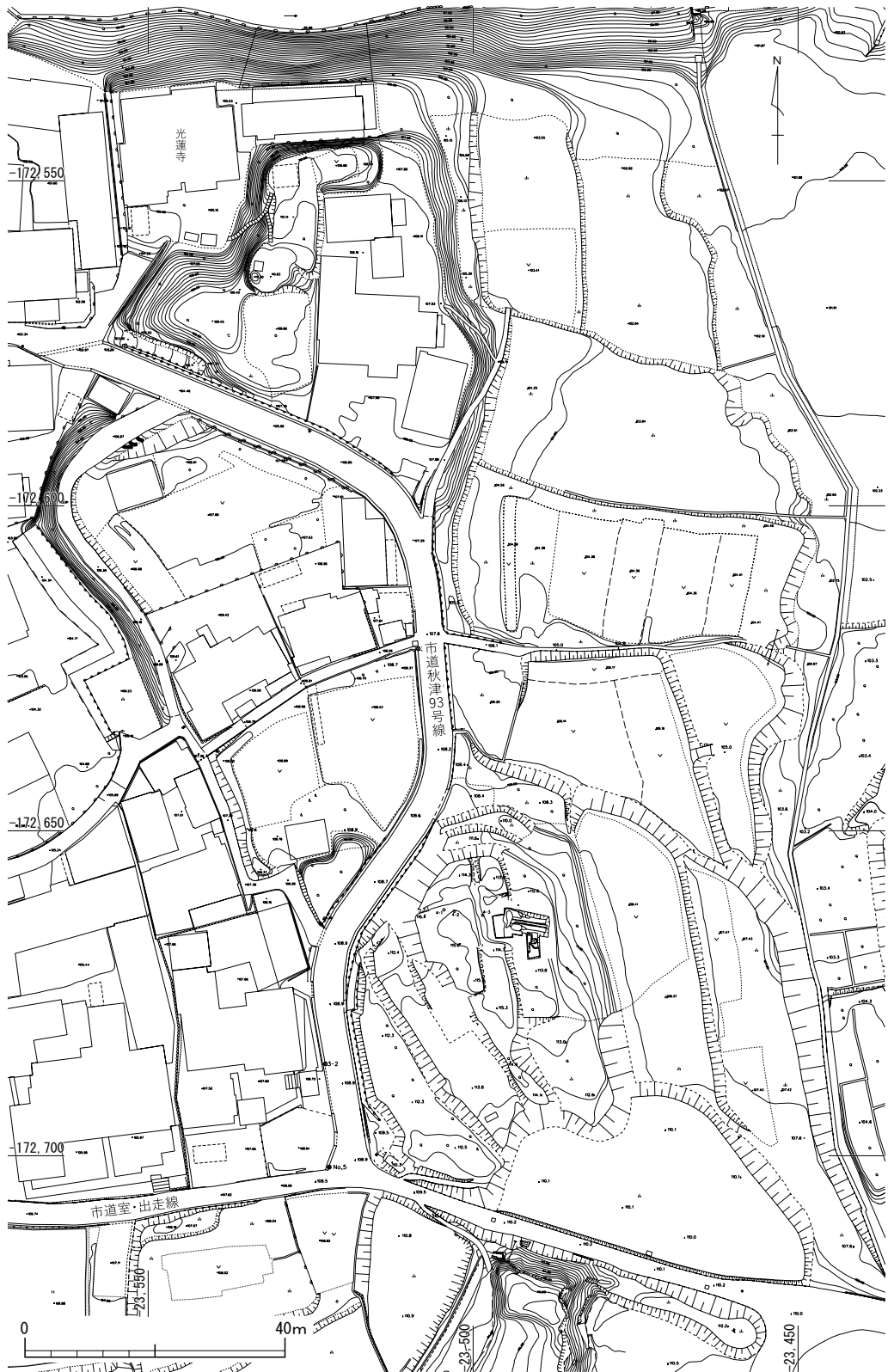
墳丘・石室ともに報告の規模があまりに大きいこと、また、述べられている石棺蓋の形状がやや特異であることなど、にわかには信じ難い内容であったことに加え、報告後の周辺地形の改変が進行し、横穴式石室の開口部が現地で確認できなくなってしまったこともあり、この西崎報告は後世の疑念を免れなかった。

その後、昭和47年に刊行された奈良県遺跡地図では、16-B-318古墳として登載され、横穴式石室をもつ径20mの円墳とされていた(奈良県教育委員会1972)。昭和59年に実施された巨勢山古墳群の分布調査においても、古墳の規模等については遺跡地図の情報が踏襲され、改めて巨勢山658号墳、38支群12条ウル(穴)神古墳として位置づけられることになり、現在に至っている(田中1984)。これらの分布調査の記録には石室の詳細について何らの記述もみられないため、少なくともこれらの時点では既に石室開口部は埋没してしまっていたと考えられる。

第2節 調査に至る経緯と墳丘の現況

調査に至る経緯 条ウル神古墳の南側、巨勢山丘陵に広がる巨勢山古墳群は、総数700基を超える列島最大級の群集墳であるが、ゴルフ場や工業団地、土砂採取などにより既にその2割程度が消失しており、従来よりその保存が急務となっていた。そこで御所市教育委員会は、巨勢山古墳群のうち主要な部分を国史跡として指定し保存する方向で奈良県教育委員会文化財保存課および文化庁と協議を重ね、平成13年度事業として、巨勢山古墳群の性格を確認し、保存のための基礎資料を得ることを目的として、複数の古墳において測量・発掘調査を実施した。その中の1つが、上述のような疑念を呈せられてきた条ウル神古墳の石室の所在や残存状況を確認し、石室の実測図を作成するための発掘調査であった。

墳丘の現況 墳丘の現況について述べておくと(図5)、上述の通り、南側の市道室・出走線(以下、東西市道と呼ぶ。)と西側の市道秋津93号線(以下、南北市道と呼ぶ。)が交差する地点の北東角に位置し、全体が耕作地として利用されている。高まりとして残っている部分は、標高114～115mのあたりが古墳の占地する尾根の頂上となっており、その東西を段々畑として成形されている。西側は2段に成形され、上段は標高113.5m前後、下段は標高約112.3mで平坦面を成しており、そのまま擁壁を介して南北市道に接している。東側は3段に成形され、上段がやや高く標高113.0m前後、中段が108.4m前後、下段が107.4m前後で平坦面を成している。下段のさらに東側には小河川が北流しており、谷底状を呈す。



南側の東西市道に北接している畑地は、標高約 110.0 m の平坦地になっており、敷地北西部は墳丘の高まりを大きく削り取っていることがわかる。東西市道のさらに南側には、古墳の占地する尾根が続いており、東側は土砂採取によって崖面となっているが、西側については段々畑として利用されている。

墳丘の北側は、標高約 111.6 m、標高約 111.0 m の高さに通路状に細かな段が形成されており、その下は東側中段と同じく標高約 108.4 m に段があり、その下は標高約 106.1 m、104.4 m に広い耕作面が作られている。

南北市道よりも西側については、広く宅地化が進んでおり、地形の旧状を窺い知ることが難しい。墳丘から南北市道を挟んですぐ北西には、古墳の占地する尾根の延長部かと思われる小さな高まりが残されているが、その頂部は平坦面となっており、既に大きな削平を受けていることが容易に推測できる。そしてその小丘の北側には、標高 108.5 m 前後の高さで平坦な耕作面が作られており、尾根の多くを削平しているものと考えられた。

この尾根の先端は、南北市道が北西へ方向を換える地点よりも北側へ続いており、ここの尾根頂部も大きく削平され、現在は民家の他に浄土真宗光蓮寺が存在している。先述の西崎報告では、「其一端に寺院民家等散在せり。」と記述されていることから、この尾根先端までを古墳の墳丘として捉えていたものと思われる。しかし、南北市道沿いの崖面、特に光蓮寺の南側に露出している地層を観察すると、そこで確認できるのは地山と思われる黄褐色の地層のみであり、古墳の盛土と判断できる土は全く確認できなかった。測量図を見ると、確かに墳丘の高まりから北西方向に前方部状に地形の高まりを見ることができ、そもそも古墳自体が尾根上に作られていることを考えると、この前方部状の高まりが前方部であるのか、旧地形の尾根を反映しているのかを判断することは、測量図の読図だけでは困難な状態であった。

第3節 調査の経過（図6）

（1）巨勢山古墳群の内容確認調査

1次調査 上述のとおり、條ウル神古墳の1次調査は、史跡指定に向けた巨勢山古墳群の内容確認調査の一環として行われた。平成14年1月11日より現地での調査が開始され、残存する墳丘の東側に露出していた、石室石材と思われる石の付近に調査区を設定し掘削を始めた。するとほどなく、露出石材の下に空洞があることがわかり、そこから内部を観察すると、石室の奥行きや石棺の蓋、堆積土の状況などが観察でき、露出石材が最も羨道寄りの玄室天井石であることがわかった。

調査区を拡げ、より下段の部分で開口部を確認できたため、土層の記録を取りながら石室内への進入路を確保し、1月22日に石室内部への進入を果たした。石棺蓋上に遺物の散乱があることもこの時点で確認できたため、ここからは開口部と石室内の調査を並行して進めていくこととなった。

石室は、壁体の清掃を行った上で図面の作成を行った。石室内堆積土については、基本的に掘削



図6 条ウル神古墳トレンチ配置図

を行っていないが、石棺身や石室床面の高さを確認する目的で、一部試掘坑を設けて掘削を行った。試掘坑内では、石棺身の底や敷石と思われる石材を確認するとともにいくつかの遺物も検出したが、試掘坑外に広がっていたため取り上げは行わず、図面等の記録を作成した上で埋め戻した。

石棺蓋上の遺物は、出土状況写真を撮影後、棺蓋上を計 27 の区画に分けて取り上げ作業を行い、合わせて朱の残存範囲も記録に残した。石棺内については、溜まっていた水の除去を行った後、石棺内堆積土の除去を行った。掘削に際しては、棺内を 8 の区画に分け、遺物の取り上げを行った。

開口部については、墳丘盛土や墓道の掘り込み、閉塞石などの関係に留意しながら掘削を進め、適宜土層図や写真等の記録を作成した。途中、後述する調査委員会の現地視察時に、追葬面について土層の誤認がある可能性を指摘いただき、改めて土層の検討を行った結果、追葬面の墓道を認識することができた。

墳丘端の確認については、トレンチを 1 箇所設けたものの墳端を確認することはできなかった。

なお、調査成果がある程度出揃った 3 月 14 日には報道関係者向けの記者発表を行い、3 月 16 日以降は折りをみて地元住民向けの現地説明会を行った。そして一般向けの現地説明会は 3 月 23・24 日に行い、約 10,000 人の見学者があった。

発掘調査の途中 3 月 7 日には、天井石の一部の隙間より雨水の流入があったため、株式会社アクトに依頼し、モルタルを充填する方法で雨水の流入を防いだ。また、発掘調査後の埋め戻しについては、奈良県内で起きた横穴式石室進入及び石棺破損事件などのことも考慮し、土嚢を積み上げるだけでなく、その途中段階で格子状に組んだ単管を挟み込むなどして対策を図った。その後 3 月 29 日をもって現地での作業を終えた。

現地調査の終了後も、現地説明会に参加できなかった多くの方から石室見学の希望が殺到したため、平成 14 年 5 月 3～6 日に横穴式石室の再公開を行った。この見学会にも約 2,000 人もの参加者があり、條ウル神古墳への関心の高さが窺える結果となった。

1 次調査にあたっては、巨勢山古墳群の他地点の調査も含み込んだ巨勢山古墳群調査委員会を組織し、平成 13 年 11 月 20 日と平成 14 年 2 月 19 日の 2 回にわたって調査方針の検討や現地指導を賜った。なお、委員会の委員は以下の通りである（役職当時）。

委員長 網干善教（御所市文化財保護審議委員・関西大学名誉教授）

委員 河上邦彦（奈良県立橿原考古学研究所 副所長）

松田真一（奈良県教育委員会文化財保存課 主幹）

大塚和章（奈良県教育委員会文化財保存課 課長補佐）

西藤清秀（奈良県立橿原考古学研究所調査第 2 課 課長）

山口秀次（御所市教育委員会 教育次長）

(2) 小規模開発に伴う範囲確認調査

2次調査 本報告とは直接関連しないが、平成17年に條ウル神古墳の西側で小規模な開発事業が起こったため、2次調査として範囲確認調査を行った(木許編2008)。報告では、検出した地山の傾斜変換点を墳端と仮定し、横穴式石室との位置関係から径70m程度の円丘の存在を想定するとともに、傾斜変換点より西側に水成層が存在しないことから、周濠や周堤が存在しない可能性を示した。

2次調査時点では墳丘に関する情報が無かったため、上記のような想定をせざるを得なかったが、後述の報告のとおり、この検出した傾斜変換点は旧の自然地形のものである蓋然性が高いと考えている。

(3) 史跡指定を目指した範囲確認調査

1次調査後の一時中断と秋津地区史跡整備基本計画 平成13年度の発掘調査によって、一躍全国的な注目を集めることとなった條ウル神古墳であったが、当市の財政状況の悪化などの理由でその後の追加調査が行われることのないまま年月が過ぎ去っていった。平成22年度に御所市が財政早期健全化団体になったころをピークに、市全体で様々な事業が凍結され、ひたすらに緊縮財政をもって耐え忍ぶ日々が続いていたが、赤字財政の解消が目前となった平成23年度に至り、当市教育委員会は「秋津地区史跡整備基本計画」を策定した(御所市教育委員会2012)。この計画は、御所市の秋津地区に所在する国指定史跡の宮山古墳と巨勢山古墳群、および重要遺跡である條ウル神古墳を適切に保存し、周辺の良い風致景観を保全するとともに、古墳を中心とする公園的空間として整備することで、県民はもとより広く国民の利用に供することを目的としたものである。

京奈和自動車道の建設も進み、秋津地区周辺における様々な開発事業が目に入るようになってきた状況で、その保存活用が喫緊の課題となったことが計画策定の大きな要因であったが、財政事情がわずかにも上向いてきたなかにあつて、鬱々たる市の雰囲気盛り上げるためにも、全国的な知名度をもつこれら古墳を1つの起爆剤としたい思いも少なからずあったことは否めないだろう。

秋津地区史跡等調査整備審議会の設置 この基本計画に基づいて、当市教育委員会は、非常に重要な古墳でありながらも未指定で、周囲の開発の影響を真っ先に受ける可能性が考えられた條ウル神古墳について、国史跡への指定を目指して墳丘の規模や形状を明らかにする範囲確認調査を計画した。そこでまず、範囲確認調査の方針を定めるため、秋津地区史跡等調査整備審議会を立ち上げた。審議会の委員は以下の通りである(役職当時)。

委員長 白石 太一郎(大阪府立近つ飛鳥博物館 館長)

委員 土生田 純之(専修大学 教授)

審議会を平成25年1月29日に開催し、墳丘に関する情報やいくつかの墳丘復元案の整理を行ったうえで、次年度の調査に向けたトレンチの配置を検討した。審議会の時点では、西崎報告のよう

な巨大な前方後円墳と考える案が見られたが（藤原 2009）、当初からそこまでの墳丘規模を想定して調査を行うのではなく、残存する墳丘の周囲から調査を進めていくこと、そして最初から大きなトレンチを設定するのではなく、墳丘に関わる痕跡が検出できたところから拡げていくこと、の2点の方針を確認し、地権者の土地利用状況などを相談したうえでトレンチの配置を決定した。

3次調査 墳丘測量図からもわかるように、残存墳丘の周囲は切土、盛土などの造成が広くなされ、現在も畑として利用されている。そのため、現地での農作業に支障がない位置と時期を調整し、上記の方針をもとに合計10カ所のトレンチを設定した。

発掘調査にあたっては、発掘通知（法第92条）を平成25年9月10日付、御市教文第189号で奈良県教育委員会に提出し、現地での調査は、平成25年10月3日より開始した。地権者の了解が得られたところから順に調査を始めたため、トレンチの呼称についてはその順番によって1から10のトレンチ名を付した。

1～5・8トレンチにおいては、古墳に関わる遺構が検出されなかったものの、旧地形の復元に資する地山の傾斜面などを記録することができた。6トレンチでは、墳丘盛土と考えられる土層を検出し、7トレンチでは明確に古墳に伴う遺構は確認できなかったものの、弥生時代終末期頃の遺構が古墳の周辺に存在している状況を確認した。一部墳丘寄りの地点で、古墳の周溝の可能性が考えられる溝状遺構を検出したが、3次調査の成果のみでは性格を確定させるには至らず、次年度以降の課題となった。9トレンチでは、南から伸びる尾根を切断し墳丘の南端を画す隍が検出され、墳形や規模を考えるための定点となる情報を得ることができた。10トレンチは、調査期間終了間際の調査となってしまったことに加え、中世以降の盛土が想定以上に厚くなされていたことも重なり、古墳に関わる面まで全体を掘削することができなかった。そのため、トレンチ壁際に設けたサブトレンチにおいてのみ下層の状況を確認することにした。その結果、サブトレンチ内で墳丘側から流出したと考えられる須恵器群を検出し、間接的ではあるものの、墳丘端を想定する材料を得ることができた。

調査期間中においては、平成25年10月22日、平成26年1月17・29日、3月12日の4度にわたり審議委員による現地指導を受け、各トレンチでの墳丘盛土の認識や墳丘構築前の地形の様相などについて検討を行った。そのほか、平成26年1月7日には、既存の測量図の不足部分を補うための空中写真測量を行った。最終的に現地での調査は平成26年3月28日をもって終了した。

4・5次調査 3次調査の結果、いくつかのトレンチにおいて古墳に伴う可能性の高い遺構が確認でき、南東方向に前方部を向けた前方後円墳である可能性も考えられるようになった。しかし、まだ可能性の域を出ず、墳丘規模や墳形を確定するまでには至らなかった。そのため、平成26年度も継続して範囲確認調査を実施する方向で地権者との交渉を行った。その結果、平成26年度については、作付け等の時期を避けるかたちで前・後期の2度に分け、それぞれを4・5次として現地での調査を進める運びとなった。

4次調査にあたっては、発掘通知を平成26年7月23日付、御市教文第151号で奈良県教育委員会に提出し、現地での調査は、平成26年8月1日より開始した。4次調査では、3次調査で墳丘盛土と思われる土層を検出した6トレンチを拡張し、墳丘盛土の平面的な広がりについて新たな知見を得ることができた。加えて、9トレンチで検出した想定前方部前端ラインの東側延長部に11トレンチを設定したが、当該トレンチにおいては古墳に伴うと思われる隍や盛土は検出できなかった。しかし、トレンチ東端において、7トレンチで検出していた古墳の周溝の可能性が考えられる溝状遺構の延長部を検出した。その結果、溝状遺構は弧を描く形で接続しており、古墳に伴う遺構ではない可能性が高いと考えられた。

調査期間中においては、平成26年8月29日に審議委員による現地指導を受け、6トレンチで検出した盛土が墳丘本体では無く、横穴式石室開口部付近に設けられた基壇の可能性も考慮が必要であるとの指摘をいただいた。最終的に現地での調査は、平成26年9月11日をもって終了した。

5次調査にあたっては、発掘通知を平成27年2月5日付、御市教文第27号で奈良県教育委員会に提出し、現地での調査は、平成27年3月2日より開始した。5次調査では、前方部前端の可能性が考えられた隍の平面的な形をおさえるため、9トレンチを拡張する形で調査を行った。この際、8トレンチにおいて隍の延長部が検出されず、周囲の削平状況をみても9トレンチより西側では隍の残存が悪いことが予想されたため、東側にトレンチを拡張することとした。

調査の結果、隍は東側に向かって直線的に伸びていることが明らかになるとともに、新たに墳丘盛土と考えられる土層を確認することができた。

調査期間中においては、平成27年3月25日に審議委員による現地指導を受け、墳丘盛土の認識等について検討を行った。そのほか、平成27年3月22日に地元向けの説明会、平成27年3月25日に記者発表を行った。最終的に現地での調査は、平成27年3月30日をもって終了した。

6次調査 4・5次調査の結果、墳形や墳丘規模について一定の成果が得られたため、平成27年度については発掘調査を行わず、報告書作成を進めていた。しかし、平成27年7月31日に開催した審議会において、残存墳丘の東側については一定の成果が得られたが、墳丘規模を確かにするには残存墳丘の西側、特に4・5トレンチを設定した段のさらに上段（以下、西上段とする。また、4・5トレンチを設定した段を西下段、横穴式石室のある尾根頂部を東側に下りたところの段を東上段とする。）について追加調査が必要ではないか、との指摘があった。その時点では報告書作成作業を一定程度進めており、年度内の発掘調査を行う費用・時間的余裕がなかったため、改めて平成28年度に追加調査を行う方向で地権者交渉や予算措置の準備を進めた。

6次調査にあたっては、発掘通知を平成28年5月23日付、御市教文第127号で奈良県教育委員会に提出し、現地での調査は平成28年5月26日より開始した。6次調査では、審議会で指摘があった残存墳丘西半の状況を確認するために、3つのトレンチを設定した。いずれのトレンチにおいても、頂部より東では耕作土下に墳丘盛土を、西上段では地山を検出した。これらの成果によ

り、残存墳丘周辺における盛土の平面的な範囲が明らかとなり、墳形や墳丘規模を考える大きな材料が得られた。加えて13トレンチ東上段では、墳丘盛土を掘り込んだ落ち込みを検出した。この落ち込みの埋土には、陶磁器や瓦、古墳時代の須恵器や埴輪の破片とともに、花崗岩の小礫や破片、凝灰岩の破片が含まれており、既知の横穴式石室の南側に、異なるもう1つの埋葬施設が存在する可能性が生じることとなった。

調査期間中においては、平成28年6月26日に審議委員による現地指導を受け、墳丘盛土の認識や13トレンチで検出した落ち込みの評価について検討を行った。そのほか、平成28年6月28日には、奥田尚氏に依頼して13トレンチ落ち込み内で検出した石材の鑑定を行った。最終的に現地での調査は、平成28年7月14日に終了した。

調査終了後の平成29年2月22日に開催した審議会では、前回審議会以後の調査成果や整理作業の成果について検討するとともに、報告書の構成等についても指導を受けた。

第4節 発掘調査・整理作業

(1) 調査・整全体制

條ウル神古墳の発掘調査は、いずれも御所市教育委員会が国庫補助事業として実施しており、文化庁及び奈良県から補助を受けている。各年度の調査・整全体制は以下のとおりである。

【平成13年度（1次調査、測量調査）】

調査主体：御所市教育委員会

教育長 弓場康 教育次長 山口秀次 生涯学習課長 山本宏司 主幹 植木理史

文化財係長 藤田和尊 係員 木許守

調査担当：藤田和尊（生涯学習課文化財係長）

調査補助員：伊藤諭、井上詩野、牛尾大祐、大久保順子、大矢祐司、高島洋、長江真和、中野咲、深谷淳、細川晋太郎、松本健太郎

発掘作業補助：安西工業株式会社 空中写真測量：株式会社南紀航測センター

【平成25年度（3次調査、測量調査、整理作業）】

調査主体：御所市教育委員会

教育長 上田貞夫 事務局長 北岡一郎 文化財課長 藤田和尊 文化財係長 木許守

係員 坂口あすか、金澤雄太

調査担当：金澤雄太（文化財課文化財係技師）

調査補助員：金光順子、松村朋美、村島有紀

発掘作業補助：安西工業株式会社 空中写真測量：株式会社アクセス

【平成26年度（4・5次調査、整理作業）】

調査主体：御所市教育委員会

教育長 上田貞夫 事務局長 安井敏朗 文化財課長 藤田和尊 文化財係長 木許守
係員 坂口あすか、金澤雄太

調査担当：金澤雄太（文化財課文化財係技師）

調査補助員：伊田葵、金光順子、松村朋美

発掘作業補助：安西工業株式会社（4次）、有限会社ワーク（5次）

【平成27年度（整理作業）】

調査主体：御所市教育委員会

教育長 梶田行男 事務局長 安井敏朗 文化財課長 藤田和尊
文化財課長補佐 木許守 文化財係員 田中久美子、金澤雄太

【平成28年度（6次調査、整理作業）】

調査主体：御所市教育委員会

教育長 梶田行男 事務局長 桑原信治 文化財課長 藤田和尊
文化財課長補佐 木許守 文化財係員 田中久美子、金澤雄太

調査担当：金澤雄太（文化財課文化財係技師）

調査補助員：金光順子、松村朋美

発掘作業補助：安西工業株式会社

【平成29年度（整理作業）】

調査主体：御所市教育委員会

教育長 梶田行男 事務局長 桑原信治 文化財課長 藤田和尊
文化財課長補佐 木許守 文化財係員 田中久美子、金澤雄太、後藤愛弓

【平成30年度（整理作業、報告書刊行）】

調査主体：御所市教育委員会

教育長 秋元直樹 事務局長 桑原信治 文化財課長 藤田和尊（平成30年12月まで）
文化財課長補佐 中井戸隆（平成31年1月より文化財課長）
文化財係員 田中久美子、金澤雄太、後藤愛弓

（2）報告書作成

條ウル神古墳の整理作業については、3次調査の開始後に着手し、その後は各次調査と並行しながら進めていった。ただし、1次調査の遺構を中心とした成果については、その重要性に鑑み、速報としての記事（藤田2002a・b）や平成15年に刊行した『古代葛城とヤマト政権』の中に「條ウル神古墳とヤマト政権」と題した座談会記録を掲載することで紹介した（御所市教育委員会編2003）。

報告書の作成作業は、5次調査終了後の平成27年度より開始し、1次調査の成果の一部につい

ては調査担当者の藤田が報告し、それ以外の1次調査および3～6次調査の成果については、金澤が報告している。なお、調査で検出した石材については奥田尚氏、出土遺物の自然科学分析については奥山誠義氏（奈良県立橿原考古学研究所）、柳田明進氏、田村朋美氏（国立文化財機構奈良文化財研究所）、大賀克彦氏（奈良女子大学）より玉稿を賜った。

なお、上記のほか、調査・整理期間中に数多くの方々より様々なご指導・ご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。（1次調査時は、非常に多数の来訪があったため、その全てについて正確に記録できていなかった。ご寛恕願いたい。）

青木敬・青柳泰介・石野博信・泉武・泉森皎・伊藤健司・今尾文昭・入倉徳裕・卜部行弘・近江俊秀・大西貴夫・岡林孝作・置田雅昭・小栗明彦・亀田修一・北井利幸・北山峰生・絹島歩・黒崎直・合田茂伸・木場幸弘・高野政昭・田中晋作・千賀久・辻康男・寺沢薫・中井一夫・禰亙田佳男・林正憲・坂靖・東影悠・樋口隆康・廣岡孝信・広瀬和雄・藤井幸司・前坂尚志・前田俊雄・間壁忠彦・石島和夫・宮原晋一・茂木雅博・森岡秀人・山内紀嗣・和田一之輔・和田晴吾

第3章 横穴式石室の調査

第1節 石室内の堆積状況

今回の横穴式石室の調査は、石室の有無やその所在の確認、石室実測図の作成を目的とした調査であったため、基本的に石室内の堆積土を掘削する調査は行っていない。ただし、後述する石棺の寸法を確認する目的で、羨道側の短辺に沿って40cm四方の確認孔を設けており、そこでおよその石室内堆積状況を把握することができている（図7）。

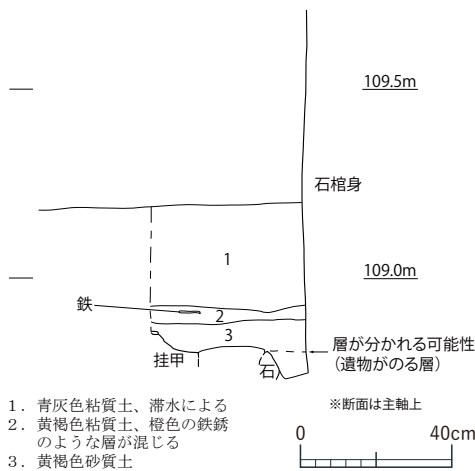


図7 石室床面堆積土層断面図

石室内には、水成層が厚く堆積しており、上から

青灰色粘質土が約25cm、鉄分の混じる黄褐色粘質土が約5cm、黄褐色砂質土が約10cmの厚みで順に堆積していた。狭い範囲での掘削であったため、それぞれの層の形成時期や性格を明らかにするまでは至らないが、青灰・黄褐色の粘質土については、石室内に水が流入してからの堆積とみられ、黄褐色砂質土については、床面上遺物の覆土になることから、石室内に水が入る前の流入土砂と考えられよう。

開口部付近の土層の検討から、複数回にわたり墓道が掘り直されている状況が明らかとなっているが、今回の調査では羨道部に残存している閉塞石や堆積土がどの段階のものであるかまでは、明らかにできていない。

第2節 横穴式石室

(1) 石室の構造と規模

石室は東に開口する両袖式の横穴式石室である。石室の主軸はS - 80° - Eであり、ほぼ真東を指向している。玄室平面形は細長い矩形を呈し、両側壁は直線的で胴張りにはならない。土砂の堆積や閉塞石が残存しているため、細部については判然としないことも多いが、現状で計測できる石室の規模は、全長15.6 m以上、玄室は長さ7.1 m以上、奥壁部の幅2.35 m以上、中央部の幅2.67 m以上、玄門部の幅2.78 m以上である。玄室の高さについては、床面の堆積土上からの高さでは3.8 mであるが、後述する試掘坑における小礫上からの高さでは4.18 mとなり、その標高は約108.8 mである。

羨道は、長さ8.5 m以上、開口部での幅1.9 m以上、玄門部での幅1.76 m以上であり、土砂や閉塞石の影響の少ない箇所での高さは1.82 mとなる。

(2) 壁体構造

奥壁 大きくは3段積みとなっており、1段目については幅2.35 m以上、高さ1.28 m以上の大型石材を基底石として1つ配置し、右側壁側の2段目石材との隙間には、小礫を詰める形で対応している。2段目については、1段目と同等の幅2.3 m、高さ1.81 mの大型石材を1つ使用しているが、石材上面がやや右側壁側に傾斜しているため、その傾斜を解消するために幅約1.3 mのやや小型の石材を付加的に載せている。3段目は、1・2段目に比べて小型の幅1.4 m、高さ0.54 m程度の石材を横方向に向けて置き、天井石との隙間には小礫を嚙ませている。

基底石はほぼ垂直に設置されているが、2段目は10°、3段目は21°と徐々に持ち送りが強くなっている。

上述のとおり、奥壁基底部での幅は2.35 mであり、両側壁が持ち送っているため天井部の幅は1.3 m程度となっている。堆積土上からの高さは3.87 mを測る。

玄室右側壁 奥壁と同様、大きくは3段積みとなっているが、横方向の目地はそれほど明瞭ではなくやや凹凸が認められる。1段目は、まず幅1.8 m、高さ0.7～1.3 m程度の石材を横置きし、隣り合う石材との間に生じた凹みにさらに石材を載せる、いわゆる谷積みと呼ばれる石積み技法で積まれている。中には奥壁から2石目の石材のように、1石を縦置きしている部分も見受けられるが、概ねこの1段目の上面が、羨道部天井の高さと整合している。ただし、1段目の奥壁と接する部分については、目地を無視したやや大きめの石材が使用されている。この状況は左側壁においても確認でき、玄室構築上の特徴といえるかもしれない。

2段目は、幅1.5～1.6 m、高さ1.25～1.3 mの石材を主に使用し、やや小さな石材のところは2石を用いて補っている。2段目では1段目と異なり、前壁と接する部分において目地を無視した石材の使用がみられるが、左側壁については石積みの乱れがあり同様の状況かは判然としない。

3段目は、幅 1.45 m、高さ 0.65 m 程度の低平な石材が用いられ、これらの石材で直接天井石を支えることはせず、天井石との間に小礫を挟み天井石を載せている。

1段目の石材はほぼ垂直に設置され、2段目は 5.8° 、3段目は 10.6° と徐々に持ち送りが強くなっている。

玄室左側壁 奥壁、右側壁と同様、大きくは3段積みとなっているが、1段目の目地が比較的きれいに通っているのに対し、2・3段目については石積みの乱れが窺え、明瞭な目地は認識し難い。⁽²⁾

1段目は、幅 1.2～2.1 m、高さ 0.6～1.0 m 程度の石材を横置きし、その上に谷積みでもう1石分を積み上げる。右側壁同様、概ねこの1段目上面が、羨道部天井の高さと整合している。2段目は幅 1.2～2.0 m、高さ 1.1 m 程度の石材を使用し、3段目はやや小ぶりの幅 1.0～1.5 m、高さ 0.5～0.9 m の石材を使用するが、3段目については右側壁と比較すると積み方がやや乱雑にも見受けられる。3段目の石材の中には、直接天井石を支えているものが複数認められ、隙間に小礫を挟む有り様は他の壁面と同様である。

1段目の石材はほぼ垂直に設置され、2・3段目は約 15° と右側壁よりも持ち送りが強くなっている。

玄門部 玄室と羨道の接続部にあたる玄門部は、袖部を形作る袖石とその上に載せられる前壁からなっている。袖石の様相は左右で若干異なっており、右袖は幅 1.55 m、高さ 1.52 m の石材を立石状に立て、その上に幅 0.95 m、高さ 0.28 m の扁平な石材を載せ前壁を支えている。それに対し左袖は、幅 1.52 m、高さ 1.8 m の立石1石で前壁の高さに至っているものの、上端の面が狭いためか、袖石に隣接する羨道側壁とともに前壁を支える構造となっている。前壁は、幅 2.02 m、高さ 1.93 m、厚み 1.91 m の大型石材1石で構成され、玄室側の面は垂直となっている。

上述のとおり、玄門基底部での幅は 2.78 m であり、持ち送りのある天井部での幅は 1.5 m となっている。堆積土上からの高さは 3.74 m を測る。

玄室天井石 天井部は、持ち送りによって狭くなった空間を4つの石材で閉塞しており、下面はほぼ平坦な面を形成している。天井石を見上げた状態の図面は作成できていないが、奥壁や側壁との間に生じた隙間には小礫を詰めることで対応している。

羨道右側壁 羨道部の右側壁は、袖石より開口部側において概ね2段構成になっており、幅 1.4～1.9 m、高さ 0.7～1.3 m 程度の石材を横置きにしている。天井石との間にはやや小型の石材を配置し天井石の高さを調整しているように見受けられる。

羨道左側壁 右側壁と同様、袖石より開口部側については2段構成をとっており、幅 1.3～2.0 m、高さ 0.6～1.2 m 程度の石材を横置きにしている点も似通っている。開口部端では、3段積みになっているところも見受けられるが、閉塞石の残るところでもあり、細部については判然としないところも多い。

羨道天井石 前壁を含めて羨道には3石の天井石が残存しているが、羨道側壁の様相からすると、

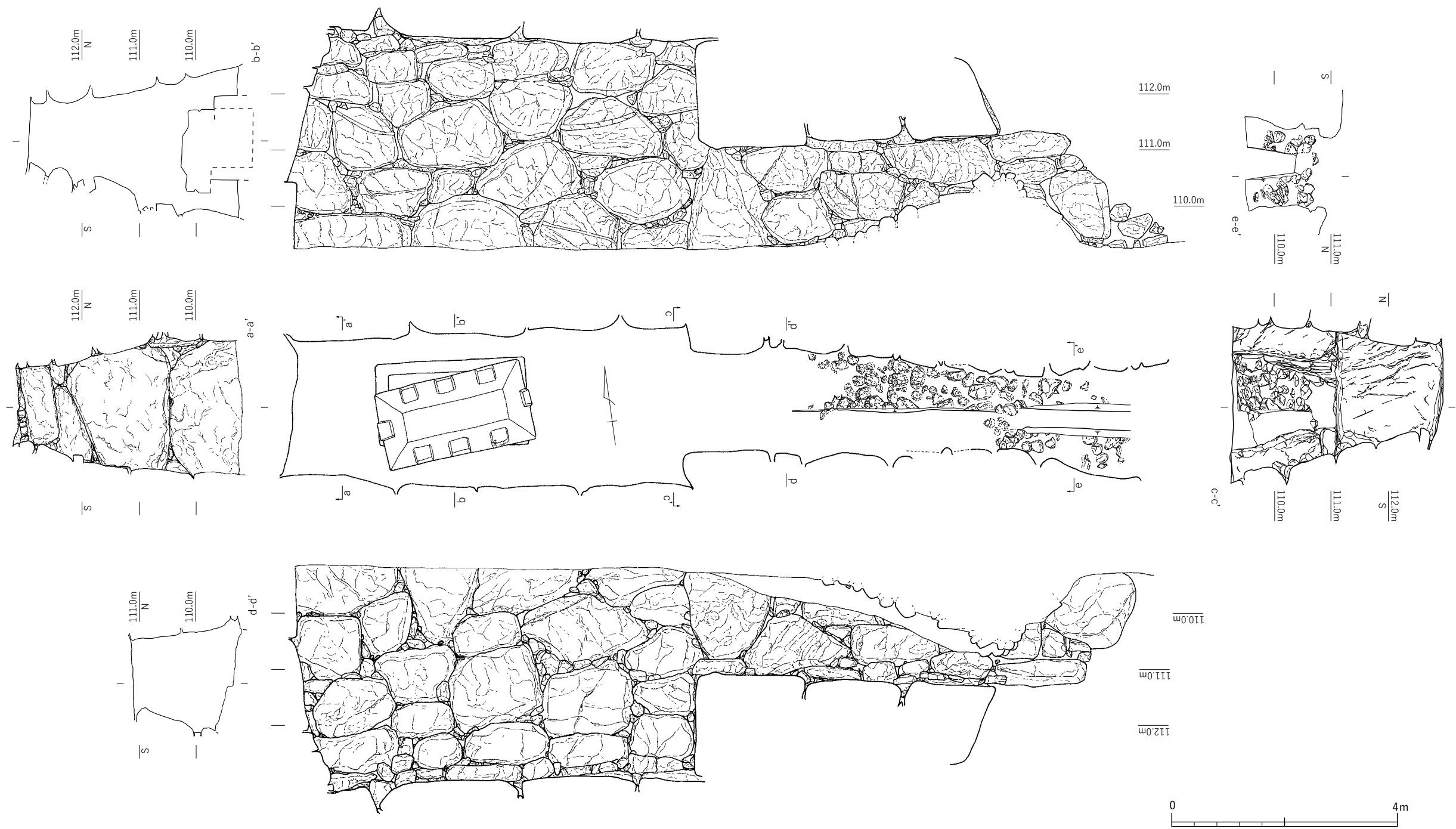


图8 横穴式石室实测图

本来はもう1石加えた計4石が架構されていたものと思われる。閉塞石が残るため、羨道部の高さについては判然としないが、天井石下面の高さだけをみると、開口部側に向かって徐々に高さを増しているようにも見受けられ、前壁部下面で標高111.04 mを測り、開口部端の天井石下面では標高111.25 mを測る。

(3) 閉塞施設

調査当初、羨道部分にはいくらかの土砂が堆積していたが、石室中軸線より左側壁側のみを掘削したところ、非常に良好な形で閉塞石が残存していた。長径30～50cm程度の塊石を用いたもので、羨道の幅一杯に羨道側壁の開口部端から5.8 m内側の範囲に広がっていた。現状では、残存する最も外側の羨道天井石の下あたりが最も良く残っており、床面の正確な高さはわからないものの、1.4 m程度の高さが残存しているとみられる。盗掘等に伴う流入土と閉塞土の厳密な区別は困難であるが、石材間の土砂の有り様から閉塞石と閉塞土を併用した構造であったと考えられる。

(4) 石棺

玄室における位置 調査で確認できた石棺は、蓋と身からなる刳拔式家形石棺1基のみで、玄室の中軸に平行する向きに据えられている。玄室内における平面的な位置は、玄室中心からやや奥壁寄りであり、奥壁から石棺までの距離は1.48 m、右側壁からは0.75 m、左側壁からは0.47 mとやや左側壁寄りになっている。奥壁・玄門双方との間には一定程度の空間が残されており、後述する出土遺物の様相からも追葬の可能性は十分に考えられるが、床面の検出を行っていないため、家形石棺以外の棺の存在は確認できていない。

蓋の寸法と形状 縄掛突起を含む長さ278cm、含まない長さ267cm、奥壁側の幅141.5cm、玄門側の幅148.5cm、奥壁側の高さ51.75cm、玄門側の高さ53.1cmを測り、玄門側の方が幅も高さも大きく作られている。また、左側壁側の方が右側壁側より若干高くなっているが、これは加工時の誤差の範疇と思われる。天井部の平坦面は、長さ186.0cm、奥壁側の幅53.0cm、玄門側の幅55.4cmを測り、蓋全体の幅に対する平坦面幅の占める割合を表す平坦面指数は37となる。側面の高さは、概ね21.0cm前後でまとまり、長側辺と短側辺の接合部には2～3cm前後の面取りがなされている。

縄掛突起を中心に、角をもつ部分の破損が認められるが、全体としての残りはよく、全形の詳細をほぼ窺い知ることが可能である。

縄掛突起は、長側辺に3対、短側辺に1対の計8つが削り出されている。長側辺のものは蓋斜面から水平あるいは若干上方に向かって突出し、突起の正面や側面はほぼ垂直に下りる形となる。それぞれの面の接合部には2～3cm幅での面取りがなされるが、右側壁側の正面と側面の接合部のみ面取りがなされていない。寸法は幅29.9～34.9cm、長さ26.3～28.9cm、高さ17.6～

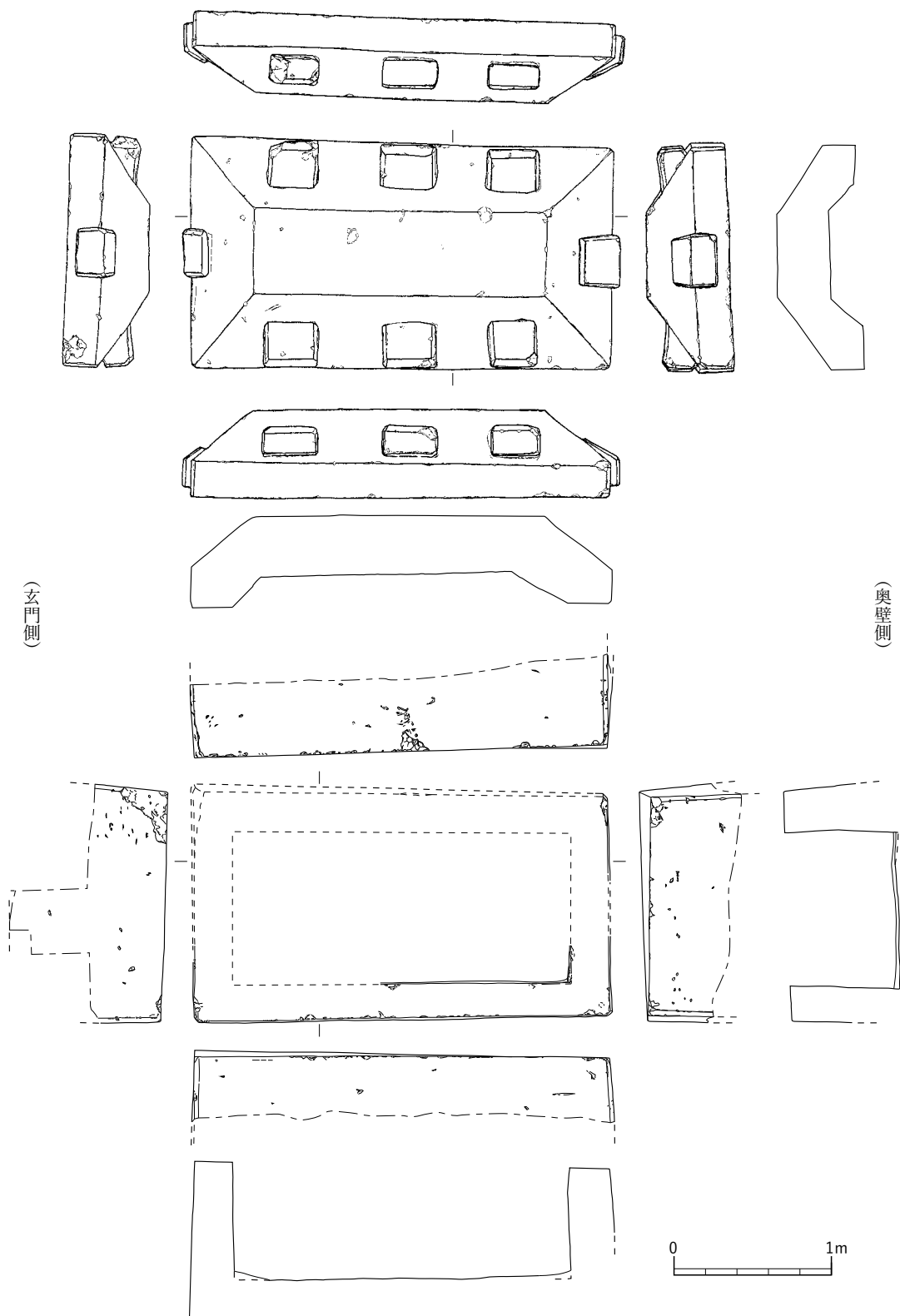


図9 家形石棺実測図

20.8cm と若干の変異はあるものの、概ね同様の直方体状を呈している。短側辺のものは、蓋の斜面から側面にかけて取り付け、長側辺のものほど突出が強くない。突起上面が外下方へ傾斜し、正面・側面はほぼ垂直に下りる形となる。また長側辺と同様、各面の接合部には2～3cm程度の面取りがなされている。寸法は奥壁側と玄門側で若干異なっており、奥壁側は幅34.8cm、長さ26.1cm、高さ28.5cm、玄門側は幅31.6cm、長さ14.2cm、高さ26.2cmと、玄門側の方が蓋斜面のより下位に取り付く形となっている。

蓋の内側については、断面台形に削り込まれており、各面の接合部には明瞭な稜線が形成されている。削り込み部の長さは中軸線上で下辺210cm、上辺は178.3cm、奥壁側の幅は下辺86cm、上辺50cm、玄門側の幅は下辺92cm、上辺57.5cmと、削り込み部についても玄門側の方が広がっている。削り込みの深さは16～21cmで、蓋の下面にあたる身と接する面は、特に造作のない平坦面をなしており、幅は27cm前後を測る。

外面に残る加工痕跡は、天井部平坦面や斜面ではほぼ確認できず、短側辺の側面部を中心に観察できる。それらによると概ね上から下へと加工が進んでいったようであるが、左右の動きなどは明瞭ではない。また、単位の幅は2cm前後と概ねまとまっているが、中には1cm未満のものも認められる。

身の寸法と形状 寸法は、右側壁側で上辺の長さ263cm、埋没部での下辺の長さ264.6cm、左側壁側で上辺の長さ264cm、埋没部での下辺の長さ266.5cm、玄門側で上辺の長さ147cm、埋没部での下辺の長さ151.5cm、奥壁側で上辺の長さ140cm、埋没部での下辺の長さ142.5cmとなっている。棺蓋と同様、玄門側の方が幅広がっていると、若干ではあるが棺身の下部の方が上部よりも大きく作られているようである。棺身の高さについては、玄門側に設定した試掘坑部分でのみ明らかとなっており、その部分で98.5cmであった。側面の4つの角には3～5cm幅の面取りがなされている。身の上面、棺蓋と接する面は、蓋と同様に平坦面をなしており、幅は計測できた左側壁側の長側辺で21cm前後、奥壁側の短側辺で24cm強であり、上述の蓋の下面の寸法と比較すると蓋の方が若干大きくなっている。全体の寸法で比較しても、蓋が身より数cmではあるが大きく作られているようである。

身の削り抜かれた部分の寸法は、長さ約214cm、玄門側の幅97cm、奥壁側の幅95cm、高さ70cmであり、これも玄門部側がやや大きくなっている。内側面には、器表面の色調等が水平に変化するところが4条程度認められ、おそらくいずれかの時期には棺内にも水が溜まっていたものと思われる。

身の外面にも加工時の痕跡が残っており、奥壁側短側辺や左側壁側長側辺の上部には、幅2～4cm程度の工具痕が認められるが場所によってストロークの長さが異なっている。左側壁側長側辺の下部には、5～6cmと幅広でストロークのかなり長い加工単位が観察でき、長側辺についてはその上下で加工の有りが異なっている可能性がある。棺内にも加工痕が観察でき、断面が浅い匙

面状を呈する幅 1.5 ～ 4 cm 程度の工具痕が認められる。

赤彩の有無 蓋身ともに内外面の多くは、現状で赤色顔料の付着が確認できず、もともとどの程度赤彩されていたのかは判断が難しい。ただし、蓋と身の両接合面では、確認できた範囲の中に一定程度赤色顔料が付着しており（図 10）、棺内堆積土中にも赤色顔料が含まれていた。石室内の厚い水成層の存在や、大正年間の西崎報告においても棺身の高さまで水が満たされていたように記載されていることを考えると、石棺表面はかなり風化の影響を受けていると考えられ、当初は蓋身の内外ともに赤彩が施されていた可能性も十分に考えられよう。

盗掘時の痕跡 蓋身の玄門側および左側壁側の側面には、それぞれ対応する箇所にも風化による損傷とは異なる破損の痕跡が認められた。その位置関係から推察するに、この痕跡は、石棺の盗掘時に生じたものとみられ、棒状のものを蓋と身の間に差し込み、槌子の原理を使って蓋を右側壁側にずらした際に破損したものと考えられる。

（5）遺物出土状況

ここまでにも述べてきたとおり、條ウル神古墳の横穴式石室は後世の盗掘を受けており、また今回の調査では石室内の堆積土を除去していないため、出土した遺物はそれほど多くなかった。それらを今その出土位置によって大別すると、石棺蓋上、石棺内、玄室床面上（試掘坑内）、開口部周辺流入土、その他に分けられる。

石棺蓋上 まず石棺蓋上であるが、奥壁側に偏って遺物が検出され、その中でも天井部や左側壁側に特に集中する傾向がみられた（図 10・表 1）。これは、盗掘者が石棺と左側壁の間から棺身の中を探り、手に付いた副葬品を一度石棺蓋上に仮置きし、それから石室外に持ち出したことによって

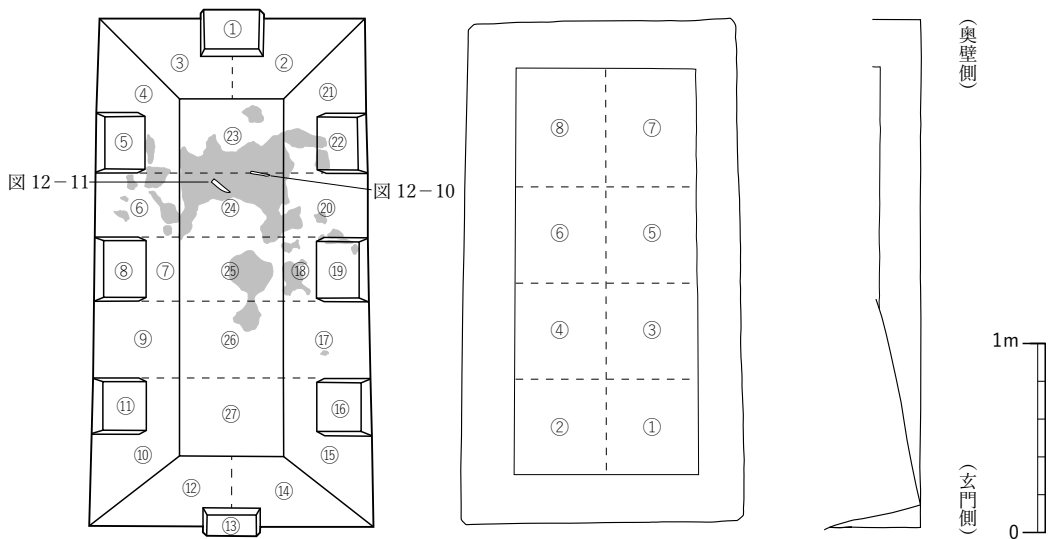


図 10 石棺蓋・身の遺物取り上げ区画と出土状況図

生じた状況と考えられ、いずれの資料も本来は棺内に納められていたものと判断できる。そのため、原位置を留めた状態のものは無いと判断できたので、石棺蓋上を図のとおり 27 の区画に分割し、区画ごとに遺物を取り上げることとした。

出土した遺物は、ガラス小玉や冠等の破片と考えられる金銅板片が大半を占め、金銅製歩揺片、銀製空玉、鉄刀片、鉄刀子片、鉄鉤などもある。図中に示したとおり、石棺蓋上には遺物の範囲と重複する形で赤色顔料を含む土砂が広がっていた。この粘質土中にもガラス小玉や金銅板が混じっていることから、これらの赤色顔料自体も盗掘の際に石棺内から掻き出されたものと考えられる。

石棺内 棺蓋をずらした隙間の大きさはそれほどではないものの、石棺内は全体が荒らされており、遺物の残存状況は良くなかった。棺内を精査した結果、堆積土は少なく、わずかに厚さ 3 cm 程度の淡黄褐色粘質土が堆積している以外は、部分的に赤褐色砂質土が認められる程度であった。遺物はその赤褐色土中やその上面で検出でき、本来の位置を保った遺物は残されていないと判断できたため、棺蓋上の時と同様に、棺内を 8 つの区画に分割し、区画ごとに遺物の取り上げを行った。区画ごとの出土遺物の種類に差はなく、量としては 5・7・8 区からの出土が多かった。これは副葬品の配置を反映しているものとは考えられず、石棺蓋上の有り様と同様に盗掘を行った位置によるものと考えられる。

石棺内から出土した遺物は、石棺蓋上の様相と大きくは変わらず、ガラス小玉や金銅板片が多く、歩揺や歩揺金具、銀製空玉も出土している。石棺内のみで出土したものとしては、金糸や螺旋状銀製品であり、これらは鉄刀に伴う付属具や鍔飾付耳飾りなどの可能性が考えられる。石棺内の堆積土中には、赤色顔料が目立ち、埋葬当初には多量の赤色顔料が棺内に使用されていたと考えられる。

玄室床面上 玄門側の石棺短側辺沿いに設けた 40cm 四方の試掘坑において、その一端が明らかになっている（図版 15 - 1）。非常に狭い範囲ではあるが、その中では石棺寄りのところに土師器壺と思しき土器が横たわり、さらに玄門側には金銅製鞍金具の端が顔を覗かせている。その南側には鉄製の小札の束が折り重なっている様子が観察できることから、挂甲かそれに伴う付属具の存在が窺える。

横穴式石室における副葬品の配置については、追葬や盗掘による攪乱の影響が及びやすいこともあり慎重な議論が必要であるが、大和の大型横穴式石室の様相をみると、馬具や武具等の副葬品は、石棺と奥壁や側壁の間で検出されることが多い。そのような様相の中で、條ウル神古墳では石棺の前面にそれらが存在することが注意される。石棺の前面には一定の空間が存在していることを踏まえると、家形石棺以外の埋葬に伴う可能性も考慮する必要がある。

閉塞石周辺流入土 小片の資料ばかりであるが、多くの土師器・埴輪・須恵器・陶磁器・瓦・サヌカイトの破片が出土している。古墳に伴うものとしては、小型青銅鏡や金銅板の破片が出土しており、盗掘時に移動されたものと考えられる。

その他 上記以外に特記すべき出土状況としては、石室壁体に挟まるような形で出土した須恵器坏

身(図12-9)と鉄器が存在する。どちらも完形ではなく、須恵器については奥壁に挟まるような形で出土している。埋葬時に置かれたものとは考えにくく、これについても盗掘時に移動されたものと考えられよう。

第3節 前庭部(図11)

前庭部の堆積状況 石室前庭部の堆積土について図11の縦断面土層図に基づいて記すと、大正5年の西崎報告(西崎1916)以降に堆積した7~35層(以下、a層という)と、畑として利用するための平坦面造成土40~65層(以下、b層という)に区分される。

b層は本来は、羨道開口部を完全に埋没させ、羨道天井石を覆っていたものとみられるが、現在は既に無い、羨道東端の天井石を外して持ち出すために、b層が掘削された状態が西崎報告時のものであったとみられる。

a層はその埋土に弥生土器、サヌカイト剥片、土師器、埴輪、須恵器、瓦器、燻し瓦、陶磁器と弥生時代から近代までの幅広い時期の遺物を多く含んでいる。天井石際の表層近くには昭和30~40年代のものともみられる電熱コンロまで埋められており、はからずも冬眠中のマムシ数匹の巣となっていた。

対してb層の埋土には弥生土器、サヌカイト剥片、土師器、埴輪、須恵器まではみられるが、それより新しい時期の遺物は含まれていない。これは平坦面の造成が墳丘の盛土を切り崩してなされたことを示すのであろう。

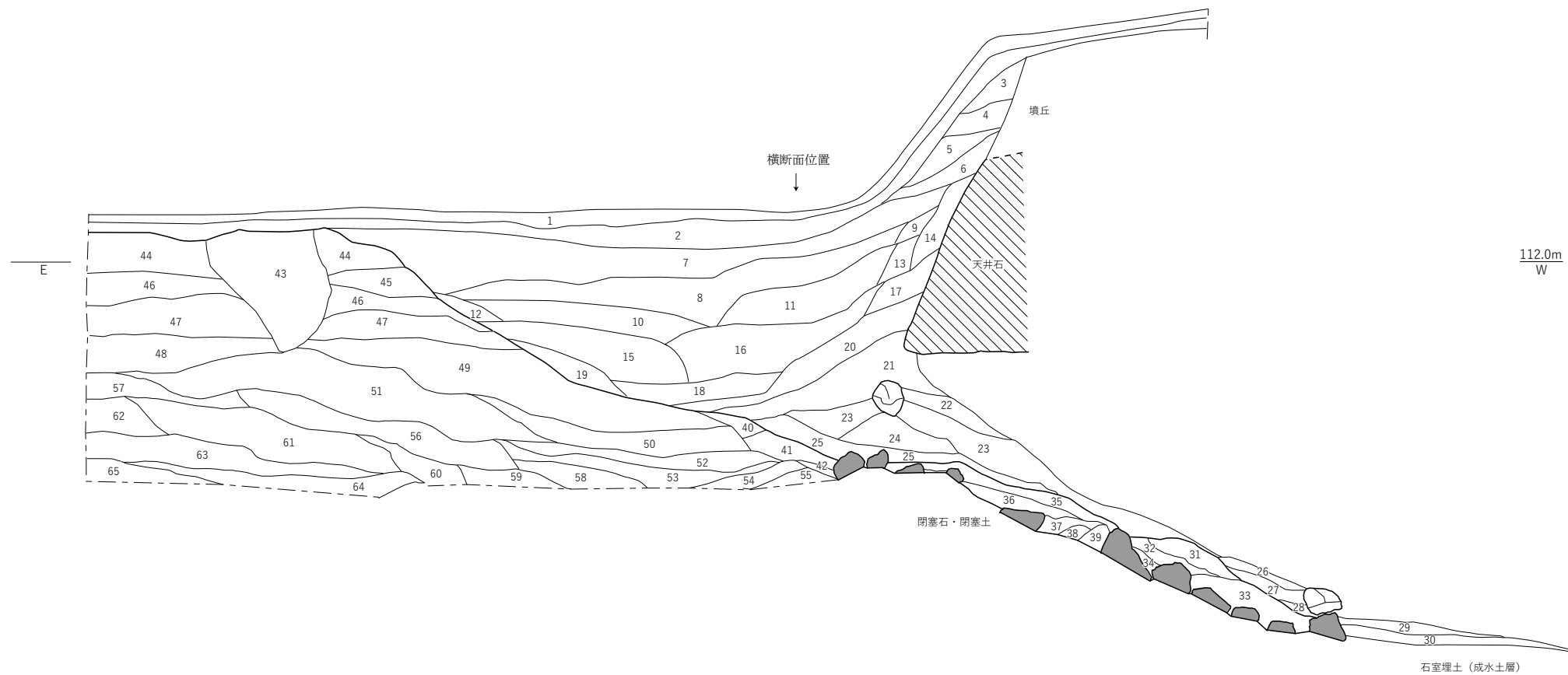
また、b層のさらに下層では、初葬や追葬に関わる複数の墓道の可能性が考えられる土層を確認した。しかし今回の狭小な範囲の調査だけでは、その厳密な土層の検討を行うことができなかった。今後の課題としたい。

第4節 出土遺物(表1・図12~15)

(1) 出土遺物の概要

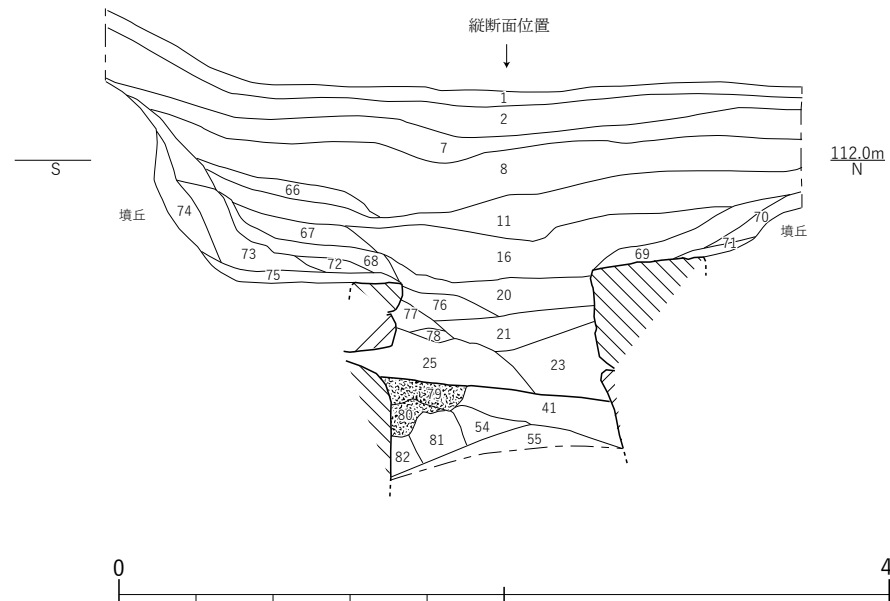
1次調査である横穴式石室とその周辺から出土した遺物には、弥生土器や土師器、須恵器、瓦器、陶磁器、埴輪、瓦といった土製品の破片を中心に、サヌカイト片、鉄刀や鉄刀子、鉄鉈、不明鉄製品といった鉄器類、冠などと考えられる金銅板の破片や歩揺(金具)、鉄地の金銅片、金銅製空玉、銀製空玉、螺旋状銀製品、ガラス玉といった装身具類、青銅鏡の破片などがある(表1)。

いずれも小片となっているものが多く、実測図の作成が困難なものが大半を占める。また、ガラス小玉については、その出土量の多さ故に全ての実測図を作成することが叶わなかった。ここでは、図化できた資料を中心に遺物の詳細を記すこととし、残る部分については今後改めて報告の機会を作りたい。



土層注記

1. 表土
2. 灰黄褐色砂質土
3. 黄褐色砂質土
4. 黄褐色砂質土
5. 茶褐色砂質土
6. 褐色砂質土
7. 茶褐色砂質土
8. 黄褐色砂質土
9. 茶褐色砂質土
10. 灰褐色砂質土
11. 灰黄褐色砂質土
12. 褐灰色砂質土
13. 茶褐色砂質土
14. 黄褐色砂質土
15. 灰褐色砂質土
16. 黄褐色砂質土
17. 茶褐色砂質土
18. 淡灰黄褐色砂質土
19. 茶褐色砂質土
20. 灰茶褐色砂質土
21. 茶褐色砂質土
22. 茶褐色砂質土
23. 黄褐色砂質土
24. 黄褐色砂質土



- | | | | |
|-------------|--------------|-------------|-------------------|
| 25. 灰褐色砂質土 | 40. 淡褐灰色砂質土 | 55. 灰褐色砂質土 | 69. 茶褐色砂質土 |
| 26. 茶褐色砂質土 | 41. 明黄褐色砂質土 | 56. 黄褐色砂質土 | 70. 灰黄褐色砂質土 |
| 27. 黄灰褐色砂質土 | 42. 茶褐色砂質土 | 57. 灰褐色砂質土 | 71. 淡茶褐色砂質土 |
| 28. 茶褐色砂質土 | 43. 根 (黒灰色土) | 58. 淡黄褐色砂質土 | 72. 茶褐色砂質土 |
| 29. 茶褐色砂質土 | 44. 黄橙色砂質土 | 59. 灰褐色砂質土 | 73. 黄褐色砂質土 |
| 30. 淡黄褐色砂質土 | 45. 褐灰色砂質土 | 60. 灰褐色砂質土 | 74. 黄橙色砂質土 |
| 31. 茶褐色砂質土 | 46. 黄橙色砂質土 | 61. 黄褐色砂質土 | 75. 黄橙色砂質土 |
| 32. 明黄褐色砂質土 | 47. 灰黄褐色砂質土 | 62. 黄褐色砂質土 | 76. 暗黄褐色砂質土 |
| 33. 淡黄褐色砂質土 | 48. 淡褐灰色砂質土 | 63. 茶褐色砂質土 | 77. 黄褐色砂質土 |
| 34. 淡黄褐色砂質土 | 49. 褐灰色砂質土 | 64. 茶褐色砂質土 | 78. 黄褐色砂質土 |
| 35. 明黄褐色砂質土 | 50. 褐灰色砂質土 | 65. 茶褐色砂質土 | 79. 灰褐赤色砂質土 (燒土坑) |
| 36. 暗黄褐色砂質土 | 51. 淡褐灰色砂質土 | 66. 茶褐色砂質土 | 80. 茶褐赤色砂質土 (燒土坑) |
| 37. 黄褐色砂質土 | 52. 淡黄褐色砂質土 | 67. 茶褐色砂質土 | 81. 黄褐色砂質土 |
| 38. 黄褐色砂質土 | 53. 灰褐色砂質土 | 68. 茶褐色砂質土 | 82. 茶褐色砂質土 |
| 39. 暗黄褐色砂質土 | 54. 茶褐色砂質土 | | |

図 11 前庭部土層断面図

表1 1次調査石室内出土遺物一覧

整理番号	出土位置	地区	種類	内容	実測図番号		
1	石棺蓋上	1	ガラス小玉	完形：黄緑 (A) 1			
			金銅製品	歩揺 1			
			4	金銅製品		金銅板 7	
			3	5		金銅製品	金銅板 2、歩揺金具 1
			4	6		金銅製品	金銅板 5 (うち 4 点は大きいものの剥離の可能性)
			5	7		銀製品	空玉片 1
			6	20		ガラス小玉	完形：黄緑 (A) 17、濃青緑 (B) 1、淡青 (B) 1、重層 (C) 2 破片：黄緑 (A) 21、重層 (C) 10、淡青 (D) 14、淡黄 (D) 4
		銀製品	銀板 (刀装具か) 1				
		鉄製品	鉄片 15、木質 1				
		金銅製品	金銅板 112、金銅板 (鉄地か) 1、歩揺金具 12				
7		21	ガラス小玉	破片：黄緑 (A) 5、重層 (C) 6、淡青 (D) 7、淡黄 (D) 1			
			鉄製品	鉄片 3			
			金銅製品	金銅板 41、歩揺金具 3、木質 1			
8		23	ガラス小玉	完形：黄緑 (A) 39、濃青緑 (B) 4、黄緑 (B) 2、淡青 (B) 2、 重層 (C) 2 破片：黄緑 (A) 31、重層 (C) 18、淡青 (D) 22、淡黄 (D) 8	116～119		
			銀製品	棒状銀製品 1、銅を銀箔で巻いた棒状銀製品 1、銀箔 3			
			鉄製品	鉄片 37、木質 4			
			金銅製品	金銅板 273、金銅板 (彫刻あり) 2、歩揺 5、歩揺金具 31			
9		24	ガラス小玉	完形：黄緑 (A) 42、濃青緑 (B) 4、重層 (C) 3 破片：黄緑 (A) 16、重層 (C) 10、淡青 (D) 19、	32～73 92～95		
			銀製品	空玉片 5、銀箔 5	28		
			鉄製品	鉄刀子 1、鉄刀子片 3、鉄鉋 1、鉄片 55 (2 点に有機質付着)、 木質 2	10・11		
			金銅製品	金銅板 275、歩揺 7、歩揺金具 29			
10		25	ガラス小玉	完形：黄緑 (A) 8 破片：黄緑 (A) 4、重層 (C) 1、淡青 (D) 8			
			鉄製品	鉄刀子片 1、鉄片 50、木質 5			
			金銅製品	金銅板 84、金銅板 (鉄地) 1、歩揺 1、歩揺金具 15、不明 1			
11		-	ガラス小玉	完形：黄緑 (A) 138、濃青緑 (B) 7、淡青 (B) 4、黄緑 (B) 1、 青紺 (B) 1、重層 (C) 6 破片：黄緑 (A) 62、重層 (C) 27、淡青 (D) 20、淡黄 (D) 2、 淡青 (E) 2	106～111 124～126		
			銀製品	銀板 (刀装具か) 1			
			鉄製品	鉄刀片 (足金具) 1、鉄刀子片 4、鉄片 81、木質 14	12～15		
			金銅製品	金銅板 487 (1 点に有機質付着)、金銅板 (彫刻あり) 3、歩揺 24、 歩揺金具 82、空玉 2、弧状不明 2	26・27		
			赤色顔料	顔料付着土塊			
			12	棺身の蓋と接する面	-	ガラス小玉	完形：黄緑 (A) 5、濃青緑 (B) 1、淡青 (B) 1 破片：黄緑 (A) 3、重層 (C) 2、淡青 (D) 1
			鉄製品	鉄鏃 1、鉄片 3			
			金銅製品	金銅板 33、歩揺 1、歩揺金具 1	25		
13	棺内赤褐色土直上	-	銀製品	螺旋状銀製品 6	29・30		
14	棺内堆積土	1	ガラス小玉	破片：淡青 (D) 16、淡黄 (D) 7			
			金銅製品	金銅板 32、金銅板 (彫刻あり) 3、歩揺 4、歩揺金具 5			
			赤色顔料	顔料付着土塊			
15		2	ガラス小玉	破片：重層 (C) 1、淡青 (D) 8、淡黄 (D) 6			
			鉄製品	鉄片 1			
			金銅製品	金銅板 28 (1 点に有機質付着)、歩揺金具 6、金糸 1			
			赤色顔料	顔料付着土塊			

整理番号	出土位置	地区	種類	内容	実測図番号	
16	棺内堆積土	3	ガラス小玉	完形：黄緑 (A) 16、濃青緑 (B) 1 破片：黄緑 (A) 2、重層 (C) 3、淡青 (D) 14、淡黄 (D) 14、淡青 (E)	120	
			滑石製玉	白玉？ 1		
			銀製品	不明銀製品 1		
			鉄製品	鉄片 4		
			金銅製品	金銅板 11、金銅板 (彫刻あり) 2、步揺金具 1		
			赤色顔料	顔料付着土塊		
17		4	ガラス小玉	完形：黄緑 (A) 3、濃青緑 (B) 1 破片：淡青 (D) 5、淡黄 (D) 3	113	
			鉄製品	鉄片 1		
			金銅製品	金銅板 7、金銅板 (彫刻あり) 5、步揺金具 3、金箔 3		19・20
			赤色顔料	顔料付着土塊		
18		5	ガラス小玉	完形：黄緑 (A) 37、濃青緑 (B) 1、黄緑 (B) 1、重層 (C) 1 破片：黄緑 (A) 24、重層 (C) 10、淡青 (D) 37、淡黄 (D) 18	121	
			鉄製品	鉄片 44、木質 5		
			金銅製品	金銅板 33、步揺 4、步揺金具 11、金箔 10 強		
			赤色顔料	顔料付着土塊		
19		6	ガラス小玉	完形：黄緑 (A) 2 破片：黄緑 (A) 2、淡青 (D) 1、淡黄 (D) 2		
			鉄製品	鉄片 10		
			金銅製品	金銅板 9、步揺金具 1		
			赤色顔料	顔料付着土塊		
20		7	ガラス小玉	完形：黄緑 (A) 143、濃青緑 (B) 8、淡青 (B) 1、重層 (C) 6 破片：黄緑 (A) 123、重層 (C) 44、淡青 (D) 80、淡黄 (D) 37	74～91 96～103 122・123	
			銀製品	空玉片 2、不明銀製品 2		
			鉄製品	鉄刀子片 1、鉄片 195、木質 8		
			金銅製品	金銅板 316、步揺金具 70		
21		8	ガラス小玉	完形：黄緑 (A) 16、濃青緑 (B) 1 破片：黄緑 (A) 7、重層 (C) 3、淡青 (D) 7、淡黄 (D) 1	112	
			銀製品	螺旋状銀製品 3、銀箔 2		
			鉄製品	鉄片 68 (一部木質付着、1点金銅板付着)、木質 2		
			金銅製品	金銅板 36、步揺 8、步揺金具 12、金箔 1		
			赤色顔料	顔料付着土塊		
22		1・4・5	金銅製品	金銅板 10、金銅板 (彫刻あり) 13、步揺金具 12、金箔 4	18・21・22	
23		-	ガラス小玉	完形：黄緑 (A) 4 破片：黄緑 (A) 33、重層 (C) 4、淡青 (D) 21、淡黄 (D) 17		
			銀製品	螺旋状銀製品 2、銀箔 3		
			金銅製品	金銅板 41、步揺金具 4、金箔 16		
24	羨道開口部 上層堆積土	-	鏡	青銅鏡片 1	31	
25	羨道部上層 攪乱埋土	-	金銅製品	金銅板 2		
26	開口部付近	-	鉄製品	不明鉄製品 1	16	

(2) 土製品 (図 12 - 1 ~ 9)

埴輪 出土した埴輪は全て小片となっており、全容を窺うことのできる資料はない。その中でも各部位の形状や調整等がわかる 6 点について図化を行った。1・3・5 は突帯部の破片で、外面調整がタテハケである点は共通するが、突帯断面形状や内面調整に違いがみられ、色調なども異なっている。2 は朝顔形円筒埴輪の口縁部付近の破片で、外面にタテハケと赤彩が観察できる。4・6 は底部の破片で、6 は摩耗のため調整が判然としないが、4 は外面調整にタテハケ、内面調整にヨコハケ・ユビオサエが確認できる。色調はどちらも橙色であるが、器壁の厚さには大きな違いがある。

須恵器 須恵器は 3 点を図示した。7 は坏 H 身の破片で、底部から口縁部までが径の 3 分の 1 程度残存しており、口径 11.4cm、器高 4.0cm を測る。体部は特徴的な箱形を呈し、華奢な受け部に四角い端部の口縁部がつく。8 は壺の口縁部で、上方と斜め下方に端部をつまみ出す。頸部外面には回転ナデが施されるが、器面にはハケメにも似た凹凸が認められる。9 は坏 B で、石室奥壁の石材に挟まれるような形で出土した。やや丸みを帯びた底部から、口縁部は外上方に直線的に開いていく形態となり、口径 13.4cm、器高 4.6cm を測る。内外面共に凹凸の目立つ回転ナデが施され、底部にはヘラケズリの痕跡が確認できる。

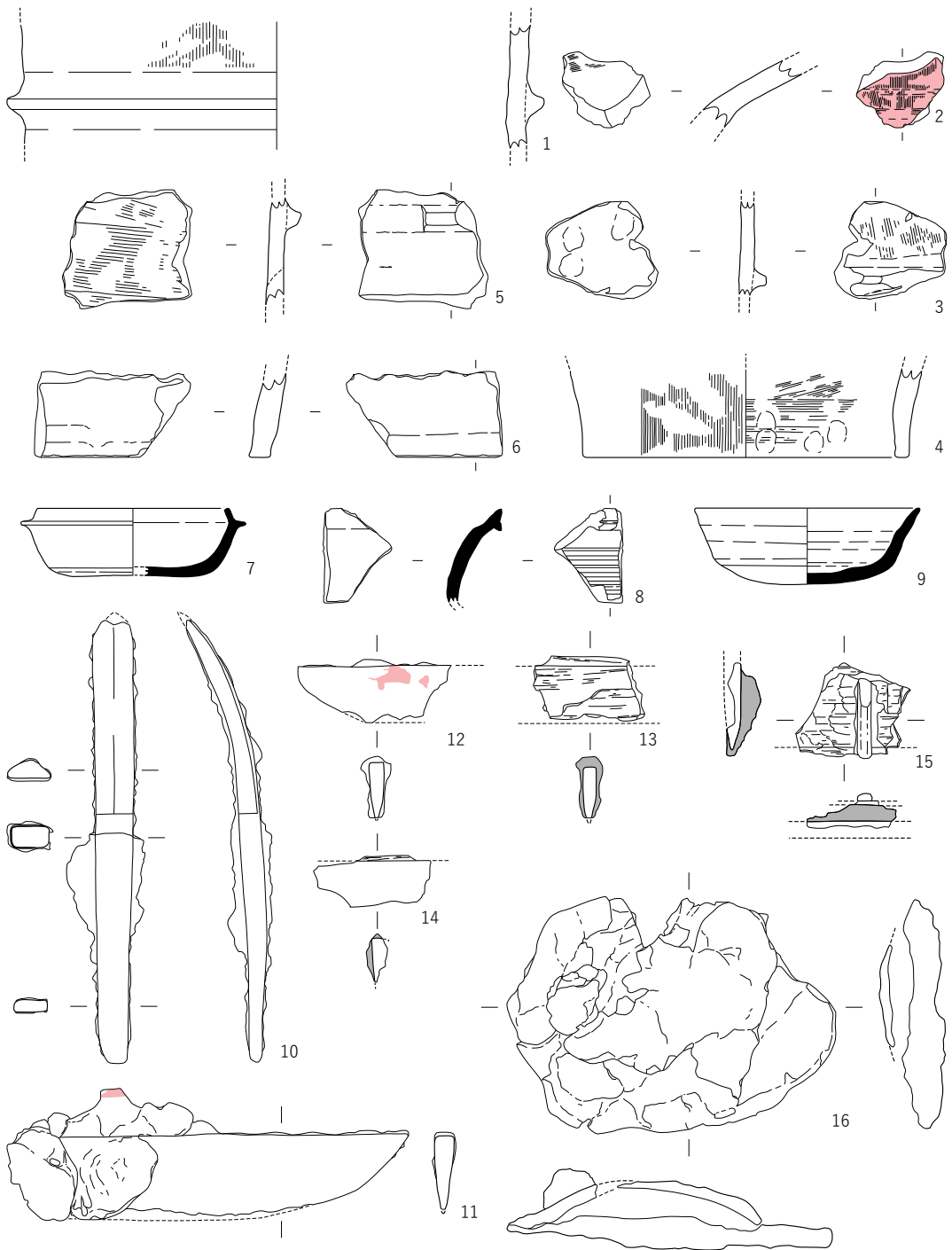
(3) 金属製品 (図 12 - 10 ~ 16、図 13)

鉄製品 器種不明の鉄塊なども多く出土しているが、ここではある程度器種が特定できるものを中心に 7 点を図化した。10 は鉄鉞で、先端は欠損しているが、寸法は残存長 13.1cm、幅 1.2cm、厚み 0.6cm で、重量は 28.6g である。図上半の 5.7cm の範囲に断面三角形の刃部が作られ、それよりも下方は断面長方形の柄部となる。刃部先端に向かって反り上がる形状をし、錆の付着が激しく明瞭ではないものの、刃部直下の柄部には革のような有機質と思われるものが巻き付けられている。刃部の裏側には朱の付着が認められる。

11 ~ 14 は鉄刀子である。11 は刃部を欠損しているものの、比較的寸法の大きなもので、長さ 11.8cm、残存幅 2.2cm、厚み 0.65cm で、重量は 50.4g である。鋒はあまり膨らまず、茎部は残存していないため関の形態はわからない。関付近と思われる実測図の左側には、革のような有機質の付着があるが、木質などは一見して確認できない。刀子本体ではないが、錆の一部に朱の付着が認められる。12 ~ 14 は刃部の破片であるが、11 に比べやや小型である。14 は残存が悪く寸法が計測できないが、12・13 は幅 1.6cm、厚み 0.45cm を測り、13 には鞘と思われる木質が依存している。

15 は鉄刀の破片である。鉄部分の残存は良くないが、鞘となる木質と銀製の足金具が一部残存している。木質と足金具の間には鉄のような金属が間に挟まっており、金属の外装をもつ鞘であったと考えられる。足金具の一部には緑錆が付着しており、二次的に付着したものであるか、足金具の材から生じたものであるかは判然としない。

16 は不明鉄製品である。X 線透過撮影像などをみると、実測図の上側や右下の外形線が生きて



- 1: 填頂表土
 2~4: 前庭部上層堆積土
 5~7: 羨道上層攪乱埋土
 8: 閉塞土中
 9: 奥壁石材間
 10・11: 石棺蓋上 (24区)
 12~15: 石棺蓋上
 16: 開口部付近

0 (鉄器) 5cm 0 10cm

图 12 1次調査出土遺物実測図 (1)

いるようにも思われたが、形状・構造ともにその詳細がよくわからない資料である。鉄の割れ方などから鍛鉄ではなく⁽³⁾ 鋳鉄の可能性もあり、開口部付近からの出土であることを踏まえると、後世の混入品である可能性も考えられる。重さは128.1gである。

金銅製品 金銅板の破片資料の中から、冠片と思しき彫金の様子が確認できる資料を抽出して6点を図化した(17~22)。17・18は蕨手状に巻き込む外形をしているが、大きさや厚みが異なっている。類例をみると、この外周部からさらに別の意匠へ派生するものも見られるが、この資料にはそういった痕跡は認められない。17は、2条の線彫によって縁取りがなされ、その線彫の間に径1mm弱の点文が1.5mmほどの間隔で打たれている。縁取りの内側には文様が施されず、歩揺を取り付けるための小孔が2個1対で2カ所に認められる。18は、1条の線彫で縁取りを行い、その内側にさらに1条の線彫を施すことで内側の空間を2つに分割する。そしてその内側の空間にのみ径1mmの点文が2.0~3.5mmの間隔で打たれている。17と同様、歩揺を取り付けるための小孔が2カ所に確認でき、その1カ所には針金状の歩揺金具が付着している。19は、縁が残存していないが、文様構成は17に近いと思われ、2条の線彫による縁取りの中に径0.65mmの点文を1.6

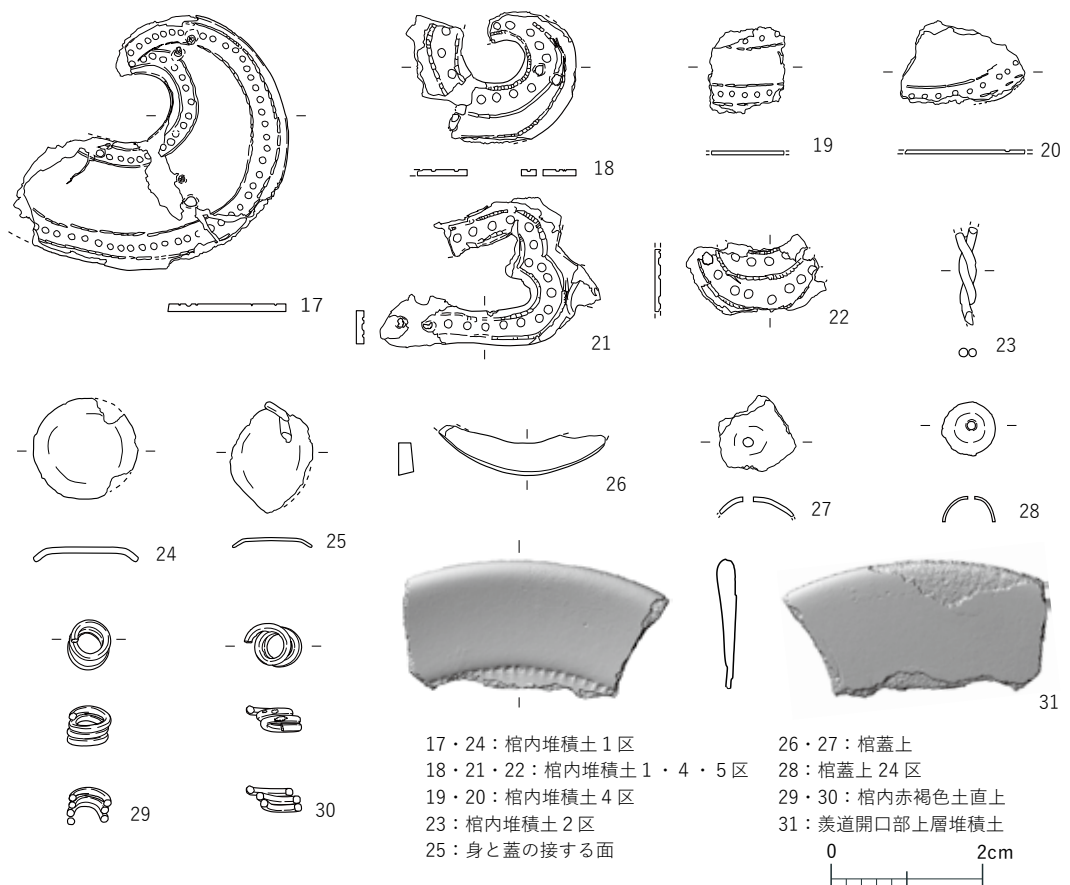


図13 1次調査出土遺物実測図(2)

～2.1mmの間隔で配している。20は、外縁が一部残存しており、19と同様の文様構成と考えられ、点文の大きさや間隔も類似している。ただし、縁取り内側の無文部の幅に若干の違いが認められる。21は、具体的な意匠はわからないが、1条の線彫で縁取りを行い、その間に径1mmの点文を2.5mm程度の間隔で配する。図の右下、縁取り線の右側には、縁取り線に接するように弧線が彫られており、右側へ文様が広がっていくようである。また、図の左下には歩揺を取り付けるための小孔が1カ所確認できる。22は、縁が残存していないが、文様構成は他のものとやや異なっており、3条の弧状の線彫が認められ、その2分割された空間の両側に径1mm程度の点文を2.0～3.0mmの間隔で配する。破片の両端には歩揺を取り付けるための小孔が確認できる。

このように金銅板の破片には、線彫と点文を用いつつも少しずつ異なる文様が彫られている。ここで、そこで用いられている彫金技術について見てみると、線彫については、いわゆる蹴り彫りによるものと判断でき、岩本崇による分類のc類に該当する(岩本2015)。17・19・20はその中でも比較的彫りの単位が粗く、タガネの打ち込み痕跡が丸みの強い雫状を呈するのに対し、18・21・22は比較的単位が細かく、タガネの打ち込み痕跡が角のある三角形状を呈する。ただし、18・21も位置によっては単位の粗い部分や、単位の認識自体が困難な線状を呈するところもあり、それらを区別することにあまり意味は見いだせない。

点文については、上述のとおりその径や間隔に若干の差異があり、17・18・21・22が少し大きく、19・20は少し小さい。それに対応してかはわからないが、19・20は他のものに比して金銅板の厚みも薄くなっている。

こういった種々の差異がどういった事象を反映しているかは、この資料状況では判断ができないが、全てが同一個体内での部位による差異という可能性もあれば、器物自体の差異である可能性も当然考えられる。また、図化していない金銅板の中には、3cm四方ほどの大きさの中に全く文様などが認められない資料が含まれている。こういった資料も冠の一部を構成するのか、冠とは異なる金銅製品となるかは即断しかねるが、今後更なる検討が必要となろう。

23～25は、冠などの装飾具に取り付けられた歩揺の部品である。図化していない他の資料も参照して全体の構造を復元すると、まず円形(24)もしくは下端がやや窄まる形状(25)の歩揺の上端にあけられた小孔に、径1mm程度の針金状の金銅製品(23)を通して6回程度捻る。そして、冠などの装飾具本体にあけられた2つの小孔に針金状金銅製品の両端を通し、内側に折り曲げて脱着を防ぐ、というものである。歩揺の大きさは概ね径1.3cmで揃っており、端部を緩く屈曲させる。針金部は個体により捻る回数に若干の違いが認められる。

26は、断面が不整形な矩形となる不明金銅製品である。図化していない小片が他に2点あるが、厚みが2mm程度あり、上述の金銅板とは明らかに様相を異にする。いずれの面にも鍍金が施されるが、表裏ともに彫金は認められない。

27は、金銅製空玉で、球形の頂部しか残存していないが、概ね径1.3cm程度の大きさに復元で

きる。頂部に 1.5mm ほどの小孔が穿たれ、厚みは 0.5mm である。他に小片が 1 点出土している。

28 は、銀製の空玉で、大小の破片が 10 点出土している。残りの良いものは全て半球状で、径 7mm、高さ 3.5mm、厚さ 0.4mm を測る。頂部に 1mm 弱の小孔が穿たれている。

29・30 は、器種不明の螺旋状銀製品であり、残存状況に差異はあるものの 11 点が出土している。径 1mm 弱の針金状の銀線を、径 5mm ほどの輪をつくるように螺旋状に巻き上げており、最も残りの良いもので 4 周程度が残存している。この形状と似たものに、古墳の時期や材質は異なるが、奈良県橿原市新沢千塚 126 号墳から出土した金製垂飾付耳飾がある（森ほか 1977）。この資料の中間飾部分は、芯となる金線をさらに金線で巻いていく構造をしており、その周りに巻かれた金線の有り様が形状としてはこの資料に類似している。しかし、その金線の輪は径 2.5mm と本資料の半分程度であり、類似度はそこまで高くない。

青銅製品 31 は青銅鏡の破片である。⁽⁴⁾ 復元径 10cm 程度の小型のもので、縁は平縁で幅 1.4cm を測る。外区に櫛歯文と思われる文様がわずかに残っている。

(4) 玉類 (表 2・図 14・15)

石棺蓋上や石棺内から出土した玉類には、滑石製白玉とガラス玉がある。⁽⁵⁾

滑石製白玉 その可能性が考えられる破片が 1 点出土しているのみであり、外径 6.5mm、内径 3.5mm、厚さ約 1mm を測る不整形のものである。古墳時代に通有の白玉とは形状や厚さの点で異なっており、古墳時代の玉類として捉えるべきか判断が難しい資料である。

ガラス玉 小玉がその大半を占め、重層玉に分類されるものも含まれている。本報告では、その全てについて図化するまでに至らなかったため、その一部を図示した。

ガラス小玉は、完形のものが 536 点、破片になっているものが 877 点出土しているが、製作技法の違いによって 5 種類に大別できる (表 2、詳細は第 5 章第 4 節参照)。

引き伸ばし法で作られた A 類 (32～91) が最も多く、完形資料の 9 割、破片資料の 4 割を占めている。完形資料を計測した大きさは、径が 1.9～4.3mm 前後と幅があるが、その変化は漸移的であり、厚さも 0.7～3.9mm 前後と幅があるものの、径との正の相関は弱い。孔径は 0.5～1.6mm

表 2 ガラス玉集計表

類型	器種	製作技法	材質	着色剤	色調	完形	破片
A	小玉	引き伸ばし	S II B	銅+錫酸鉛	黄緑色半透明	471	333
B	小玉	変則的引き伸ばし	S III C	コバルト	青紺色透明		1
				銅	濃青緑色透明		29
				銅	淡青色半透明		9
				銅+錫酸鉛	黄緑色半透明		6
C	重層玉	連珠	S III	鉄	黄褐色透明	20	139
D	小玉	鑄型	S II B	錫酸鉛	淡黄色不透明		120
				銅	淡青色半透明		280
E	不明玉	不明	S II B	銅	淡青色透明		5
合 計						536	877

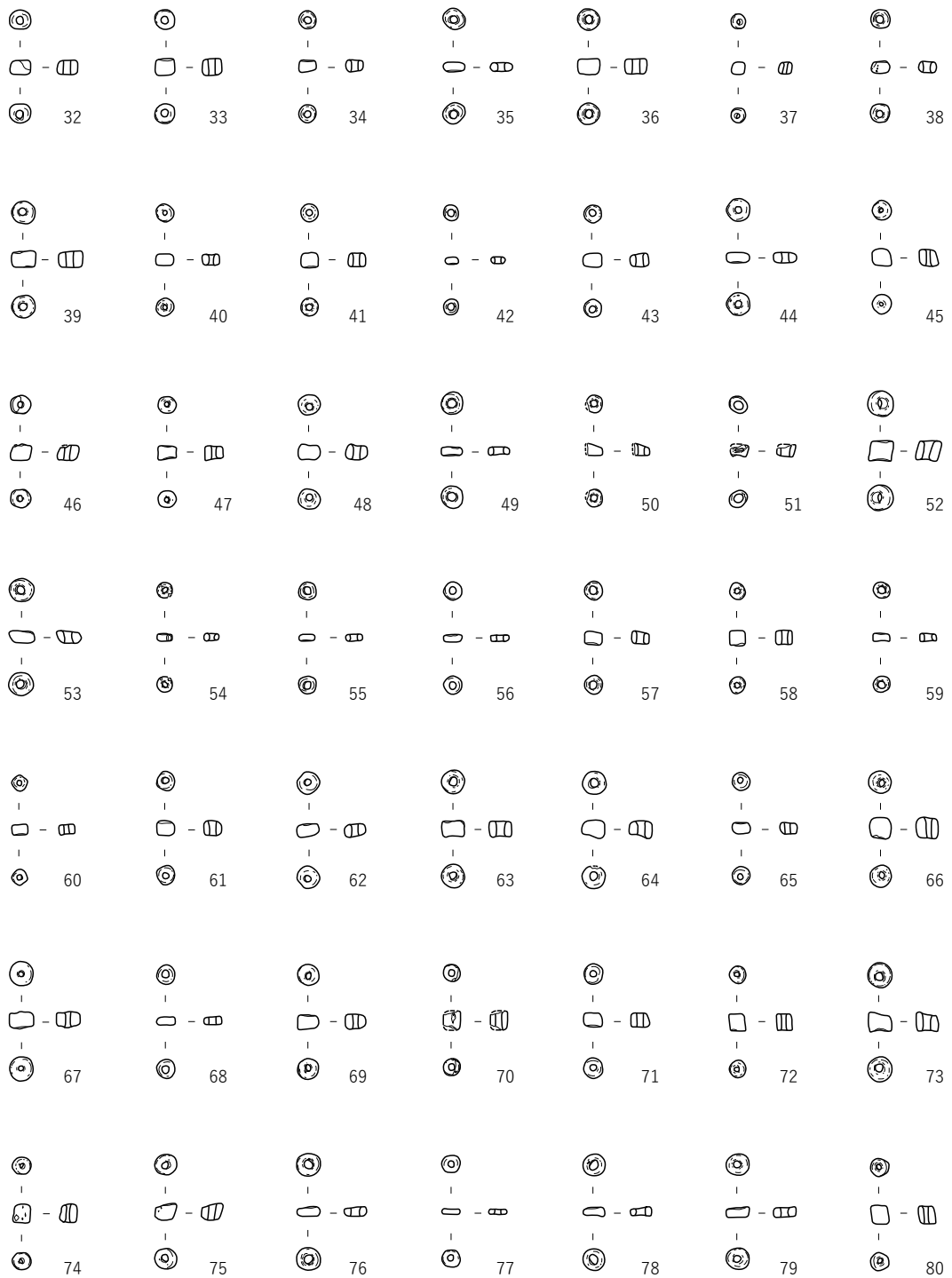


図 14 1次調査出土ガラス玉実測図(1)

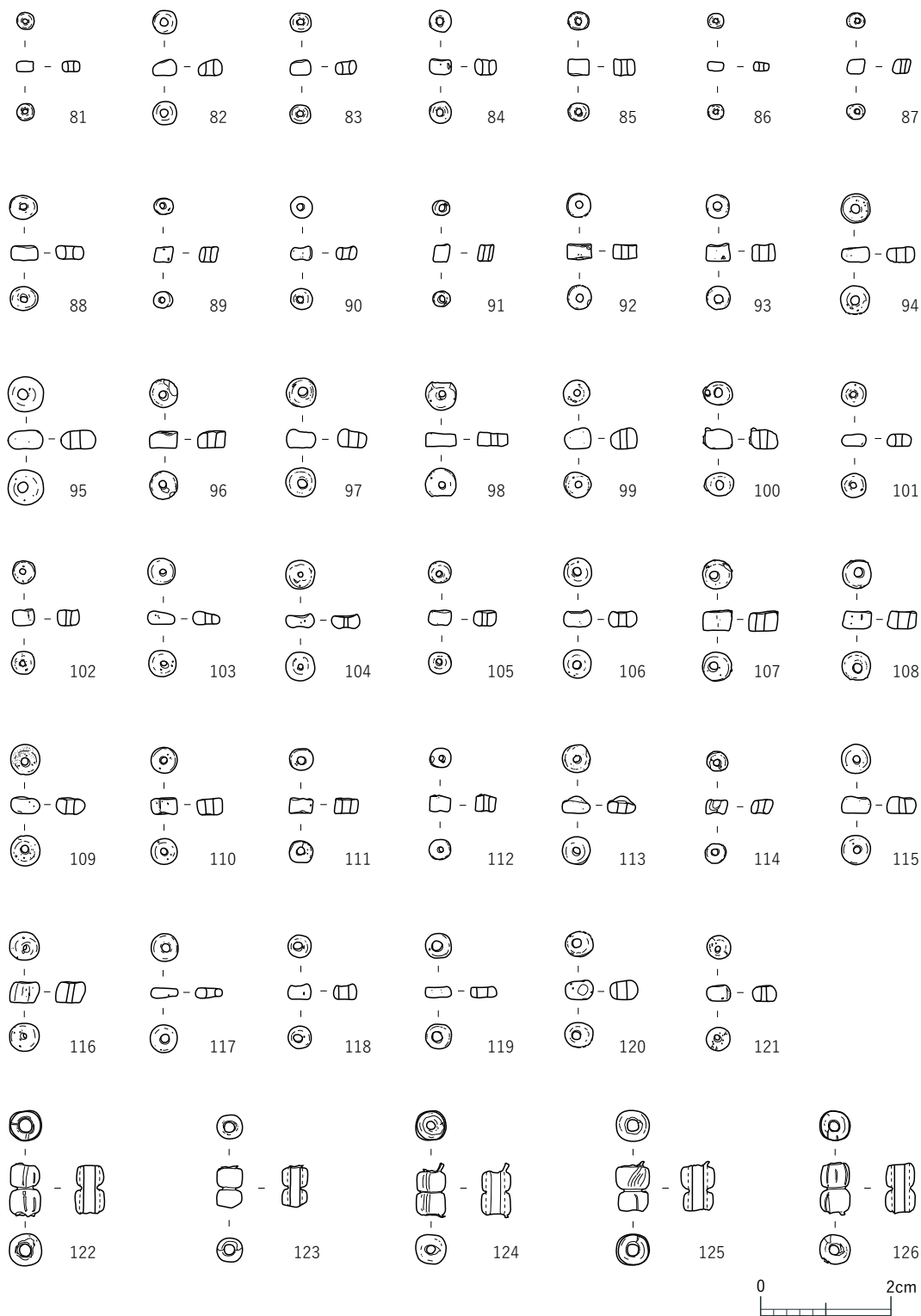


図15 1次調査出土ガラス玉実測図(2)

を測り、径に対して正の相関が認められるものの、これについても強いものではなく、大きさにおける作り分けのようなものは現状認めがたい。

B類(92～121)は、製作技法が変則的引き伸ばし法と呼ばれるものである(大賀2002・2010a)。着色剤による色調の違いによって細分できるが、それぞれの個体数は少ない。破片資料として出土しているものが認められない点が、他の製作技法のものとは異なる点であるが、それが製作技法の違いに起因するものであるかは判然としない。大きさのまとまりは、それぞれに若干の違いはあるものの、引き伸ばし法で作られたA類より総じて大きく、3.1～5.4mm弱を測る。厚みも1.5～3.2mm前後とA類に比べ大きいものが多いが、径との相関はA類と同様弱いものである。孔径は0.5～1.6mmを測り、A類とほぼ同じ値を示す。

D類は、鋳型法で作られたもので、その技法によるためか全て破片資料となっている。そのため、製品時の大きさなどについてはよくわからないが、破片の出土数ではA類の次に出土数が多く、副葬された玉類の中でも一定の割合を占めていたものと推測される。

C類(122～126)とした重層玉については、完形資料が20点、破片資料が139点出土しており、玉類全体に占める割合は1割強と比較的多い。製作技法は連珠法と考えられ、最も残りの良いもので二連の連珠となっているものがある。連珠ではなく1つの小玉のようにになっているものもあるが、破片資料の様相をみるに、そういったものも元々は二連のものとして副葬されていた可能性が高いと考えられる。重層玉の構造は、2重のガラスの間に銀箔が挟み込まれており、径4～5mm、厚さ3.5mm程度の小玉が連珠となることで、全体として長さ7mm前後の大きさとなっている。

E類は、巻き付け法で作られたものである可能性があるが、小片のみのため、その大きさなどについては不明である。

第5節 横穴式石室小結

既に述べたとおり、今回の横穴式石室の調査は、その存否確認および存在した場合の石室実測図の作成を主たる目的として行った。調査の結果、過去に指摘されていた通りの巨大な横穴式石室が存在していることがわかり、石室としてはほぼ完存していると言いうる残りの良さであった。

また、石室内には刳拔式家形石棺が1基納められており、その大きさもさることながら、長辺に3つの縄掛突起をもつ特異な形状は、今後條ウル神古墳の性格を考える上で重要な特徴といえる。

また、石棺は盗掘の被害を受けていたため、棺内に納められていたであろう副葬品の多くは失われていた。しかし、盗掘の残骸ではあるものの、金銅製装飾具や鉄製品、多量のガラス玉など、当初の副葬品の一端を掴むことができた。そして、今回調査を行わなかった石室の床面上には、盗掘の被害を受けていない手つかずの副葬品が残っている蓋然性が高いことも明らかとなった。

條ウル神古墳の歴史的な位置づけを深める上では、これら資料の解明が非常に重要な位置を占めることは論を待たない。今後の大きな課題と言えよう。

第4章 墳丘の調査

第1節 基本層序

墳丘に設定したトレンチでは様々な土層の堆積が確認できたが、それらをその推定される性格によって大別すると、Ⅰ：表土、現耕作土やそれに伴う攪乱土、Ⅱ：古墳築造以後の盛土、Ⅲ：墳丘盛土、Ⅳ：古墳築造時旧表土、Ⅴ：地山となる。

トレンチによって全ての性格の土層が確認できる場所もあれば、あいだの層が認められず、Ⅰ層の直下でⅤ層を検出したり、Ⅱ層とⅢ層の間に自然堆積層が挟まる場合もある。特に残存する墳丘の東西で堆積状況が大きく異なり、Ⅲ層は残存墳丘の東半部に目立って認められ、西半部ではほとんど確認できない。このことは、條ウル神古墳の築造工程を考える上で重要な知見といえる。

以下では、残存している墳丘を、横穴式石室が構築されている北側の墳丘（以下、北墳丘と呼ぶ。）と、その南側に続いている墳丘（以下、南墳丘と呼ぶ。）の2つに分け、報告を行う。

第2節 横穴式石室の墳丘

(1) 1トレンチ (図16～19)

位置 北墳丘の北西、南北市道を挟んだ位置に1トレンチを設定した。掘削当初は長さ11.5m、幅1.5mで設定したが、掘削土置場等の都合から、最終的に長さ8.8m、幅1.7mとなった。

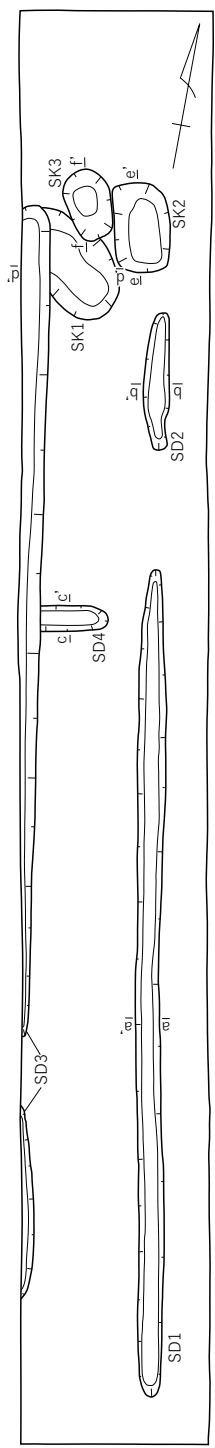
1トレンチの南西には高さ1.4m程の小丘が存在する。地元住民の話によると、市道が造られる以前は、北墳丘から北西方向に尾根が続き、その尾根を崩して現在の道路や住宅、耕作地が作られたようである。この小丘は、そういった削平を免れ、尾根の一部が取り残されたものと考えられるが、もし條ウル神古墳の墳丘がこの小丘を含むものであった場合、1トレンチを設定したあたりで、古墳に伴う何らかの造作が認められると考えられた。

土層の状況 Ⅰ層である厚さ20cmの黒褐色や黄褐色細砂層（1～6層）の下には、第1遺構面の基盤となる、黄褐色細砂主体のⅡ層（7・8層）が最大90cmの厚みで上面水平に堆積している。7層中には、瓦器碗片や磁器片などが混じることから、この盛土は近世以降に耕作地の拡大を目的としてなされたものと考えられる。

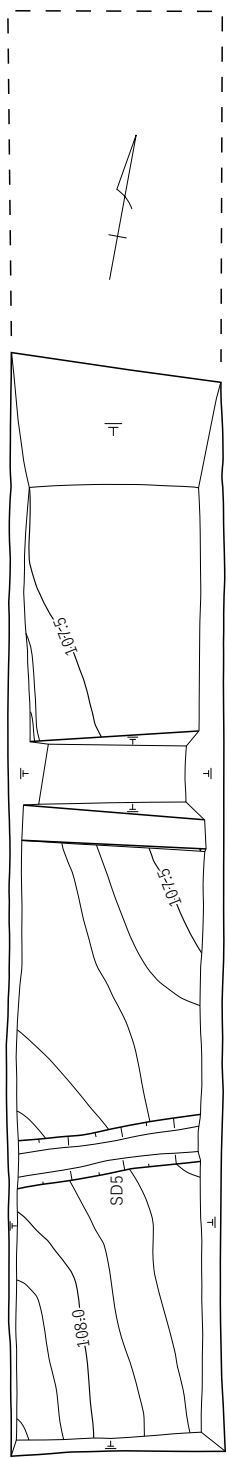
その厚いⅡ層を除去すると、トレンチ南端付近ではⅤ層（37層）が検出され、その北側では北東へ傾斜する第2遺構面の基盤となる、褐色粗砂や黄褐色シルトの互層状堆積層（9～35層）が認められた。この土層の生成要因については俄に判断できないが、複数回にわたる切り合いが認められること、下層の地山と同様の傾斜面を形成していること、層中に土師皿や瓦器碗の破片が混じることから、中世頃の尾根斜面上における自然堆積と考えておきたい。

さらにそれら土層を除去すると、Ⅴ層である黄褐色シルト層（36～38層）が全面で検出された。

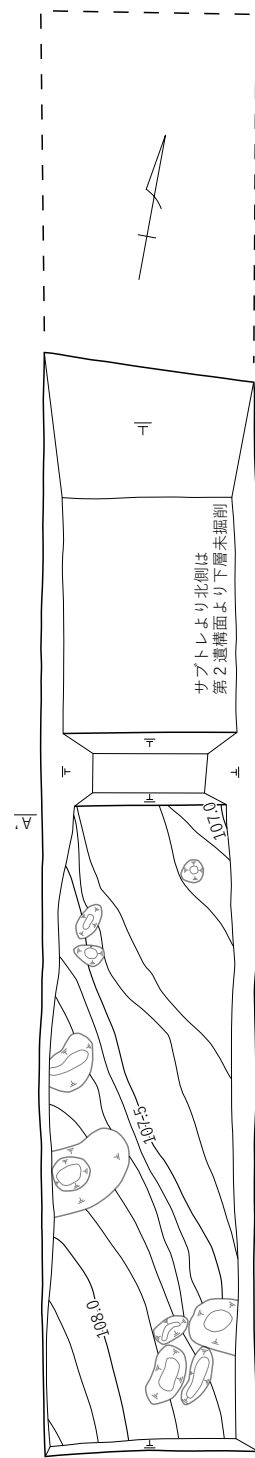
第1遺構面 素掘溝4条（SD1～4）、土坑3基（SK1～3）を検出した。いずれからも目立った



第1遺構面



第2遺構面



第3遺構面 (地山) 面

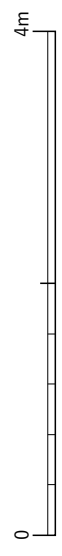
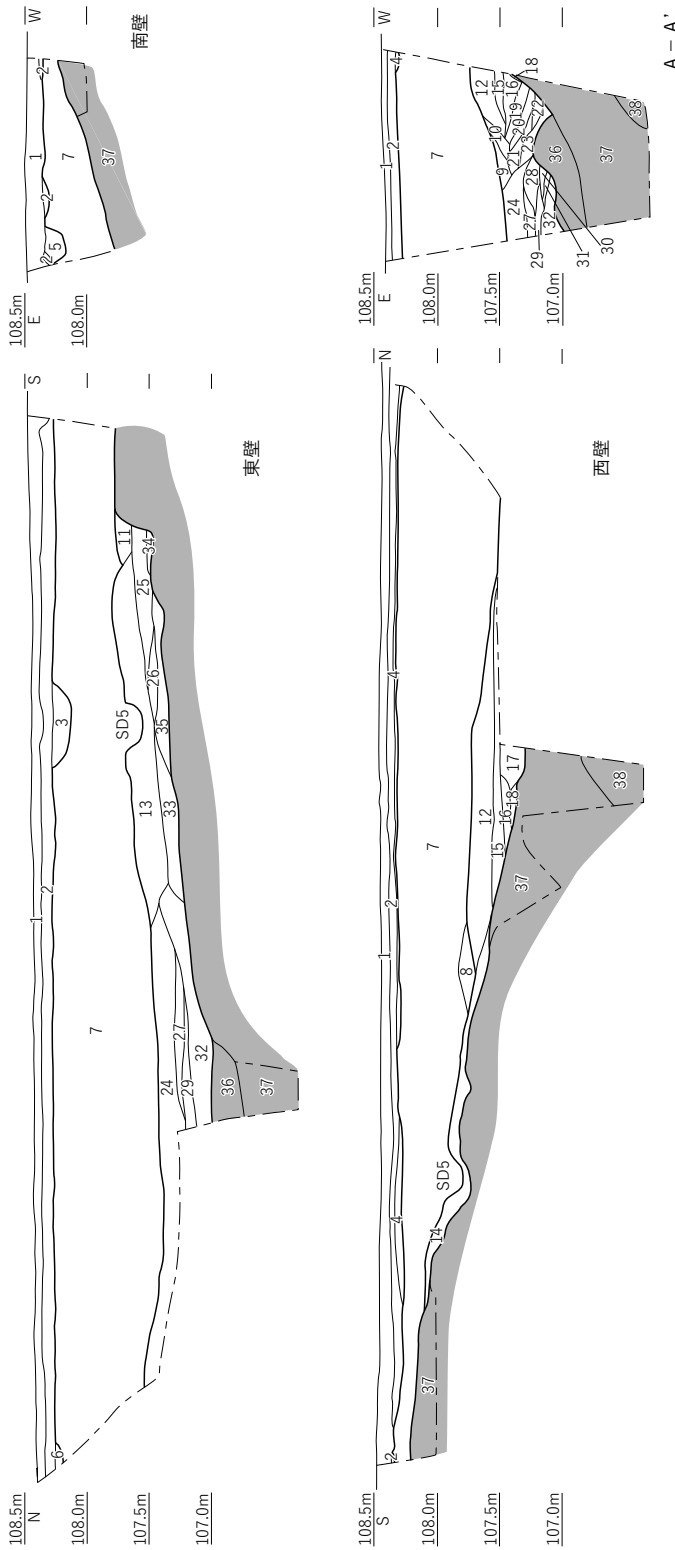


図16 1トレンチ平面図



- | | | |
|---|---------------------------------|--------------------------------------|
| 1. 黒褐色 (2.5Y3/2) 細砂 (耕作土) | 16. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂～シルト | 31. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細砂 |
| 2. 黄褐色 (2.5Y5/3) 細砂、褐色粒をやや含む | 17. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粗砂 | 32. 褐色 (10YR4/4) シルト |
| 3. 褐色 (10YR4/4) 細砂、黄褐色細砂ブロックを含む | 18. 褐色 (10YR4/4) 粗～中砂 | 33. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗砂 |
| 4. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細～極細砂、褐色土を斑状に含む (SD3埋土) | 19. 褐色 (10YR4/4) 粗～中砂 | 34. 黄褐色 (2.5YR5/3) シルト～粘土 |
| 5. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂 | 20. 褐色 (10YR4/4) 極細砂 | 35. 褐色 (10YR4/4) 極細砂 |
| 6. 黄褐色 (2.5Y5/3) 極細砂～シルト | 21. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中～細砂 | 36. 黄褐色 (10YR5/6) シルト (地山) |
| 7. 黄褐色 (10YR5/6) 細砂、白色粒をやや含む | 22. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中～細砂 | 37. 黄褐色 (10YR5/8) シルト、黒色粒子を多く含む (地山) |
| 8. 褐色 (10YR4/4) 極細砂～シルト | 23. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗砂 | 38. 黄褐色 (10YR5/6) シルト、黒色粒子を多く含む (地山) |
| 9. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗～中砂 | 24. 褐色 (10YR4/4) 極細砂 | |
| 10. 褐色 (10YR4/4) 極細砂 | 25. 黄褐色 (10YR5/8) シルト、地山ブロックを含む | |
| 11. 褐色 (10YR4/4) 極細砂 | 26. 黄褐色 (10YR5/4) 中～細砂 | |
| 12. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗砂 | 27. 褐色 (10YR4/4) 中砂 | |
| 13. 褐色 (10YR4/4) 粗～中砂 | 28. 褐色 (10YR4/4) 極細砂 | |
| 14. 褐色 (10YR4/4) 細砂 | 29. 黄褐色 (10YR5/6) シルト | |
| 15. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中～細砂 | 30. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中～細砂 | |

図 17 1 トレンチ土層断面図

遺物の出土はないが、SD1 から瓦質土器片、SD2・SK3 から磁器片が出土している。現耕作土の直下でもあり、近世から現代にかけての耕作痕と考えられる。

第2遺構面 北東へ傾斜する第2遺構面では東西方向の素掘溝1条（SD5）を検出した。埋土が7層であるため、盛土がなされた時に機能していた溝と考えられるが、その性格については定かではない。

第3遺構（地山）面 上層堆積の影響による凹凸が認められるが、第2遺構面と同様南西から北東に向かってなだらかに傾斜している。トレンチ南端の最も高いところで標高108.2m、検出した最も低いところは標高107.0mである。

條ウル神古墳の規模によっては、1トレンチにおいて北側を画する溝などが検出される可能性が考えられたが、そのような痕跡は全く認められなかった。周辺地形を観察しても、この1トレンチで検出した地山面の傾斜は、古墳の載る尾根自体の自然傾斜面を表している可能性が高いと考えられる。

出土遺物（図19） 器種等のわからない土師器小片が多いが、陶磁器や瓦器、須恵器、瓦、サヌカイトの破片も少数であるが認められる。

127～130は、いずれも遺構面基盤層を構成する層位からの出土であり、遺構自体に伴うものではない。127・129・130は埴輪の突帯片で、断面形状が台形のもの（127）や上稜が外側に引き出されるもの（129・130）がある。調整は摩耗により不明瞭なものが多いが、130は外面をヨコハケ、内面をタテハケで調整している。128は土師器羽釜の鏝部片で、鏝部の断面が細長く、突出の強い形状をしている。

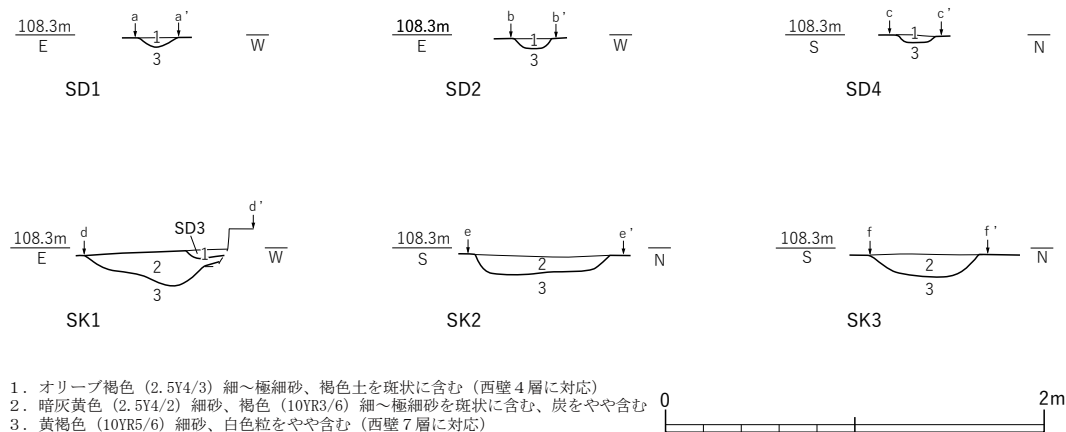


図18 1トレンチ第1遺構面 遺構断面図

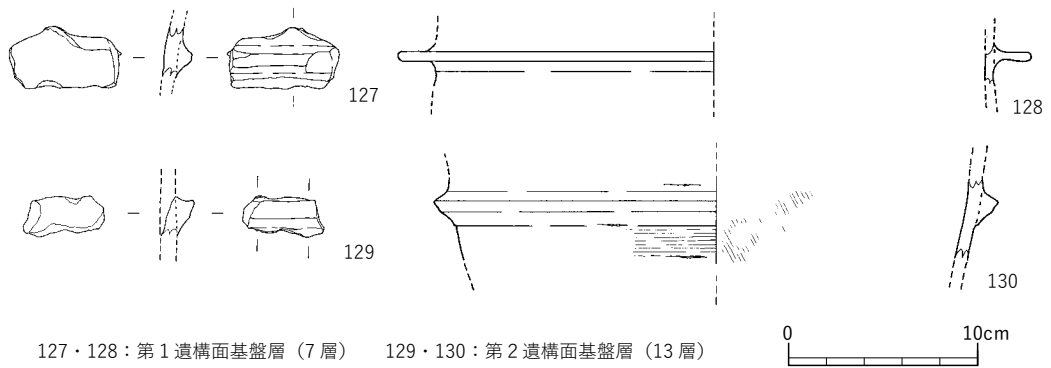


図19 1トレンチ出土遺物実測図

(2) 2トレンチ (図20)

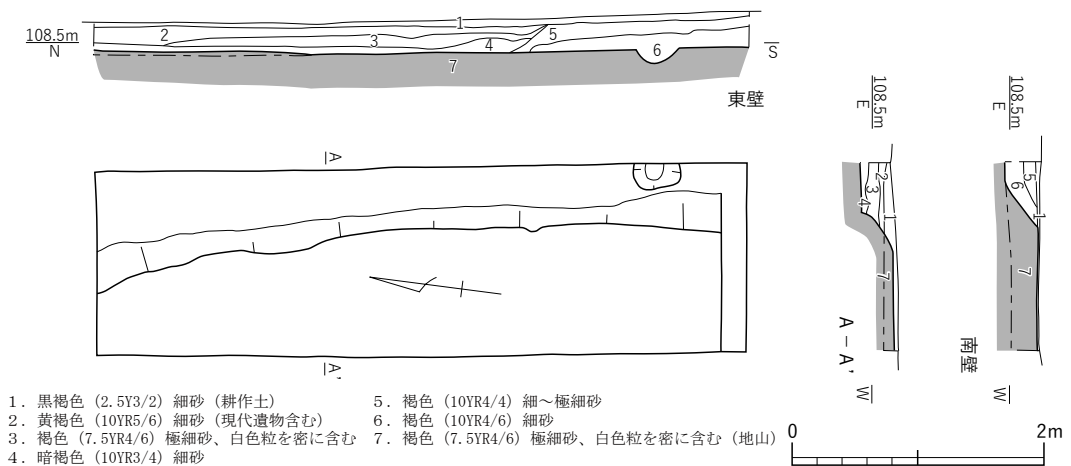
位置 1トレンチから西へ12mほどのところに、1トレンチと同様の可能性を想定して2トレンチを設定した。長さ5.2m、幅1.5mである。

土層の状況 I層である褐色系細砂層(1~6層)の直下で、V層である褐色極細砂層(7層)を検出した。

地山面 検出した地山面は平坦面をなしており、周辺地形の状況からも、大きく削平され本来の形状を留めていないことは明らかであった。当然ながら古墳に伴う遺構の存在は確認できなかった。

トレンチ東側の地山面上には、深さ24cm程度の溝状の掘り込みが認められた。トレンチ南端から1.6mのところまで切り合いが認められ、同一箇所において溝の掘り直しが行われているようであるが、近代~現代にかけての耕作に伴う溝と考えられる。トレンチ南端から70cmの溝底に、径約40cm、深さ約10cmの土坑を検出したが、この遺構も上記の溝と同様の耕作に伴うものであろう。

出土遺物 出土量は非常に少なく、溝埋土から土師器や瓦器の小片が出土したのみである。



- | | |
|-------------------------------|------------------------------------|
| 1. 黒褐色 (2.5Y3/2) 細砂 (耕作土) | 5. 褐色 (10YR4/4) 細~極細砂 |
| 2. 黄褐色 (10YR5/6) 細砂 (現代遺物含む) | 6. 褐色 (10YR4/6) 細砂 |
| 3. 褐色 (7.5YR4/6) 極細砂、白色粒を密に含む | 7. 褐色 (7.5YR4/6) 極細砂、白色粒を密に含む (地山) |
| 4. 暗褐色 (10YR3/4) 細砂 | |

図20 2トレンチ平・土層断面図

(3) 5トレンチ (図21)

位置 北墳丘の南西、段々畑西下段面の北側に、墳端を画する溝や段築平坦面など墳丘に関わる遺構の確認を目的として5トレンチを設定した。トレンチの大きさは長さ5.6m、幅1.6mである。

土層の状況 I層である黒色細砂(1層)やにぶい黄褐色細砂(4層)を除去すると、全面に褐色細砂(5層)が検出された。この土層には瓦器片が含まれていたが、小片であるため土層の形成時期を示すものであるかは定かではない。5層を取り除くと、トレンチ北半ではV層の花崗岩パイラソ土である褐色細砂(8層)がほぼ水平に検出され、南半では厚さ約40cmの白色粒を多く含む褐色極細砂(6・7層)が確認された。積極的な根拠は乏しいものの、堆積状況から5～7層は中世以降に行われた耕作に伴う盛土(II層)である可能性が考えられる。その下では、北半から続くV層が南西方向になだらかに傾斜していた。

トレンチ南西隅に、4層上面から掘り込まれた落ち込み状の土層が確認できる。埋土からは長径20cm前後の礫1点が出土したのみで詳細はわからないが、南北市道に伴う擁壁設置時の掘方である可能性も考えられる。

地山面 検出した地山面は、上記のとおりトレンチの北半では平坦面を成し、南半は南西に向かってなだらかに傾斜している。その標高は、平坦面で約111.8m、最も低いところで111.35mである。この傾斜面がどの程度古墳の旧状や元々の地形を反映しているかは、出土遺物も少なく判断としない。トレンチ北半の地山平坦面も、古墳の段築平坦面の名残である可能性を積極的に肯定する根拠に乏しく、直上にII層が確認できることを踏まえると、中世以降に削平を受けている可能性が高いと考えられる。

出土遺物 4層から陶磁器片、5層から瓦器片がわずかに出土しているのみである。

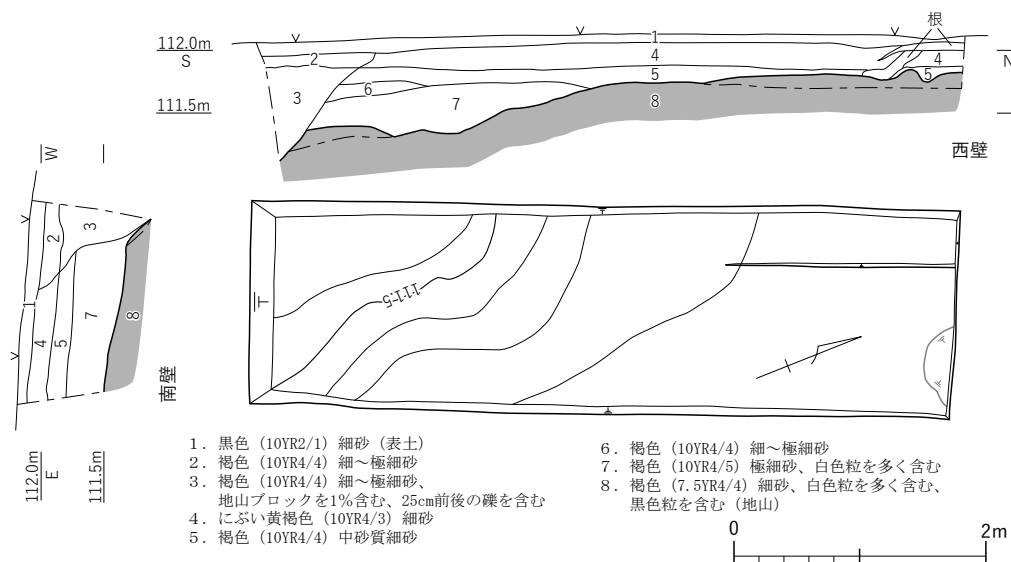


図21 5トレンチ平面・土層断面図

(4) 5トレンチ延長部 (図 22)

位置 5トレンチの調査成果を受け、その北東、段々畑西上段から石室を包含する尾根頂部にかけて、墳端を画する溝や段築平坦面、墳丘盛土の存在を確認する目的で、長さ 11.6 m、幅 1.0 m のトレンチを設定した。

土層の状況 I層である黄褐色細砂層(1～6層)を除去すると、トレンチ北側の頂部ではIII層(12～22層)が、西上段部ではV層である浅黄橙色細砂(25層)が検出された。頂部に至る斜面と西上段面の境界部には、溝状の掘り込みが認められたが、埋土の出土遺物をみると近現代の耕作に伴う排水用の溝と判断できる。

トレンチ南端から約 2.0～4.5 m の範囲では、地山上にいくつかの堆積が認められた(7～11層)。層中からの出土遺物がないため、その性格は詳らかにできないが、色調や土質などは後述する他のトレンチで確認した墳丘盛土に近い。この点を積極的に評価すると、本来はこのあたりまで墳丘に伴う盛土が行われており、段々畑の造成時に大きな削平を受け、現況のような地形に改変された可能性も考えられよう。

墳丘盛土 本トレンチの成果により、北墳丘の頂部は、その大部分が盛土で構築されている可能性が高いことが明らかとなった。盛土の断ち割り調査を深くは行っていないため、確認できた盛土は締りの強い褐色系の極細砂のみで、後述する 6・9トレンチで確認した、複数の土質の盛土を積み重ねるような状況はここでは確認できていない。地山である 25層との間にIV層は確認できず、盛土が直接載っている。ただし、地山の最高点を確認できていないため、地山・石室・盛土の詳細な関係は判然としない。頂部で検出した墳丘盛土の最も高いところの標高は 114.96 m であり、検出した地山の北端部は標高 113.0 m である。

上述したとおり、トレンチ南端から約 2.0～4.5 m の範囲で検出した土層は、黄褐色極細砂～シルトを中心とした締りの強い土質で、橙色系のブロックが含まれているものもある。周囲のトレンチで検出されている中世以降の盛土や地山とは明らかに土質が異なっており、墳丘盛土が削平を免れて残存した可能性も想定できる。ただしこの点は、墳丘の規模・形態に直結する問題であるため、周辺の調査結果を踏まえて慎重に判断する必要がある。

出土遺物 図化できる資料はなく、表土直下の攪乱層から土師器・磁器・埴輪の小片が出土しているのみである。

(5) 10トレンチ (図 23～27)

位置 北墳丘東側にある段々畑の中段北側に、墳端や段築平坦面など墳丘に関わる遺構を確認するために 10トレンチを設定した。トレンチの大きさは長さ 10.6 m、幅 2.0 m である。

土層の状況 I層の灰オリーブ色極細砂(1層)を除去すると、II層と判断できる分厚い土層が認められた。そのうち近世以降の盛土と考えられる層としては、花崗岩バイラン土や黒褐色ブロック

が多く混じる厚さ 10～75cm の褐色細砂（3～6層）、その下に厚さ 20～60cm のオリーブ褐色細砂（7層）が堆積していた。これらは、4・5層と6層の間で土質が大きく異なることや、7層上面で第1遺構面を検出したことなどから、複数次に渡って段階的に行われた盛土と考えられる。また、3～6層の土質は、他のトレンチで検出している墳丘盛土と類似した土質であり、近世以降の盛土の際は一定程度墳丘を削平して行っている可能性が考えられる。黄褐色細砂の8層、褐色シルトの9層は均質で分厚い堆積となっており、同じ段に設定した後述する6トレンチの成果を踏まえると、中世頃に耕作地拡大の目的で行われた盛土と評価できる。

9層を除去した面で第2遺構面を検出したが、その基盤層である10～12層は、にぶい黄褐色や黒褐色シルト層で構成される。11層は、途中を素掘溝で切られながらも、トレンチの西端から5.4m東側まで堆積している。西端から2mほどまでは平坦に堆積し、そこからやや角度を変えて落ちていき、再び4.5mほどのところで平坦になる。この落ち込んでから平坦になっていくあたりで須恵器の破片がまとまって検出された（図25）。器種は甕・高坏・器台であり、須恵器型式はTK43型式（田辺1966・1981）前後のものと考えられる。横穴式石室開口部に近い位置関係からすると、前庭部における祭祀痕跡を想起させる内容ではあるが、破片の出土した高さは、横穴式石室で想定される床面の高さに比べると1.5m以上低いため、前庭部で行われた祭祀そのものとは考えにくい。須恵器の出土状況も、層理面に接して検出されたものではなく、層中に含まれ破片ごとに出土する高さも異なる状況であったため、現状では前庭部で用いられた須恵器が後に流出した可能性を考えたい。

11層の下で検出した黄橙色シルトの13層は、検出当初、地山の可能性を考えていたが、下層を確認したところ、14層から埴輪の出土が認められた（図26-142）。その埴輪は胴部の破片であるが、外面にヨコハケ調整が確認でき、條ウル神古墳に伴うものとは考えにくい。上記の須恵器の出土などを考えると、13層は古墳に伴う盛土である可能性も考えられる。ただし、後述する6トレンチのような細かな盛土の単位は確認できないため、確実な盛土の認定は今後の調査で補足する必要がある。トレンチ西端における13層上面の標高は107.62mを測り、検出した最も東側の標高は106.6mである。

14・15層は、確認できた範囲では東側にやや傾斜しながらもほぼ水平に堆積している。14層からは上述の埴輪が出土し、15層からも細片ながら酸化焰焼成の土器が出土している。古墳構築前の旧表土などの可能性が考えられるが、現状ではその性格は判然としない。16層は、緑灰色粘土であるが、狭い範囲での確認ではあるものの地山の可能性が高いと考えられる。上面の標高は106.4mである。

なお、9層より下層の堆積に関しては、調査期間等の問題から、北壁沿いに設けたサブトレンチ内のみでの観察所見であるため、今後の調査において面的な確認を行う必要がある。

第1遺構面 7・8層上面で南北方向の素掘溝2条（SD1・5）と東西方向の素掘溝3条（SD2～4）

- 1. 黒褐色 (10YR3/2) 極細砂、締り弱い (表土)
- 2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 極細砂 (根攪乱)
- 3. 黄褐色 (2.5Y5/4) 細～極細砂、白色粒を1%含む (表土下の攪乱層)
- 4. 黄褐色 (10YR5/6) 細～極細砂
- 5. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂
- 6. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細砂 (表土下の攪乱層)
- 7. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂、締り強い、白色粒を1%含む
- 8. 黄褐色 (10YR5/6) 極細砂～シルト、締り強い、白色粒を2%含む、1cm前後の黄褐色ブロックを1%含む
- 9. 黄褐色 (10YR5/6) 中砂質シルト
- 10. にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト、締り強い、白色粒を2%含む、4cm弱の橙色ブロックを1%含む
- 11. 明褐色 (7.5YR5/6) 中砂質シルト
- 12. 黄褐色 (10YR5/6) 細～極細砂、締り強い、白色粒を1%含む
- 13. 褐色 (10YR4/4) 極細砂、締り強い、白色粒を3%含む、橙色粒を2%含む
- 14. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、締り強い、5mm弱の橙色粒を2%含む
- 15. 黄褐色 (10YR5/6) 極細砂、締り強い、2cm～4cmの明黄褐色ブロックを3%含む、白色粒を1%含む
- 16. 黄褐色 (10YR5/6) 細～極細砂、締り強い
- 17. 明黄褐色 (10YR6/6) 極細砂、締り強い、白色粒を2%含む
- 18. 黄褐色 (10YR5/6) 細～極細砂、締り強い、白色粒を1%含む
- 19. 明黄褐色 (10YR6/6) 極細砂、締り強い、白色・橙色粒を1%含む
- 20. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、締り強い、橙色粒を1%含む、2cm前後の黄褐色ブロックを1%含む
- 21. 明黄褐色 (10YR6/6) 極細砂～シルト、締り強い、橙色粒を1%含む
- 22. 黄褐色 (10YR5/6) 細～極細砂、締り強い、白色粒を2%含む
- 23. 褐色 (10YR4/4) 細～極細砂、5cm前後の地山ブロックを7%含む (根攪乱を受けた地山)
- 24. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 極細砂～シルト (根攪乱を受けた地山)
- 25. 浅黄褐色 (10YR8/3) 粗砂質細砂 (地山)

平面土層注記

- 1. 浅黄褐色 (10YR8/3) 粗砂質細砂 (地山)
- 2. 黄褐色 (10YR5/6) 中砂質シルト (断面9層に対応)
- 3. 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト、締り強い
- 4. にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト、締り強い、白色粒を2%含む、4cm弱の橙色ブロックを1%含む (断面10層に対応)

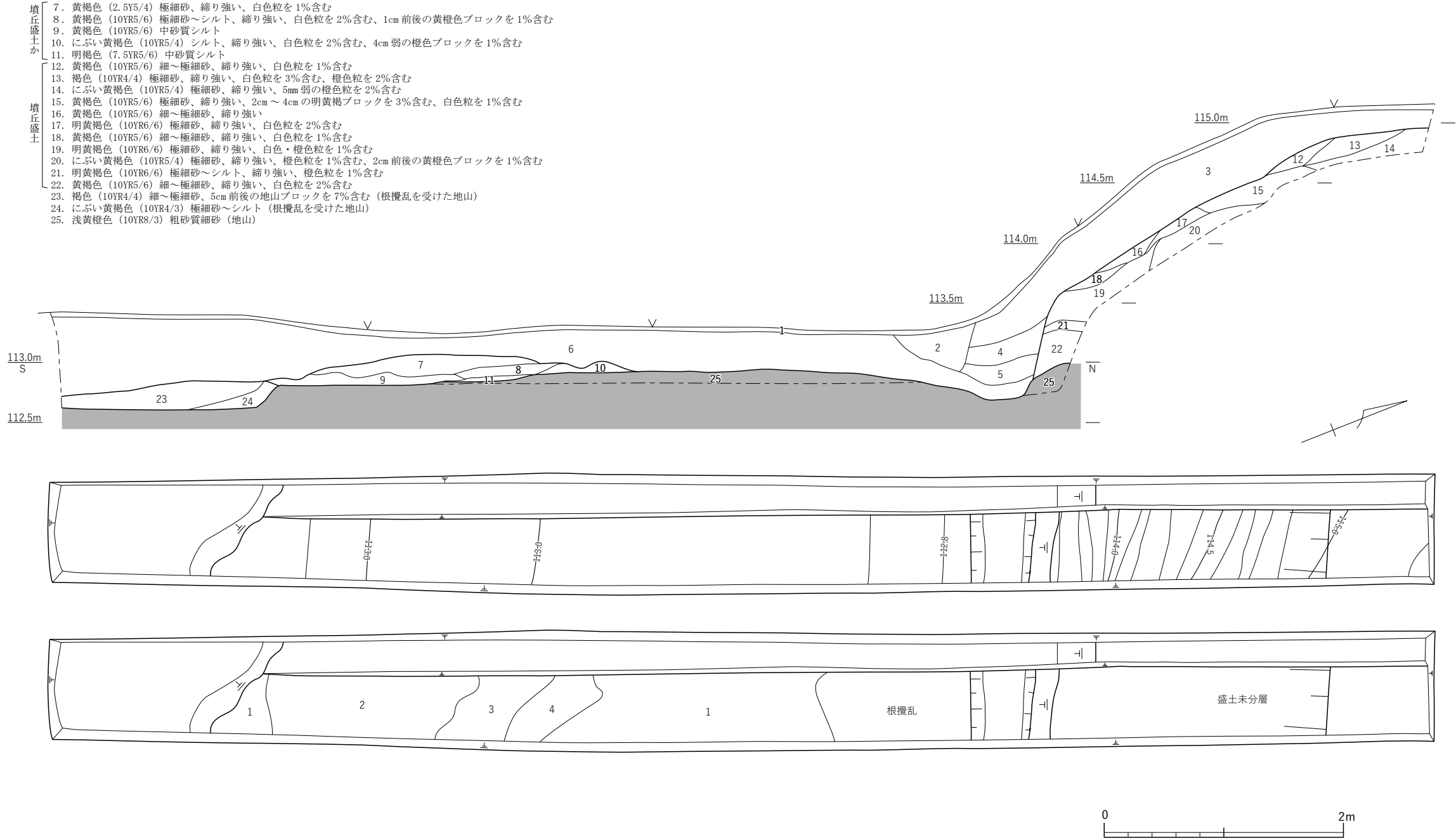


図22 5トレンチ延長部平面・土層断面図

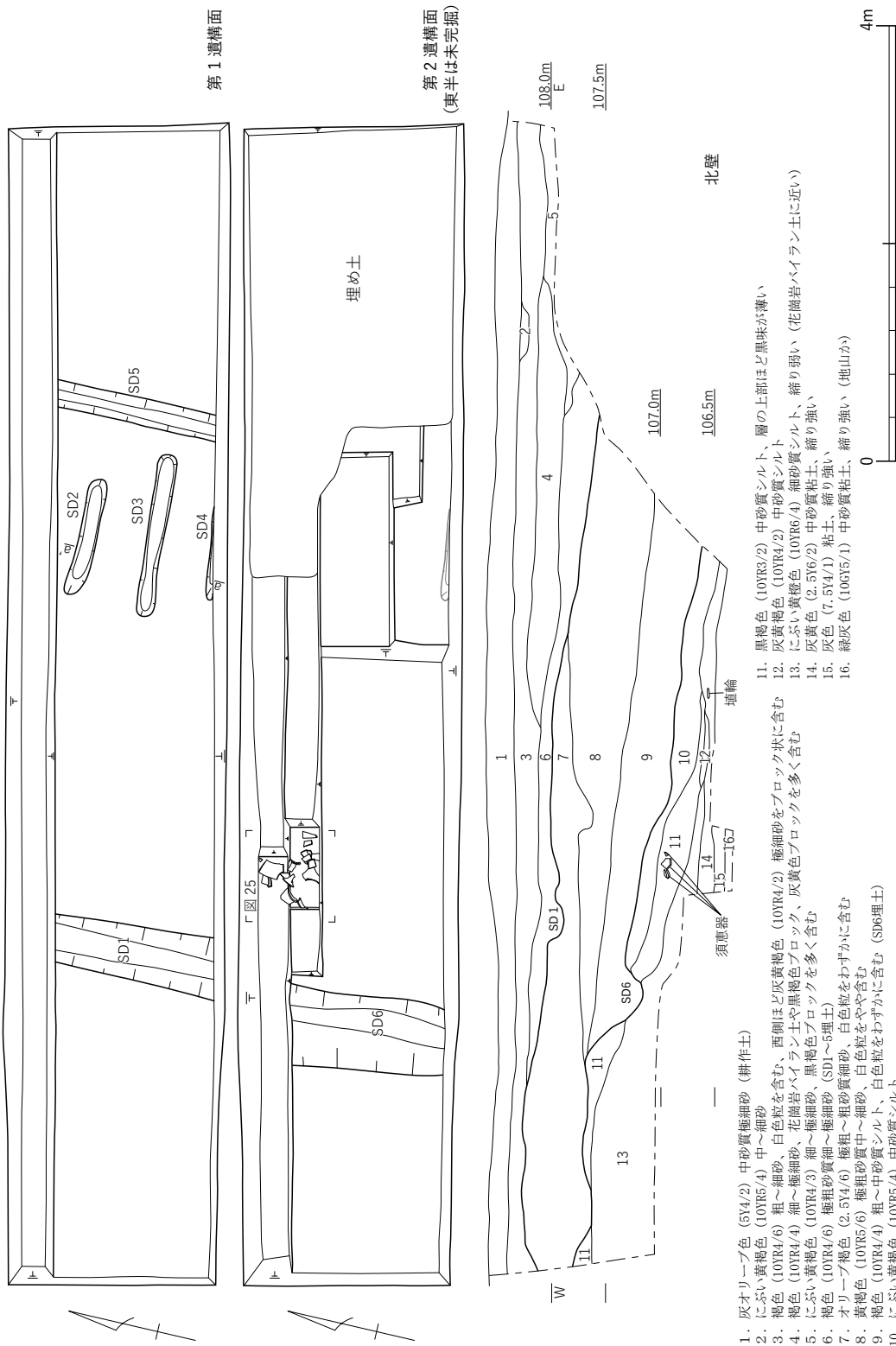
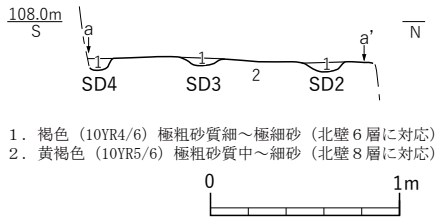


図23 10トレンチ平面・土層断面図



1. 褐色 (10YR4/6) 極粗砂質細～極細砂 (北壁6層に対応)
2. 黄褐色 (10YR5/6) 極粗砂質中～細砂 (北壁8層に対応)

図24 10トレンチ第1遺構面 遺構断面図

(SD6)を検出した。基盤層が東側へ傾斜していく部分に設けられており、埋土は中世頃の盛土と考えられる9層であるため、これもまた中世頃の耕作に伴う溝と考えられよう。

出土遺物 (図26・27) 10トレンチの出土遺物は、II層からの出土遺物が大半を占め、その内容は、器種等のわからない土師器細片が主体であるが、弥生土器や須恵器、瓦器、陶磁器、埴輪、瓦、サヌカイトなど種類は多岐にわたる。しかし、特に注目されるのは、北壁沿いサブトレンチ内で検出した、埴丘流出土中の古墳時代須恵器群である。

131～140は、II層から出土したものを示した。土師器には高坏の脚部(131)と甕の口縁部(138)があり、いずれも摩耗のため調整はわからないが、131は内面に絞り痕が確認でき、138の端部は特に摘まみ上げるなど無く丸く収める。139は弥生土器の底部で、底面はやや窪み内面に蜘蛛の巣状のハケメがある。132・133は円筒埴輪の突帯片で、132は低平な断面台形の突帯であるのに対し、133は突出の強い台形状を呈し、円形の透孔に外面ヨコハケ調整が認められる。須恵器は4点を図化し、134は甕の口縁部で外面に波状文が施される。135は壺の口縁部で外面に突線状の弱い稜が作り出される。136は器台の脚端部で横方向の凹線によってつくられた区画内に波状文が施されている。137は提瓶の把手部の破片で、端部は残存していないが下方向に少し折り曲げる形状の把手となる。140はサヌカイト製打製石鏃で、凹基式に該当し、重量は0.8gを計る。

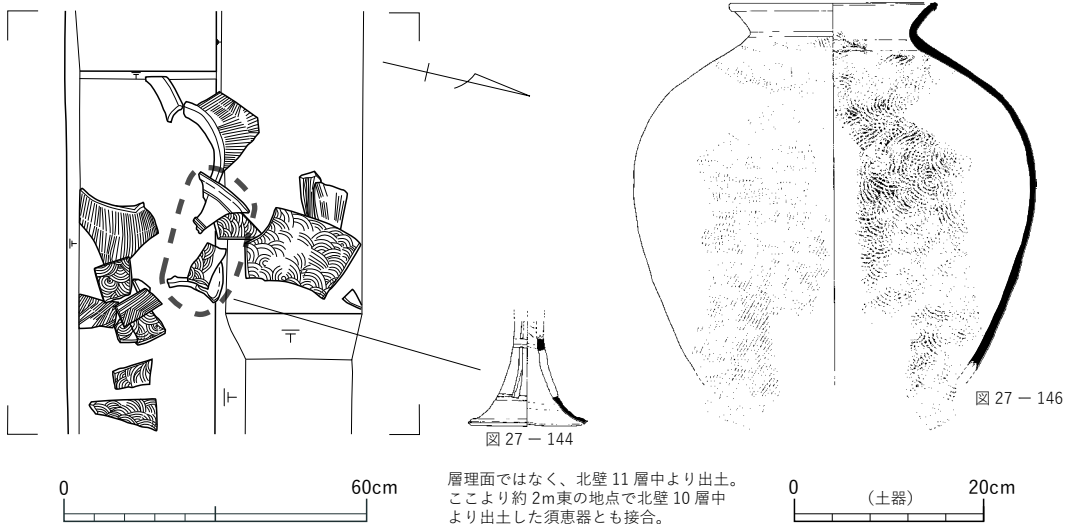


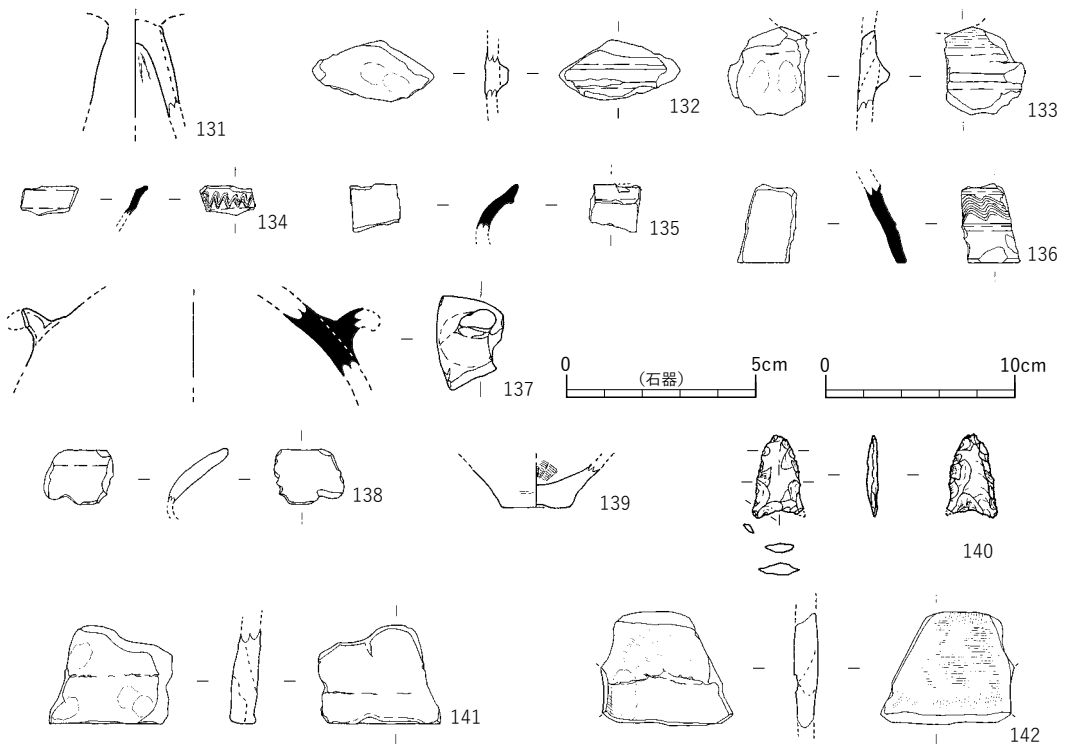
図25 10トレンチ北側サブトレンチ土器出土状況図

層理面ではなく、北壁11層中より出土。ここより約2m東の地点で北壁10層中より出土した須恵器とも接合。

141 は第2遺構面の基盤層であり、古墳築造以後の流出土と考えられる土層から出土した埴輪底部片で、調整は残っていないが、破断面には外傾接合の特徴が認められる。

142 は、旧表土の可能性のある古墳築造前の堆積土から出土した埴輪片で、円形透孔があり、上下ともに粘土接合部で剥離している。外面はタテハケの後に二次調整ヨコハケを施し、内面には斜め方向のハケメが残る。

143～146 は、北壁沿いサブトレンチ内の10・11層中よりまとまって出土した須恵器である。143 は高坏坏部の破片で、外面の突線による区画の中に細かな波状文が施されている。144 は長脚高坏の脚部で、凹線によって2段に区画された中に長方形の透孔を3方向より穿っている。上段部の内面には明瞭に絞り痕が確認できる。145 は器台の脚部で、凹線によって3段以上に区画された各段に波状文が施される。長方形の透孔が各段千鳥状に穿たれているが、下段の透孔は突線の区画をまたいで穿たれている。146 は中型甕の口縁～体部で、口縁端部をわずかに肥厚させている。外面には平行タタキの上から回転ナデが施されているが、全体をなでつけるものではなく、一定の間隔を空けて施されている。内面には同心円文当て具の痕跡が明瞭に残る。時期を特定しにくい器種が多いが、長脚高坏脚部の特徴からはTK 43 型式期前後の年代が考えられる資料と位置づけられる。



131：第1遺構面覆土（6層）

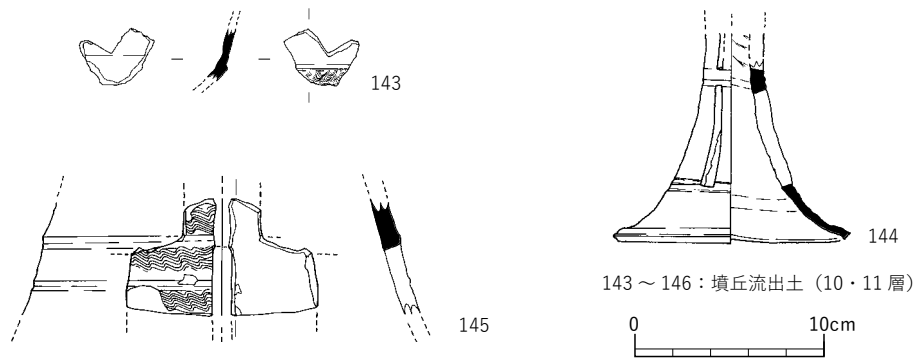
132～137：第1遺構面基盤層（7層）

138～140：第2遺構面覆土（9層）

141：第2遺構面基盤層（10層）

142：古墳に先行する堆積土（14層）

図26 10トレンチ出土遺物実測図（1）



143～146：墳丘流出土（10・11層）

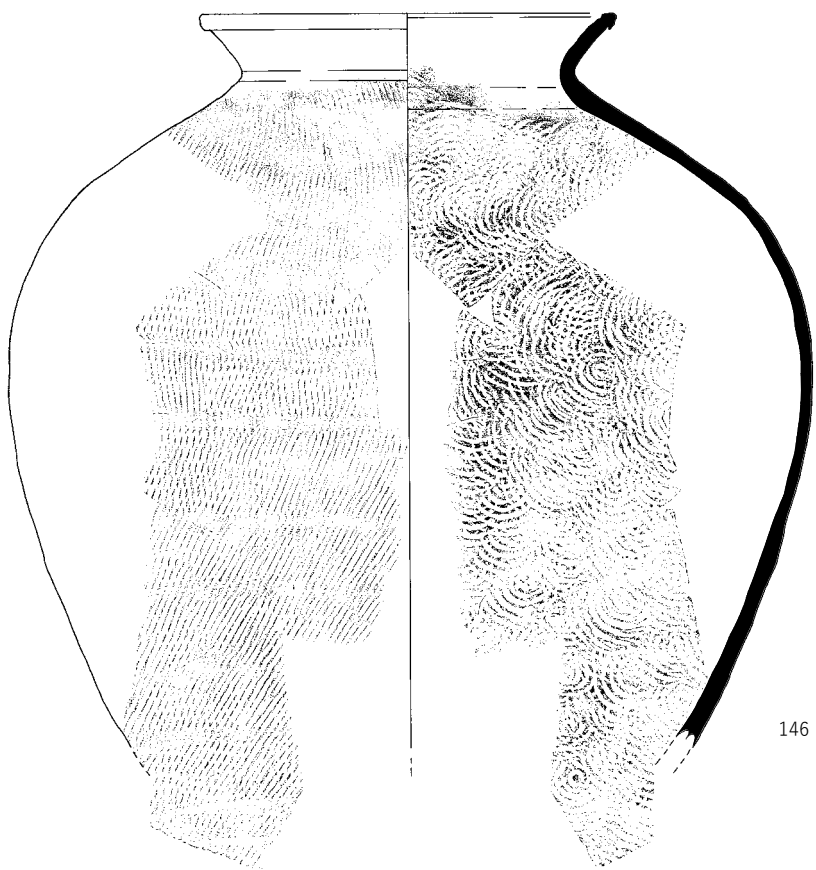


図 27 10 トレンチ出土遺物実測図（2）

第3節 横穴式石室南側の墳丘

(1) 6トレンチ (図28～32)

位置 南墳丘東側にある段々畑の中段南側に、墳端や段築平坦面など墳丘に関わる遺構を確認するために6トレンチを設定した。トレンチの大きさは当初長さ8.6m、幅2.0mで設定し、適宜拡

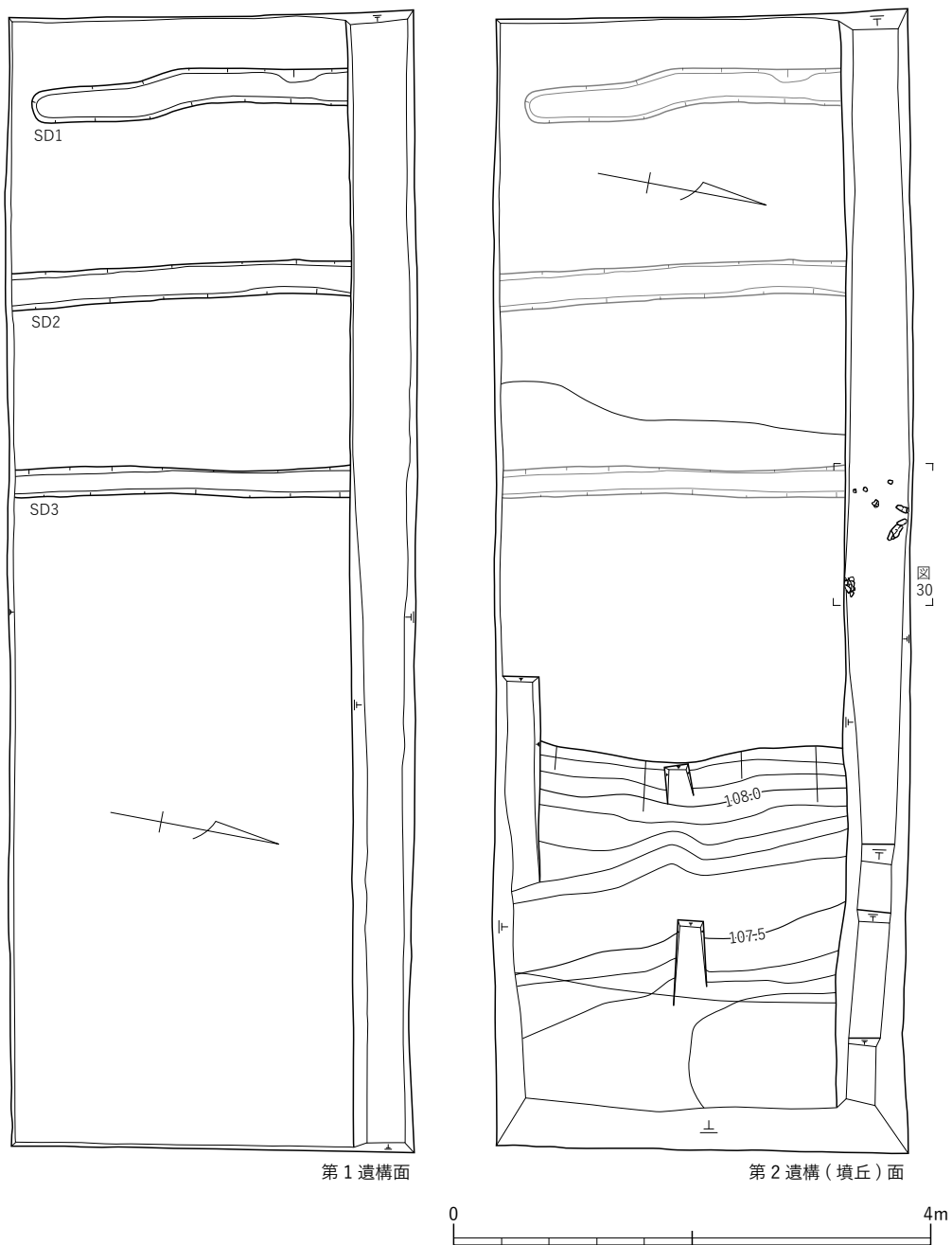


図28 6トレンチ平面図

張を行った結果、最終的に長さ 9.6 m、幅 3.4 m となった。

土層の状況 I層である黒褐色極細砂（1層）を除去した面が第1遺構面となるが、その基盤層となる土層は、トレンチ西端ではV層のにぶい黄色シルト（67層）、東端から 3.0 m 程の範囲ではII層と考えられるにぶい黄褐色細砂を主体とする土層（6～12層）、それらの間にIII層である墳丘盛土層（24～61層）が挟まる。II層中の12層からは、残りのよい瓦器碗などが出土しており、7・8層からも瓦器や磁器の破片が出土していることから、他トレンチと同様、中世以降に耕作地の拡大を意図して行われた盛土と考えられる。II層とIII層の間に位置している13～23層は、白色粒を多く含むにぶい黄褐色細砂を主体とする層であるが、層中からの出土遺物が乏しく、その性格を決定し難い。III層と接して堆積している16層の西側が、切り立った堆積形状になっている点から、墳丘盛土の削平を伴う後世の堆積土である可能性を考え図29ではそのように示したが、これらも墳丘盛土に含まれる可能性を完全には否定できない。

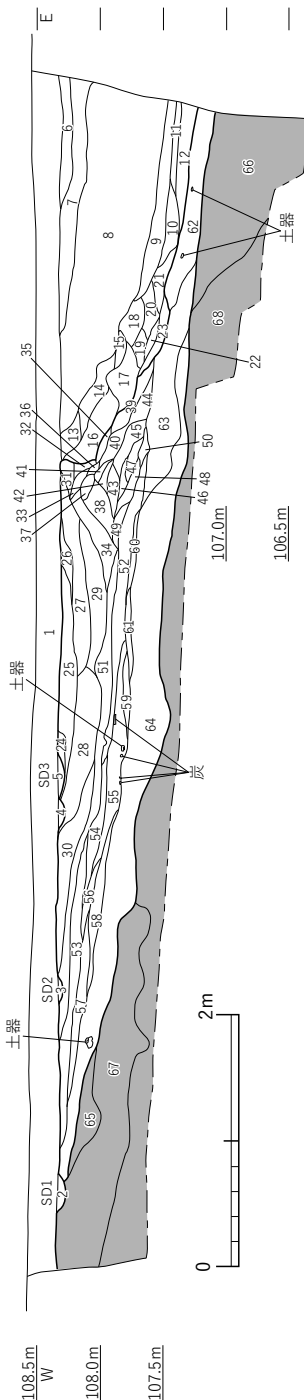
IV層と考えられる黒褐色シルト（62～64層）は、V層である65～68層との層理面が不明瞭で、粒径もV層と類似していることから、V層が土壌化して形成されたものと考えられる。6トレンチで検出した地山の標高は、西端で108.35 m、東端で107.08 mであった。

第1遺構面 南北方向の素掘溝3条（SD1～3）を検出した。出土遺物は、SD3の埋土から瓦器の細片が出土したのみである。I層直下であることから近世以降の耕作痕と考えられる。

墳丘盛土 第1遺構面の基盤層として検出した墳丘盛土部分は、基本的に削平を受け、標高108.35mのあたりで平坦面を形成している。そしてトレンチ東端より約3.4mのところから東向きになだらかに下がっていき、標高107.3mあたりが下端となっている。平面的には、ほぼトレンチ長辺に直交する方向に墳丘盛土の上端・下端の外形線が伸びている。

盛土の構築過程をみていくと、まずIV層の上に黄色みの強いシルト層（52～61層）を薄く積んでいく。これら土層の層理面や層中からは、甕などの土師器や炭がまとまって出土した（図30）が、おおよそ古墳時代後期までにおさまる時期のものと考えられる。その後、トレンチ東端から3.2mのあたりに、黒褐色や黄灰色シルトを土手状に約70cmの高さで積み上げているが、積み上げる途中段階でやや粒径の粗い花崗岩バイラン土を挟み込み互層状にしている。そしてその土手状に盛り上げた内側にさらに花崗岩バイラン土を流し込んでいる。

以上をまとめると、もともと緩やかな傾斜面であったところに、その傾斜面以上に急な傾斜をつくるため、薄く整地を行ったのち、おそらく近隣の他所から持ってきた旧表土起源と思われる黒褐色の粘質土を土手状に積んで固める。ただし盛土下の旧表土である62～64層に比べると砂粒が多く混じっているため、敢えて砂粒を混ぜることで強度の高い盛土にしている可能性も考えられる。また、その黒褐色粘質土の間に花崗岩バイラン土の砂質土を挟みこむことで、効率的な排水についても考慮にいれていたと考えられる。そして、できあがった土手状盛土の内側に、古墳周辺で手に入れやすい花崗岩のバイラン土を流し込んで盛土を行っている。



1. 黒褐色 (10TR3/2) 極細砂 (耕作土)
2. 黄褐色 (2.5V5/3) 極細砂～シルト (SD1埋土)
3. にぶい黄褐色 (10VR5/4) 極細砂 (SD2埋土)
4. 黄褐色 (2.5V5/3) 細～極細砂
5. 黄褐色 (10TR4/1) 細砂 (SD3埋土)
6. 黄褐色 (2.5V5/3) 細～極細砂、黄灰色や明褐色ブロックを含む、縮り非常に強い
7. にぶい黄褐色 (10TR4/3) 細砂、縮り無し
8. にぶい黄褐色 (10VR5/4) 細砂、白色粒を多く含む
9. 褐色 (10TR4/4) 極細砂、白色粒を含む
10. 褐色 (10TR4/4) 細～極細砂、白色粒を含む
11. にぶい黄褐色 (10VR5/4) 極細砂～シルト、白色粒をやや含む
12. にぶい黄褐色 (10TR4/3) 極細砂、白色粒をやや含む
13. にぶい黄褐色 (10VR5/4) 細砂、白色粒を多く含む
14. にぶい黄褐色 (10TR4/3) 細砂、白色粒を多く含む
15. 黄褐色 (2.5V5/3) 中砂質極細砂～シルト
16. にぶい黄褐色 (10TR4/3) 細～極細砂、白色粒を多く含む
17. にぶい黄褐色 (10VR5/4) 細～極細砂、白色粒を多く含む
18. にぶい黄褐色 (10VR5/3) 極細砂～シルト、白色粒をやや含む
19. 暗灰黄色 (2.5V5/2) 中砂質シルト、白色粒を含む
20. 褐色 (10TR4/4) 細～極細砂、黒褐色ブロックを含む、白色粒を多く含む
21. にぶい黄褐色 (10VR5/4) 細砂、黒褐色ブロックを含む、白色粒をやや含む
22. にぶい黄褐色 (10TR4/3) 細砂、縮り強い、白色粒を多く含む
23. 灰黄褐色 (10TR4/2) 細～極細砂、縮り弱い (花崗岩・鉄分を含む)
24. 赤褐色 (5VR4/8) 細砂、縮り強い (花崗岩・鉄分を含む)
25. 灰黄褐色 (10TR4/2) 極細砂、縮り強い、白色粒をやや含む
26. 黄褐色 (10TR5/6) 粗～細砂、縮り弱い (花崗岩・鉄分を含む)
27. 褐色 (10TR4/6) 粗～細砂、縮り無し (花崗岩・鉄分を含む)
28. 黄褐色 (10TR5/6) 粗砂質細砂、縮り強い、白色粒を多く含む
29. 黄褐色 (10TR4/6) 粗砂質細砂、縮り無し (花崗岩・鉄分を含む)
30. 黄褐色 (10TR5/6) 粗砂質細砂、縮り弱い、3cm以下のシルトブロックを密に含む (花崗岩・鉄分を含む)
31. 黒褐色 (10TR3/2) 極細砂、縮り非常に強い、白色粒を多く含む
32. 黒褐色 (10TR3/2) 極細砂、縮り非常に強い
33. にぶい黄褐色 (10TR5/4) 細砂、シルトブロックを含む、白色粒をやや含む
34. 褐色 (10TR4/6) 細砂、シルトブロックを含む、白色粒を多く含む
35. 灰黄褐色 (10TR4/2) 極細砂、縮り強い、白色粒・鉄分を多く含む
36. 黒褐色 (10TR3/1) 極細砂、縮り強い、白色粒を含む
37. 黒褐色 (10VR3/1) 極細砂、縮り強い
38. 褐色 (10TR4/6) 粗砂質細砂、白色粒を多く含む (花崗岩・鉄分を含む)
39. 灰黄褐色 (10TR4/2) 細～極細砂、縮り非常に強い、白色粒を多く含む、上端に鉄分を含む
40. 黄褐色 (2.5V4/1) 極細砂～シルト、縮り強い、白色粒を多く含む
41. 黄褐色 (2.5V4/1) 極細砂～シルト、縮り強い、白色粒をわずかに含む
42. 黄褐色 (2.5V4/1) 中砂質極細砂～シルト、縮り強い、白色粒をわずかに含む、41層との境に薄く花崗岩・鉄分を含む
43. 褐色 (10TR4/6) 中砂質シルト、縮り弱い、白色粒を含む (花崗岩・鉄分を含む)
44. 黒褐色 (10TR3/1) 極細砂～シルト、縮り強い、白色粒・鉄分を多く含む
45. 黄褐色 (2.5V4/1) 極細砂～シルト、縮り強い、白色粒・鉄分を含む
46. 黄褐色 (2.5V4/1) 中砂質シルト、縮り強い
47. 黄褐色 (2.5V4/1) 粗砂質極細砂、縮り強い、白色粒を多く含む、鉄分を含む
48. 黄褐色 (2.5V4/1) 中砂質シルト、1～2cmの白色シルトブロックを部分的に含む、縮り強い
49. 黄褐色 (2.5V4/1) 中砂質シルト、1.5cmの礫が部分的に入る、縮り強い
50. 黄褐色 (2.5V4/1) 中砂質シルト、縮り強い、白色粒を含む
51. 黄褐色 (10VR5/6) シルト (花崗岩・鉄分を含む)
52. 黄褐色 (2.5V4/1) 中砂質シルト、にぶい黄色 (2.5V6/4) 中砂質シルトを斑状に含む
53. 黄褐色 (2.5V4/1) 中砂質シルト、縮り強い、にぶい黄色 (2.5V6/4) 中砂質シルトを斑状に含む
54. 黄褐色 (2.5V4/1) 中砂質シルト、縮り強い、にぶい黄色 (2.5V6/4) 中砂質シルトを斑状に含む
55. 暗灰黄色 (2.5V4/2) 中砂質シルト、縮り強い、炭を少し含む、にぶい黄色 (2.5V6/4) 中砂質シルトを斑状に含む、鉄分を含む
56. にぶい黄色 (2.5V6/4) 細砂質シルト、縮り強い、黄灰色土を多く含む
57. にぶい黄色 (2.5V6/4) 細砂質シルト、縮り強い、黄灰色土をわずかに含む
58. 暗灰黄色 (2.5V4/2) 中砂質シルト、縮り強い、鉄分を含む、にぶい黄色 (2.5V6/4) 中砂質シルトを斑状に含む
59. 緑灰色 (7.5V6/1) シルト、縮り弱い、炭を含む、暗灰黄色 (2.5V4/2) 中砂質シルトを斑状に含む
60. 暗灰黄色 (2.5V4/2) 中砂質シルト、にぶい黄色 (2.5V6/4) 中砂質シルトを斑状に含む
61. にぶい黄色 (2.5V6/4) 中砂質シルト、暗灰黄色 (2.5V4/2) 中砂質シルトを斑状に含む
62. 黒褐色 (10TR3/1) 極細砂～シルト、縮り強い、白色粒を多く含む (旧表土)
63. 黒褐色 (2.5V3/1) 中砂質シルト、縮り強い、白色粒を多く含む (旧表土)
64. 黒褐色 (2.5V3/1) 中砂質シルト、縮り強い、鉄分を部分的に含む、層中の上部寄りに白色粒を含む (旧表土)
65. 暗灰黄色 (2.5V5/2) 中砂質シルト、縮り強い、白色粒を多く含む (地山)
66. にぶい黄色 (2.5V6/3) 粗砂質シルト、縮り強い、白色粒をやや含む、鉄分を含む (地山)
67. にぶい黄色 (2.5V6/4) 中砂質シルト、縮り強い、白色粒をやや含む (地山)
68. 緑灰色 (7.5V6/1) 中砂質シルト、縮り弱い (地山)

図 29 6 トレンチ北壁土層断面図

このように6トレンチでは、II層とした中世以降の盛土とは明らかに異なる丁寧な盛土が構築されている。II層中には明らかに新しい時期の遺物が含まれるのに対して、III層中には古墳時代より確実に新しくなる遺物は1点も出土していないことを考えるならば、III層としたこの盛土は、條ウル神古墳に伴う墳丘盛土である可能性が高いといえるだろう。

出土遺物（図31・32） 6トレンチの遺物は、II～IV層の大きく3つの土層から出土している。

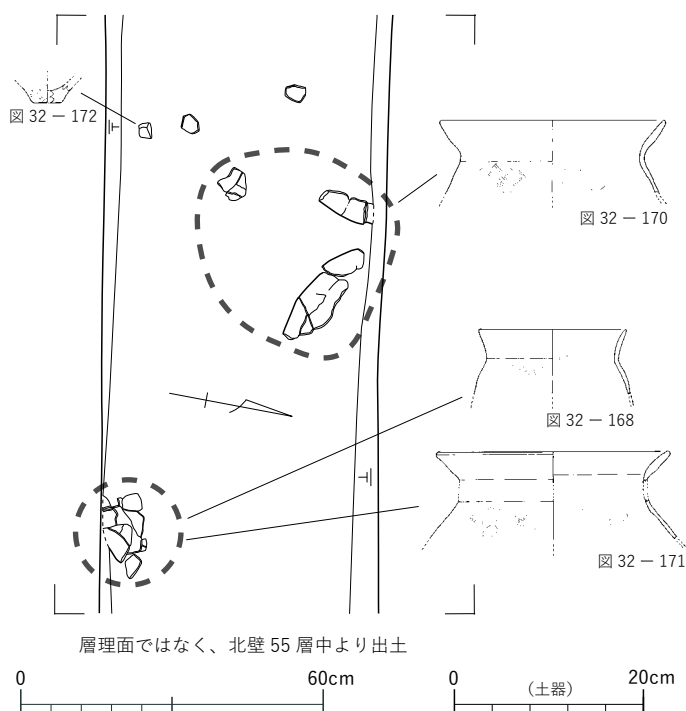


図30 6トレンチ北側サブトレンチ土器出土状況図

II層は多種多様な遺物が含まれており、弥生土器や土師器、須恵器、瓦器、磁器、埴輪、サヌカイトなどの破片が多く出土している。その中で図示できたものが147～161である。147の土師器甕口縁や156の円筒埴輪口縁のようなやや古い時期の遺物が混じるものの、多くは中世頃の遺物で占められている。148～153・160・161は口縁部が外反する大和型瓦器碗で、やや小さいものもあるが口径は概ね15cm程度にまとまっている。高台は、高さは低いものの方形の断面形を維持している。内面は幅1.0弱～1.5mmほどの水平方向のミガキが比較的密に施されているものの、外面については摩耗の影響もあるかもしれないが、ほとんどミガキを確認できない。157・159は瓦器皿で、碗同様口縁部が外反しているが、内外面にミガキは認められない。154は土師器羽釜の口縁～鏝部の資料で、鏝部から内側に入ってきた頸部がくの字状に屈曲し、口縁端部は内側に折り曲げる形状をしている。口縁部外面に黒斑、鏝部下面には煤の付着が認められる。155・158は土師皿で、158は外面の口縁部と体部の境に、緩い稜が作り出される。これらの資料は、概ね12世紀前半頃の資料と考えられる。

162・163はIII層とII層との間の土層から出土した遺物である。162は土師器甕の口縁部で、端部に面をもつ。163は二重口縁壺の口縁部で、外面に円形浮文の剥離した痕跡がある。

164～172はIII層から出土した遺物である。164・172は弥生土器壺もしくは甕の底部で、外面にタタキ、内面に蜘蛛の巣状ハケメが認められる。165・167～171は土師器の甕の口縁部で、端部を丸く収めるもの（167・168）と端部に面をもつもの（165・169～171）がある。外面には細

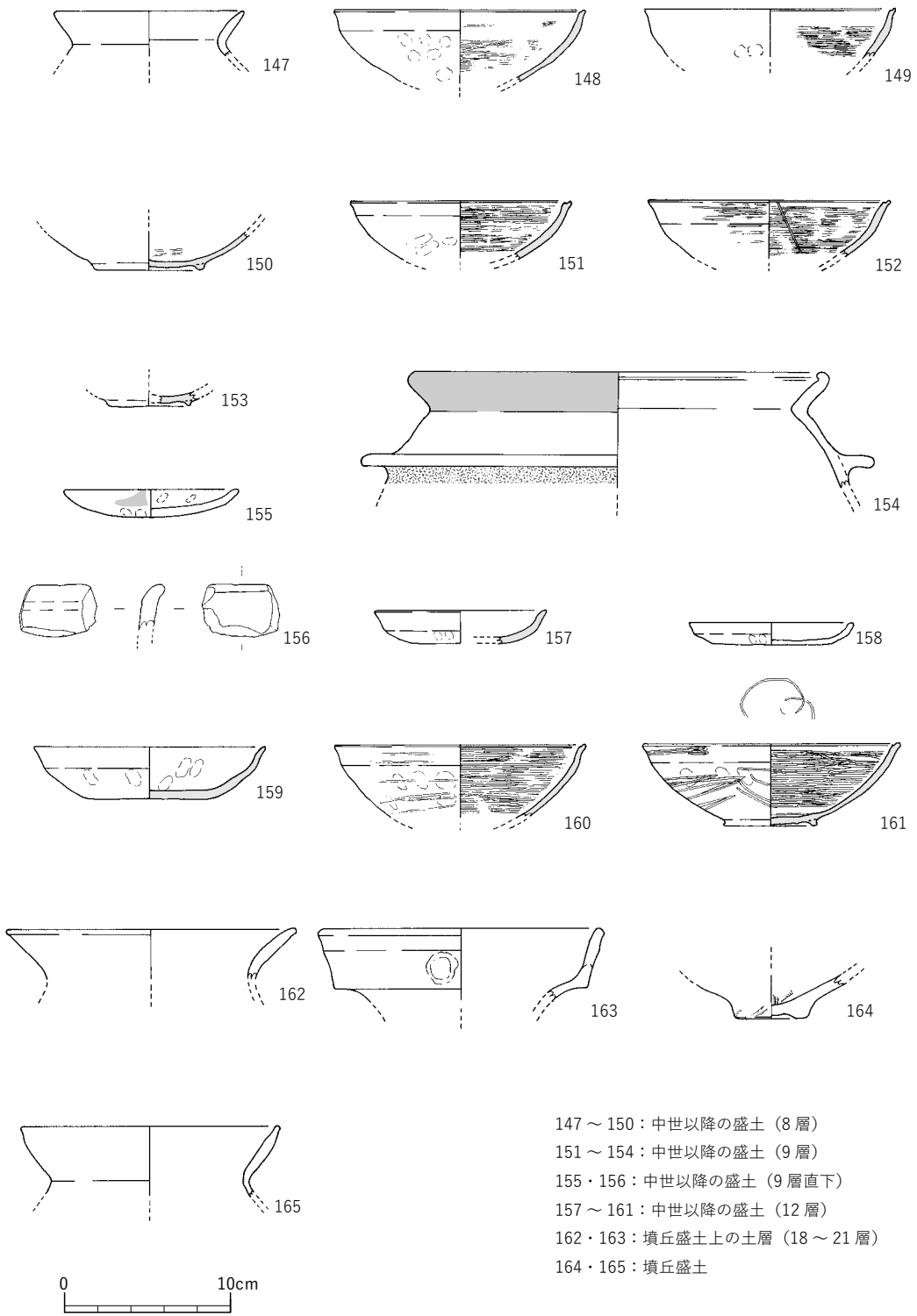
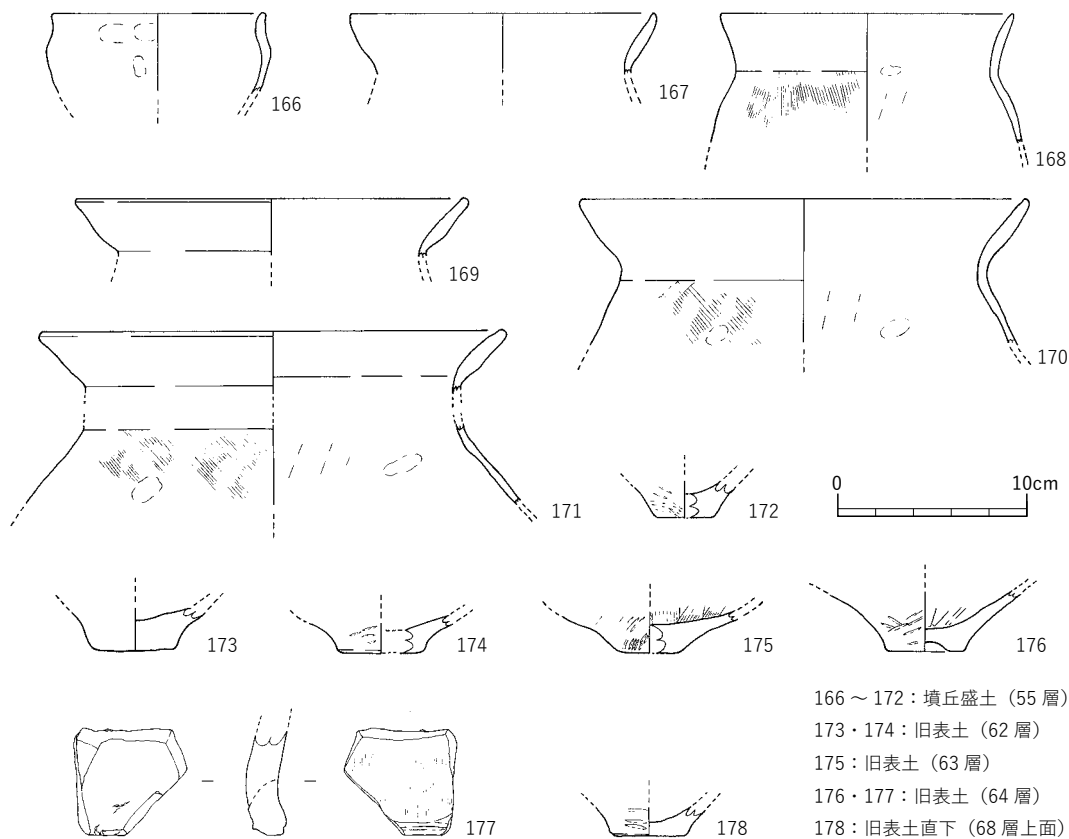


図31 6トレンチ出土遺物実測図（1）



166～172：墳丘盛土（55層）
 173・174：旧表土（62層）
 175：旧表土（63層）
 176・177：旧表土（64層）
 178：旧表土直下（68層上面）

図32 6トレンチ出土遺物実測図（2）

かな縦・斜め方向のハケメが認められる。166は土師器碗の口縁部で、体部最大径の部分からやや内側に入り込んで口縁部が直立している。土師器の細かな時期比定には難が残るが、III層から出土した遺物は、概ね弥生時代後期から古墳時代後期までの資料で構成されていると判断できる。

173～178はIV層から出土した遺物である。173～176・178は弥生土器の底部で、若干傾きが異なるもののいずれも外面にタタキの痕跡が残る。176は底面に凹みがある。177は埴輪の底部片で、厚みは1.9cmを測り、外面に細かなタテハケが確認できる。

(2) 6トレンチ拡張区 (図33～37)

位置 6トレンチで確認した墳丘盛土が南北にどのように伸びていくのかを確認するため、6トレンチ北辺の西端より7.2mの範囲を北側に8.8m拡張し、北拡張区とした。また、6トレンチ南辺の西端より5.0～7.2mの範囲を南側に4.0m拡張し、南拡張区とした。また掘削の途中、北拡張区の北端を、検出した盛土の方向に合わせて、北東-南西方向に9.3m、北西-南東方向に5.0mの大きさで拡張し、第2北拡張区とした。

土層の状況 拡張区の土層は、基本的に上述した6トレンチの土層と同じ状況であった。I層であ

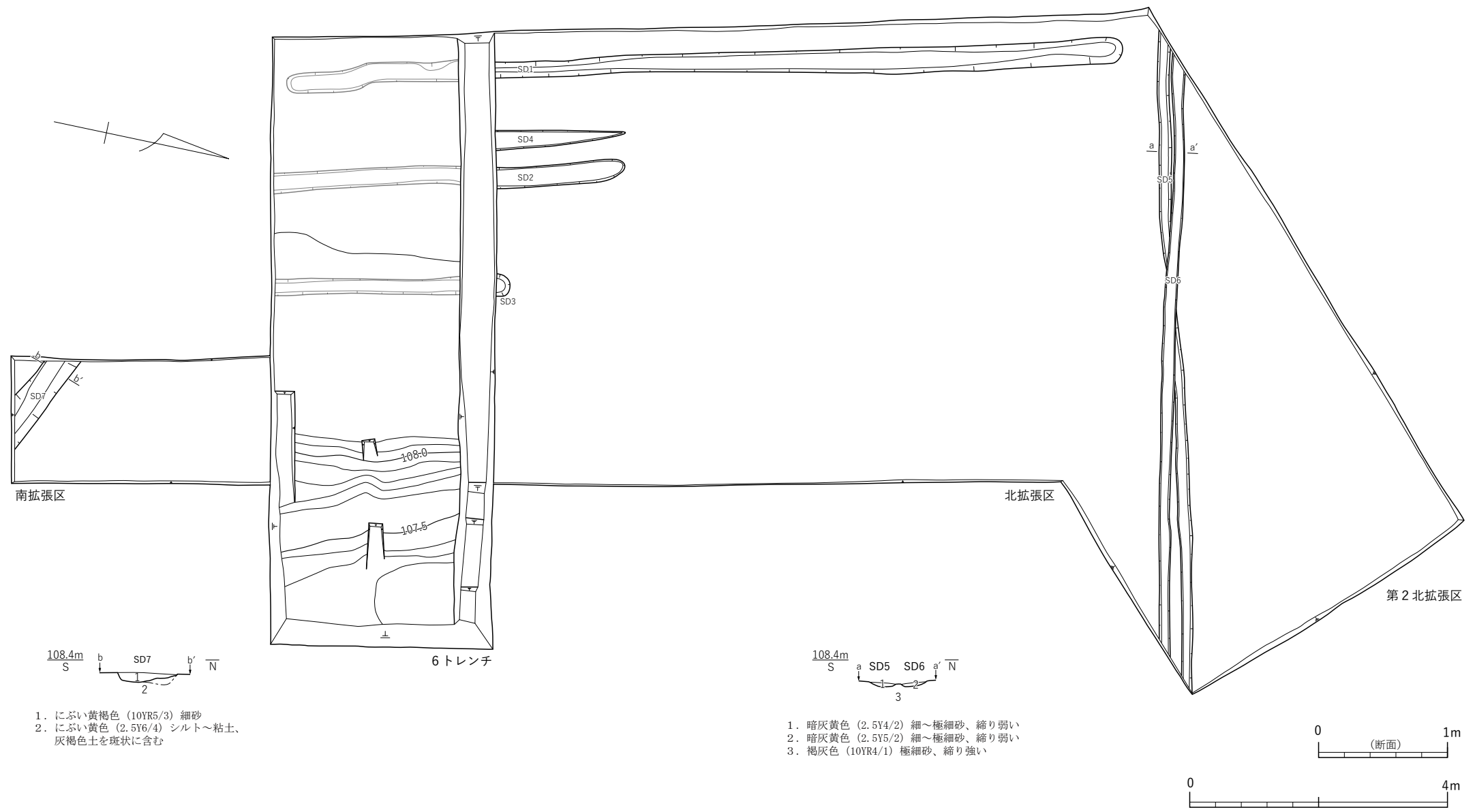
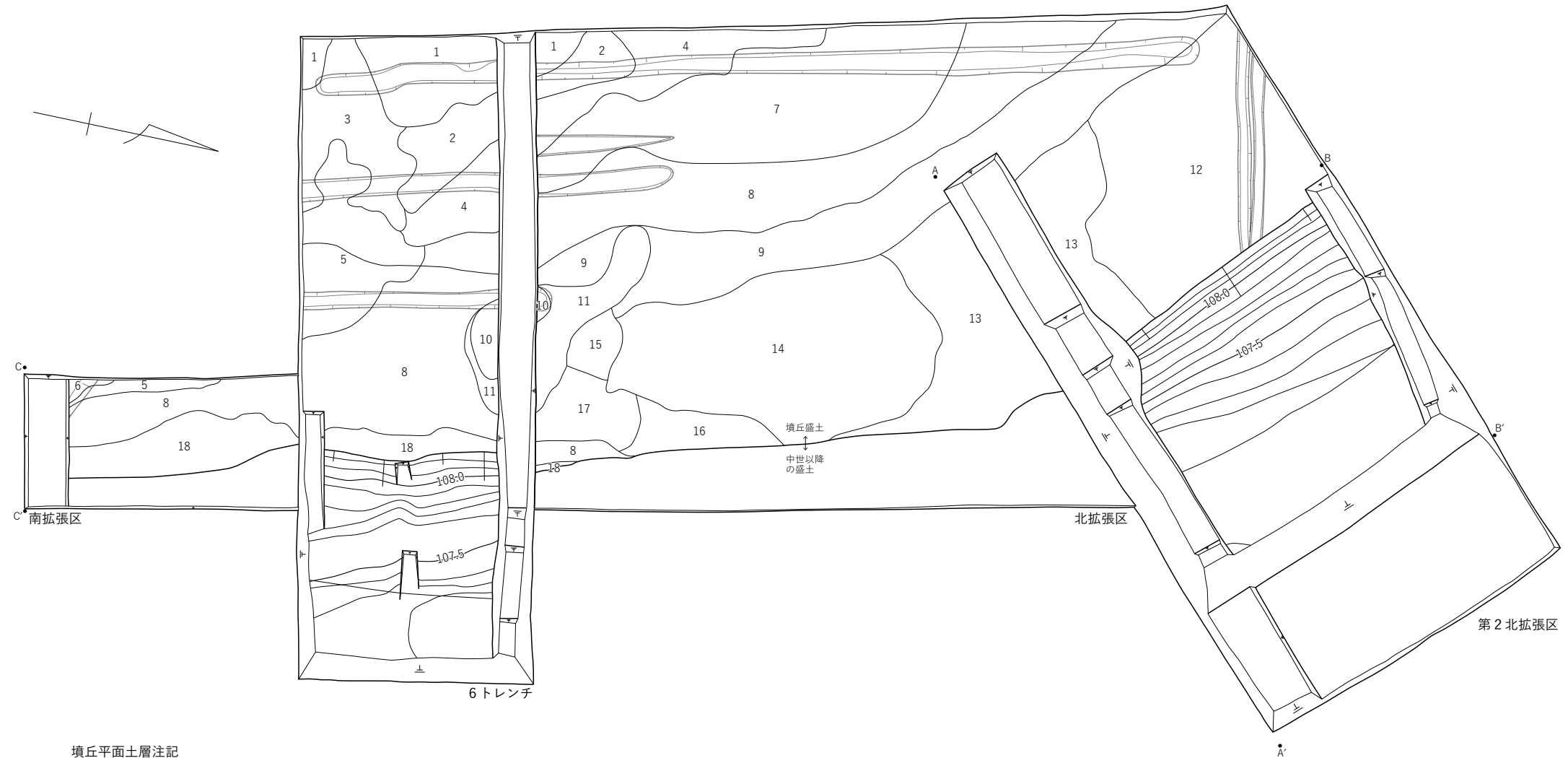


図33 6トレンチ南・北拡張区第1遺構面 平面・遺構断面図



墳丘平面土層注記

1. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 中砂質シルト、縮り強い、鉄分をやや含む (地山) (6tr67層に対応)
2. 黒褐色 (2.5Y3/1) 中砂質シルト、縮り強い、鉄分を部分的に含む、層中の上部寄りに白色粒を含む (旧表土) (6tr64層に対応)
3. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト、縮り強い、やや緑灰色を帯びる
4. 黄灰色 (2.5Y4/1) 中砂質シルト、縮り強い、にぶい黄色 (2.5Y6/4) 中砂質シルトを斑状に含む、鉄分をやや含む (6tr53層に対応)
5. 褐色 (10YR4/6) 粗砂質極細砂～シルト、縮り弱い
6. にぶい黄色 (2.5Y6/4) シルト～粘土、褐灰色土を斑状に含む (C9層に対応)
7. 黄褐色 (10YR5/6) シルト (花崗岩バイラン土) (6tr51層に対応)
8. 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂質細砂、縮り弱い、3cm以下のシルトブロックを密に含む (花崗岩バイラン土) (6tr27・30層に対応)
9. 褐色 (10YR4/6) 粗～細砂、縮り弱い (花崗岩バイラン土) (6tr28層に対応)
10. 赤褐色 (5YR4/8) 細砂、縮り弱い (花崗岩バイラン土) (6tr24層に対応)
11. 黄灰色 (2.5Y4/1) 細～極細砂、縮り非常に強い (6tr25層に対応)
12. 褐灰色 (10YR4/1) 極細砂、縮り強い (B27層に対応)
13. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト、縮り強い、白色粒をやや含む (A22層に対応)
14. 黒褐色 (10YR3/2) 細～極細砂、縮り強い
15. 黒褐色 (2.5Y3/1) 細～極細砂、縮り強い、白色粒を多く含む
16. 灰黄褐色 (10YR4/2) 極細砂～シルト、縮り強い
17. 褐灰色 (10YR4/1) 極細砂～シルト、縮り強い、白色粒をわずかに含む
18. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 中砂質シルト、白色粒をわずかに含む

図34 6トレンチ南・北拡張区第2遺構(墳丘)面 平面図

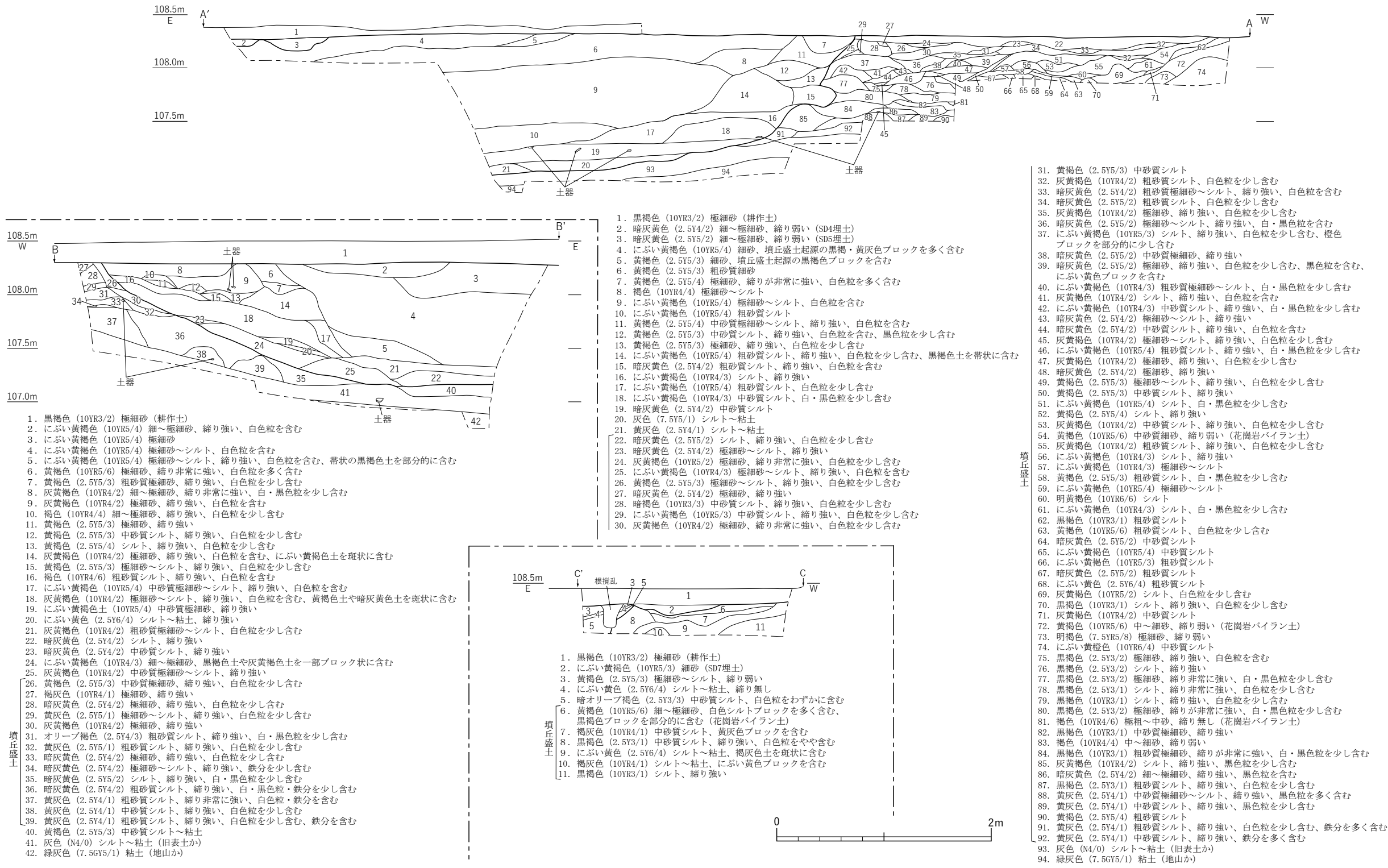


図35 6トレンチ南・北拡張区土層断面図

る黒褐色極細砂（断面1層）を除去した面で第1遺構面を検出し、その基盤土層は、6トレンチ付近のみV層のにぶい黄色シルト（平面1層）があり、大半はⅢ層（A断面22層、B断面26・27層、C断面6・9層など、以下A22層と記述する。他トレンチも同様。）と、にぶい黄褐色極細砂を主体とするⅢ層の外側に盛られたⅡ層（A4～6層、B2～4層）である。Ⅱ層の中でもA4・5層は、墳丘盛土起源と考えられる黒褐・黄灰色ブロックを多く含んでおり、それ以下の土層とは時期が異なるものと考えられる。10トレンチの3～5層に対応する土層であろう。Ⅱ層とⅢ層の間には、6トレンチ同様、墳丘盛土か否かの判断が難しい土層（A11～21層、B6～25層）が存在したが、拡張区においてもその性格を確定させることはできなかった。ただしこれら土層には、Ⅱ層のような明確に新しい遺物は含まれておらず、やや締りの弱い土層の堆積状況を踏まえて考えると、墳丘盛土起源の流土の可能性が考えられる。Ⅲ層（A22～92層、B26～39層、C6～11層）の下にはⅣ層の可能性が考えられる灰色シルト～粘土（A93層、B41層）、そしてV層の可能性が考えられる緑灰色粘土（A94層、B42層）が続いている。A94層の標高は、西端で107.15m、東端で106.9mである。

第1遺構面 6トレンチで検出した南北方向の素掘溝3条（SD1～3）のほか、数条の素掘溝を確認した。SD4はSD1～3に平行し、SD5・6はそれらに直交する東西方向、SD7はそれらとも異なる北西－南東方向の斜交するものである。埋土からの出土遺物はほとんどないが、いずれも近現代の耕作に伴うものと考えられる。

墳丘盛土 6トレンチの成果により、墳丘盛土はいくつかの単位に細分でき、Ⅱ層と接する墳丘盛土東端部には締まりの強い黒褐色系の粘質土が用いられていることが明らかとなっていた。その所見に基づいて、まず第1遺構面で墳丘盛土の外形線を確認すると、北拡張区では、6トレンチから直線的に盛土の外形線がのび、8.0mほどいったところで西側の北墳丘に向かって弧状に屈曲していく様子が確認でき、南拡張区では、6トレンチから直線的に4.0mほど盛土の外形線がのびることがわかった。

しかし、この検出した盛土上面の外形線は、中世以降の耕作地造成によって墳丘盛土が任意の高さで削平された面で検出したものであるため、仮に墳丘が旧地形の制約を受けて、斜めに傾いた形状をしていた場合、本来の墳丘外形線を正確に表していない可能性も考えられた。そこで、墳丘盛土の下端を確認し、この削平された墳丘盛土上面の外形線が有意なものであるかの判断を行うため、北拡張区のさらに北側に、弧状に入り込む墳丘盛土に直交する形で第2北拡張区を設定し、盛土下端の検出を行うこととした。

掘削の結果、盛土の下端は若干の揺れはあるものの、南北拡張区で検出した削平された盛土上面の外形線と平行することが明らかとなった。つまり、6トレンチも含め、検出した総長20mの削平盛土上面の外形線と盛土下端の外形線に大きな齟齬は無いということである。第2北拡張区で検出した墳丘盛土上端の標高は108.28mで、下端は107.16～107.28mであった。

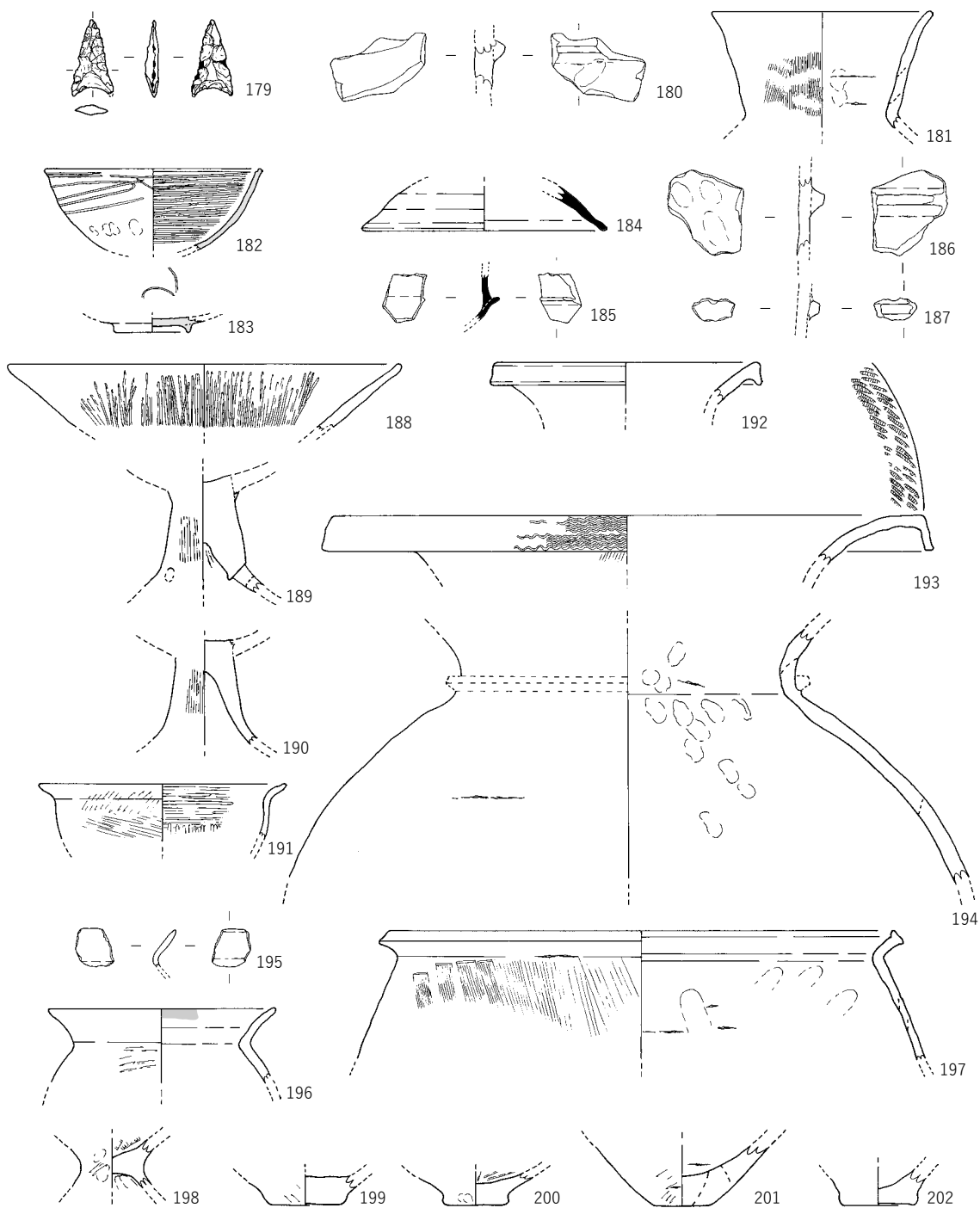
しかし、葺石や埴輪列といったものが確認できていない状況で、この外形線が古墳の原初の墳端を表している、とまで言うことはできない。この外形線自体が既に後世の削平を被っている可能性が十分に考えられるからである。特に残存墳丘の方へ屈曲していく部分より南側については、墳丘盛土の外形線が今現在の地形区画に平行しており、現状の地割りが作られた時に大きな削平を受けている可能性も考えられる。図34に、検出した墳丘盛土の平面的な分層線を示しているが、外形線より内側の分層線を見ると北西-南東方向を指向しているものが多く、外形線に平行するものが少ない印象を受ける。このことは、今回検出した墳丘盛土の外形線が原初のものではない可能性を示唆しているとも考えられる。墳形の検討に際してはこれらの点も十分に考慮する必要があるだろう。

墳丘盛土の構築過程をみると、6トレンチの成果と同様に、東側の墳丘端側から内側に向かって盛土を行っていく過程が認められた。外側には黒褐色系の締まりの非常に強い粘質土を用い、その内側に暗灰黄や灰黄褐色極細砂、褐色系中砂を用いる点も6トレンチと同様である。

出土遺物(図36・37) II層からは多数を占める土師器の小片に加え、弥生土器、埴輪・須恵器・瓦器・陶磁器・サヌカイトの破片が出土しているのに対し、III層からは弥生土器、土師器、埴輪、須恵器、サヌカイトの破片が出土している。墳丘流出土としたII層とIII層の間に位置する土層からは、III層と同じ種類の土器片が出土しており、明らかに新しい瓦器や陶磁器の類は出土していない。

179～183はII層から出土した遺物で、179はサヌカイト製の凹基式打製石鏃である。逆刺部分が一部欠損しているがほぼ完形の資料で、重量は0.7gである。180は埴輪突帯の破片で、やや角の丸い断面台形を呈する。内外面ともに調整は摩耗している。181は弥生土器長頸壺の口縁部で、頸部からやや外側に直線的に開いていく形をし、外面にタテハケ調整が認められる。182・183は大和型瓦器椀の破片で、182は高さのある半球形を呈する。内面は幅1mm程度の水平方向のミガキが密に施されているが、外面のミガキは非常に粗く、下半にはミガキが施されていない。183は底部の破片で小さいが断面方形の高台をもち、見込み部には螺旋状と思われる暗文が認められる。概ね12世紀前半頃の資料とみて大過ないだろう。

184～206は墳丘流出土とした土層から出土した遺物である。184は須恵器蓋の破片で、かえりは認められず、端部は丸く取める。185は須恵器器身の受け部の破片で、口縁端部は残っていないが、短い受け部から直立気味に立ち上がる口縁部である。186・187は埴輪の突帯片で、高さは若干異なるがどちらも断面台形状を呈する。188～190は土師器高坏の破片である。188は直線的に広がる口縁部で、内外面に縦方向のミガキが施される。189・190は脚部の破片で、外面に縦方向のミガキが施され、189は3方向に円形の透孔が穿孔されている。191は土師器鉢の口縁部片で、体部から口縁部にかけての屈曲部に成形時のタタキ痕がわずかに確認でき、成形後外面は横方向のミガキ、内面は口縁部付近には横方向、体部下半には縦方向のミガキが施される。192・193は弥生土器大口壺の口縁部片で、いずれも端部が下方に下がる形状であるが、193はより広く面を作り出し、外面に2条の波状文、内面には櫛描列点文が施されている。194は大型壺の肩部から頸部の破片で、



179 : 中世以降の盛土 (A-A' 6 層) 184~202: 墳丘流出土 (A-A' 12~15 層、
 180・181: 中世以降の盛土 (A-A' 9 層) B-B' 8~18 層)
 182・183: 中世以降の盛土 (A-A' 10 層)

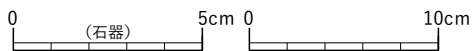


図 36 6 トレンチ拡張区出土遺物実測図 (1)

摩耗のため内外面の調整は判然としない。頸部外面には突帯の剥離した跡が確認できる。195は土師器甕の口縁部で、直線的に伸び端部はやや尖り気味に丸く収めている。196・197は弥生土器甕の口縁部から体部上半の破片で、196は、口縁部は緩やかに外反し体部外面にはタタキ痕が確認できる。197は、短く屈曲する口縁の端部を内側につまみ出す。体部上半外面にはやや左側に傾くハケ調整が施される。198は弥生土器の器種不明台部で、上部内面にはハケ、下部内面にはナデの痕跡が確認できる。199～202は弥生土器の底部片で、調整の確認できるものは外面にタタキが観察できる。203は須恵器高坏の脚部片で、204は弥生土器壺の口縁部から剥離した粘土帯で、外面に竹管文が施されている。205・206は弥生土器の底部片で、205は外面にタタキ、内面にハケメが観察できる。このように墳丘流出土とした土層からは、弥生時代中期から古墳時代後期頃までの資料が含まれており、明らかに古代以降と考えられる資料は今のところ含まれていない。

207～211はⅢ層から出土した遺物である。207は弥生土器の底部で、外面にタタキが見える。208はサヌカイト製の凸基式打製石鏃で、茎部が欠損している。重量は2.8gである。209は朝顔形円筒埴輪の口縁部と思われる破片で、外面には細かなハケ、端部付近にはヨコナデが施されている。210は円筒埴輪の突帯片で、やや丸まった断面台形状を呈している。外面にヨコハケ、内面に斜め方向のハケが認められる。211は須恵器坏身の口縁～体部の破片で、突出の短い受部に端部を丸く収めた口縁部が取り付く。Ⅲ層中の遺物は、弥生時代後期から古墳時代後期までの資料に収まっていると言えよう。

212・213はⅣ層の可能性が考えられる土層からの出土遺物である。212は土師器の把手片で、

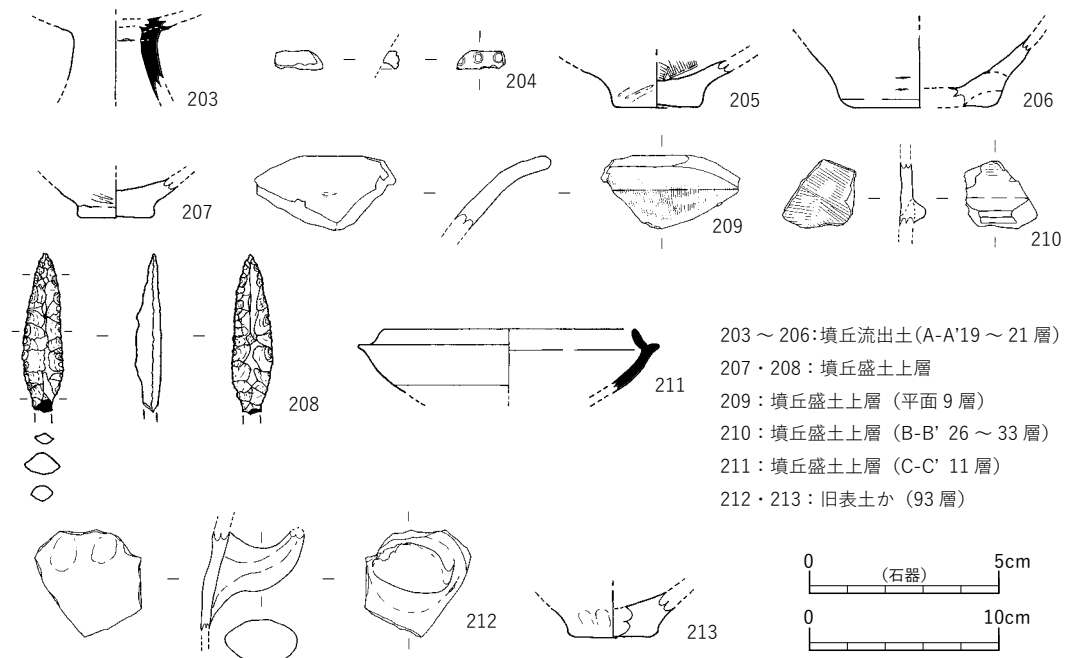


図 37 6 トレンチ拡張区出土遺物実測図 (2)

断面楕円形を呈し、先端が上方に持ち上がっている。213 は弥生土器の底部片で、外面にユビオサエ、内面にナデが認められる。

(3) 7トレンチ (図 38～41)

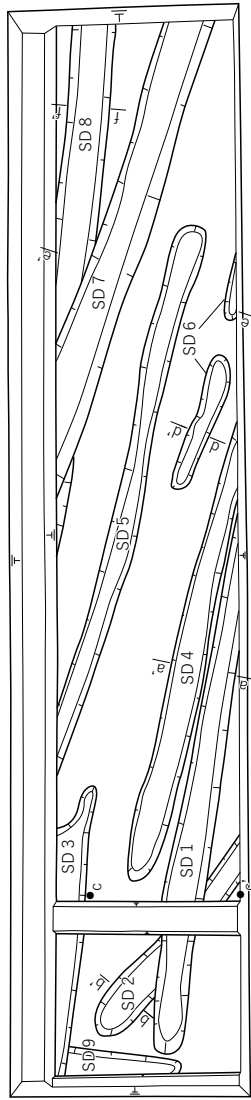
位 置 南墳丘東側にある段々畑の下段、6トレンチの延長上に、墳端に関わる遺構の有無を確認する目的で7トレンチを設定した。トレンチの大きさは長さ8.6 m、幅1.8 mで、トレンチ西端北壁側のみ、幅50cmで西側に90cm程度拡張した。

土層の状況 I層である暗オリーブ褐色細砂(1層)の下には、II層と判断できるにぶい黄褐色極細砂(2・3層)があり、それらを除去した面で第1遺構面を検出した。第1遺構面の基盤層(11・12・22・23層)は、厚さ15cm程度の堆積であり、それらの下層で検出した第2遺構面は、一部が第1遺構面と同一面になる上に、出土遺物などからみても大きな時期差は無く、連続的に形成された遺構面と考えられる。第2遺構面の基盤層は、V層である黄褐色シルト(29層)とその上に堆積している24～27層であるが、これらV層上の土層も粒径は29層と大きく異なっていないため、V層が耕作等によって攪乱された土層である可能性が考えられる。7トレンチで検出したV層は、6トレンチで検出した緩斜面状を呈するV層とやや異なり、上面がおよそ標高106.5 mで平坦となっている。

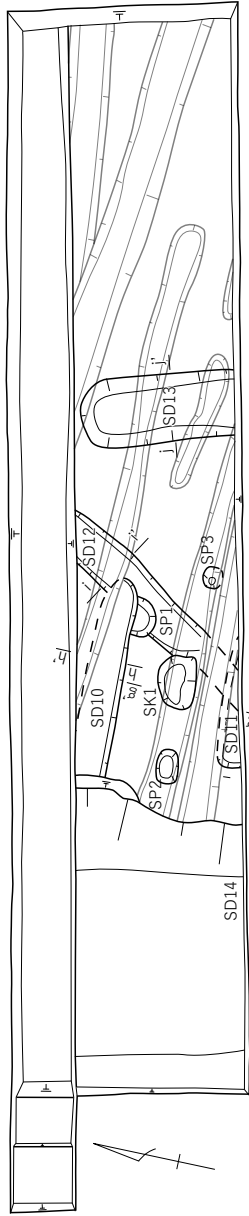
第1遺構面 素掘溝を9条検出した(SD1～9)。東西方向を基調とするものの、SD9のように南北方向のものも存在する。SD3は北壁まで埋土が続いており、素掘溝とは異なる遺構の可能性もある。いくつかの遺構で切り合い関係が認められるが、埋土に含まれる遺物の下限は中世の瓦器片であり、全体を覆う3層に近世頃の遺物が含まれることから、その間の時期の耕作面と考えられる。

第2遺構面 素掘溝5条(SD10～14)、土坑1基(SK1)、ピット3基(SP1～3)を検出した。多くは出土遺物が無いため時期比定が難しいが、SD10・11は、埋土の特徴からすると、第1遺構面に含めて考えるべきかもしれない。SD12の埋土からは残りの良い弥生土器のタタキ甕(図41-224・225)が複数個体出土しており、これは弥生時代後期の遺構である可能性が高い。西側に接するSK1やSD13は、埋土の特徴からSD12と同時期の可能性が考えられる。SD14とした幅2.5 m程度の溝は、検出当初條ウル神古墳に伴う周溝埋土の可能性も考えたが、埋土から出土する遺物の多くが弥生土器であり、埋土の土質の類似や、北西端の拡張部で溝の西側の肩が検出できたことから、古墳に伴うものではなく、SD12などと同じく弥生時代後期の遺構と考えられる。瓦器などを埋土に含む素掘溝の一部がほぼ同一面で検出できることから、これら弥生時代の遺構は上面が一定程度削平を受けていると考えられる。

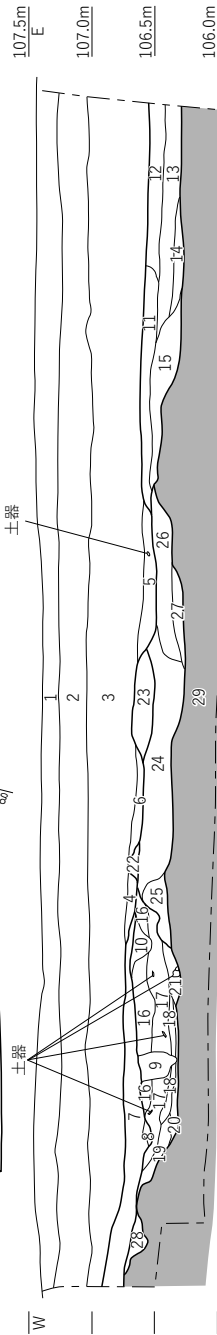
以上のように、7トレンチでは中世以降の耕作痕や、弥生時代後期の遺構が確認できたが、條ウル神古墳の墳丘に関わるような遺構は確認できなかった。6トレンチで検出した墳丘盛土からは至近の距離であるものの、周溝など墳丘を画する造作は認められず、10トレンチなどで確認した、



第1遺構面



第2遺構面



1. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 細～極細砂、縮り無し (耕作土)
2. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、縮り弱い、白色粒をやや含む
3. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細砂、2層に比べやや明るい
4. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細砂、白色粒をやや含む (SD5埋土)
5. 褐色 (10YR4/4) 細砂、にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂、黄褐色 (2.5Y5/3) 極細砂、にぶい黄褐色 (10YR4/3) 中粗砂質シルトが上から順に堆積 (SD7埋土)
6. 褐色 (10YR4/4) 中砂質極細砂、5mm以下の礫をわずかに含む (SD8埋土)
7. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中砂質シルト、白色粒を部分的に含む (SD3埋土)
8. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 極粗～粗砂 (SD9埋土)
9. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 中砂質シルト、縮り無し
10. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細～極細砂
11. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 中粗砂質極細砂、白・黒色粒を多く含む
12. 黄褐色 (2.5Y5/3) 中砂質シルト、炭を部分的に含む、黄色粒を多く含む
13. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 中粗砂質シルト、白色粒をわずかに含む
14. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト
15. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 中粗砂質シルト、白・黒色粒をやや含む
16. 黒褐色 (10YR3/2) 中砂質シルト、白色粒を含む (SD14埋土)
17. 褐灰色 (10YR4/1) 中砂質シルト、白色粒をやや含む (SD14埋土)
18. 黒褐色 (10YR3/1) 中粗砂質シルト (SD14埋土)
19. 灰黄褐色 (10YR4/2) 中砂質シルト (SD14埋土)
20. 褐灰色 (10YR6/1) シルト、黄褐色 (10YR5/6) シルトを含む (SD14埋土)
21. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 中粗砂質シルト (SD14埋土)
22. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中砂質極細砂、縮り強い、白色粒を部分的に含む
23. 褐色 (10YR4/4) 中砂質シルト、白色粒を多く含む
24. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中砂質シルト
25. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 中粗砂質シルト
26. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中粗砂質シルト
27. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中砂質シルト
28. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中砂質シルト、部分的に暗灰黄色粗砂質極細砂を含む、縮り弱い
29. 黄褐色 (2.5Y5/3) 中粗砂質シルト、2mmを超える礫を含む (地山)

図 38 7 トレンチ平面・土層断面図

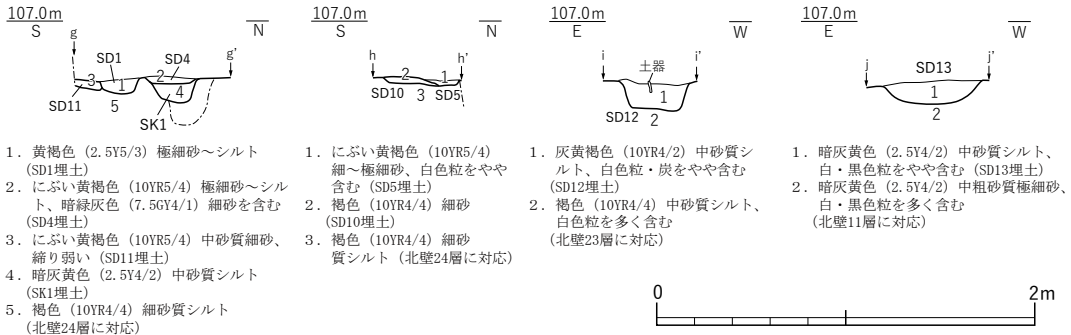
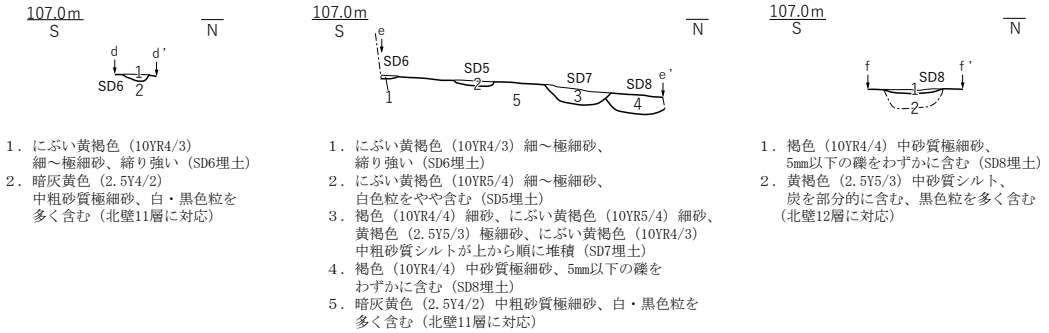
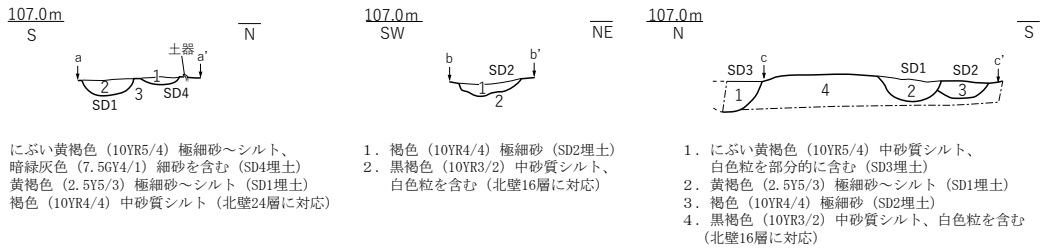


図 39 7 トレンチ遺構断面図

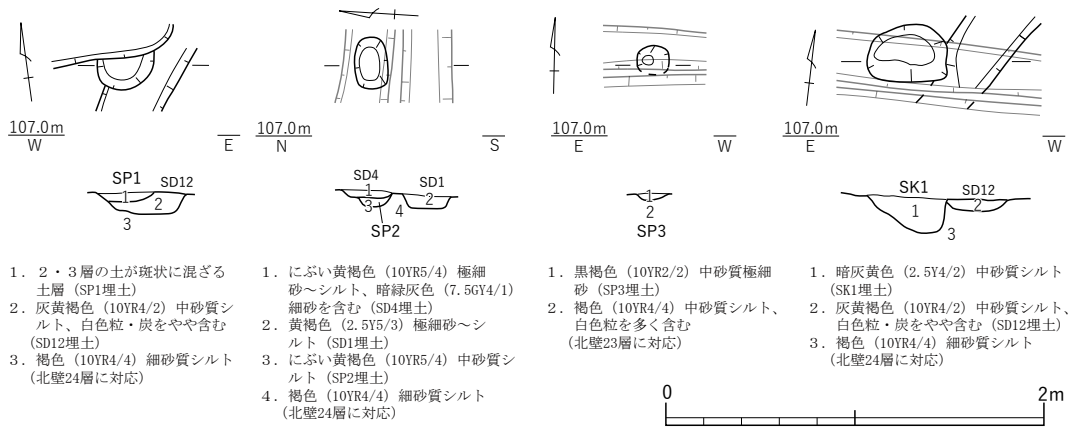


図 40 7 トレンチ遺構平面・断面図

墳丘盛土を崩して後世に盛土として使用したような痕跡も認められない。7トレンチのすぐ東側が大きな谷となっていることも合わせて考えると、墳丘の東側については周溝などの造作が行われていなかった可能性が高いと考えられる。

出土遺物 (図 41) 7トレンチから出土した遺物の大半は、器種の推定も不可能な土師器の細片であるが、瓦器や須恵器、埴輪の破片に加え、他のトレンチに比して弥生土器の破片が細片ではあるものの多く含まれている。

214・215・217は円筒埴輪の破片である。214はⅡ層である3層から出土した底部片であるが、調整は摩耗のためわからない。215・217は第1遺構面の素掘溝埋土から出土した突帯片で、幅に差はあるものの、どちらも突出度の高い資料である。216は第1遺構面基盤層から出土した須恵器短脚高坏の脚裾部片で、丸みのある端部の上面に自然釉が溜まっている。

218～223は第2遺構面SD14の埋土から出土した遺物である。218～221は弥生土器の高坏で、坏部中位に稜をもつもの(218)と段をもつもの(220)がある。220は坏部内面に黒斑が認められる。脚部片である219・221は、単位はわかりにくいが両者ともに外面にミガキが施され、内面にはシボリの跡が確認できる。222は弥生土器甕の底部片で、外面にタタキ、内面にハケが確認でき、底面には外面から内面に向けて径9mmの円孔が穿たれている。223はサヌカイトの剥片である。両面ともに風化が著しく、全体が灰白色を帯びている。両側縁の一部に自然面を残し、その自然面には筋状の窪みや爪跡状の凹みが多数観察できる。実測図の上辺が打面と考えられるが、風化の影響が強く、破面か自然面かの判断が難しい。重量は79.9gである。

224～226はSD12埋土から出土した遺物である。224・225は弥生土器甕の破片で、いずれも体部の丸みが強く、外面にタタキが施され、225は内面にハケが施される。226は弥生土器大型壺の底部付近の破片と思われ、外面はナデ、内面にはハケが施される。

(4) 9トレンチ (図 42～45)

位 置 南墳丘の南東、南墳丘を一部削平して作られたと思われる広い耕作地の東側に、墳端に関わる遺構の存否確認を目的に9トレンチを設定した。トレンチの大きさは長さ21.0m、幅2.0mである。

土層の状況 Ⅰ層の暗オリーブ褐色細砂(1層)を除去すると、トレンチ北端より4.0mあたりまでは、Ⅴ層である白色シルト(29層)が面的に検出され、それより南側ではⅡ層と考えられる褐色・にぶい黄褐色極細砂(7～13層)を検出した。これらの上面が第1遺構面である。トレンチ北東隅部においてのみ、Ⅴ層上面に17～25層のⅢ層を形成する土層が認められた。Ⅱ層は60～90cmの厚さで堆積しており、細かな単位が見いだせないことや層中に含まれる遺物の内容から、中世以降に行われた盛土と考えられる。Ⅱ層を除去すると、トレンチ北端で検出していたⅤ層が南に向けて傾斜していき、トレンチ北端より10mのあたりで再び立ち上がっていく状況が確認でき

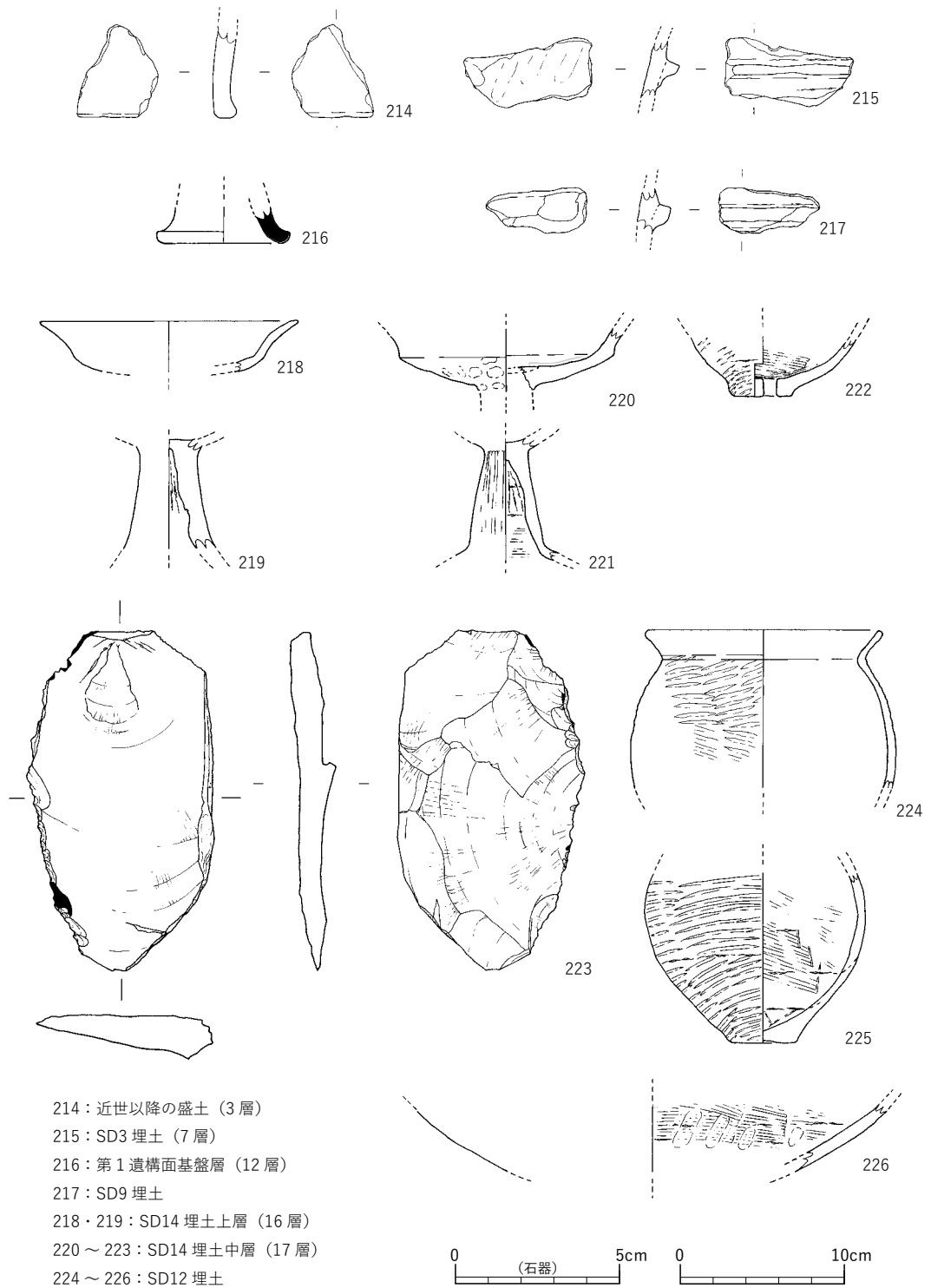


図41 7トレンチ出土遺物実測図

た。なお、V層が最も標高を下げたあたりで、II層とはやや土質の異なる堆積土（14～16層）が認められたが、出土遺物が認められなかったためこれら土層の性格は判然としない。

第1遺構面 素掘溝を10条検出した（SD1～10）。直線的なものが多数を占めるが、SD3のみ途中で直角に屈曲している。I層の直下であり、埋土からの出土遺物はいずれも小片で、基盤層となる7・8層中に含まれているものと大きく異ならないため、これら素掘溝の正確な年代は判然としない。近世～現代にかけて行われた耕作痕と考えられる。なお、トレンチの北端部において南北方向のやや幅の広い素掘溝状の土質の違いを認識したが、掘削の結果、塩ビ管が埋設された現代の攪乱であった。

墳丘盛土 トレンチ北東隅で検出した17～25層について、9トレンチ調査時は上述の塩ビ管を埋設した攪乱が存在したことから、それらと同じく地山上に掘削された後世の攪乱である可能性を考えていた。しかし、後述する拡張区の調査成果により、これら土層が墳丘盛土の一部であることが明らかとなった。上面が削平されているため検出面における認識ではあるものの、9トレンチ北東隅部が、ちょうど地山と墳丘盛土の境界部にあたると考えられる。

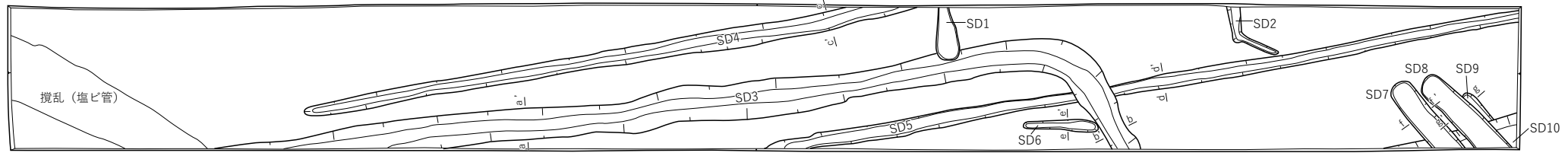
検出できた墳丘盛土の厚みが20cm前後しかなかったため、本トレンチ内で盛土の構築過程などを推測することは難しいが、わずかに言及できることは、この地点では地山の直上に墳丘盛土が行われており、旧表土のような土層は認識できなかったことである。

第2遺構（地山）面 上述のとおり、トレンチ北側のI層直下で検出したV層は、トレンチ北端より4mあたりで南側に向けて落ち込んでいき、トレンチ北端より10mのあたりで再び立ち上がっていく様子が確認できた。立ち上がった地山面は、そのまま西から東へ傾斜する旧地形の尾根斜面へ収束していく。上面の削平の程度がわからないため正確な数値ではないが、この落ち込みは幅約6.0m、深さ90cmを測る。底面上に堆積していた14～16層からの出土遺物が乏しいものの、旧地形の尾根を切断している状況からは自然地形とは考えにくく、條ウル神古墳の南端を画する隍である可能性が高いと判断できる。隍の内側にあたる北側のV層上面の標高は約109.7m、隍底の標高は約108.6～108.8mで東側がやや低くなっており、隍の外側にあたる南側のV層上面の標高は109.1mである。

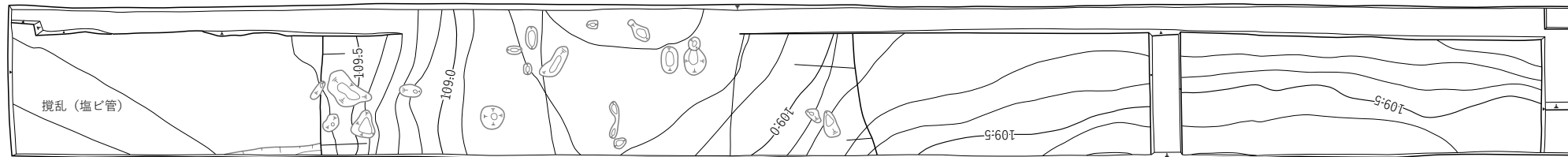
南墳丘に近いトレンチ北端のV層が平坦面を形成していることについては、塩ビ管を埋設した攪乱などの存在から、耕作地の拡張などに伴って南墳丘の一部を削平したことに起因すると考えられ、古墳の段築平坦面を反映したものとは考えにくい。

このように9トレンチでは、條ウル神古墳に伴う墳丘盛土および南端を画する隍の一部を検出することができた。しかし、幅の狭いトレンチでの所見であるため、隍の平面形が弧状を呈するのか、直線状となるのかは本トレンチの調査では確定できなかった。

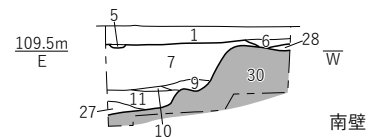
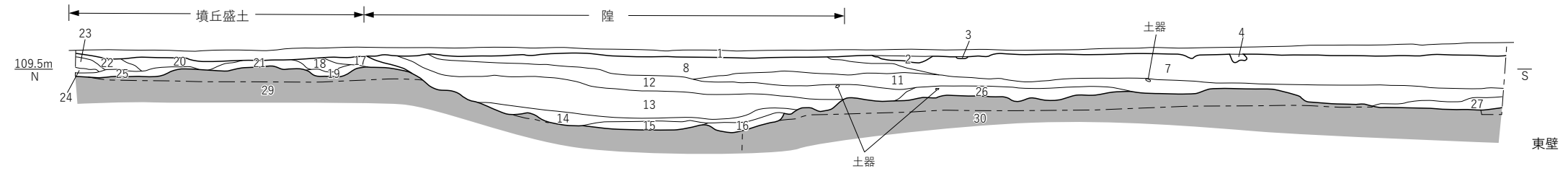
出土遺物（図44・45） 9トレンチの出土遺物は、II層から出土したものが大半を占める。上層（7・8層）と下層（11～13層）に分けて取り上げているが、上層にのみ陶磁器が少量含まれる以外は、



第1遺構面



第2遺構 (地山) 面



1. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 細砂 (耕作土)
2. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中粗砂質極細砂 (SD4埋土)
3. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 中～細砂、縮り弱い (SD1埋土)
4. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細砂 (SD2埋土)
5. 褐色 (10YR4/4) 中粗砂質極細砂 (SD5埋土)
6. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細砂、縮り弱い (SD10埋土)
7. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細砂、白色粒を含むが南側ほど少量になる
8. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂～シルト、白色粒を含む
9. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、縮り弱い、一部帯状に粗～極粗砂を含む
10. 褐色 (10YR4/4) 極細砂～シルト
11. 黄褐色 (10YR5/6) 極細砂、白色粒を含むが南側ほど少量になる
12. 褐色 (10YR4/4) 極細砂～シルト、白色粒を多く含む
13. 褐色 (10YR4/4) 極細砂、白色粒を多く含む
14. 灰色 (7.5Y6/1) 粘土
15. にぶい黄褐色 (10YR6/3) 極粗砂質中砂
16. 黄褐色 (10YR5/6) シルト～粘土、層の下半はやや灰色味が強い
17. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂、縮り強い、白色粒をやや含む
18. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、花崗岩風化礫をブロック状に含む
19. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 極細砂、縮り強い
20. 明黄褐色 (10YR6/6) 細～極細砂、褐色極細砂をブロック状に含む、白色粒を北半に多く含む
21. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂～シルト、灰黄褐色シルトを部分的に含む、白・褐色粒を含む
22. 黄褐色 (10YR5/6) 細～極細砂、白色粒をやや含む
23. 灰黄褐色 (10YR4/2) 極細砂～シルト、黄褐色シルトを部分的に含む
24. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗砂質シルト
25. 灰黄褐色 (10YR5/2) 中砂質シルト
26. 明黄褐色 (10YR6/6) 粗砂質極細砂～シルト、にぶい黄褐色土を斑状に含む
27. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 極細砂～シルト (地山か)
28. 明黄褐色 (10YR6/6) シルト～粘土、縮り強い (地山か)
29. 白色シルト、褐色極細砂を部分的に含む (地山)
30. 明黄褐色 (10YR6/6) 極細砂～シルト、縮り強い、浅黄色粘土を斑状に含む、黒色粒を南半にやや含む (地山)

図42 9トレンチ平面・土層断面図

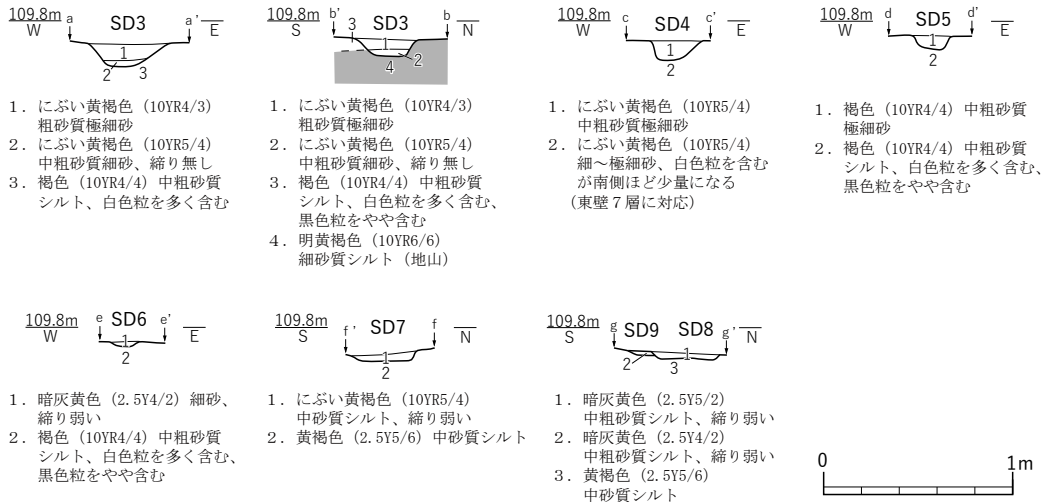


図 43 9トレンチ遺構断面図

土師器、埴輪、須恵器、黒色土器、瓦器、サヌカイトなどが含まれる様相は大きく変わるものではない。

227～249は上層から出土した遺物である。227～231は土師器羽釜の破片で、口縁部は端部を上方に折り曲げるもの(227・228)と四角く収めるもの(229)があり、鏝部は厚みにやや差異があるものの、どちらも体部があまり膨らまない形態と考えられる。227は口縁部外面に、229は口縁部内面に煤が付着し、231は鏝部上面に黒斑が確認できる。232～234は土師器皿の破片で、寸法や底部から口縁部にかけての形態が多様である。232は径が小さく、平らな底部から直線的に口縁部が外方へ伸びる。233は器壁が厚く、底部と口縁部の境に緩い段がつくられている。234は底部と口縁部の境に明瞭な段がつくられ、口縁部は強く外反する。235はやや器高が高く、土師器坏といえる器形である。内外面ともにナデ調整で、口縁端部は丸く収めている。236は内黒の黒色土器碗の底部片で、外側に踏ん張る形状の高台がつき、見込み部には平行線状の暗文が確認できる。237は土師器高坏の脚柱部片で、摩耗により調整はわからないが、内面にはシボリ痕が確認できる。238は須恵器瓶類の口縁部片で、端部は丸く収めている。239は須恵器坏身の破片で、短い受部の付け根には溝状の窪みがあり、口縁端部は丸く収めている。240～249は埴輪の破片である。240は口縁部の破片で、端部を内外面に引き出している。外面にはヨコハケが施され、ハケメの窪みには赤色顔料が認められる。241・242は朝顔形円筒埴輪の口縁部中位突帯付近の破片で、内外面にハケメが確認できる。243～248は突帯部および体部の破片で、円形透孔が確認できるもの(243)や外面調整にヨコハケが確認できるもの(245)も含まれる。249は底部片であるが、摩耗のため内外面の調整はよくわからない。

250～256は下層から出土したものである。250は土師器甕の口縁部片で、器壁が厚く、頸部外面に刺突のような痕跡が確認できる。251は大和型瓦器碗の口縁～体部片で、内面は摩滅のため単

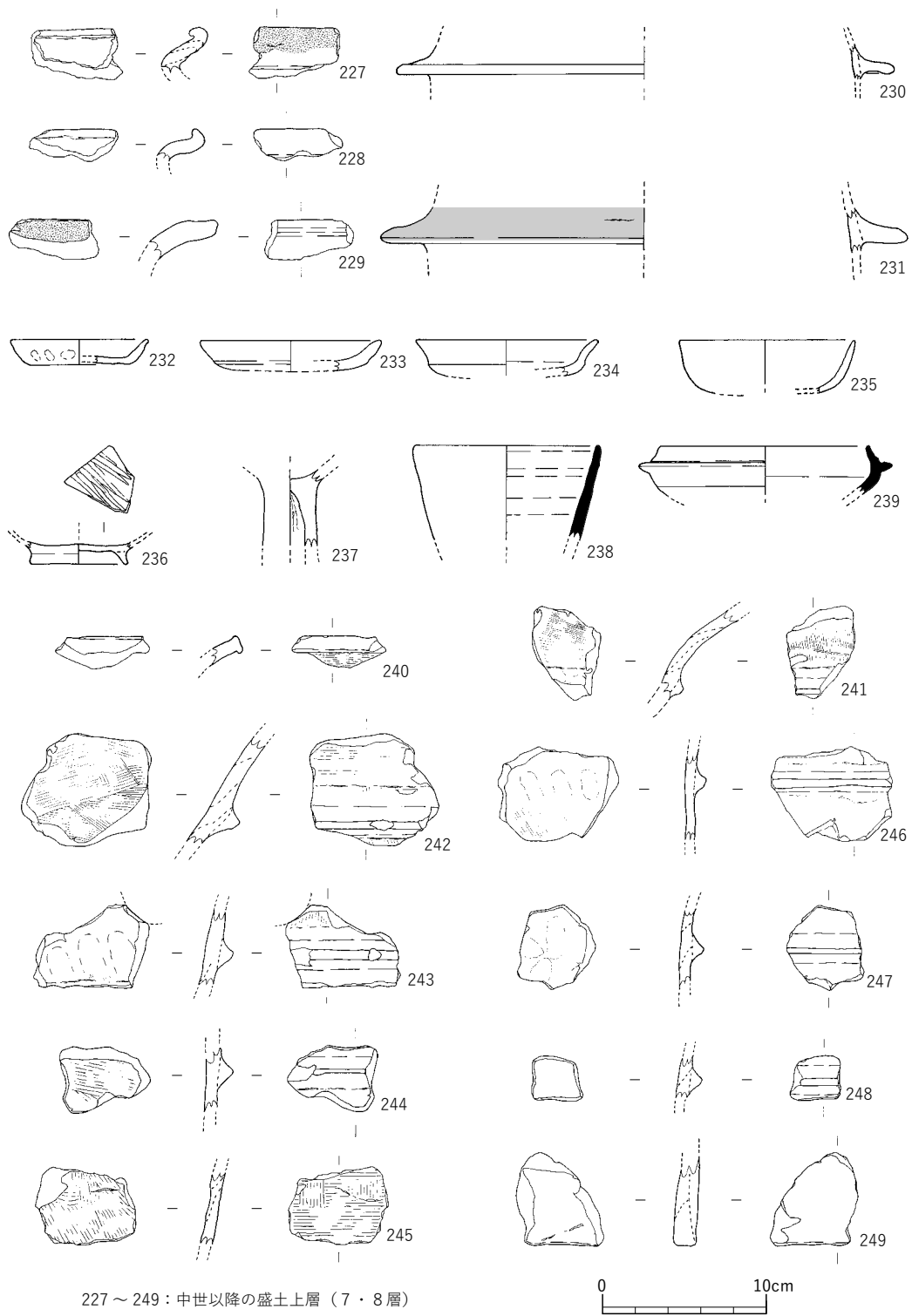
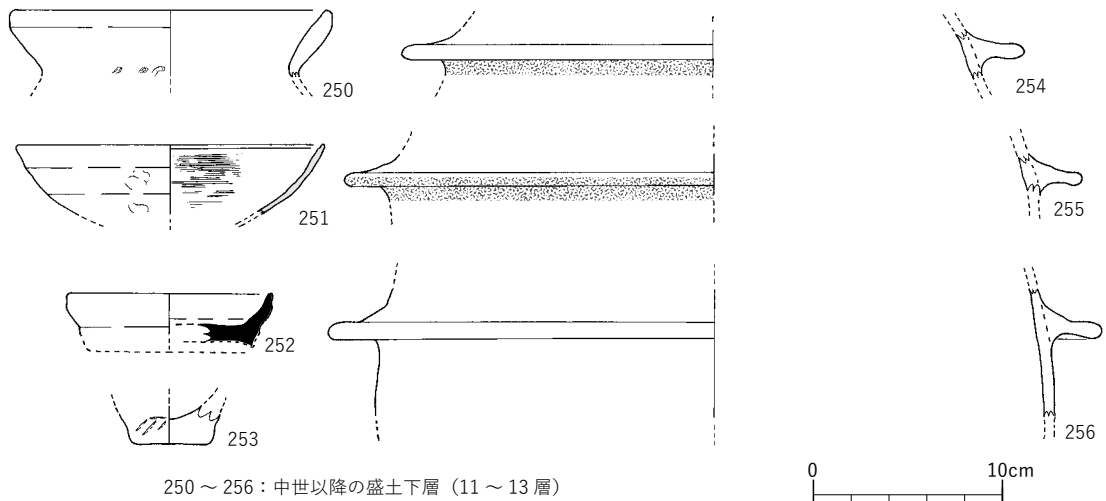


図44 9トレンチ出土遺物実測図(1)



250～256：中世以降の盛土下層（11～13層）

図45 9トレンチ出土遺物実測図（2）

位の幅がわからないが、水平方向の密なミガキが確認でき、外面はミガキが明瞭ではない。252は須恵器の小型環と呼ぶ器形をしている。器壁は厚みがあり、現状の底部外面は剥離しているが、実測図に示した復元線が妥当であるかは判然としない。253は弥生土器の底部片で、外面にタタキが確認できる。254～256は土師器羽釜の鏝部片で、254は鏝部より下位が膨らむ形状であるのに対し、255・256はあまり膨らまない形状である。

以上のように、II層は、上・下層ともに12世紀後半頃と思われる土器類が一定数含まれており、これらの示す時期に大規模な盛土造成が行われた可能性が考えられる。しかし、上層にのみ陶磁器の小片が少数含まれていることを踏まえると、これら土層は時期の異なる段階的な盛土である可能性も考えられる。いずれにせよ條ウル神古墳の周辺は、中世以降に耕地拡充を目的とした造成が行われることで、現状の土地区画の基本が形成されていったものと考えられる。

（5）9トレンチ拡張区（図46～50）

位置 9トレンチで検出した隍が東側にどのようにのびていくのかを確認するため、9トレンチ北半を東側におよそ6m拡張した。

土層の状況 9トレンチと同様の堆積をしており、I層である暗オリーブ褐色細砂（A1層）を除去した面で、第1遺構面を検出した。その基盤層は、9トレンチ北端ではV層が検出されたが、拡張区北端では9トレンチ北東隅で検出していたIII層の続きが検出された。それらは、締まりの弱い褐色系花崗岩バイラン土、締まりの非常に強い黒褐色土、締まりの弱い白色系花崗岩バイラン土などで構成されており、上面は削平されていると考えられる。拡張区北端より約4mの地点から南側では、9トレンチで検出していたものと同質のII層を検出した（A2層）。II層は0.3～1.1mの厚さで堆積し、旧地形の傾斜に沿って東側にいくに従い厚さを増している。II層の下には、II層の

ような新しい時期の遺物が混じらない堆積土（A 5～10層）が認められ、隍内の堆積土と考えられる。Ⅲ層とⅤ層の間に認められたA 89～95層は、Ⅴ層と土質が近く、Ⅴ層起源の旧表土のようにも思われたが、一部は人為的な掘り込みのように見える断面形であったため、古墳構築前の遺構が存在している可能性も考えられる。しかし、今回調査では、盛土面以下の掘削はいくつかのサブトレンチ内でしか行っていないため、墳丘盛土下の遺構について十分に検討ができていない。

第1遺構面 北西－南東方向の素掘溝2条（SD1・2）を確認した。いずれも出土遺物がなく、詳細な時期は不明であるが、9トレンチ同様、近世～現代の耕作痕と思われる。

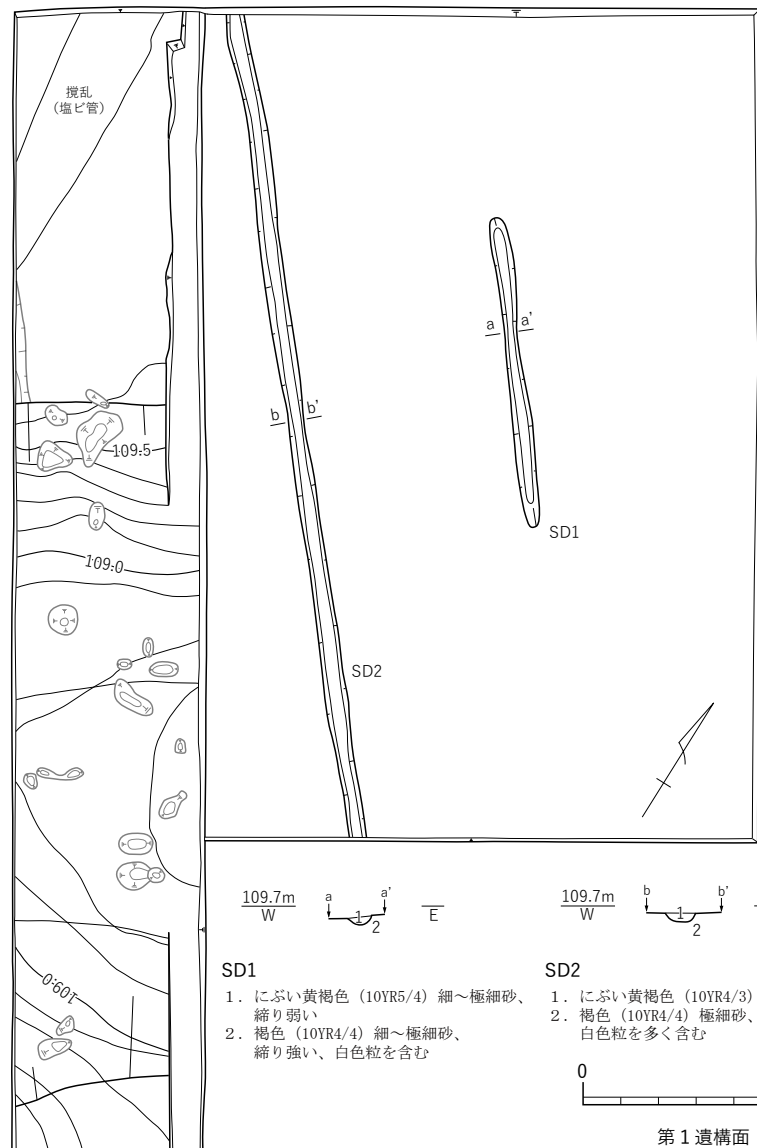
第2遺構（墳丘）面 Ⅱ層を除去していくと、9トレンチで検出した隍の墳丘側斜面が、東に向かって直線的に続いていく様相が確認された。拡張区を合わせると、検出長は約7.0mとなる。加えて拡張区の範囲では、9トレンチで検出したⅤ層が東側に向かって緩く傾斜していき、その上に盛土を行うことで墳丘を構築していることも明らかとなった。隍底の標高は、9トレンチ西端の最も高いところで108.8m、東端の最も低いところで108.42mを測る。

墳丘盛土 墳丘盛土の構築過程は、大きくみると、まず旧表土上に薄く黄色系の粘質土をはり、その上に花崗岩バイラン土、締まりの強い黒褐色土、黄色系粘質土の順に積み上げていく。それぞれの盛土は、おおむね外側に土を盛り上げてからその内側に土を入れていく流れで行われている。検出した墳丘盛土は、高いところで標高109.65m、低いところで108.6mであった。

隍底面の堆積土には遺物があまり含まれていなかったが、盛土の構築過程が、6トレンチで確認した墳丘盛土の構築過程とおおむね同一の様相を呈していること、これら盛土内に含まれる遺物に、明らかに條ウル神古墳の築造時期より新しいと判断できるものが無いことなどから、これら盛土は條ウル神古墳に伴う墳丘盛土である蓋然性が高いといえる。つまり、條ウル神古墳の南端部は直線的なラインを形成していたと考えられる。

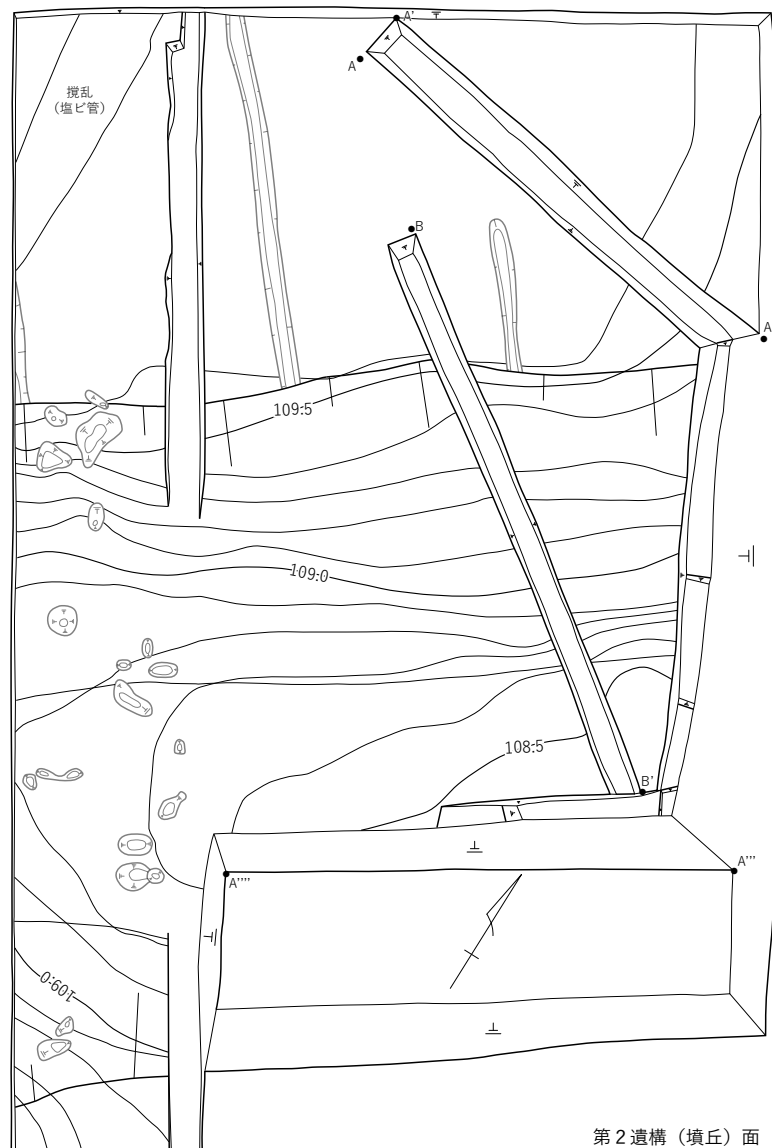
出土遺物（図49・50） Ⅱ層からの出土遺物が大半を占め、弥生土器、土師器、埴輪、須恵器、瓦器、瓦、サヌカイトの破片が出土している。隍底面の堆積土やⅢ層からも少数ながら遺物が出土しており、弥生土器、土師器、埴輪、須恵器、サヌカイトなどが含まれている。

257～270はⅡ層から出土した遺物である。257・260・261は瓦器碗の破片で、底部は断面三角形の低い高台が取り付け、見込み部にわずかに暗文が確認できる。口縁部の残る資料（260）には大和型のものが認められ、内外面に幅1.0mmほどの水平方向の密なミガキが施される。これらは概ね12世紀後半頃の資料と考えられる。258は埴輪の底部片で、外面に黒斑が認められる。259は長脚高坏の脚裾部片と思われ、端部付近の外面に自然釉が付着している。262・268は土師器羽釜の破片で、口縁部まで残る268では、鏝部から頸部がやや内傾し、口縁部が大きく外側に屈曲する。口縁端部は四角く収める。上述の瓦器と同時期の資料と考えられる。263は土師器鉢の口縁から体部の破片で、内外面共にナデで仕上げられ、体部と口縁部の境の器壁が最も厚くなり1.0cmを測る。264は土師器高坏の脚柱部片で、外面は幅8mmほどの面取りがなされているが、その後

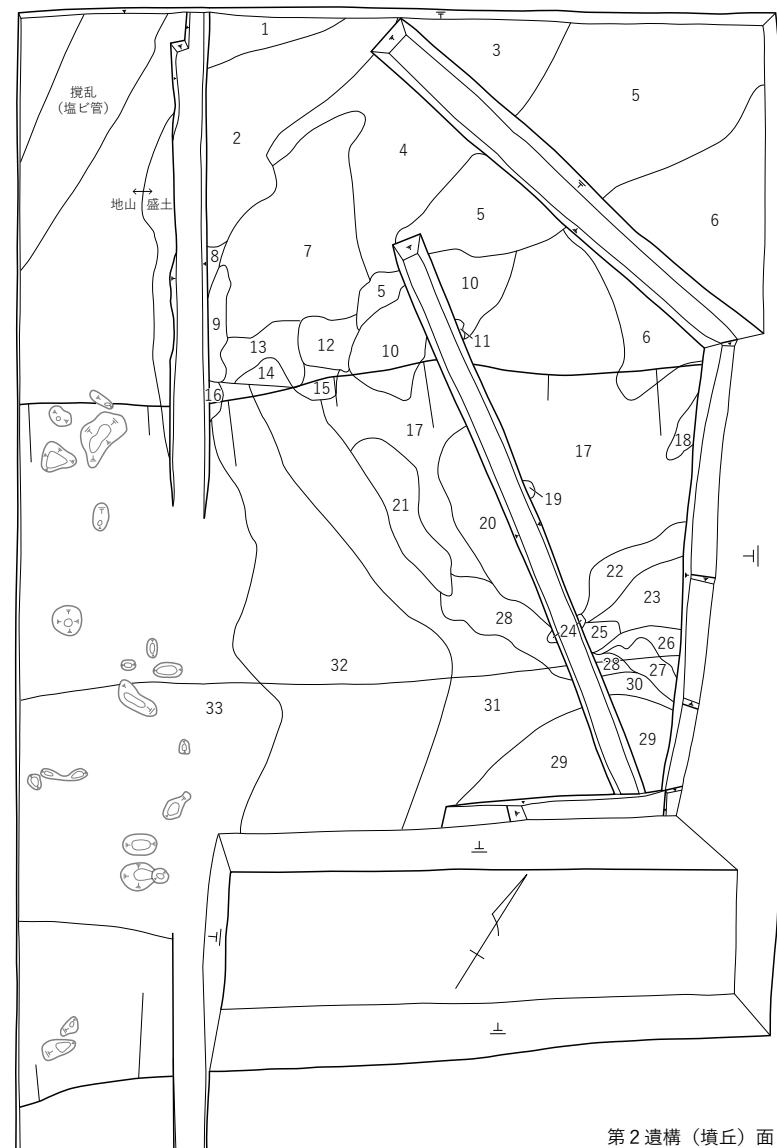


- SD1**
1. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細砂、縮り弱い
 2. 褐色 (10YR4/4) 細～極細砂、縮り強い、白色粒を含む
- SD2**
1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 極細砂
 2. 褐色 (10YR4/4) 極細砂、白色粒を多く含む

第1遺構面



第2遺構 (填丘) 面



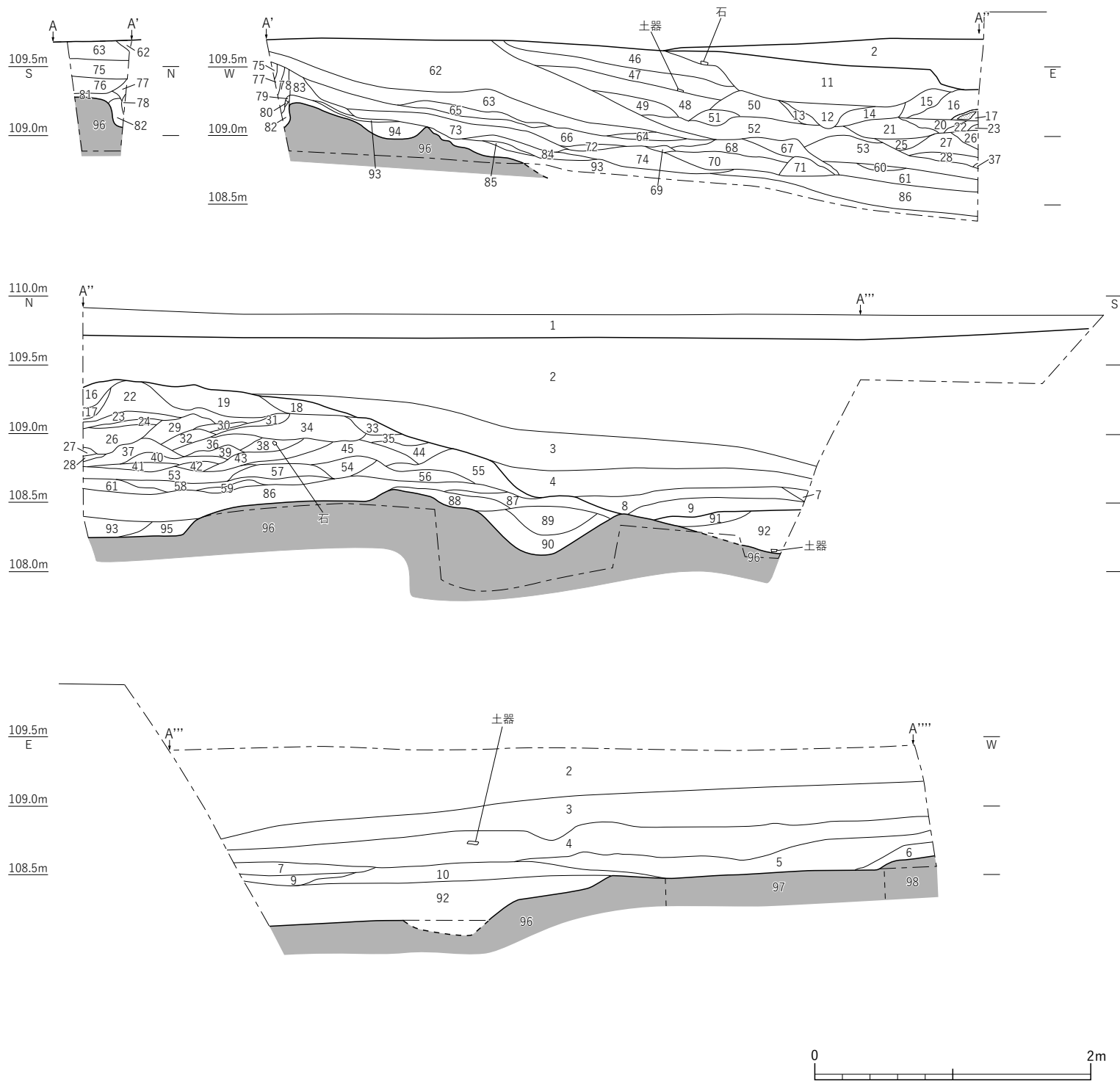
第2遺構 (填丘) 面 平面分層図

填丘平面土層注記

1. 黄褐色 (10YR5/6) 細～極細砂、白色粒をやや含む (9tr22層に対応)
2. 明黄褐色 (10YR6/6) 細～極細砂、褐色極細砂をブロック状に含む、白色粒を北半に多く含む (9tr20層に対応)
3. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗砂質極細砂～シルト、縮り弱い、白色粒を含む (花崗岩パイラン土) (A62層に対応)
4. 明黄褐色 (10YR6/6) 中砂質シルト、縮り弱い、白色シルトブロックを部分的に含む (花崗岩パイラン土) (A63層に対応)
5. 黒褐色 (2.5Y3/2) 細砂、縮り強い、白色粒を含む (A46層に対応)
6. 黄褐色 (10YR5/6) 細砂、縮り弱い、白色粒を多く含む (A11層に対応)
7. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中砂質シルト、縮り弱い、白色・浅黄色シルトブロックを多く含む
8. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂～シルト、灰黄褐色シルトを部分的に含む、白・褐色粒を含む (9tr21層に対応)
9. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、花崗岩風化礫をブロック状に含む (9tr18層に対応)
10. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 細砂、縮り強い、白色粒を多く含む、7cm以下の橙色ブロックをやや含む (B15層に対応)
11. 黄褐色 (2.5Y5/4) 細砂、縮り強い、白色粒を多く含む (B4層に対応)
12. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂、白色粒を多く含む
13. 黄褐色 (2.5Y5/4) 細～極細砂、縮り強い、黒褐色土・白色粒を多く含む
14. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂～シルト、縮り強い、白色粒を含む
15. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 極細砂、縮り強い、にぶい黄褐色土を多く含む
16. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 極細砂、縮り強い (9tr19層に対応)

17. 褐色 (10YR4/4) 細～極細砂、縮り強い、白色粒を含む (B7層に対応)
18. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂、縮り強い、白色粒・黒褐色土を部分的に含む (A19層に対応)
19. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中砂質極細砂～シルト、縮り弱い (B5層に対応)
20. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 極細砂、白色粒を多量に含む
21. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 中砂質極細砂、縮り強い、黒褐色土・白色粒を含む
22. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 極細砂、縮り強い、黒褐色土をやや含む、白色粒を含む
23. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 極細砂、縮り強い、白色粒をわずかに含む (A55層に対応)
24. 黄褐色 (2.5Y5/4) 中砂質極細砂 (B8層に対応)
25. 黒褐色 (2.5Y3/2) 中砂質極細砂、縮り強い (B9層に対応)
26. 暗褐色 (10YR3/3) 極細砂～シルト (A87層に対応)
27. 暗灰色 (N3/0) シルト、縮り強い、黄色土を斑状に含む (A89層に対応)
28. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 中砂質極細砂、縮り強い (B35層に対応)
29. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 中砂質シルト、縮り強い、明褐色土を部分的に含む (A92層に対応)
30. 浅黄色 (2.5Y7/4) 中砂質シルト、縮り強い、暗灰黄色シルトを斑状に含む (地山) (B40層に対応)
31. 黄褐色 (2.5Y5/4) 細砂、縮り強い (地山) (A96層に対応)
32. 黄褐色 (10YR5/6) 極細砂、縮り強い (地山) (A97層に対応)
33. 白色シルト、褐色極細砂を部分的に含む (地山) (A98層に対応)

図46 9トレンチ拡張区平面・遺構断面図



1. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 細砂 (耕作土)
2. 褐色 (10YR4/4) 極細砂～シルト、白色粒を多く含む
3. 褐色 (10YR4/4) 極細砂、白色粒を多く含む
4. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂～シルト、白色粒をわずかに含む
5. 灰色 (7.5Y6/1) 粘土
6. にぶい黄褐色 (10YR6/3) 極粗砂質中砂
7. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂～シルト、4層に比して粒径がやや大きい、炭をわずかに含む
8. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中砂質シルト
9. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 極細砂～シルト、部分的に褐色極細砂粒を含む
10. 黄褐色 (2.5Y5/3) 極細砂～シルト、93層の土をやや含む
11. 黄褐色 (10YR5/6) 細砂、締り弱い、白色粒を多く含む
12. 黄褐色 (2.5Y5/3) 極細砂、締り強い、白色粒をわずかに含む、暗灰黄色土を斑状に含む
13. 黒褐色 (2.5Y3/2) 極細砂～シルト、締り強い、白色粒をわずかに含む
14. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 極細砂、締り強い、白色粒をわずかに含む
15. 黄褐色 (2.5Y5/3) 細～極細砂、締り強い、白色粒をわずかに含む、浅黄色土をブロック状に含む
16. 褐色 (10YR4/4) 細砂、締り強い、白色粒を多く含む、暗灰黄色土を部分的に含む
17. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、締り強い
18. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂、締り強い、白色粒をやや含む
19. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂、締り強い、白色粒・黒褐色土を部分的に含む
20. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、締り強い、白色粒をわずかに含む
21. 黄褐色 (2.5Y5/3) 極細砂、締り強い、白色粒をやや含む
22. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粗砂質極細砂、締り強い、白色粒を多く含む
23. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂、締り強い、白色粒をわずかに含む
24. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 極細砂、締り強い、暗灰黄色土を斑状に含む
25. 明黄褐色 (10YR6/6) 極細砂、締り強い、浅黄色土を斑状に含む
26. 明黄褐色 (2.5Y6/6) 極細砂、締り強い
27. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 極細砂～シルト、締り強い、黄褐色シルトを斑状に含む
28. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂、締り強い、にぶい黄色土をやや含む
29. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 極細砂、締り強い、暗灰黄色土をやや含む
30. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂、締り強い
31. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂
32. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂
33. 黄褐色 (2.5Y5/4) 細～極細砂、締り強い
34. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂、締り強い、黒褐色土を部分的に含む
35. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 極細砂、締り強い、層の下半に黒褐色土をブロック状に含む
36. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂
37. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂、締り強い、暗灰黄色土をやや含む
38. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂、明黄褐色土を部分的に含む
39. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂
40. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 極細砂、白色粒をわずかに含む、暗灰黄色土をやや含む
41. 黄褐色 (10YR5/6) 極細砂～シルト、白色シルトを多く含む
42. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、黄褐色土を斑状に含む
43. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 極細砂～シルト、暗灰黄色土を含む
44. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 極細砂、締り強い、層の下半に黒褐色土をブロック状に含む
45. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 極細砂、締り強い、黒褐色土をブロック状に含む、明黄褐色土を斑状に含む
46. 黒褐色 (2.5Y3/2) 細砂、締り強い、白色粒を含む
47. 黒褐色 (2.5Y3/2) 細～極細砂、締り強い、白色粒を含む
48. 暗褐色 (10YR3/3) 中砂質極細砂、締り強い
49. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 細～極細砂、締り強い、白色粒をやや含む
50. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細～極細砂、締り強い、白色粒を含む
51. 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 極細砂、締り強い
52. 黒褐色 (10YR3/2) 極細砂、締り強い、白色粒をやや含む
53. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粗砂質極細砂、締り強い、白色粒をやや含む
54. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂～シルト、締り強い、白色粒を含む
55. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 極細砂、締り強い、白色粒をわずかに含む
56. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中砂質シルト、締り弱い、白色粒を含む
57. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 極細砂～シルト、締り強い、白色粒を含む
58. 黒褐色 (2.5Y3/2) 中砂質シルト、締り強い、黄褐色土をブロック状に含む
59. 黄褐色 (2.5Y5/4) シルト
60. 黄褐色 (10YR5/6) 極細砂
61. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、浅黄色土をブロック状に含む
62. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗砂質極細砂～シルト、締り弱い、白色粒を含む (花崗岩パイラン土)
63. 明黄褐色 (10YR6/6) 中砂質シルト、締り弱い、白色シルトブロックを部分的に含む (花崗岩パイラン土)
64. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、白色粒をわずかに含む
65. 黄褐色 (2.5Y5/3) 極細砂～シルト
66. 黄褐色 (2.5Y5/3) 極細砂～シルト、締り強い、橙色・暗灰黄色土を斑状に含む
67. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 中砂質極細砂、明黄褐色土を斑状に含む
68. オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 極細砂～シルト、明黄褐色・黒褐色土を斑状に含む
69. 黄褐色 (10YR5/6) 細～極細砂
70. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂～シルト、暗灰黄色・明黄褐色土を斑状に含む
71. 浅黄色 (2.5Y7/4) 極細砂～シルト、明黄褐色・黒褐色土をやや含む
72. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト
73. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粗砂質シルト
74. 明黄褐色 (10YR6/6) 粗砂質シルト、締り強い、橙色・暗灰黄色土を斑状に含む
75. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 極細砂～シルト、黄褐色土を斑状に含む、炭を含む
76. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂～シルト、白色粒をわずかに含む
77. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂～シルト、白色シルトブロックを多く含む
78. 黄褐色 (10YR5/6) 粗砂質細砂、締り弱い、白色粒をやや含む
79. 黄褐色 (2.5Y5/6) 極細砂
80. 黒褐色 (10YR3/1) 細砂質シルト
81. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト、黄褐色土をわずかに含む
82. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂、白色粒をわずかに含む
83. 黄褐色 (2.5Y5/4) 極細砂～シルト、白色粒をわずかに含む
84. 灰黄色 (2.5Y4/1) 細砂質シルト、橙色土をわずかに含む
85. 明黄褐色 (10YR6/6) 中砂質シルト
86. 黒褐色 (2.5Y3/2) 粗砂質シルト、締り強い、鉄分を部分的に含む
87. 暗褐色 (10YR3/3) 極細砂～シルト
88. 黒褐色 (10YR3/2) シルト
89. 暗灰色 (N3/0) シルト、締り強い、黄色土を斑状に含む
90. 灰色 (N4/0) 粘土
91. 褐色 (10YR4/4) 極細砂、白色粒を含む
92. オリーブ褐色 (2.5Y6/1) 中砂質シルト、締り強い、明褐色土を部分的に含む、層の上方ほど7・9・10層の土を斑状に含む
93. 黒褐色 (10YR3/1) 細砂質シルト
94. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 極細砂～シルト、黄褐色土をわずかに含む
95. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 中砂質シルト
96. にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粗砂質シルト、締り強い (地山)
97. 黄褐色 (10YR5/6) 極細砂、締り強い (地山)
98. 白色シルト、褐色極細砂を部分的に含む (地山)

図47 9トレンチ拡張区土層断面図(1)

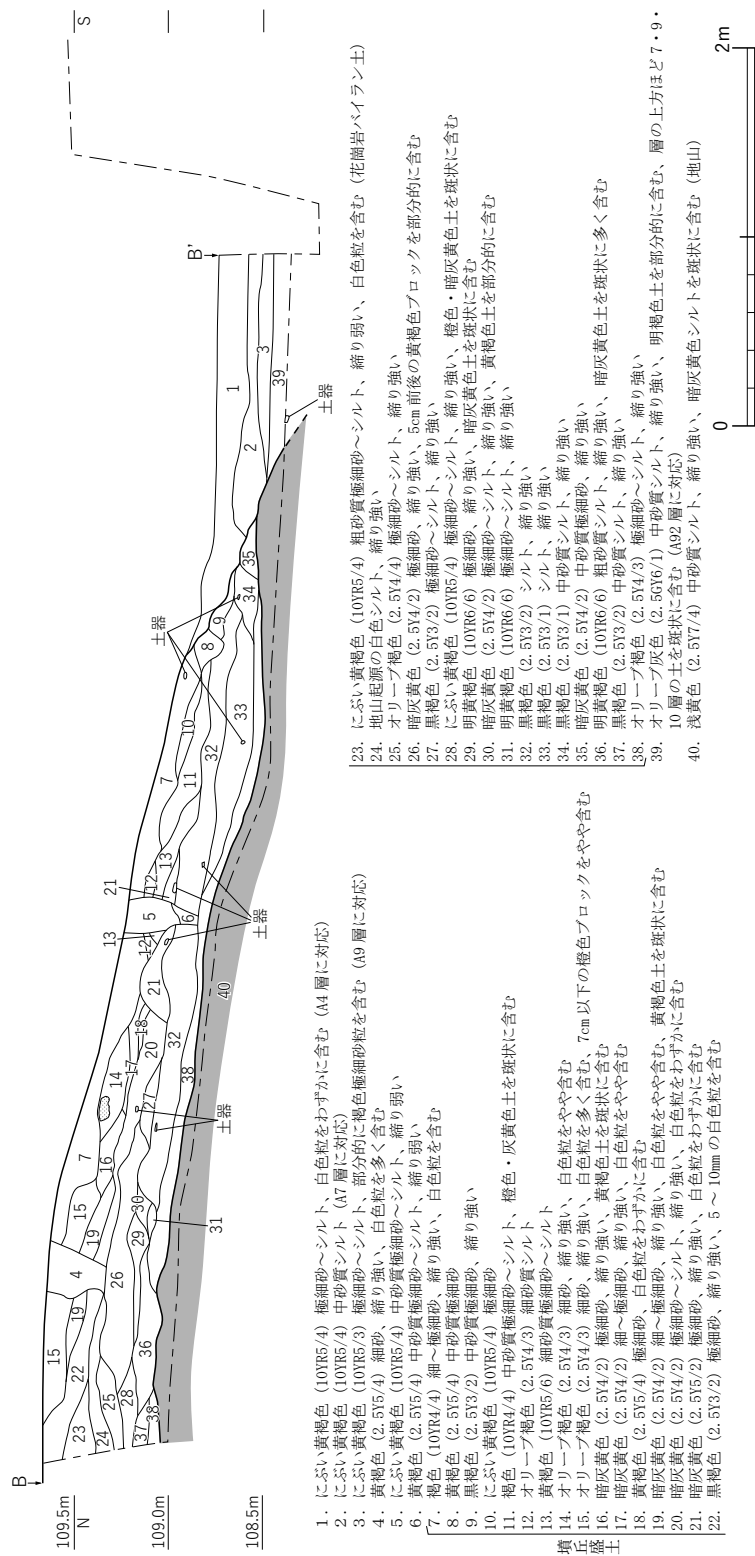


図 48 9 トレンチ拡張区土層断面図 (2)

の調整は摩耗のため判然としなない。265 は須恵器坏蓋の天井部片で、反時計回りのロクロによるヘラケズリが認められる。266・269 は短脚高坏の破片で、266 は有蓋高坏の坏部であり、口縁端部は丸く収め、底部外面にはロクロ時計回りのヘラケズリが、底部内面には静止ナデが確認できる。269 はおそらく三方向の方形透孔があり、外面にはカキメが認められる。267 は平瓦の破片で、外面に縄蓆文タタキ、内面に布目の跡が残っている。270 は須恵器壺の頸部片で、外面にカキメが認められるが、一部がナデ消されている。

271・272 は隍底の堆積土から出土した遺物である。271 は台付壺の破片で、底部の外面にはロクロ反時計回りのヘラケズリが施され、内面には台部の接合に伴うと思われる複雑なナデ・ユビオサエの跡が残る。272 は器種不明の須恵器体部片で、5mm 弱の薄い器壁

1. にぶい黄褐色 (10VR5/4) 極細砂～シルト、白色粒をわずかに含む (A4 層に対応)
2. にぶい黄褐色 (10VR5/4) 中砂質シルト (A7 層に対応)
3. にぶい黄褐色 (10VR5/3) 極細砂～シルト、部分的に褐色極細砂粒を含む (A9 層に対応)
4. 黄褐色 (2.5V5/4) 細砂、縮り強い、白色粒を多く含む
5. にぶい黄褐色 (10VR5/4) 中砂質極細砂～シルト、縮り弱い
6. 黄褐色 (2.5V5/4) 中砂質極細砂～シルト、縮り強い
7. 褐色 (10VR4/4) 細～極細砂、縮り強い、白色粒を含む
8. 黄褐色 (2.5V5/4) 中砂質極細砂
9. 黒褐色 (2.5V3/2) 中砂質極細砂、縮り強い
10. にぶい黄褐色 (10VR5/4) 極細砂
11. 褐色 (10VR4/4) 中砂質極細砂～シルト、橙色・灰黄色土を斑状に含む
12. オリーブ褐色 (2.5V4/3) 細砂質シルト
13. 黄褐色 (10VR5/6) 細砂質極細砂～シルト
14. オリーブ褐色 (2.5V4/3) 細砂、縮り強い、白色粒をやや含む
15. オリーブ褐色 (2.5V4/3) 細砂、縮り強い、白色粒を多く含む
16. 暗灰黄色 (2.5V4/2) 極細砂、縮り強い、黄褐色土を斑状に含む
17. 暗灰黄色 (2.5V4/2) 細～極細砂、縮り強い、白色粒をやや含む
18. 黄褐色 (2.5V5/4) 極細砂、白色粒をわずかに含む
19. 暗灰黄色 (2.5V4/2) 細～極細砂、縮り強い、白色粒をやや含む、黄褐色土を斑状に含む
20. 暗灰黄色 (2.5V4/2) 極細砂～シルト、縮り強い、白色粒をわずかに含む
21. 暗灰黄色 (2.5V5/2) 極細砂、縮り強い、白色粒をわずかに含む
22. 黒褐色 (2.5V3/2) 極細砂、縮り強い、5～10mm の白色粒を含む
23. にぶい黄褐色 (10VR5/4) 粗砂質極細砂～シルト、縮り弱い、白色粒を含む (花園岩バイラン土)
24. 地山起源の白色シルト、縮り強い
25. オリーブ褐色 (2.5V4/4) 極細砂～シルト、縮り強い
26. 暗灰黄色 (2.5V4/2) 極細砂、縮り強い、5cm 前後の黄褐色ブロックを部分的に含む
27. 黒褐色 (2.5V3/2) 極細砂～シルト、縮り強い
28. にぶい黄褐色 (10VR5/4) 極細砂～シルト、縮り強い
29. 明黄褐色 (10VR6/6) 極細砂、縮り強い、暗灰黄色土を斑状に含む
30. 暗灰黄色 (2.5V4/2) 極細砂～シルト、縮り強い、暗灰黄色土を斑状に含む
31. 明黄褐色 (10VR6/6) 極細砂～シルト、縮り強い、黄褐色土を部分的に含む
32. 黒褐色 (2.5V3/2) シルト、縮り強い
33. 黒褐色 (2.5V3/1) シルト、縮り強い
34. 黒褐色 (2.5V3/1) 中砂質シルト、縮り強い
35. 暗灰黄色 (2.5V4/2) 中砂質極細砂、縮り強い
36. 明黄褐色 (10VR6/6) 粗砂質シルト、縮り強い
37. 黒褐色 (2.5V3/2) 中砂質シルト、縮り強い
38. オリーブ褐色 (2.5V4/3) 極細砂～シルト、縮り強い
39. オリーブ褐色 (2.5V6/1) 中砂質シルト、縮り強い、明褐色土を部分的に含む、層の上方ほど7・9・10層の土を斑状に含む (A92層に対応)
40. 浅黄色 (2.5V7/4) 中砂質シルト、縮り強い、暗灰黄色シルトを斑状に含む (地山)

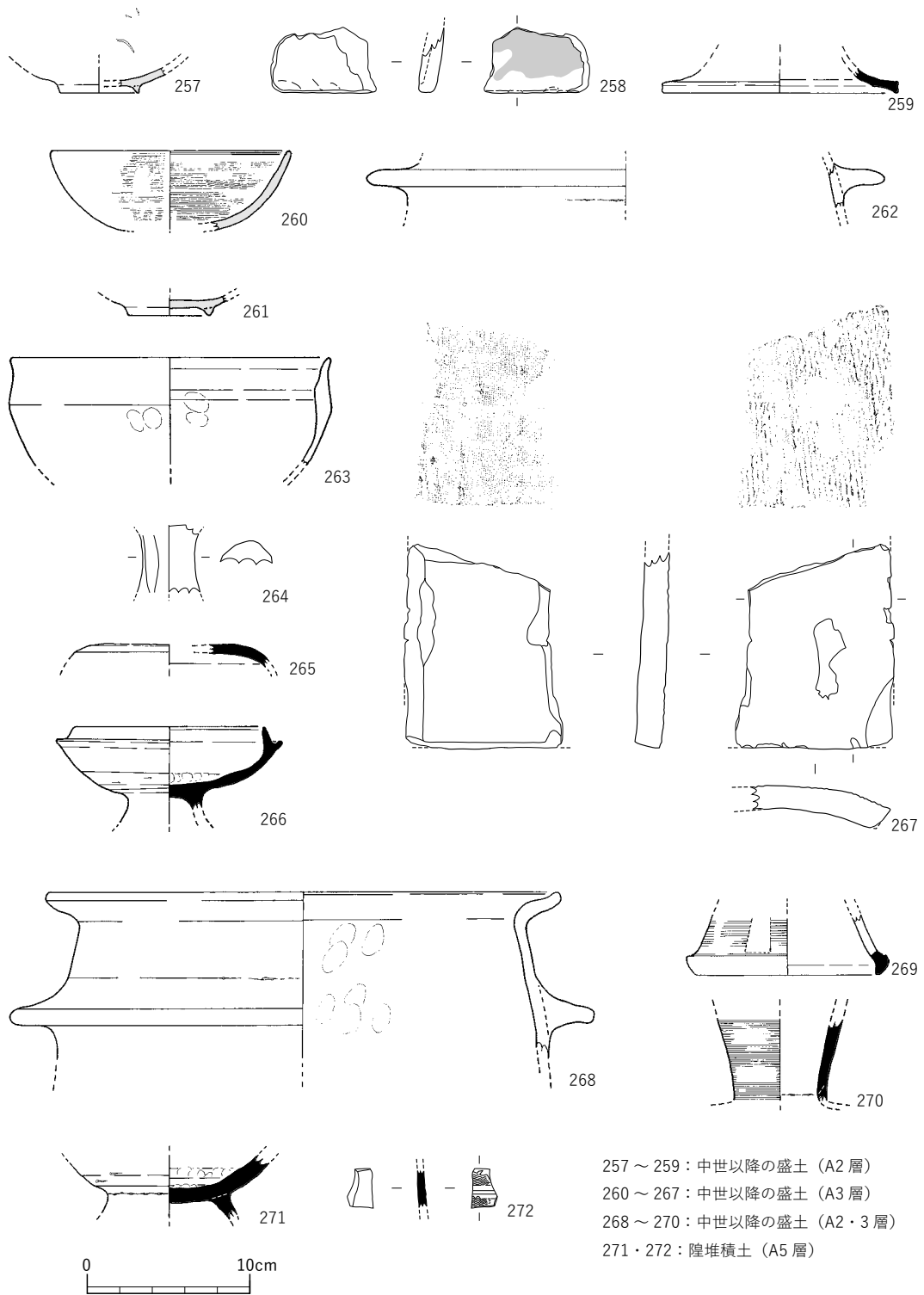


図49 9トレンチ拡張区出土遺物実測図（1）

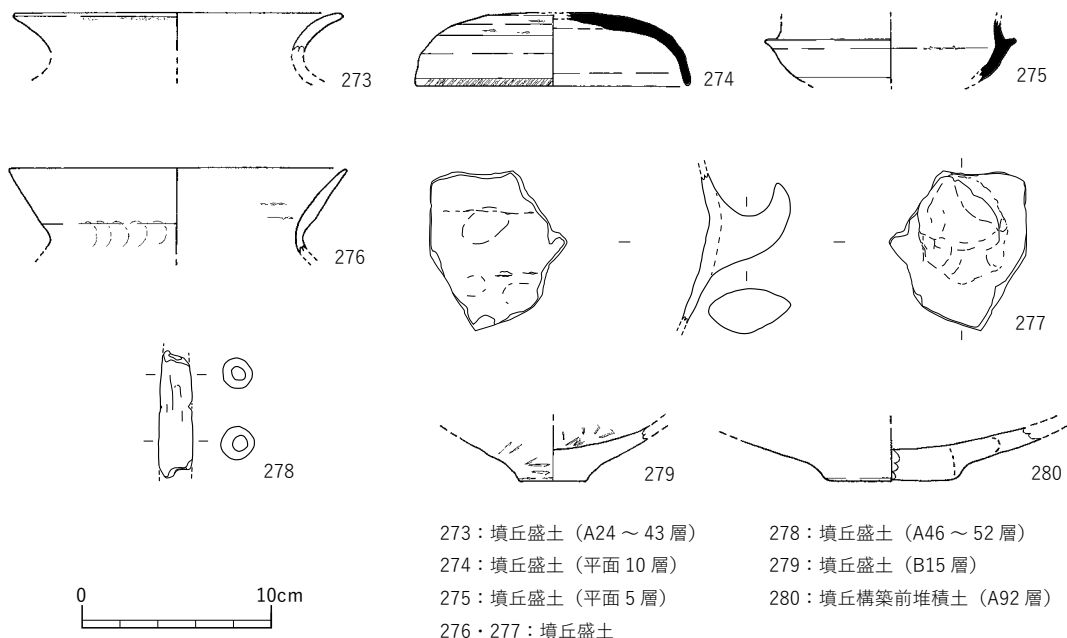


図50 9トレンチ拡張区出土遺物実測図(2)

に、外面は2条の沈線で区画された上下に波状文が施されている。

273～279はⅢ層から出土した遺物である。273・276は土師器甕の口縁部片で、いずれも端部は特に肥厚せず丸く収めている。273は外反の強い断面形状をしており、口縁端部外面に煤が付着している。276は直線的に外方にのびる断面形状をしており、調整は摩耗のためわかりづらいが、頸部外面にユビオサエの跡が認められる。274は須恵器坏蓋の破片で、口径の約半分が残存している。天井部外面にはロクロ時計回りのヘラケズリが施され、口縁端部は丸く収めるとともに外面に板状工具で押さえたような木目痕が認められる。また、天井部内面には、回転ナデの跡に施された静止ナデの痕跡も確認できる。275は須恵器坏身の破片で、短い受部から直立気味に口縁部が立ち上がるが、端部は残存していない。体部と底部の境には回転ヘラケズリの痕跡が認められるが、ロクロの回転方向は判然としない。277は土師器の把手部の破片で、内外面ともにナデによる調整が行われている。把手の横断面はやや丸みのある菱形を呈しており、器面に直接貼り付ける形で接合されている。278は管状土錘の破片で、両端を欠損している。外面縦方向のケズリかミガキのような痕跡が面取状に確認できるが、面自体は非常に不明瞭なもので、明確な単位は確認できない。表面の一部が明橙色に変色している部分があり、顔料の付着の可能性も考えられたが、焼成のムラである可能性も否定できない。残存重量は19.6gである。279は弥生土器壺の底部と思われる破片で、外面にタタキ、内面に蜘蛛の巣状のハケメが確認できる。

280は墳丘構築前の堆積土から出土した弥生土器大型壺の底部片である。内外面ともに摩耗が激しく調整は不明であるが、底面から体部最下部にかけて黒斑が確認できる。

(6) 11トレンチ (図51～55)

位置 9トレンチで検出した隕の延長や墳丘盛土の存否を確認するため、南墳丘東側にある段々畑の下段、7トレンチから南に約11mのところ、11トレンチを設定した。トレンチの主軸は9トレンチで検出した隕の延長方向に合わせ、トレンチの大きさは長さ7.7m、幅2.0mである。

土層の状況 I層である暗オリーブ褐色細砂(1層)を除去すると、トレンチ西端より2.7mの範囲では暗灰黄色シルト(20層)が、それより東側では黄褐色極細砂(3層)が検出された。3層はII層である蓋然性が高く、20層は後述のとおり、上面に弥生時代の遺構が認められることから、古墳が築造される以前の堆積土と考えられる。3層は、第1遺構面の覆土となっており、それを除去したところで第1遺構面を検出した。第1遺構面の下層については、遺構の埋土とその基盤層が複雑に入り組んでおり、明確な遺構「面」の認識が困難であったが、遺構の重複関係より便宜的に第2遺構面を設定した。これら遺構埋土や基盤層には、瓦器の小片が含まれていることが多く、当

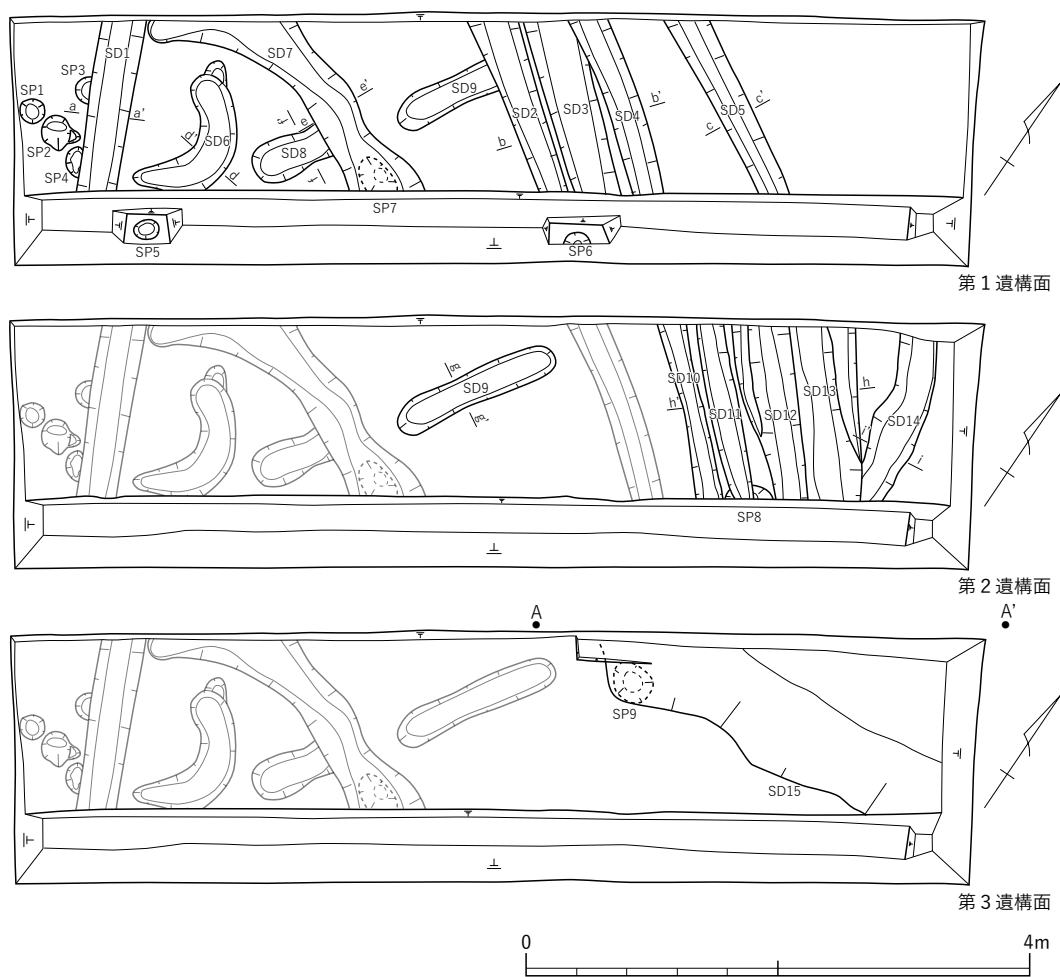


図51 11トレンチ平面図

該地において中世頃の一定期間、耕作等の営為が継続されていたことを示すものと言える。

そしてこれら瓦器等を含む土層を除去すると、トレンチ西寄りで検出していた20層や黄褐色中砂の21層が検出でき、その上面で第3遺構面を検出した。20・21層の下には、西から東へ緩やか

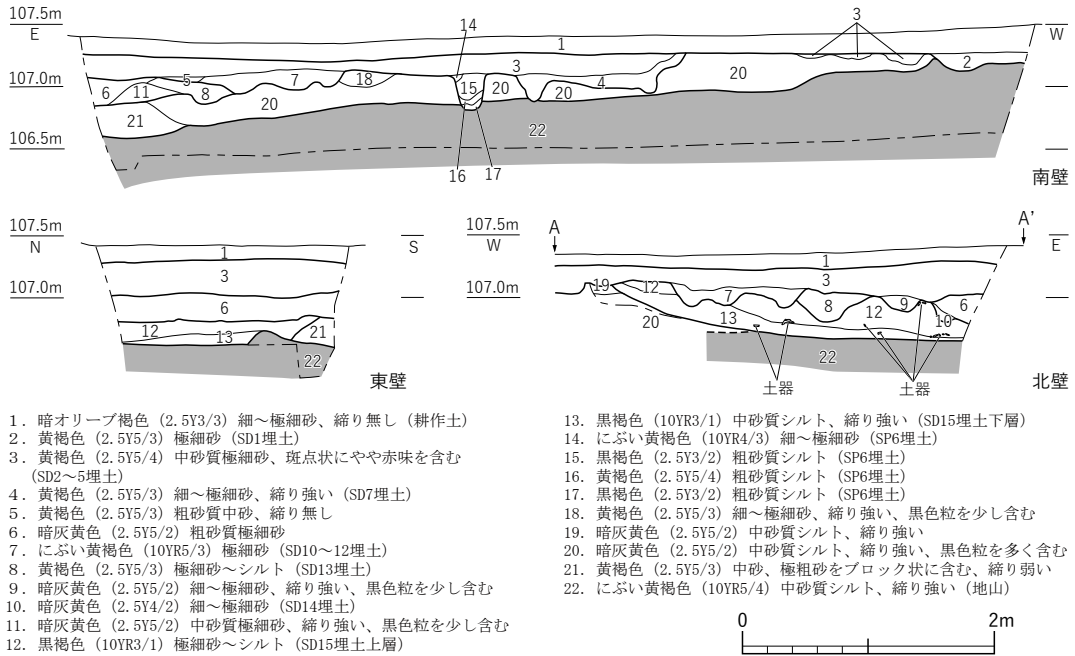


図 52 11 トレンチ土層断面図

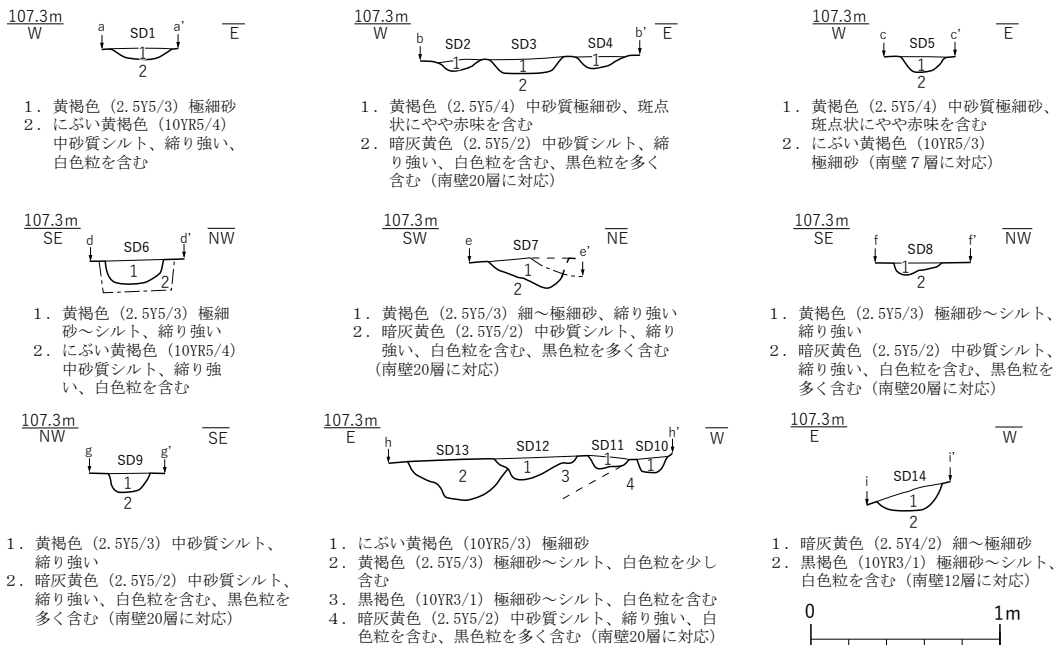


図 53 11 トレンチ遺構断面図

に傾斜していくV層(22層)が確認できており、西端で標高107.2m、東端で106.6mであった。

第1遺構面 素掘溝8条(SD1~8)、ピット7基(SP1~7)を検出した。素掘溝はSD6・7がやや不整形であることを除くと、他は直線的な平面形をしており、北西-南東方向のものが多い。それらのうちいくつかの埋土に瓦器を含むことから、これら北西-南東方向の素掘溝は中世以降の耕作に伴う溝と考えられる。不整形なSD6・7や上記のものと方向が異なるSD8に関しては、埋土の様相が後述するピットに近いことや、瓦器などの遺物が含まれないことから、異なる時期のものである可能性が考えられる。そのピットについても、出土遺物が乏しく時期の比定が難しいが、埋土が、残りの良いタタキ甕が出土した7トレンチSD12の埋土に近い特徴をもつことから、これらについては弥生時代の遺構である可能性が考えられる。ただし、その性格は判然としない。

第2遺構面 第1遺構面とほぼ同じ高さで、素掘溝6条(SD9~14)とピット1基(SP8)を検出した。素掘溝の方向は、第1遺構面と変わらず北西-南東方向のものが多く、これらの埋土にも瓦器の破片が含まれていることから、第1遺構面と同様に中世以降の耕作に伴うものと考えられる。SP8はSD11に切られる形で検出したが、出土遺物もなく、時期・性格ともに判然としない。

第3遺構面 素掘溝1条(SD15)とピット1基(SP9)を検出した。SD15は、南側の肩のみを検

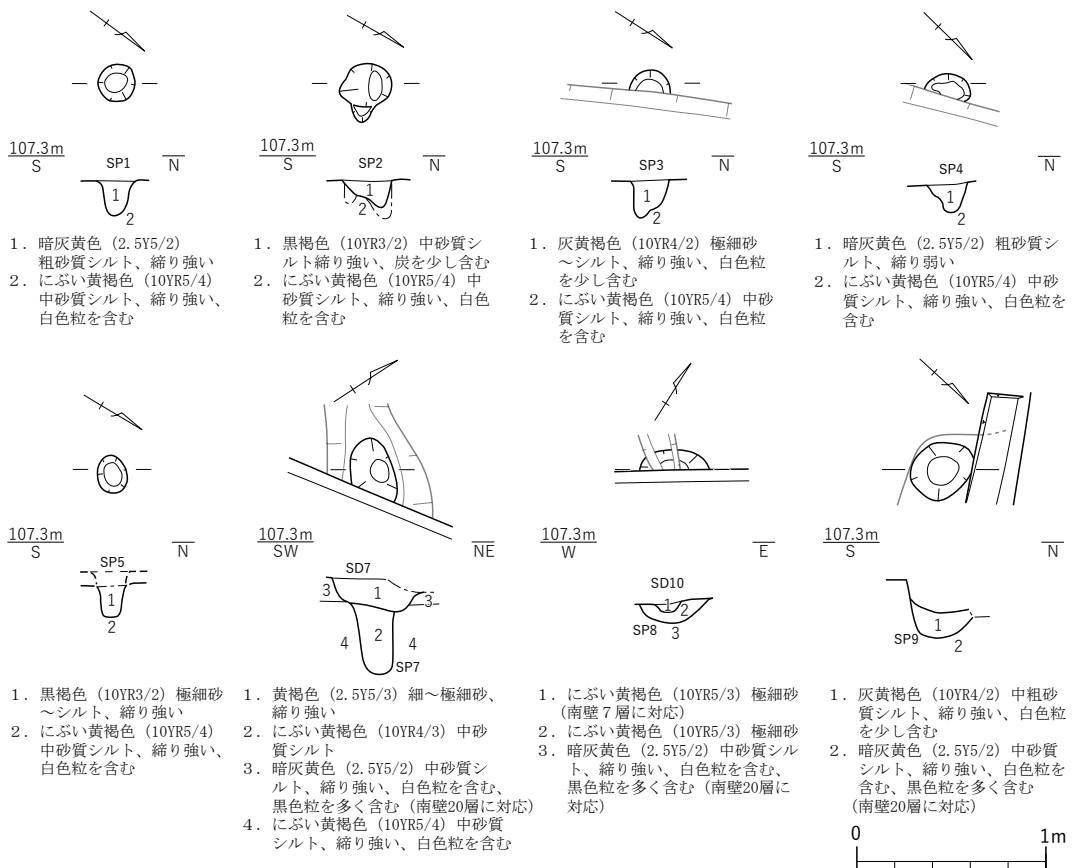


図54 11トレンチ遺構平面・断面図

出しており、検出長 2.7 m、検出幅 1.4 mを測る。黒褐色の埋土（12・13層）からは、タタキ甕の破片や土師器小型丸底壺（295）、土師質の把手（292）が出土しており、古墳時代中期以降の時期が考えられる。條ウル神古墳に伴う可能性を完全には否定できないが、埋土からの出土遺物や、墳丘との位置関係からはその可能性は低いと考えられる。SP9については、SD15の埋土除去後に検出したことから、それ以前の遺構と考えられ、埋土の類似からは、第1遺構面で検出した弥生時代と考えられるピットと同時期の可能性が考えられる。

9トレンチで確認した隍の延長や墳丘盛土の存否を確認する目的で設定した11トレンチであったが、そのような痕跡を検出することはできなかった。7トレンチの調査成果と合わせて考えると、両トレンチを設定した段々畑東下段の面には墳丘やそれに伴う遺構が広がっていなかった可能性が高いと判断できる。

出土遺物（図55） 遺構埋土・遺構基盤層ともに出土遺物の多くは器種や部位のわからない土師器小片であり、素掘溝の多くで瓦器小片が混じるような状況であった。そのほか、弥生土器、サヌカイト、埴輪、須恵器、黒色土器などの破片も出土しているが、全体に占める割合は小さいものである。

281～287は、第1遺構面SD1～5の埋土より出土した遺物である。281は円筒埴輪の突帯片で、断面三角形状を呈し、強いヨコナデによる稜線が下面中位に認められる。突帯下には円形透孔の一部が確認でき、外面は粗いタテハケ、内面はタテハケ後にナデを施す。282は埴輪の体部片であるが、外面に平行する3条のやや湾曲する沈線が認められる。鳥形埴輪といった形象埴輪の可能性が考えられよう。283・284は土師器皿の破片で、283はやや丸みをもつ底部から口縁部が外方に屈曲する形状、284は平らな底部から口縁部が立ち上がる形状をしており、12～13世紀頃のものと考えられる。285は須恵器長脚高坏の脚柱部片で、2条の凹線で2段に区切られた上側に3方向の方形透孔が穿たれている。破片上部は坏部の剥離面となっており、脚柱部内面にはヨコナデとシボリの痕跡が認められる。286は須恵器鉢の底部片で、内面に自然釉が付着し、底部外面にはロクロ時計回りの回転糸切り痕跡が確認できる。287はサヌカイト製の平基式打製石鏃で、全体に摩擦が激しく、先端部がわずかに欠損している。重量は1.0gである。

288～295は第3遺構面SD15の埋土より出土した遺物である。288は弥生土器壺の口縁部片で、二次口縁が一次口縁より剥離したものである。端部は欠損しているが、やや外側に引き出す形態と思われ、外面下部には竹管文が列状に施されている。289・291は同一個体の可能性がある資料で、口径の大きな土師器の口縁部片であることから、大型高坏の可能性が考えられる。口縁端部内面にナデによる弱い凹みは認められ、激しく摩擦しているが内外面に縦方向のミガキが施されている。290は土師器甕の口縁部片で、器厚4mm程度と非常に薄く、口縁端部は丸く収めている。外面はタテハケの後に強いヨコナデを施しているようで、内面の一部には黒斑が認められる。292は土師器の把手片で、把手の下半を欠損しているが、横断面が楕円形を呈するものと思われる。把手上面に刻みなどはなく、体部に粘土塊を貼り付けて製作している。体部外面にはタテハケが施される。

293 は土師器の底部片で、尖底状を呈する。外面には細かなハケメが残り、内面はユビオサエの跡やシボリのような皺が確認できる。294 は弥生土器甕の底部片で、外面にタタキ、内面には細かな単位のハケメが認められる。295 は土師器小型丸底壺で、口縁部は完周しているが、体部は径の3分の1程度が残存している。全体的に器壁が薄く、口縁部はその中位の厚みが最も大きくなっている。きめの細かい胎土が用いられ、外面には体部中位まで横方向のケズリ、体部上方から口縁部まで横方向のミガキを施す。内面の調整は摩耗のため判然としない。

296 は第1遺構面 SP5 の埋土から出土した弥生土器甕の破片である。摩耗のため調整は不明瞭であるものの、外面調整として体部上半にタタキ、頸部にハケの痕跡が認められる。

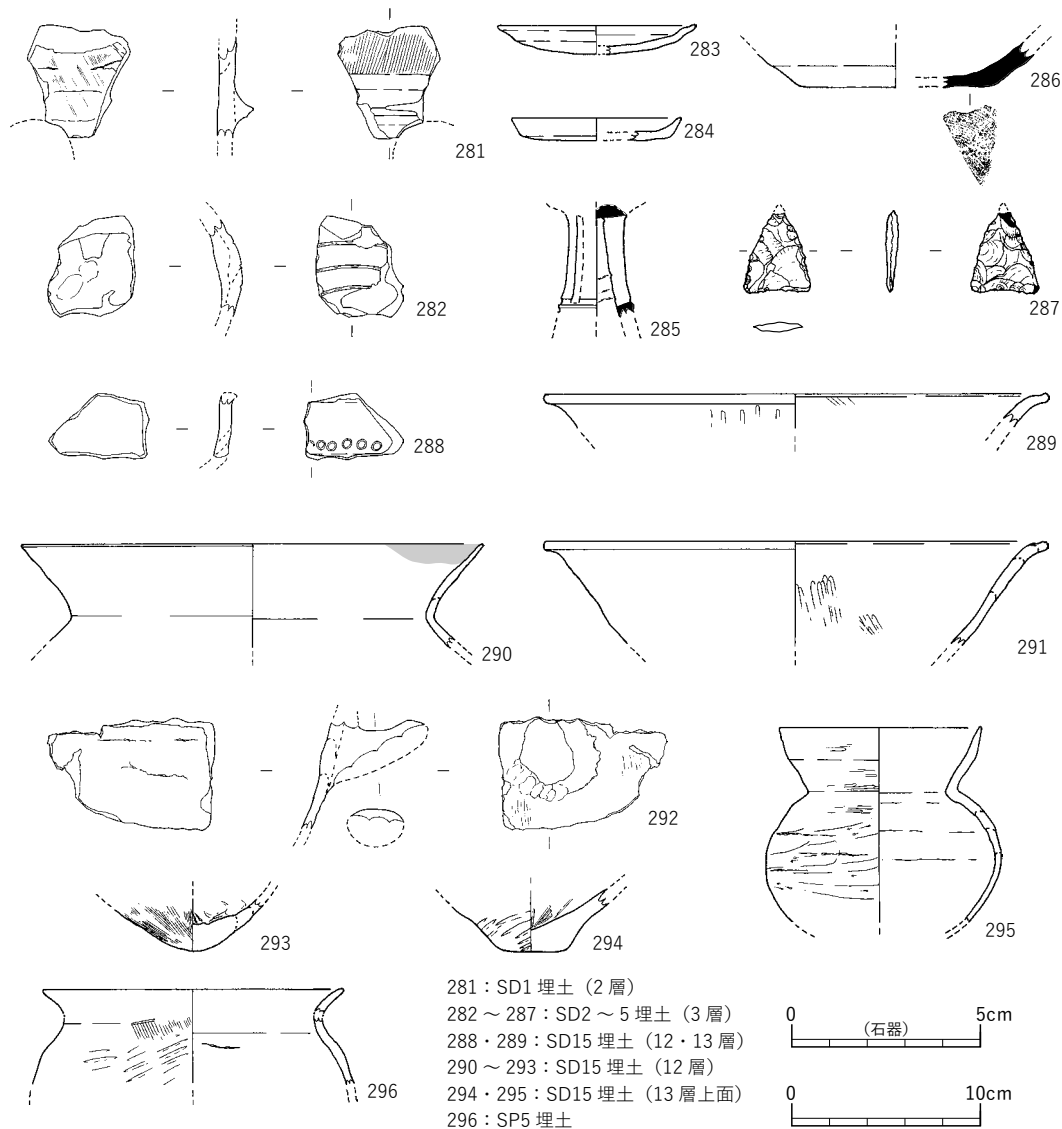


図 55 11 トレンチ出土遺物実測図

(7) 8トレンチ (図56・57)

位置 南墳丘の南東側、墳丘を一部削平して作られた耕作地の西側に、墳端に関わる遺構の存否確認を目的に8トレンチを設定した。トレンチの大きさは長さ13.6m、幅2.0mで、トレンチ南端東壁側のみ、幅40cmで南に2.0mほど拡張した。

土層の状況 I層である黒褐色極細砂(1層)の下は、細かく分層はできるものの基本的には褐色中砂～極細砂を主体とする耕作に伴う攪乱土であり、その下でV層である白・褐色極細砂(17層)を検出した。

周辺地形をみてもわかるように、8トレンチの位置は、南側墳丘の南東端を大きく削平して作り出された平坦面であり、遺構は残存しておらず、古墳に伴うような痕跡は確認できなかった。

9トレンチで検出した隍の西側の延長が8トレンチで検出される可能性があったが、そういった痕跡は南側へ拡張した部分も含め検出することはできなかった。このことは、9トレンチで検出した隍が、8トレンチのある西側へ向かって旧地形の傾斜に合わせて隍底の標高を上げていく構造であったために、

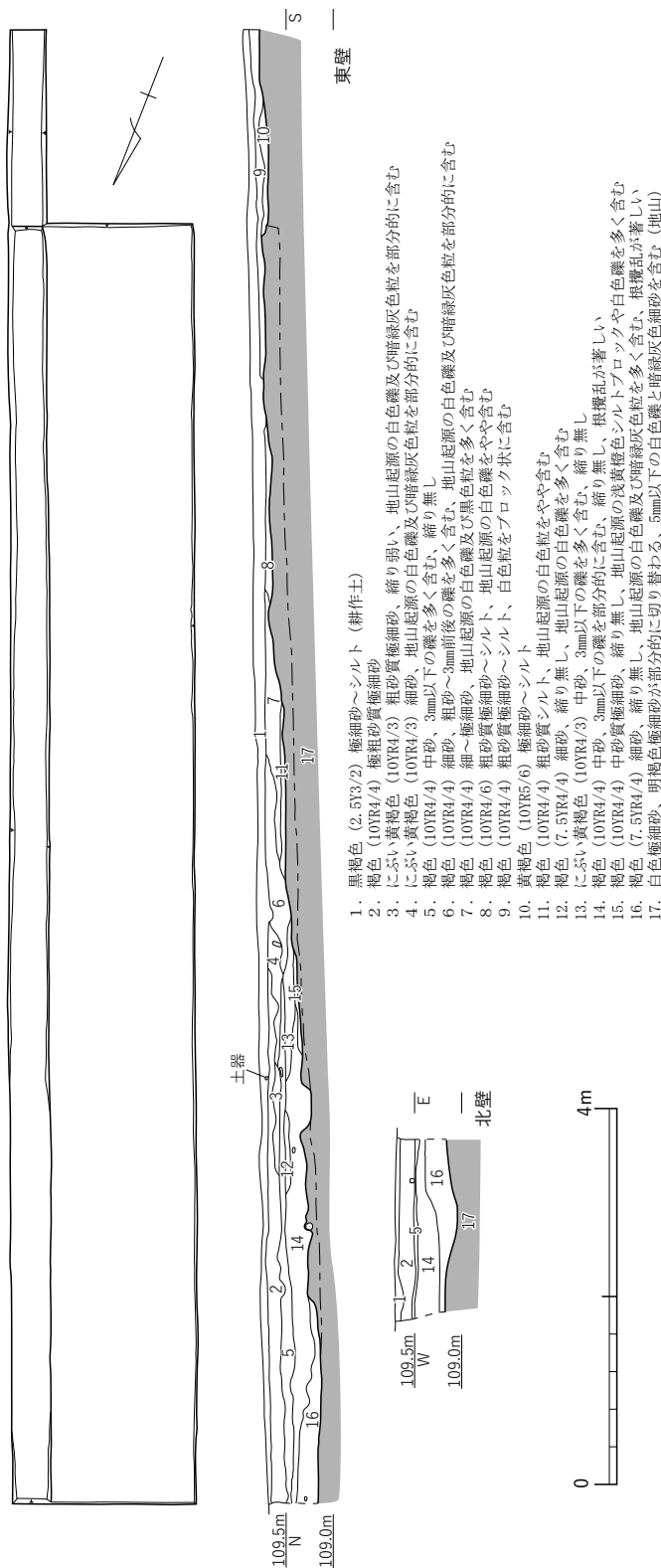


図56 8トレンチ平面・土層断面図

8トレンチの地点では耕作地拡張時の削平が本来あった陸底の高さよりも低い位置まで及んだことで、この範囲での陸が全て失われてしまったことを示していると考えられる。

攪乱を激しく受けているため、本トレンチにおけるV層上面の高さは大きな意味をもつものではないが、最も高い南側で標高 109.8 m、最も低い北側で 109.2 m であった。

出土遺物(図 57) 8トレンチでは、I層より土師器、陶磁器、埴輪、瓦の小片が出土したのみであった。唯一図化できた 297 は、埴輪の突帯片で、やや丸みを帯びた断面台形状のものである。調整は内外ともにナデのみしか確認できないが、突帯の上下にはヨコナデの移動単位と思われるユビオサエ状の凹みが観察できる。



図 57 8トレンチ出土遺物実測図

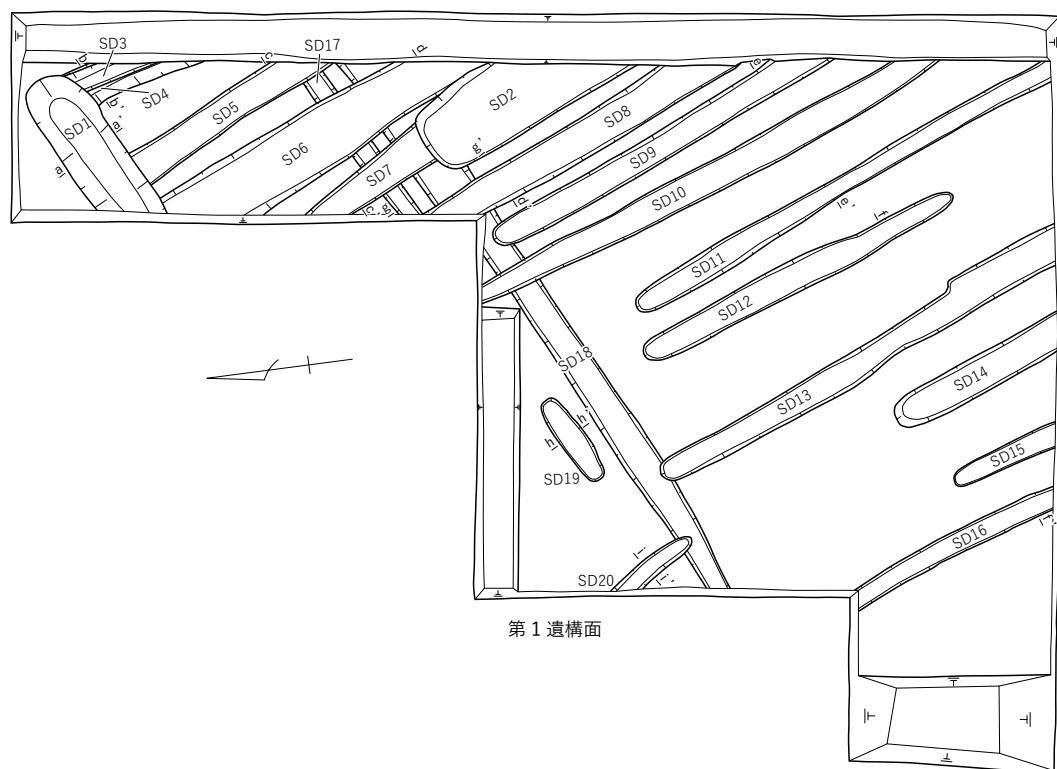
(8) 3トレンチ (図 58～61)

位置 東西市道を挟んでさらに南側に設定した。調査当初は、この市道を挟んだ南側尾根にある盛り上がった部分が、條ウル神古墳の墳丘の名残である可能性が考えられたため、それに伴う痕跡の有無を確認するために設定したものである。調査当初は長さ 8.4 m、幅 1.6 m の大きさで設定したが、調査の進捗に伴って適宜拡張を行い、最終的に南辺が 6 m となる階段状のトレンチとなった。

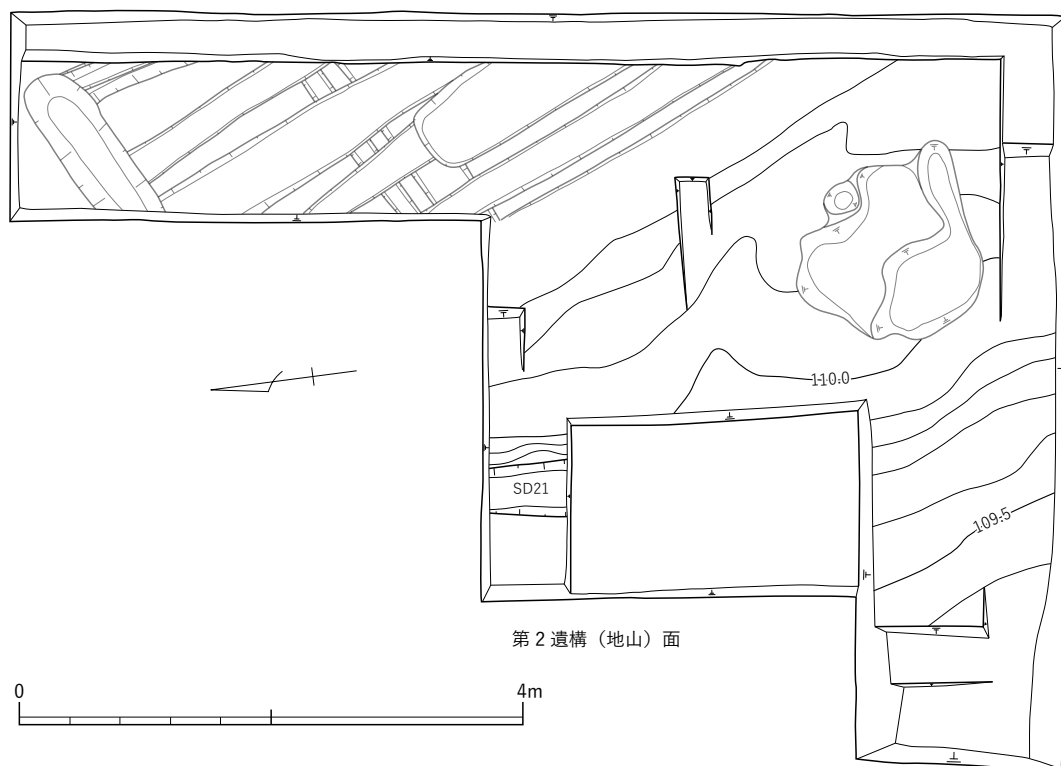
土層の状況 I層である黒褐色極細砂(1層)を除去した時点で、第1遺構面を検出した。第1遺構面の基盤層は、トレンチの東半ではV層である灰白色細砂(13層)であるが、西半ではII層と考えられるにぶい黄褐色細砂(9層)であった。9層の下には、非常に均質で厚みのある褐色細砂(10層)、オリーブ褐色極細砂(11層)が堆積しており、これらも9層とともにII層を構成する土層と考えられる。これらII層からは中世を中心とする土器片が多く出土しており、その時期以降になされた耕地拡大を目的とする盛土と考えられよう。II層を除去すると全体でV層が検出でき、東から西に向かって緩やかに傾斜していく状況が確認できた。トレンチの南東隅では、明黄褐色シルト(12層)がV層上に認められたが、その性格は判然としない。

第1遺構面 南北方向16条(SD2～16・20)、東西方向4条(SD1・17～19)の素掘溝を検出した。これらは切り合い関係から3段階に分けることができ、SD17～19が最も古く、次にSD3～16があり、幅が50～60cmと他のものに比べて広いSD1・2が最も新しい段階である。これら素掘溝は埋土からの出土遺物が少なく時期の比定が難しいが、基盤層である9層に含まれる遺物には、中世の羽釜や瓦器などが含まれていることから、少なくとも中世以降のものと考えられる。

第2遺構(地山)面 南北方向の素掘溝1条(SD21)を検出した。SD21は、拡張したトレンチ北西部で検出した素掘溝で、東側は地山の傾斜があり、SD21を挟んで西側は平坦面になっている(図版35-2)。この溝自体はトレンチ南辺まで続いておらず、溝の西側にある平坦面もトレンチ南辺では確認できない。埋土が9層であることを踏まえると、現状の地割りになる前は3トレンチ設定場所も複数段の田畑となっており、その斜面下に設けられた排水溝と考えられよう。そして6



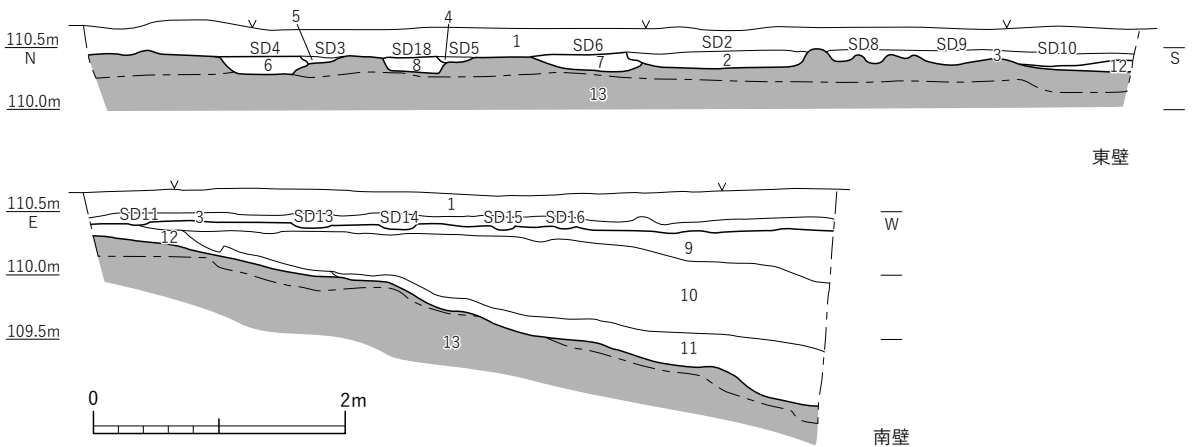
第1遺構面



第2遺構(地山)面



図 58 3 トレンチ平面図



- | | |
|--|------------------------------------|
| 1. 黒褐色 (2.5YR3/2) 極細砂 (表土) | 8. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細～極細砂 (SD18埋土) |
| 2. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂質極細砂 (SD2埋土) | 9. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂 |
| 3. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂 (SD8～11、13～16埋土) | 10. 褐色 (10YR4/4) 細～極細砂 |
| 4. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細～極細砂 (SD5埋土) | 11. オリーブ褐色 (2.5YR4/4) 極細砂～シルト |
| 5. 褐色 (10YR4/4) 細～極細砂 (SD3埋土) | 12. 明黄褐色 (10YR6/6) シルト |
| 6. 褐色 (10YR4/4) 細砂 (SD4埋土) | 13. 灰白色 (5YR8/1) 細砂、黒色粒を含む (地山) |
| 7. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細砂質極細砂 (SD6埋土) | |

図 59 3 トレンチ土層断面図

トレンチなどと同様に、中世遺構の大規模な盛土により、耕地の拡大が行われたものと考えられる。

地山面については、トレンチ東半では平坦面を形成しており、II層の盛土の時点には既に削平を受けていたと考えられるが、トレンチの西半で検出した地山の傾斜面はある程度旧地形を反映している可能性が高い。條ウル神古墳の墳丘を、3 トレンチの東側にある尾根上のやや盛り上がった部分に想定した場合、この傾斜面が南東から北西に向かって伸びている状況は横穴式石室の位置や他トレンチの成果と整合的とは言えない。6 トレンチなどで検出している墳丘盛土のような土層がトレンチ内で全く確認できないことも合わせて考えると、條ウル神古墳が南側に続く尾根上にまで墳丘をのぼしていた可能性は低いものと考えられ、3 トレンチで検出したこの地山の傾斜面は、南の巨勢山丘陵から伸びる自然地形の尾根を反映したものと判断できる。削平を受けた地山面の標高は110.5 m前後であり、トレンチ南西部の最も低い地山検出部の標高は109.0 mであった。

出土遺物 (図 61) 出土遺物の大半はI・II層より出土した器種不明の土器小片であるが、II層からは他にも埴輪・須恵器・瓦器・陶磁器・サヌカイトの小片が出土している。

298～300は、それぞれ出土層位が異なる土器器羽釜の破片である。298・299は、外上方に短く伸びる鏝部から直立ないしはやや内傾する口縁部がつく形状で、299については口縁端部内面に小さな凹みが認められる。300は上記2つとやや異なる断面三角形の鏝部をもつ。いずれも鏝部の下面に煤の付着が認められる。301は、大和型瓦器碗の破片で、内面には幅1.0～1.5mm弱ほどの水平方向の粗いミガキが全体に確認できるのに対し、外面は部分的にしかミガキが確認できず、ユビオサエの跡が下半に認められる。これらは概ね12世紀後半頃のものと考えられ、II層の形成年代の一端を示していると考えられる。

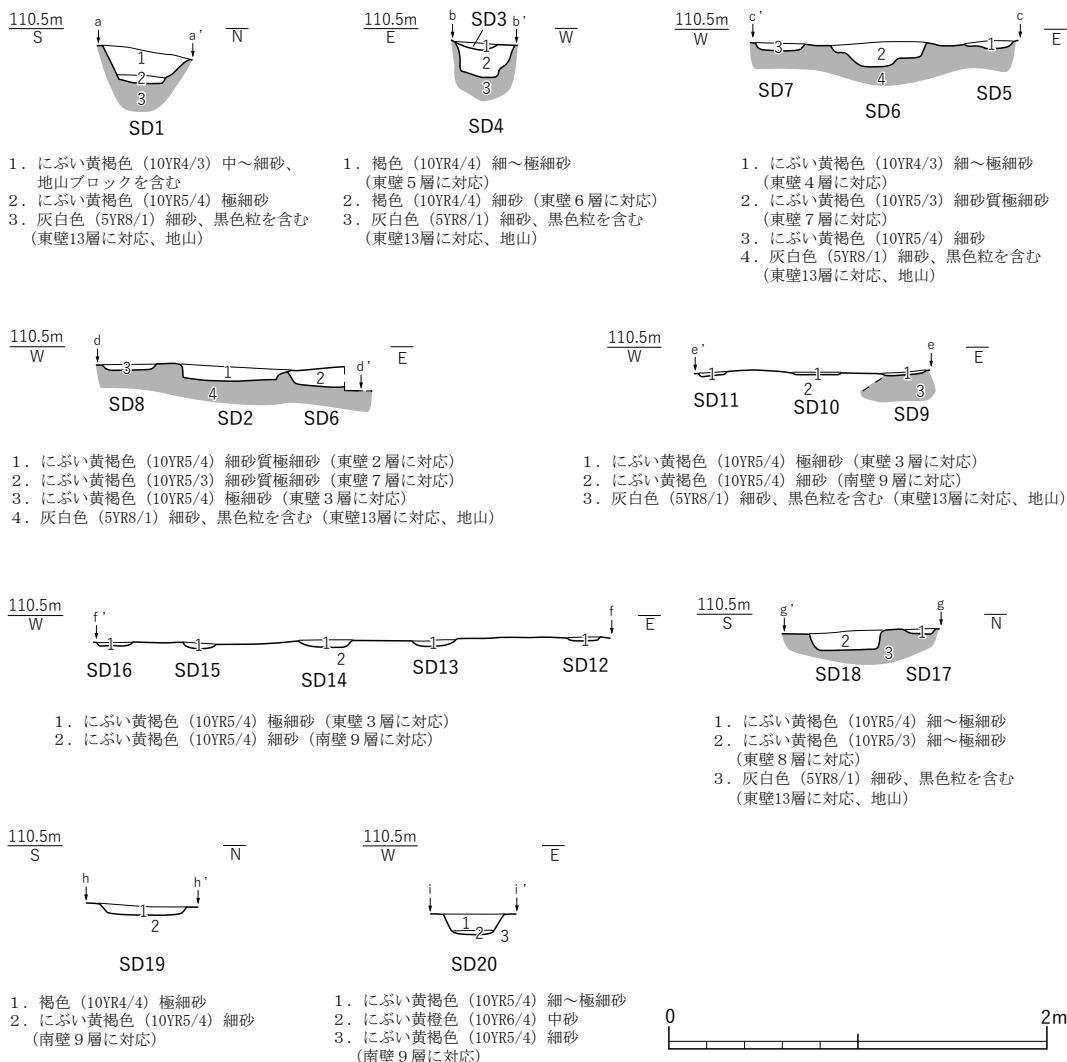


図 60 3 トレンチ第1遺構面 遺構断面図

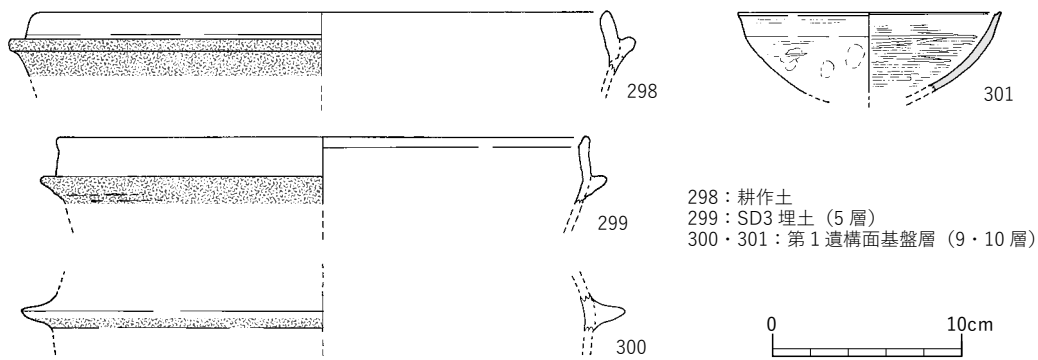


図 61 3 トレンチ出土遺物実測図

(9) 4トレンチ (図62・63)

位置 南墳丘の西下段南側に、墳丘西側の墳端に関わる情報を得ることを目的に、4トレンチを設定した。この平坦面は現在柿畑として利用されている。トレンチの大きさは長さ6.5m、幅1.7mである。

土層の状況 I層である黒色細砂(1層)の下には、にぶい黄褐色極細砂(2層)がトレンチ全体で検出された。2層を除去すると、トレンチ東半ではV層の褐色細砂(6層)がほぼ平坦面として検出でき、トレンチ西半では褐色系極細砂層がいずれも上面がほぼ平らな状態で堆積していた(3・4層)。その下で検出した5層の褐色細砂は、根で攪乱されたV層とみられ、その下に東半で検出したV層(6層)が確認できた。

出土遺物が少ないが、4層から瓦器碗の破片が出土しているため、4層より上位の土層は中世以降のII層と考えられる。V層はトレンチの東から西に向かって緩やかに傾斜し、トレンチ西端より2mほどのところからやや傾斜が強くなっている。4トレンチを設定した平坦面が古墳の段築を反映している可能性も想定されたが、地山面直上の堆積土である4層に瓦器が含まれるうえに、古墳に伴う遺物の出土も無いため、今回検出した地山面も基本的には既に削平を受けているものと考えられる。トレンチ東端の地山面の標高は112.42m、西端は111.58mである。

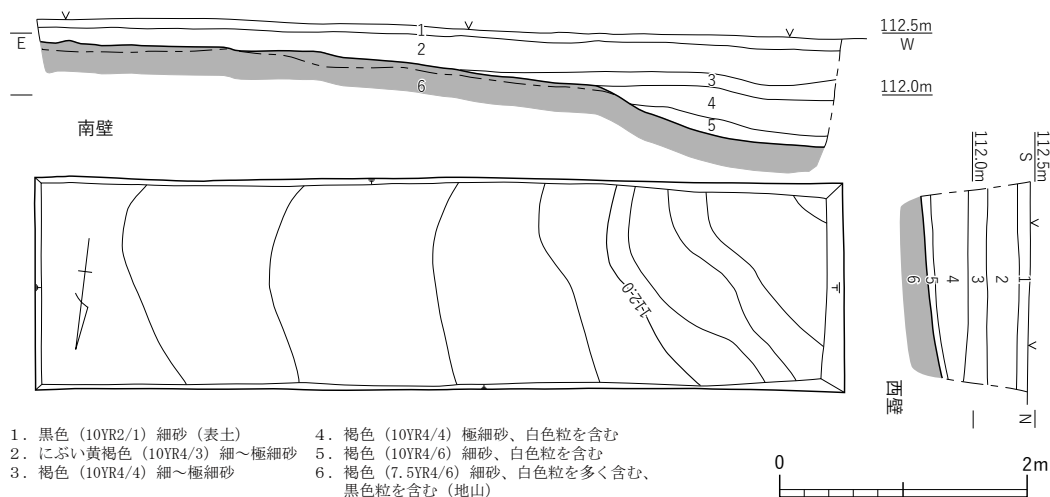


図62 4トレンチ平面・土層断面図

出土遺物 (図63) 4トレンチの出土遺物は、II層である4層から出土した土師器と瓦器の小片のみである。302は瓦器碗の底部片で、断面台形状の貼り付け高台が付き、見込み部には同心円状ないしは渦巻き状暗文の一部が認められる。他のトレンチと同様、12世紀後半頃の資料と思われる。

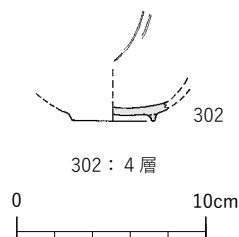


図63 4トレンチ出土遺物実測図

(10) 12 トレンチ (図 64)

位置 南墳丘の西上段中央部から頂部を跨いでさらに東上段へ向けて、墳丘盛土の範囲や墳端に関わる遺構の確認および北墳丘と南墳丘間の状況を確認する目的で、19.6 m × 1.0 m のトレンチを設定した。

土層の状況 I層が厚みをもって堆積しており、にぶい黄褐色極細砂層(1層)を除去すると、トレンチ全体に根攪乱土である2層を検出した。2層を除去すると、西上段ではすぐにV層である浅黄橙色シルト(42層)が確認でき、頂部および東上段については墳丘盛土であるIII層(5～41層)が検出された。頂部と西上段の境界部には、5トレンチ延長部同様溝状の掘り込みが認められたが、土層の切り合いや埋土からの出土遺物をみても近現代の耕作に伴う排水用の溝と判断できる。

墳丘盛土 12トレンチで検出した墳丘盛土は、狭小なサブトレンチ内で確認したこともあり、認識できた単位は6トレンチや9トレンチで検出したものに比して大きな単位になっている。本トレンチでは平面検出に留まっている土層も多く、構築過程を推量するには情報量が少ないと言わざるを得ないが、強いてその傾向を述べるならば、頂部の東端に土手状を呈すると思われる盛土が認められ(26・27層)、5～25層は概ねその土手側に向かって傾斜する形で堆積していることから、6トレンチなどで検出した盛土と同様の構築順序である可能性を指摘できる。本トレンチで検出した盛土の高さをみると、頂部で114.8 mとなり、東上段で概ね113.9 mを測る。

地山面 V層は、西上段では削平の影響か平坦な状況を呈し、頂部に至るところで80cm強の段を形成している。この段の付近では墳丘盛土のような土層は確認できておらず、この段が古墳築造時の造作である可能性は低いものと思われる。そして段を上がった頂部の西端が、本トレンチにおける地山の最高点になり、そこから東に向かって緩やかに傾斜していく様相が確認できた。しかし、狭小なサブトレンチ内での確認であったため、東上段へ向かってそのままの角度で地山が傾斜していくかどうかは確認するに至らなかった。西上段で検出したV層の標高は113.2～113.7 m、頂部のV層は最も高い西端で114.46 mを測り、サブトレンチ内で確認できた最も東側では114.32 mであった。

12トレンチは、今回北墳丘とした横穴式石室を内包する墳丘と、南墳丘としたその南側に連なる墳丘のちょうど中間地点に位置するが、この地点で両者を区画するような溝状の遺構などは確認できず、むしろ両者を跨ぐような墳丘盛土を検出した。トレンチの幅は狭いものの、この点を積極的に評価するならば、北墳丘と南墳丘は一連の古墳である可能性が高いと考えられる。なお、本トレンチの範囲内において、墳端を示すような遺構の存在を確認することはできなかった。

出土遺物 本トレンチで出土した遺物は非常に少なく、I層から土師器、埴輪、瓦、サヌカイトの小片、III層からは埴輪およびサヌカイトの小片が出土しているが、図化できるような資料は認められなかった。

(11) 13 トレンチ (図 65 ～ 69)

位 置 南墳丘の西上段南端から頂部を跨いでさらに東上段へ向けて、墳丘盛土の範囲や墳端に関わる遺構の確認を目的として、19.4 m × 1.0 m のトレンチを設定した。

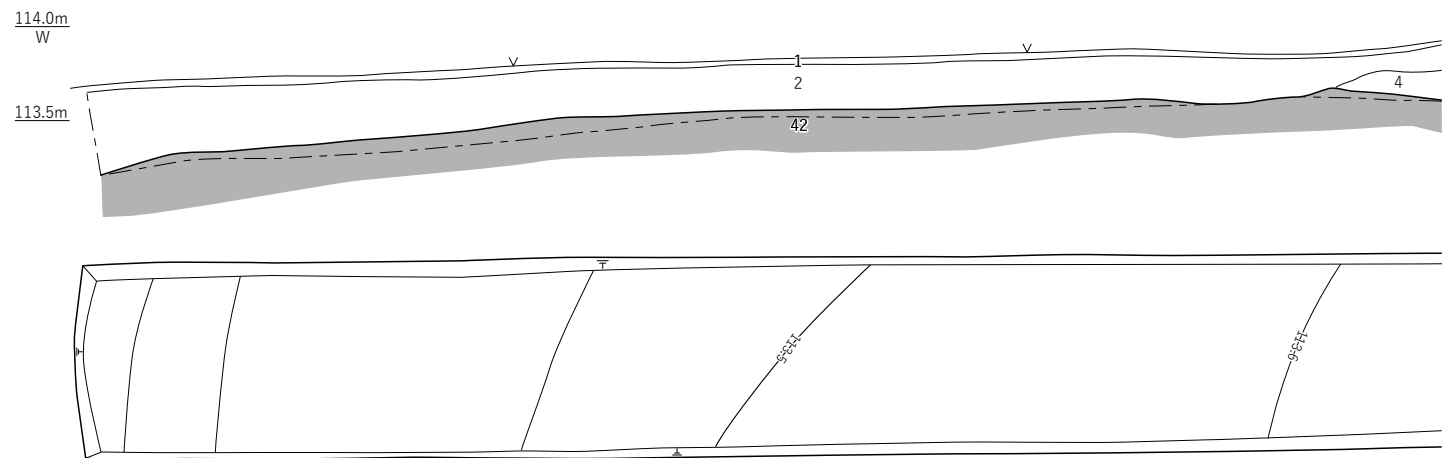
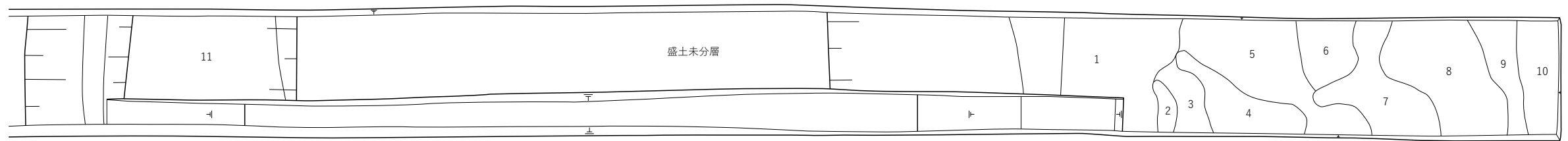
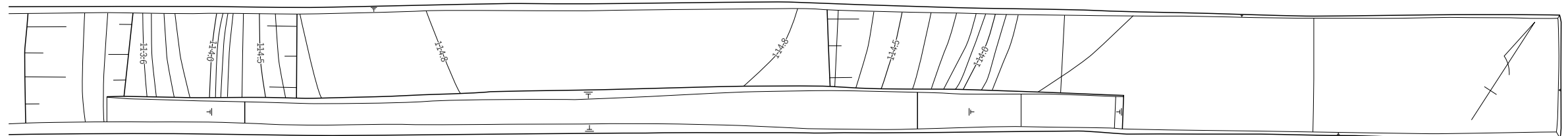
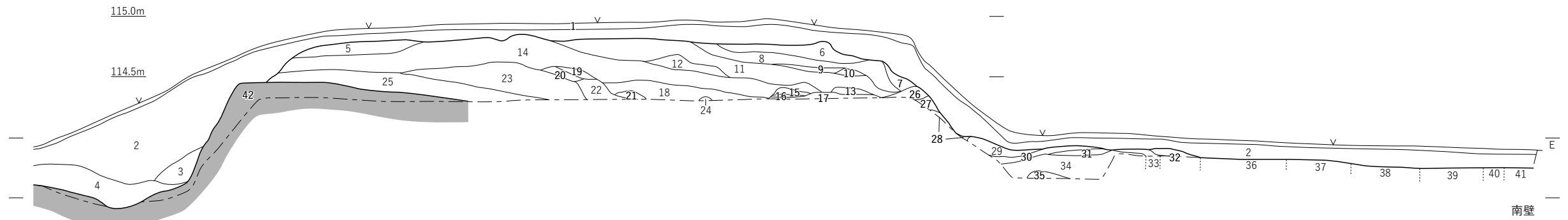
土層の状況 I 層である黒褐色極細砂 (1 ～ 3 層) を除去すると、西上段では全面で V 層である灰白色極細砂 (49 層) が検出され、頂部および東上段東半については III 層 (13 ～ 48 層) が検出された。東上段東端には III 層とは若干土質が異なる堆積土が認められ (11・12 層)、12 層中には瓦の破片が含まれていた。現状では II 層の性格を考えておきたい。

頂部と両上段の境界部には、他トレンチ同様溝状の掘り込みが認められたが、土層の切り合いや埋土からの出土遺物をみても近現代の耕作に伴う排水用の溝と判断できる。また、東上段の西端より東に 5 m 強の範囲にかけて、深さ 1.7 m 以上の落ち込みを検出した。

墳丘盛土 13 トレンチで検出した墳丘盛土についても、12 トレンチと同様に狭小なトレンチでの確認であるため、細かな構築過程を検討することは難しい。その上で盛土の様相を確認すると、13 トレンチについては、他トレンチで認識した土手状の盛土はそれほど明確ではないが、頂部及び東上段東半部どちらにおいても、東側に盛りあげた土に被せるように西側から盛土を行っている様相が認められ、外から内という盛土の流れは他トレンチと共通しているように見受けられる。頂部における墳丘盛土上面の標高は 114.74 m、東上段東半で検出した墳丘盛土上面の標高は 112.74 m であった。

東上段の落ち込み 上述の通り東上段において検出長 5.2 m の落ち込みを検出した。狭小なトレンチ調査のため、落ち込みの底を検出するには至らなかったが、掘削を行った深さ約 1.7 m の範囲では、概ね埋土を 4 つの層に分けることができた (7 ～ 10 層)。各層の土質は若干異なるものの、含まれる遺物としては、高坏や器台といった須恵器片、円筒埴輪片、近世以降の瓦・磁器片で共通している。加えて各層には、砕かれた流紋岩質火山礫凝灰岩や石英閃緑岩、花崗閃緑岩が多数含まれていた (石材の詳細については第 5 章第 1 節参照)。出土状況としては、落ち込み内全体に等質的な分布をするわけではなく、集中して分布する地点が平面的にも立面的にも散在するといったものであった。凝灰岩片の一部には、明瞭な加工面が認められ、さらにその中には赤色顔料の付着が認められるものも存在した。石英閃緑岩はその全てが割石片で、花崗閃緑岩は表面が滑らかな川原石様のものである。掘削底の標高は 111.06 m であった。

以上の状況から、この落ち込みは、横穴式石室といった埋葬施設の痕跡である可能性が高いと考えられ、石材の出土状況は、石室の大半が近世以降の石材抜き取りなどによって荒らされている状態を示していると考えられる。そのような目で、改めて周辺地形を観察すると、東上段の 12 トレンチと 13 トレンチの間には 80cm 程度の段差があり、13 トレンチ側が低くなっている。そしてこの段差は西側の頂部を挟むように南側へと続いている。範囲確認調査を実施するまでは、耕地造成のために削り取られた痕跡かと考えていたが、この段差全体が埋葬施設の陥没などによって形成され



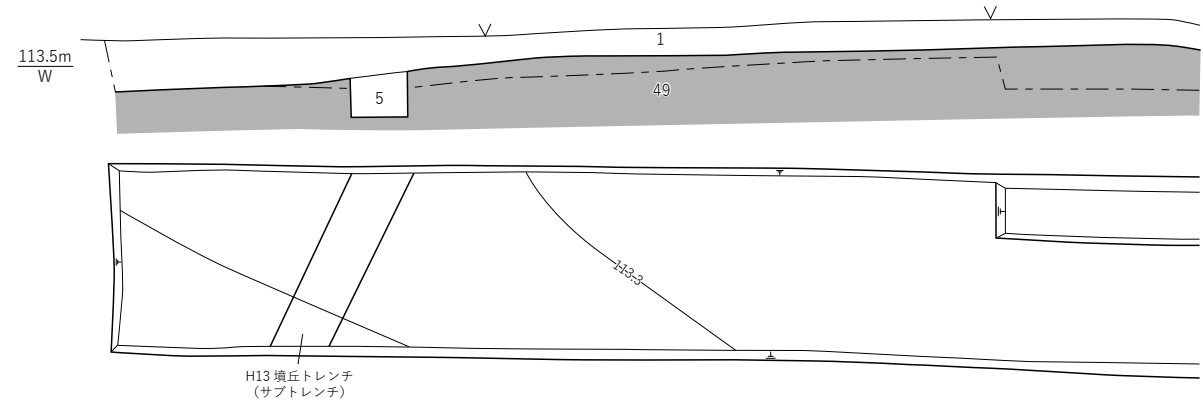
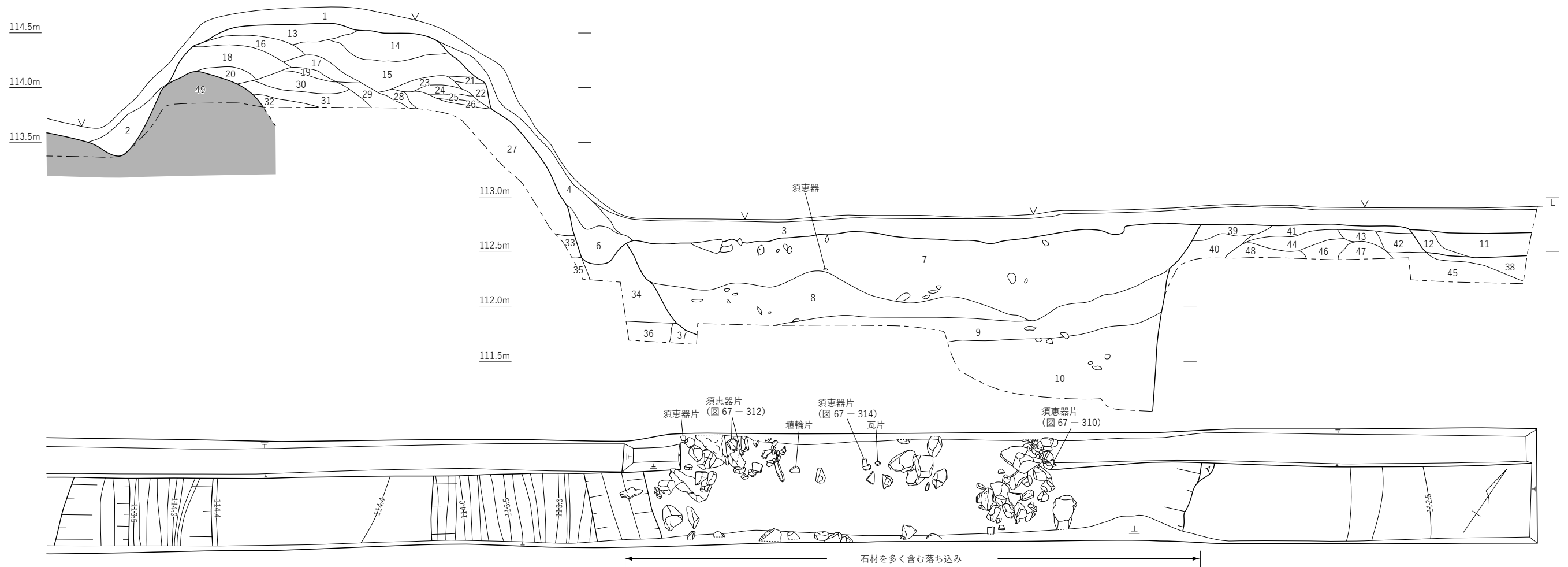
平面土層注記

- | | |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、白色粒を5%含む (南壁 34層に対応) 2. 明褐色 (7.5YR5/6) 極細砂～シルト、締り強い (南壁 33層に対応) 3. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 極細砂～シルト、締り強い、褐色シルトを部分的に含む (南壁 32層に対応) 4. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細砂～シルト、締り強い (南壁 36層に対応) 5. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細砂、締り強い、白色粒を3%含む (南壁 37層に対応) 6. 黄褐色 (10YR5/6) 細砂、締り弱い、白色粒を5%含む | <ol style="list-style-type: none"> 7. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、締り強い、白色粒を2%含む (根の影響が大きい) (南壁 38層に対応) 8. 明黄褐色 (10YR6/6) 極細砂、締り強い、白色粒を5%含む (南壁 39層に対応) 9. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細砂～シルト、締り強い (南壁 40層に対応) 10. 明黄褐色 (10YR6/6) 極細砂、締り強い、白色粒を3%含む (南壁 41層に対応) 11. 浅黄褐色 (10YR8/3) シルト、8mm前後の白礫を5%含む (地山) (南壁 42層に対応) |
|---|--|

1. 黒褐色 (10YR3/2) 極細砂、締り弱い (表土)
2. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細砂、表土下の攪乱層
3. 黄褐色 (10YR5/6) 細～極細砂、締り弱い、白色粒を5%含む (根の影響が大きい)
4. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細砂、締り弱い (根攪乱)
5. 明黄褐色 (10YR6/6) 極細砂、締り強い、白色粒を1%含む
6. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細砂 (根の影響が大きい)
7. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂～シルト、締り強い (根の影響が大きい)
8. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細砂質シルト、6cm前後の白色ブロックを2%含む
9. にぶい黄褐色 (10YR5/3) シルト、締り強い
10. 明黄褐色 (10YR6/6) 極細砂、締り強い、3mmの礫を2%含む
11. 明黄褐色 (10YR6/6) シルト、白色粒を3%含む
12. 黄褐色 (10YR5/6) シルト、締り強い
13. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト、締り強い
14. 明黄褐色 (10YR6/6) 極細砂～シルト、締り強い、白色粒を3%含む、3cm前後の白色・明黄褐色ブロックを2%含む
15. にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト、締り強い
16. 灰黄褐色 (10YR5/2) シルト、締り強い
17. 黄褐色 (10YR5/6) 極細砂～シルト、締り強い
18. にぶい黄褐色 (10YR6/4) シルト、締り強い、3mm前後の礫を2%含む、5cm強の白色ブロックを2%含む
19. 黄褐色 (10YR5/6) シルト、締り強い
20. 褐色 (10YR4/4) シルト、締り強い
21. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粗砂質粘土
22. 黄褐色 (10YR5/6) 極細砂～シルト、締り強い、10cm前後の白色ブロックを10%含む
23. 黄褐色 (10YR5/6) 極細砂～シルト、締り強い、白色粒を2%含む、3cm前後の白色ブロックを1%含む
24. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 極粗砂質シルト
25. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、締り強い、白色粒を3%含む
26. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極粗砂質極細砂、締り強い
27. 黄褐色 (10YR5/6) 極細砂、締り強い、白色粒を1%含む
28. 褐灰色 (10YR5/1) 極細砂～シルト、締り強い
29. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、締り強い
30. 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘土、締り強い
31. 明褐色 (7.5YR5/8) シルト、締り強い
32. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 極細砂～シルト、締り強い、褐色シルトを部分的に含む
33. 明褐色 (7.5YR5/6) 極細砂～シルト、締り強い
34. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、白色粒を5%含む
35. 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘土、締り強い
36. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細砂～シルト、締り強い
37. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細砂、締り強い、白色粒を3%含む
38. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、締り強い、白色粒を2%含む (根の影響が大きい)
39. 明黄褐色 (10YR6/6) 極細砂、締り強い、白色粒を5%含む
40. 灰黄褐色 (10YR5/2) 極細砂～シルト、締り強い
41. 明黄褐色 (10YR6/6) 極細砂、締り強い、白色粒を3%含む
42. 浅黄褐色 (10YR8/3) シルト、8mm前後の白礫を5%含む (地山)



図 64 12 トレンチ平面・土層断面図



1. 黒褐色 (10YR3/2) 極細砂、締り弱い (表土)
2. 黄褐色 (10YR5/6) 細～極細砂 (表土下の攪乱層)
3. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 極細砂 (耕土)
4. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂 (表土下の攪乱層)
5. 褐色 (10YR4/4) 細砂、締り弱い (H13 墳丘 tr 埋土)
6. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂
7. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細砂、明黄褐色土を 7%、黄褐色粘土を 3% 含む
8. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細砂、7 層と基質は同じだが明黄褐色土や粘土が入らない
9. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粗砂質細砂、やや締り弱い、黄褐色粘土を 3% 含む
10. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中粗砂質シルト
11. オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 極細砂、白色粒を 1% 含む
12. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、締り強い
13. 明黄褐色 (10YR6/6) 極細砂、締り強い、黒色粒を 3% 含む
14. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、締り強い、白色粒を 1%、3～5cm の白色ブロックを 1% 含む
15. 褐色 (10YR4/4) 極細砂、締り強い、白色粒を 5% 含む
16. 明黄褐色 (10YR6/6) 極細砂、締り強い、黒色粒を 3% 含む
17. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂～シルト、締り強い、白色粒を 1% 含む
18. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、締り強い、白色粒を 3% 含む
19. にぶい黄色 (2.5Y6/4) シルト、締り強い
20. 明黄褐色 (10YR6/6) シルト、締り強い、白色粒を 1% 含む
21. にぶい黄褐 (10YR5/4) シルト～粘土
22. 褐色 (10YR4/4) 極細砂～シルト
23. にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト、締り強い
24. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 極細砂～シルト、締り強い
25. 黄褐色 (10YR5/6) 極細砂、締り強い
26. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂～シルト、締り強い
27. 黄褐色 (10YR5/6) 極細砂、締り強い、白色粒を 2% 含む (根の影響で分層が難しい)
28. 明黄褐色 (10YR6/6) シルト、締り強い
29. 褐色 (10YR4/4) シルト、締り強い、白色粒を 1% 含む
30. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂、締り強い、白色粒を 2% 含む
31. 黄褐色 (10YR5/6) 極細砂、白色粒を 2%、4cm 前後の明黄褐ブロックを 2% 含む
32. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂～シルト、締り強い
33. 明黄褐色 (10YR6/6) 粘土、締り強い
34. 明黄褐色 (10YR6/6) シルト、褐灰色土を 5%、白色粒を 3% 含む
35. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂～シルト、2cm 弱の白色シルトブロックを 3% 含む
36. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂～シルト、15cm 程度の灰白色土をブロック状に含む (34 層と同一層の可能性あり)
37. 灰白色 (5Y7/2) 極細砂～シルト (水による影響か)
38. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 極細砂、締り強い、白色粒を 2%、赤褐色粒を 1% 含む
39. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂～シルト
40. 褐色 (10YR4/4) 極細砂～シルト、白色粒を 2% 含む
41. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂～シルト、白色粒を 1% 含む
42. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 極細砂、締り強い、白色粒を 1%、赤褐色粒を 2% 含む
43. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細～極細砂、締り強い、白色・赤褐色粒を 2% 含む
44. 黄褐色 (10YR5/6) 極細砂
45. 明褐色 (7.5YR5/6) 極細砂～シルト、締り強い、白色粒を 2%、赤褐色粒を 5～7% 含む
46. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粗砂質シルト、締り強い、白色粒を 1% 含む
47. にぶい黄褐色 (10YR6/4) 細砂、締り強い、白色・赤褐色粒を 2% 含む
48. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 極細砂～シルト、白色粒を 1% 含む
49. 灰白色 (10YR8/2) 細～極細砂、締り強い、3mm 前後の礫を 20% 含む (地山)

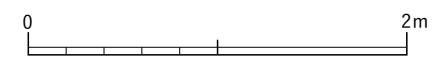


図 65 13 トレンチ平面・土層断面図

たものとも考えることも十分可能である。落ち込みの主軸方向については、現状では判然としない。

この落ち込みを埋葬施設の痕跡と考えた場合、その構築時期については、落ち込みの埋土から出土した須恵器が参考になるが、破片資料であり器種も限られるため明確ではない。現状では、3方向以上の透孔をもつ長脚二段高坏（図 67 - 314）などの存在から北墳丘の横穴式石室と近い時期の可能性を指摘できる程度である。

地山面 V層の状況は12トレンチと類似しており、西上段では削平の影響か平坦な状況を呈し、頂部に至るところで60cm弱の段を形成している。この段の付近では墳丘盛土のような土層は確認できておらず、この段が古墳築造時の造作である可能性は低いものと思われる。そして段を上がった頂部の西端が、本トレンチにおける地山の最高点になり、そこから東に向かって強い傾斜で下がっていく様相が確認できた。しかし、狭小なサブトレンチ内での確認であったため、東上段へ向かって地山がどのように傾斜していくかを確認するには至らなかった。西上段で検出したV層の標高は113.4～113.6m、頂部のV層は最も高い西端で114.16mを測り、サブトレンチ内で確認できた最も東側では113.82mであった。

出土遺物（図 66～68） I・II層からの出土遺物は、土師器・埴輪・磁器・瓦などの破片が多く、一部鉄製品の破片も含まれている。落ち込み埋土からの出土遺物についても、大きくはI・II層からの出土遺物と同様相は変わらないが、ある程度器種の特定が可能な須恵器の破片が一定量認められるのに加え、弥生土器や瓦器の破片も出土している。墳丘盛土からの出土遺物は少なかったが、埴輪や弥生土器の小片が出土している。

303～305はII層からの出土遺物である。303は直立する埴輪の底部片で、外面にタテハケ、内面にナデ・ユビオサエの痕跡が認められる。304は細長い鉄製品の破片で、断面は方形を呈する。重量は2.3gで、鉄鍔茎部の可能性が考えられる。305は丸瓦の破片で、長短辺ともにケズリによる面取りがなされている。外面は丁寧なナデが施され、内面は横方向の砂粒の動きが認められるが

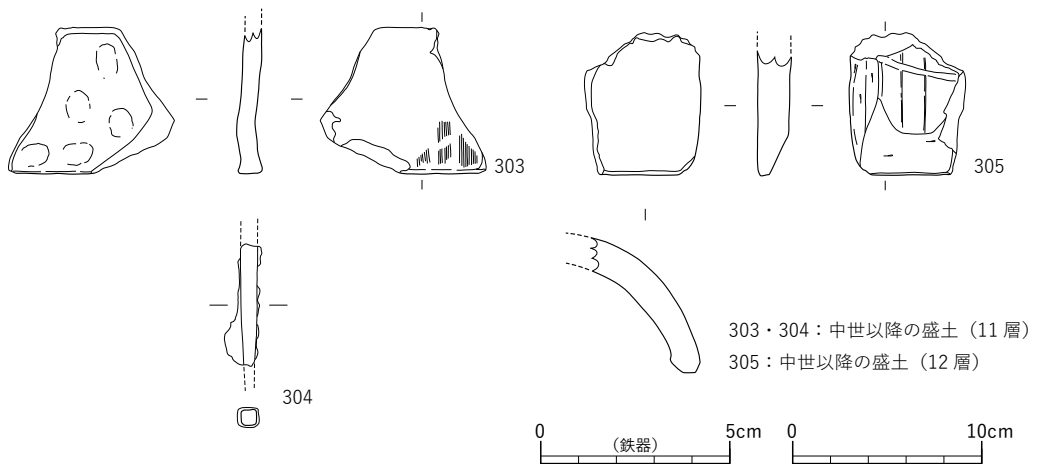


図 66 13 トレンチ出土遺物実測図（1）

単位は明瞭で無く、ケズリかナデかは判然としない。内面には加えて、工具が当たった痕跡のような縦方向の圧痕が2条確認できるが、これについてもその詳細は判然としない。

306～321は落ち込み埋土から出土した遺物である。306は瓦器碗の底部片で、断面三角形の貼り付け高台が付いている。小片のため調整等は判然としないが、見込み部に同心円状ないしは渦巻き状暗文が施される。

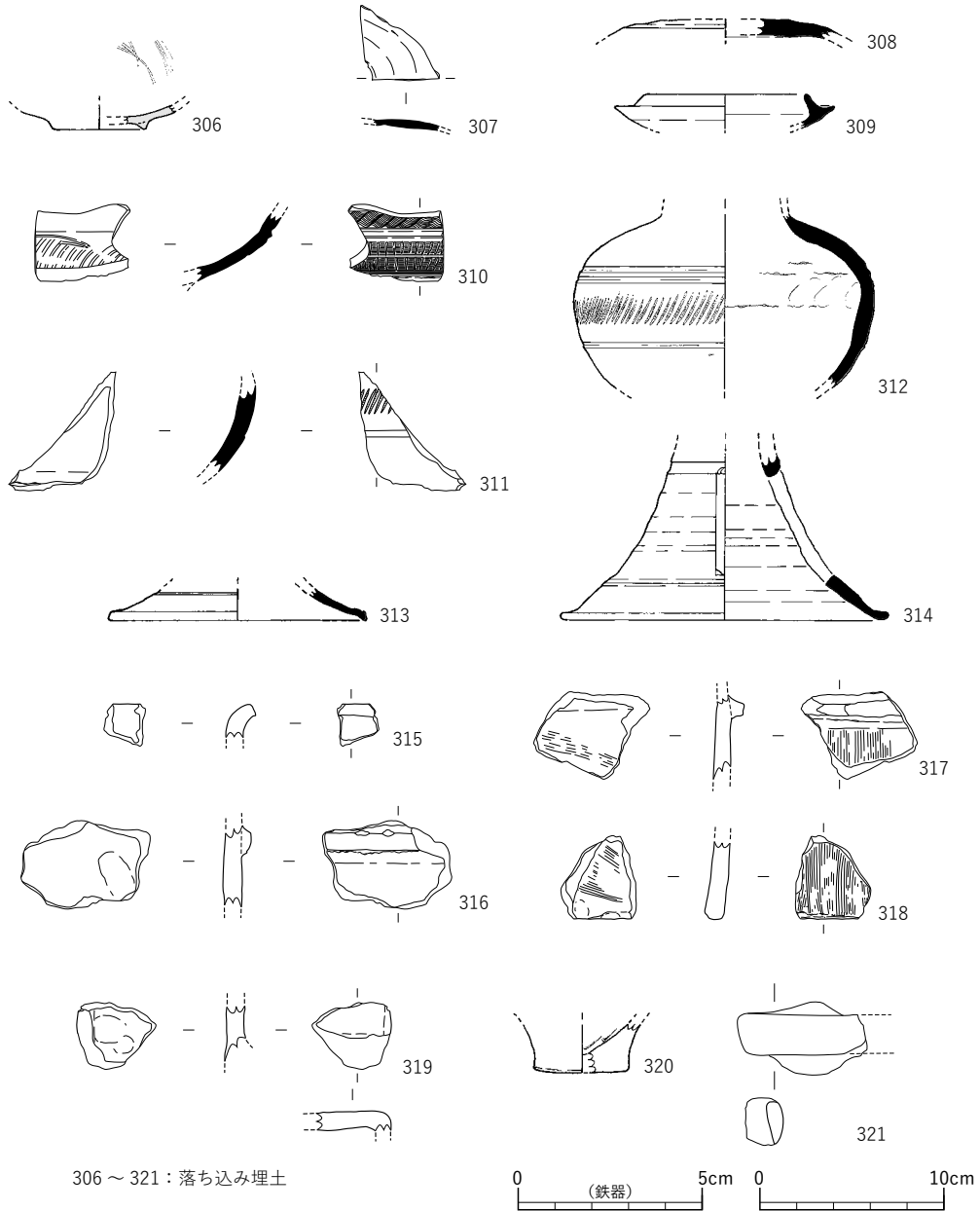


図 67 13 トレンチ出土遺物実測図 (2)

307～314は須恵器の破片資料である。307・308は坏蓋の天井部で、いずれも外面に回転ヘラケズリが施され、307はロクロ右回転、308はロクロ左回転である。器厚が大きく異なっており、308は通有の蓋坏と思われるが307は壺などの蓋である可能性もある。309は小型の坏身として図化したのが、壺蓋の可能性も考えられる。受部から突出の強い口縁部が内傾し、外面にはわずかに回転ヘラケズリの痕跡が認められるが、ロクロの回転方向は不明である。310は器壁が薄いものの器台の坏部とみられ、外面は2条の強い凹線により大きな区画を行い、その区画された領域をさらに浅い凹線で区画している。強い凹線の上部には波状文、下部にはカキメの後に櫛描列点文を2段に渡って施している。内面下半には同心円文当て具の痕跡が残り、全体に自然釉が付着している。311・312は脚台付壺の体部片で、接合はしないが同一個体の可能性が考えられる。312でその特徴をみると、外形はやや肩の張る形をしており、外面は上方を2条の凹線、下方を1条の凹線で区画し、その間に櫛描列点文を施す。内面は肩部の下にユビオサエの痕跡が連続して残っている。肩部外面には自然釉が広く付着している。313・314は高坏の脚裾部で、313は314に比べ裾の径が小さく、器壁も薄い作りである。314は外面を凹線で2段に区画し、その下段に方形の透孔をあけている。残存する2孔の透孔はほぼ直角の位置にあり、3方向以上の配置が推定できる。これら大小の脚部が、長脚高坏の蓋の有無に対応する可能性も考えられよう。

315～319は部位の特徴が残っていた埴輪の小片である。315は円筒埴輪の口縁部片で、わずかに端部だけが残存しているが、外方に屈曲させる形状である。316・317は突帯部の破片で、316は断面が低平で丸みのある台形状を呈し、317は比較的突出度の強い台形状を呈する。摩耗のため調整は317しか確認できないが、外面にはタテハケ、内面には斜め方向のハケが残っている。318は直立する底部の破片で、外面にタテハケ、内面にヨコハケが確認できる。319は小片のため明確ではないが、家形埴輪の壁体隅部の可能性がある破片である。裾廻り突帯直上の破片と思われ、内外面共に摩耗のため調整はわからない。

320は弥生土器の底部片で、外面調整は摩耗のためわからないが、底部内面にはハケ工具のあつた痕跡が確認できる。

321は刀子状鉄製品の破片である。断面形状をみると峰部と刃部が明らかに認識できる。図の右側は欠損しているが、X線透過撮影像をみると図の左側が生きているように観察でき、その場合、図の左側が先端の四角い切先と考えられる。

322～327はⅢ層から出土した遺物で、322～326は埴輪の破片である。322は口縁端部の破片で、315ほど強くはないがやや外方に屈曲させる断面形状である。323～325は体部片で、323・325ともに突帯の断面形状は突出の強い台形状を呈する。324は円形透孔の一部が残存する。調整のわかる資料をみると、外面は何れもタテハケ調整で、内面は横・斜め方向のハケ調整である。326は底部の破片で、やや外側に開いていくがほぼ直立する断面形を呈する。外面の大半が剥離しているが、残存する部分ではタテハケが確認できる。内面は底端部にユビオサエの痕跡が認められ、端部

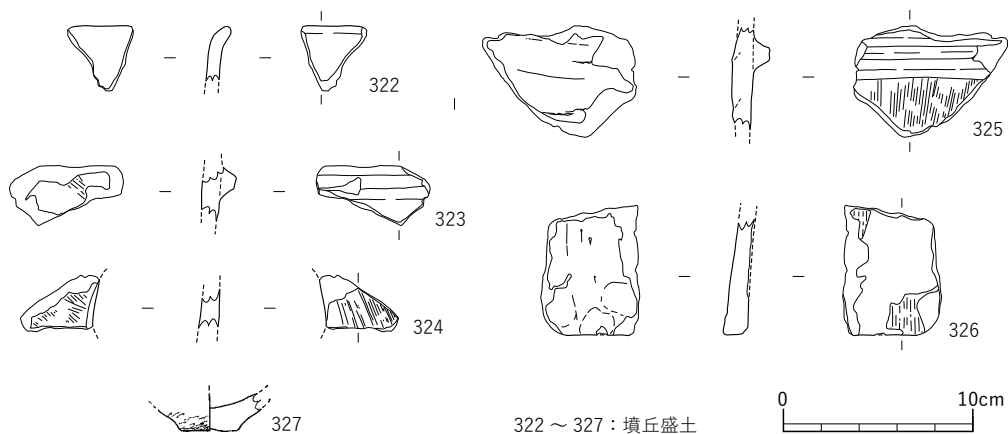


図 68 13 トレンチ出土遺物実測図 (3)

より上方には下から上へのケズリの痕跡が確認できる。327 は底面がわずかに凹む弥生土器の底部片で、外面にタタキ痕が確認できる。

出土石材 (図 69) 落ち込みの中から出土した石材は、全体で約 290 点あり、数に加えていない小片がさらに存在する。石種による内訳は、流紋岩質火山礫凝灰岩が 154 点、石英閃緑岩が 91 点、花崗閃緑岩が 29 点、アブライト質黒雲母花崗岩が 13 点、変輝緑岩が 2 点、玄武岩質凝灰岩質点紋片岩が 1 点である。

流紋岩質火山礫凝灰岩は、出土点数の約半数に及ぶ 71 点の資料で大小の加工面と思われる平坦面が確認でき、さらにその約半数である 37 点の資料で赤色顔料の付着が確認できた。詳細はわからないものの、これらは凝灰岩製石棺の破片である可能性が高い。多くは加工面が 1 面のみ確認できるものであるため、石棺のいずれの部位にあたるのかは判然とししない。しかし、328・329・333 といった資料では、鈍角に接する加工面が存在することから、これらは石棺蓋の上面であると判断でき、その特徴からは家形石棺であると考えられる。332・333 では、石材の対面に加工面が存在している。それらの面は平行しておらず、この特徴も家形石棺の蓋と考えれば理解が可能である。現状で家形石棺に伴う縄掛突起と判断できる破片は無く、全体の形状を推測することは困難であるが、最も大きな資料で計測できる寸法は、333 の長さ 51.1cm、厚さ 28cm であることから、刳抜式の石棺である可能性が強いのではないだろうか。出土資料全体での重量は、103.76kg である。

石棺の製作痕は、器表面の摩耗も多く不明瞭なものが多いが、一部の資料で鑿痕と思われる器表面の凹凸が確認でき、330 は幅 1.0cm 程の単位が、331 は幅 3.0cm 程の単位が認識できた。

石英閃緑岩は、角の取れた丸みのあるものもあるが多くは割石状を呈し、赤色顔料が付着するものがわずかに認められる。大きなもので残存長 25cm を測り、総重量は 52.79kg である。矢穴と思われる痕跡が 2 点の資料で認められた。

花崗閃緑岩は、石英閃緑岩に比べ丸みのあるものが主体を占め、赤色顔料が付着するものも認められる。大きなものは割石状のもので残存長 19.5cm、丸みのあるもので残存長 13.1cm を測る。

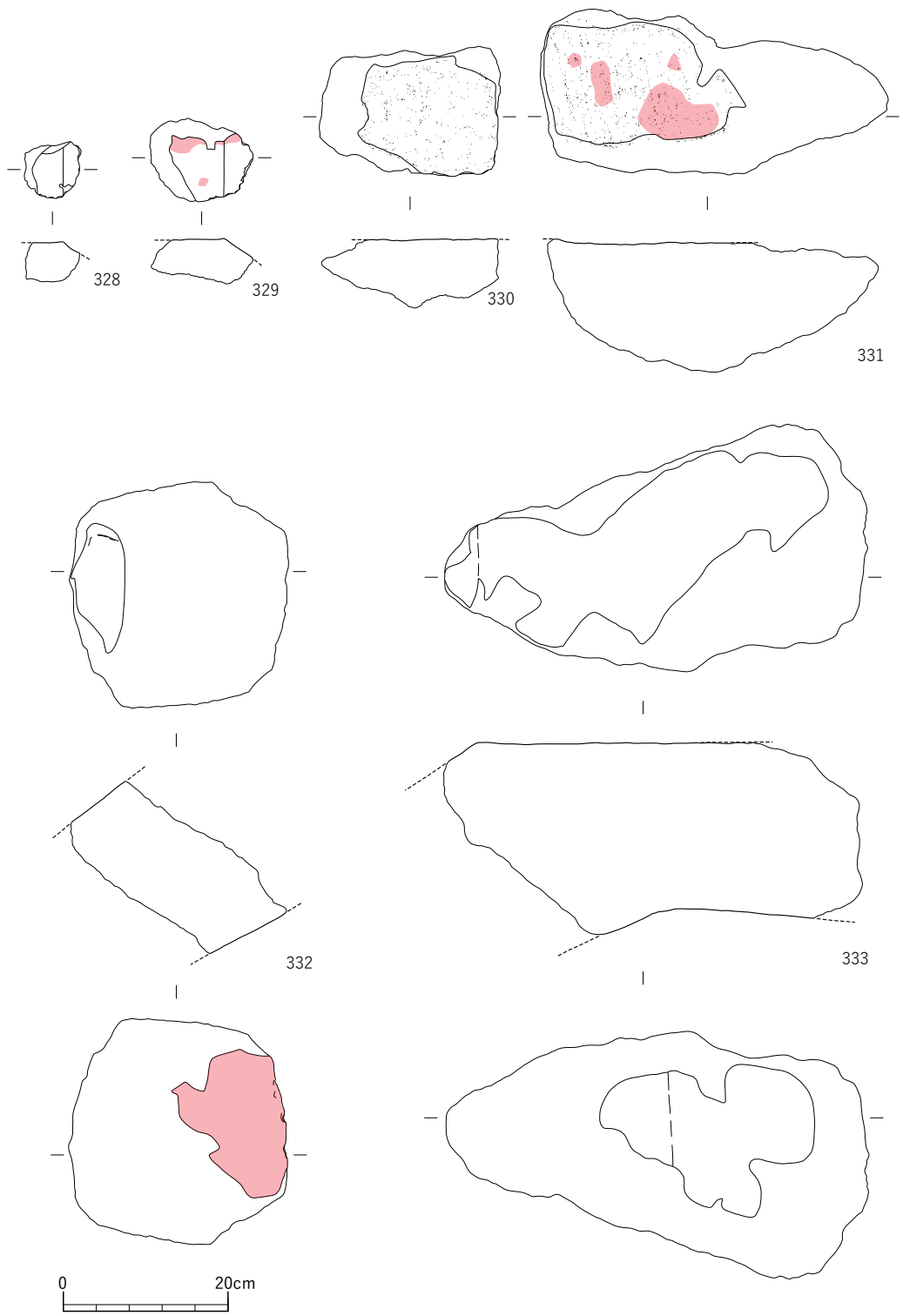


図 69 13 トレンチ出土石材実測図

総重量は 18.25kg である。

アプライト質黒雲母花崗岩は、花崗閃緑岩同様丸みのあるものが多く、赤色顔料が付着するものも認められる。大きなものは丸みのあるもので残存長 14.9cm を測り、総重量は 4.15kg である。

変輝緑岩については、2 点のみの出土であるが、大きい方は丸みのある形状で残存長 10.4cm を測り、総重量 0.77kg である。

玄武岩質凝灰岩質点紋片岩とされた資料は小片が 1 点のみで、残存長 11.1cm、重量 0.55kg である。

(12) H13 墳丘トレンチ (図 70)

位置 1 次調査の際は、條ウル神古墳の墳丘が東西市道を超えて南側に伸びる可能性を考え、南墳丘西上段の南端に南北方向のトレンチを設定した。

土層の状況 I 層である 1・2 層を除去した直下で V 層 (3 層) を検出した。この状況は 12・13 トレンチにおける西上段の調査状況と同様である。

地山面 検出した V 層は、北半では標高 113.5 m のあたりでほぼ平坦な面を形成し、中央から南側に向けて緩やかに傾斜していく状況であった。南端の最も低いところで標高 112.8 m である。本トレンチにおいて、墳形を推し量るような材料は得られなかった。

出土遺物 本トレンチからの出土遺物はなかった。

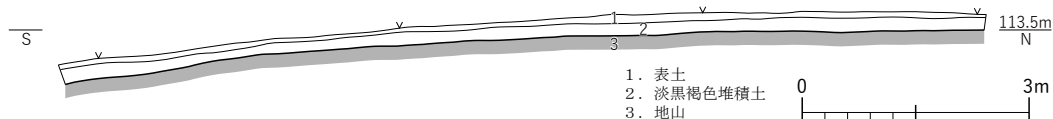


図 70 H13 墳丘トレンチ西壁土層断面図

第4節 墳丘小結

今回の範囲確認調査では、條ウル神古墳の墳形や墳丘規模を明らかにするため、南北の墳丘に合計14カ所のトレンチを設定し、適宜拡張を行った。全てのトレンチにおいて、直接的に墳丘の範囲を示す情報が得られた訳ではないが、6・9・12・13トレンチでは墳丘盛土の可能性が高い土層を、9トレンチでは墳丘の南端を画すと思われる隙を、10トレンチでは前庭部祭祀に関連する可能性のある須恵器群を検出した。このような成果が得られなかったトレンチにおいても、旧地形を反映していると思われる地山面などを検出したことは、墳丘の範囲を考える上で重要な成果といえる。

加えて、今回調査の大きな成果としては、13トレンチで検出した石材を多く含む落ち込みを検出したことが挙げられる。幅1.0mの狭小なトレンチでの検出であるため、その性格を確定させるには至らなかったが、石材の中に花崗岩の破片や、赤色顔料の付着した加工面をもつ凝灰岩片が含まれていることから、横穴式石室などの埋葬施設が南墳丘にも存在した可能性が考えられる。

古墳時代の遺物としては、上記の前庭部祭祀に関連する可能性のある須恵器群が特筆されるが、その他に多くのトレンチから埴輪の破片が少なくない量出土している。3次以降の墳丘調査時は、條ウル神古墳に埴輪が伴う可能性も充分あると考えていたが、原位置を保って出土した資料が皆無であり、その形態的・製作技術的特徴も非常に多様であることから、今のところ確実に條ウル神古墳に埴輪が伴うとは断言できないだろう。特に墳丘盛土と考えられる土層中にも埴輪片が少なからず認められることから、條ウル神古墳の築造に際して、周辺古墳に伴っていた埴輪が混ざり込んだ可能性を考える方が現状では妥当ではないかと思われる。

古墳築造以後の遺構としては、3・6・7・9・10・11トレンチで中世以降の素掘溝を検出し、また1・3～7・9～11トレンチでは耕地拡大を意図したと思われる、中世以降の段階的な盛土層を検出した。これらは明らかに古墳に伴う盛土よりも単位が粗く、中には墳丘盛土を崩したブロック土が混じる土層もある。墳丘周囲の改変が相当に行われていることを示すものと考えられる。

古墳築造以前の遺構としては、7・11トレンチで弥生時代後期頃の素掘溝やピットを検出した。それらの性格については明らかにし得なかったものの、当該期の出土遺物も一定量存在していることを踏まえると、條ウル神古墳の北西方に広がる中西遺跡が、條ウル神古墳の周囲まで広がっている可能性が高いと考えられる。

第5章 自然科学分析

第1節 横穴式石室及び家形石棺の使用石材

横穴式石室の石材・石棺材、13 トレンチで出土した石材を裸眼で観察した結果について述べる。

(1) 横穴式石室と石棺の石材

横穴式石室の壁と天井に使用されている石材の形状と使用傾向、石材の石種とその特徴及び採取推定地、石棺の石材、石室材の運搬について述べる。

石室材の形状と使用傾向 横穴式石室に使用されている石材は、粒形が垂角の自然石で、加工石がみられない。石材の表面はややなめらかで谷川に転がる石のような様相を呈し、川原にみられるような角が円く、滑らかな表面がある石はみられない。

観察した石材の個数は192個で、石種別ではアプライト質黒雲母花崗岩が12個(6%)、石英閃緑岩が180個(94%)となる。石材のみかけの長径では、50cm未満が98個(51%)、50cm以上100cm未満が32個(17%)、100cm以上150cm未満が28個(15%)、150cm以上200cm未満が19個(10%)、200cm以上250cm未満が7個(4%)、250cm以上が8個(4%)で、50cm未満の石材が半分程を占め、2mを越す巨石は15個である(表3・図71)。

石材の石種とその特徴及び採石推定地 当古墳は石英閃緑岩が風化した地に形成されている。南墳丘に設けられたトレンチで石英閃緑岩が分布しており、掘削と盛土により墳丘を形成していると推定される。石材を得ようとすれば南方の巨勢山か谷を越えた東方の国見山付近に行かなければ得ることができない。巨勢山付近には黒雲母が粒状、粗粒である石英閃緑岩が分布し、国見山付近には正長石が目立つ花崗閃緑岩、部分的にアプライト質黒雲母花崗岩、片麻状黒雲母花崗岩が分布する。

表3 石室材の石種とみかけの長径

位置	長径 石種 (cm)	～49	50～99	100～149	150～199	200～249	250～	合計
		北壁	アプライト質黒雲母花崗岩	4	4		1	
	石英閃緑岩	46	11	12	9	3		81
南壁	アプライト質黒雲母花崗岩	2	1					3
	石英閃緑岩	41	15	14	8	3		81
奥壁	石英閃緑岩	5	2	1	1	1	1	11
天井壁	石英閃緑岩						7	7
合計		98	32	28	19	7	8	192

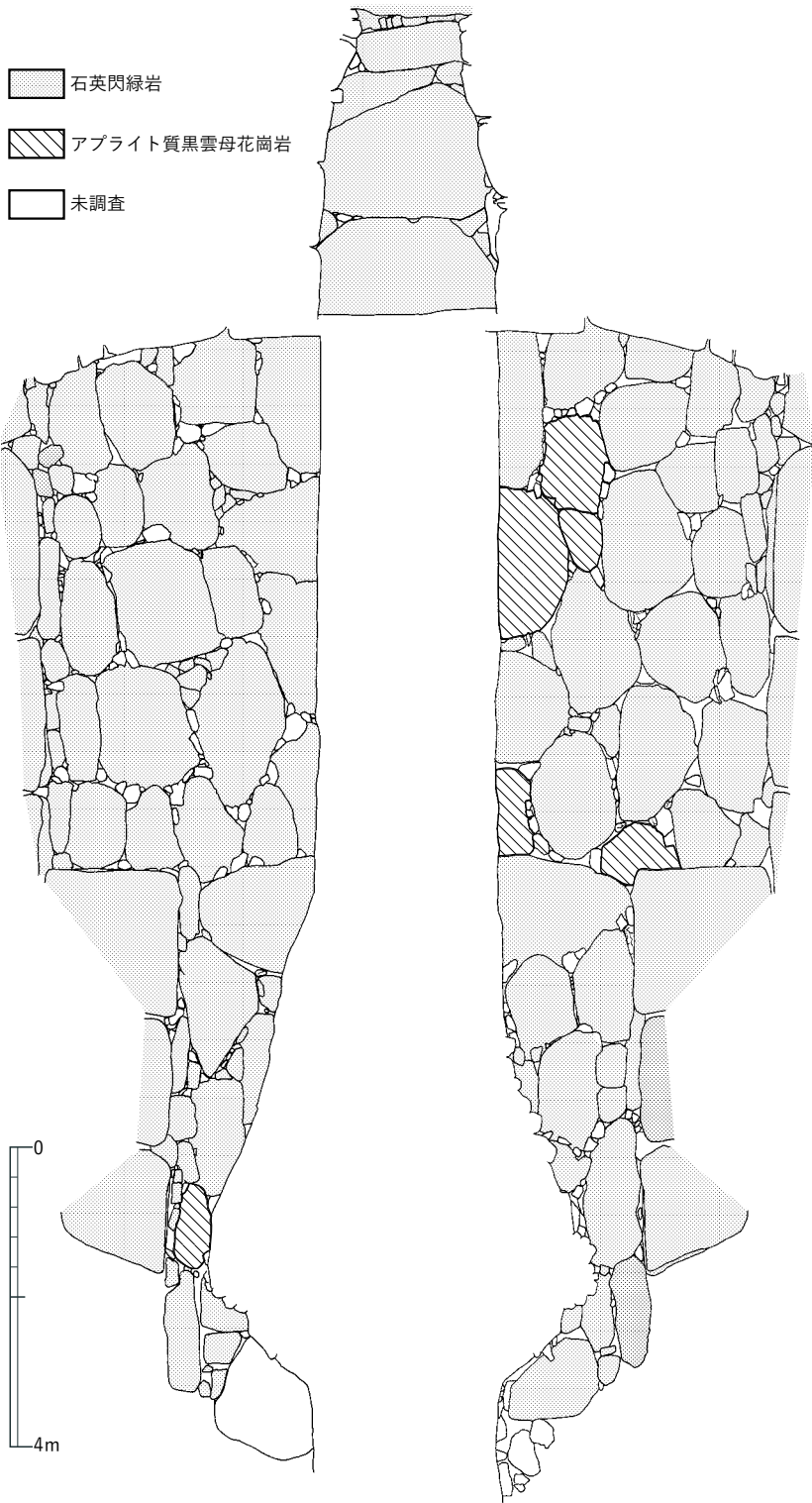


図 71 條ウル神古墳の石室材の石種

このような岩石分布の影響を受けてか、東方の谷川では花崗閃緑岩、アプライト質黒雲母花崗岩の礫がみられる。

アプライト質黒雲母花崗岩、石英閃緑岩の岩相と採石推定地について述べる。

アプライト質黒雲母花崗岩：色は灰白色で、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～8mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が2～15mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～2mm、量がごくごく僅かである。

このような石は当古墳東方の谷付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。谷川の石の様相を呈することから、東方の谷で採石されたと推定される。

石英閃緑岩：色は灰白色で、石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～4mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が3～8mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が2～8mm、量が中である。角閃石は黒色、柱状で、粒径が5～15mm、量がごく僅か～僅かである。

個々の石材には、造岩鉱物の粒径と量に変化があるが、巨勢山付近に分布する石英閃緑岩の岩相変化内におさまる。当古墳の南方の巨勢山付近の谷で採石されたと推定される。

岩石の分布と石材の形状から、横穴式石室に使用されている石材は東方の谷や巨勢山の北山麓付近で採石されたと推定される。

石棺の石材 刳抜式家形石棺に使用されている石材は、棺蓋と棺身共に同質の流紋岩質凝灰角礫岩である。棺蓋での観察結果、石材の採石推定地について述べる。

流紋岩質凝灰角礫岩：色は灰色で、構成粒は流紋岩質溶結凝灰岩、流紋岩、柘榴石安山岩、安山岩、軽石である。流紋岩質溶結凝灰岩は黒色、粒形が垂角～垂円、粒径が0.5～8cm、量が中で、石基がガラス質である。流紋岩は灰色、粒形が角、粒径が0.2～6cm、量が僅か、石基がガラス質で、流理がある。柘榴石安山岩は灰色で、粒形が垂角～垂円、粒径が0.3～5cm、量の中、石基がガラス質である。安山岩は赤褐色、粒形が垂円、粒径が0.3～3cm、量がごく僅かである。軽石は灰白色、粒形が垂角～垂円、粒径が0.4～2cm、量がごく僅かである。基質は白色緻密である。

構成礫に柘榴石安山岩が多く、赤褐色の安山岩も含まれることから、二上層群中部ドンズルボー層の凝灰岩と推定される。中部ドンズルボー層は牡丹洞付近から岩屋峠にかけて分布するが、岩相的に岩屋峠付近や牡丹洞付近の岩相とは異なる。石切場火山岩（柘榴石安山岩）の礫が多く、火山岩（赤褐色の安山岩）の礫も含まれることから、太子町春日の牡丹洞東方付近の尾根部付近（太子町の町立体育館の北方付近）の中部ドンズルボー層の凝灰岩分布地が採石地と推定される。

石室材の運搬について 石室に使用されている石材は、前述の観察結果をもとにすれば、9割以上

の石材が巨勢山の山麓から、僅かの石材が東方の谷付近から運ばれたと推定される。

最大重量の石材を運ぶ労働者数が、当古墳を築造するための最少限の人数となる。縦・横・幅の三方向が測定できる見上げ石は約 22 トンと推定される。藤井寺市三ツ塚から出土したような修羅で石材を運んだとして、修羅の牽引実験の結果をもとに牽引人数を求めれば 550 人となる。石室内にあるどの石材が一番大きいものか決めたいが、この古墳を造営するためには、同時に働く人が最低 550 人以上は必要となる。これは労働できる人の人数のみであり、人口となれば子供等の労働に従事できない者もある。この 2 倍以上の 1100 人以上が住んでいなければ労働に必要な人数を供給できないだろう。江戸時代は人口が 3000 万人程と推定されている。これを北海道を除く面積で割れば 103 人 / km² の人口密度となる。当古墳造営時期の人口を江戸時代の半分とすれば 1 km² に 50 人程が住んでいたことになり、1100 人では 22 km² ほどの広さに住んでいた人口となる。また、御所市の面積は 60 km² ほどであるから当時 3000 人程の人口となる。1 石の牽引に必要な人数を述べただけで、修羅を動かす為の他の仕事に従事する人も必要であっただろう。机上の計算のみであるが、当時、條ウル神古墳の造営に御所市の面積の 3 分の 1 以上の範囲に住んでいた人が従事していることになる。

(2) 13 トレンチの石材 (図 72)

石材の形状と石種 13 トレンチで出土した石材を形状で区分すれば、表面が滑らかな川原石様の石と角が鋭く、破断面がある割石片 (コップ) とである。石種はアプライト質黒雲母花崗岩、花崗閃緑岩、石英閃緑岩、流紋岩質火山礫凝灰岩である。形状と石種の関係をみれば、花崗閃緑岩は川原石様の石で、石英閃緑岩と流紋岩質火山礫凝灰岩は割石片である。アプライト質黒雲母花崗岩は割石片と川原石様の石の両方のものがある。また、流紋岩質火山礫凝灰岩片には平坦な加工面がみられるものがある。花崗閃緑岩の自然石や流紋岩質火山礫凝灰岩片の平坦面に赤色顔料が付着しているものがある。

このトレンチの西側部は地山となり、地山は風化した石英閃緑岩である。この石英閃緑岩は風化

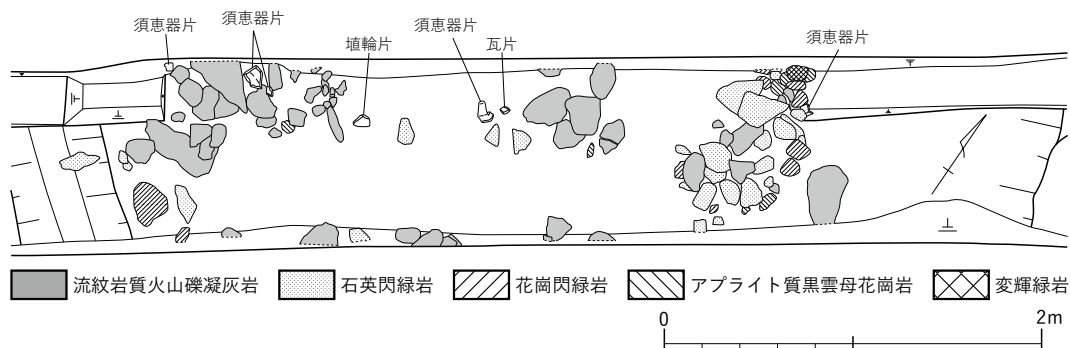


図 72 13 トレンチ落ち込み検出石材の石種

しているが、巨勢山に分布する石と同様のものである。

地山の石英閃緑岩：色は灰白色で、石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～4 mm、量の中である。長石は灰白色で、粒径が1～8 mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、球状で、粒径が1～6 mm、量が僅かである。角閃石は黒色、柱状で、粒径が1～4 mm、量がごく僅かである。

石種の特徴と採石推定地

アプライト質黒雲母花崗岩：色は淡桃灰色で、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～4 mm、量の中である。長石は淡桃色と灰白色のものがある。淡桃色の長石は、粒径が2～4 mm、量の中である。灰白色の長石は、粒径が2～4 mm、量の中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1 mm、量がごくごく僅かである。

川原石様の石は当古墳の東方の川原にみられる。

花崗閃緑岩：色は灰白色で、石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が3～5 mm、量の中である。長石は淡桃色と灰白色のものがある。淡桃色の長石は、粒径が3～5 mm、量が多い。灰白色の長石は、粒径が2～5 mm、量の中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～4 mm、量が僅かである。角閃石は黒色、柱状で、粒径が1～5 mm、量がごくごく僅かである。

このような岩相の石は当古墳の東方にある国見山付近に分布する花崗閃緑岩の岩相の一部に似ている。川原石様の石は東方の川原にみられる。

石英閃緑岩：色は灰白色で、石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が4～6 mm、量が僅かである。長石は灰白色で、粒径が5～8 mm、量が多い。黒雲母は黒色、球状で、粒径が3～6 mm、量の中である。角閃石は黒色、柱状で、粒径が2～6 mm、量が僅かである。

このような石は巨勢山付近に分布する石英閃緑岩の岩相の一部に似ている。

流紋岩質火山礫凝灰岩：色は灰白色で、構成粒が流紋岩、流紋岩質溶結凝灰岩、軽石である。流紋岩は灰色で、粒形が角、粒径が3～6 mm、量がごくごく僅かである。流紋岩質溶結凝灰岩はガラス質で、黒色と褐色のものがある。黒色のものは、粒形が角～亜角、粒径が1～40 mm、量が多い。褐色のものは、粒形が亜角～亜円、粒径が4～6 mm、量がごく僅かである。軽石は灰白色で、粒形が亜角～亜円、粒径が2～10 mm、量の中である。基質は緻密である。

このような石は鹿谷寺跡北方付近に分布する二上層群下部ドンズルポー層の火山礫凝灰岩の岩相の一部に似ている。

第2節 出土石材及び金属製品の材質調査

(1) はじめに

條ウル神古墳では、これまでの発掘調査によって多量の石材や金属製品が出土している。ここでは、これらの石材や金属製品の材質に関する調査を実施した結果を報告する。

(2) 資料及び調査の方法

調査対象資料 調査の対象としたのは、石材2点、金属製品20点である。石材は表面に赤色の色調が点在しており、顔料付着の可能性があった。金属製品は銀製品や金銅製品等各種の材質を用いた資料が見られた。

調査方法 資料の状態は肉眼及び実体顕微鏡で観察するとともに、X線透過撮影による内部構造の観察をおこなった。X線透過撮影は、X線照射にYXLON社製MGC41を用い、画像化に富士フィルム社製AC-7HR systemを用いた。なお、撮影条件は資料の状態に応じて調整した。

資料の材質の分析を目的として蛍光X線分析を実施した。蛍光X線分析は日本電子株式会社製JCX-3100R IIを用いた。必要に応じて走査電子顕微鏡(SEM)による微細構造観察と光音響赤外分光分析(Photoacoustic/FT-IR:PA/FT-IR)を行った。SEM観察には日本電子IT-100LAを用い、PA/FT-IRにはPerkinElmer SPECTRUM100/MTEC製PAS300を用いた。一部のサンプルについては、供試体を非破壊構造診断法の一つであるラミノグラフィによって観察した。ラミノグラフィ⁽⁷⁾測定は、大型放射光施設SPring-8のビームラインBL20XUに設置された測定装置を利用した。

(3) 結果

蛍光X線分析の結果を資料の種類ごとに表4に示した。調査の結果を以下にまとめる。

1. 歩揺およびそれに関連する資料は、銅を地金として水銀アマルガム法による金鍍金が施されているものと考えられる。
2. 空玉は、純度の高い銀製である。標準資料を用いないファンダメンタル・パラメーター法(FP法)によれば、銀の純度は98%以上であった。
3. 金糸は金製であるが、表面に土壌付着が認められ、金の純度は確認できなかった。
4. 金銅板は2種類あったが、いずれも銅板に水銀アマルガム法により鍍金したのと考えられる。
5. 足金具の残る鉄刀は、水銀アマルガム法によって銀で鍍金した装飾を伴う製品と考えられる。
6. 銀箔および銀板は、文字通り銀で造られており、その純度は標準資料を用いないFP法によれば、90%以上であった。なお、No.23の銀箔とした資料からは、ニッケルを顕著に検出しており、後世の混入である可能性が高い。
7. 鏡片は、銅、錫、鉛を検出しており青銅製である。しかし、錫の濃度が極めて高くなっている。埋蔵環境において銅が溶出した結果、錫の相対的な濃度が上昇したのと考えられる。また、

赤色部分の分析を行った結果、鉄を顕著に検出しており酸化鉄系の赤色顔料（ベンガラ）が使用されたものと考えられる。

8. 棺内堆積土中に確認できた赤色部分は赤色顔料と考えられ、水銀（Hg）を顕著に検出した。
9. 13トレンチの落ち込みで検出した石材3点の赤色部分からは、顕著に鉄(Fe)が検出されており、赤色顔料による彩色と考えられる。検出元素が鉄（Fe）であることから酸化鉄系の赤色顔料（ベンガラ）が使用されたものと考えられる。一部の資料について SEM 観察を実施した結果、直径（外径）1μm 程度、長さ 6μm ほどの管状（パイプ状）の形態が多数観察された。このことから、これらの石材にはパイプ状ベンガラが塗布されていたものと考えられる。
10. No.15 の一群より抽出した織物片は、糸幅が 0.5mm 前後の S 撚りの糸を用いた平織の布である。その織密度 7 × 7 本 /cm 前後と想定される。その材質は光音響 FT-IR の結果、植物繊維であると考えられる。SEM およびラミノグラフィ像による断面観察の結果、いずれの断面像にお

表 4 材質分析の結果（資料の種類ごとに配列）

整理番号	図番号	資料（分析箇所）	蛍光 X 線分析及びその他分析結果																			
			Si	Cl	K	Ca	Ti	Cr	Mn	Ni	Fe	Cu	Ag	Au	Hg	Pb	As	Sn	Rb	Sr	Br	
21	-	步揺（表面）									▽	○	▲	◎	○							
15	23	步揺金具（地金）									▽	◎	▲	◎	▽							
		步揺金具（表面）									▲	◎	▲	◎	○							
22	-	步揺金具（地金）									▽	◎		▲	▽		▽					
		步揺金具（表面）									▽	◎	▲	▲	▽							
11	-	步揺（地金）									▽	◎		▲	▽							
		步揺（表面）									▽	◎	▲	◎	○							
11	-	步揺金具（地金）									▽	◎		▲		▲	▽					
		步揺金具（表面）					▽				▽	◎	▽	○	▲	▲	▽					
9	-	空玉片①		▲							▽	▽	◎	▽	▽							
9	28	空玉片②									▽	▽	◎	▽								
15	-	金糸					◎				▲		○	◎								▲
11	26	金銅板（地金）	○								▲	◎		▲	▽		▽					
		金銅板（表面）									▲	○	▲	◎	○							
14	17	金銅板（彫刻あり）（地金）									▽	◎	▲	◎	▲							
		金銅板（彫刻あり）（表面）										▲	▲	◎	○							
11	15	鉄刀片（足金具）（表面）				▲	▲				○	○	◎	▽	▽							
13	29	螺旋状銀製品（破断面）										▽	◎	▽								
8	-	棒状銀製品（地金）									▲	▽	◎	▲	▽							
		棒状銀製品（表面）									▽	○	◎	○	▽							
8	-	銅を銀箔で巻いた棒状銀製品（地金）									▽	◎	▲	▲								
		銅を銀箔で巻いた棒状銀製品（表面）									▽	▽	◎	▲	▽							
20	-	不明銀製品									▲	▲	◎	▽	▲							
11	-	銀板（刀装具か）（欠損部）									▽	▽	◎	○	▽							
		銀板（刀装具か）（表面）										▽	◎	○	▲							
9	-	銀箔									▽	▽	◎	▽	▽							
23	-	銀箔？	○					▲		◎		▽	▽		▽							
24	31	青銅鏡片（破断面）									▲	▲	▽			▲	▽	◎				
22	-	顔料付着土塊（赤色顔料）	○		▲	▲	▽				▲	▲			◎							
集石	-	取上番号なし（赤色顔料）	◎		○	○	▽		▽		○									▽	▽	
集石	-	取上番号 61 花崗岩（赤色顔料）	◎		○	○	▽		▽		○									▽	▽	
集石	-	取上番号 131 凝灰岩（赤色顔料）	◎		○	○	▲				◎									▽	▽	
15	-	平織布	FT-IR によりセルロースのピーク検出。SEM 観察より内腔空隙あり。植物繊維製品。																			
11	-	平織布	FT-IR により Amide I のピーク検出。SEM 観察より中実の三角形断面。絹製品。																			

凡例：◎=顕著に含む、○=少量含む、▲=わずかに含む、▽=ごく微量含む

いても単繊維は楕円形ないし扁平形を呈し、その中央にはわずかに空隙を持つ内腔が確認された。この特徴を有する植物繊維は大麻であることから、本資料の織物は、現時点では大麻製である可能性が考えられる。

11. 金属片 (No.11) に付着して発見された織物片は、SEM 観察により糸幅が 100 μ m(0.1mm) 前後の糸を用いた平織の布である。糸に撚りは見られず、その織密度 15 × 33 本/cm 前後で、隙間の空いたガーゼ状の織物であったと考えられる。その材質は光音響 FT-IR の結果、Amide I に帰属される顕著なピークが確認されたことから、絹製と考えられる。

謝辞 本分析においては、下記の各氏のご協力を得ました。記して感謝いたします (五十音順)。

榎本恵美、勝川若奈、河崎衣美、小倉頌子

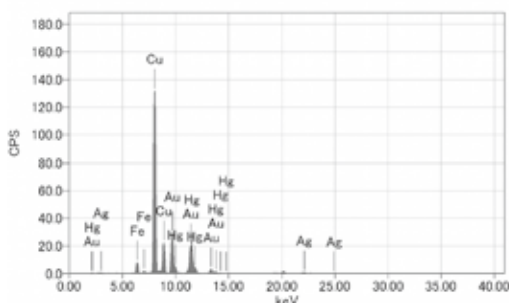


図 73 No.15 歩揺金具 (表面)

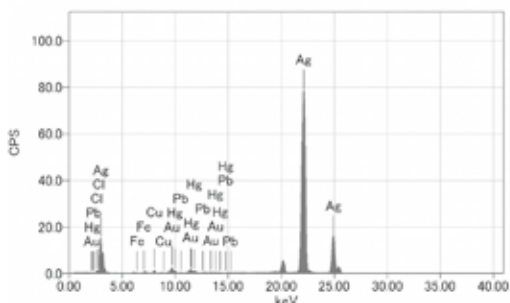


図 74 No.9 空玉片①

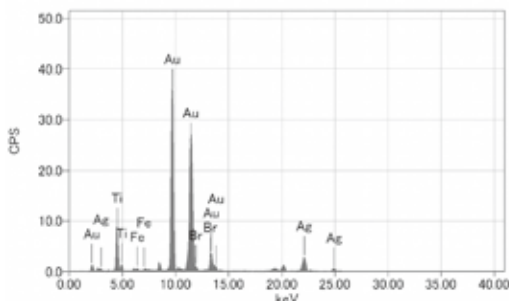


図 75 No.15 金糸

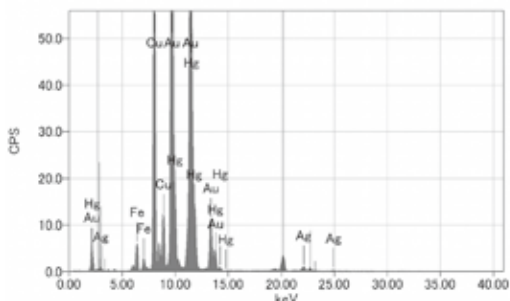


図 76 No.11 金銅板 (表面)

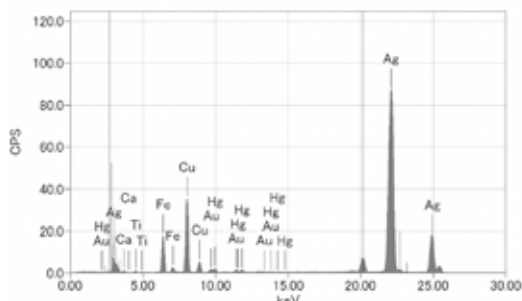


図 77 No.11 鉄刀片 (足金具) (表面)

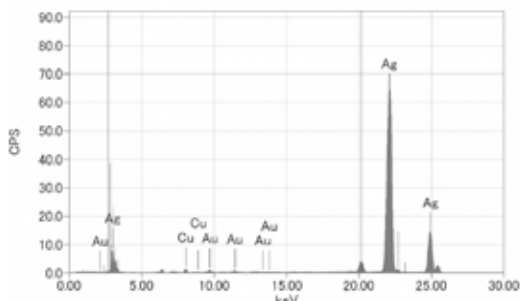


図 78 No.13 螺旋状銀製品 (破断面)

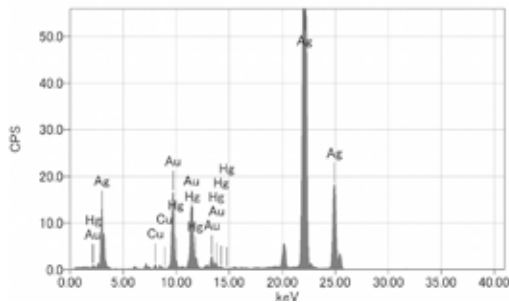


図 79 No.11 銀板 (刀装具か) (表面)

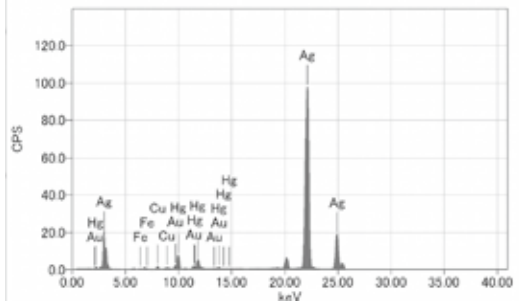


図 80 No.9 銀箔

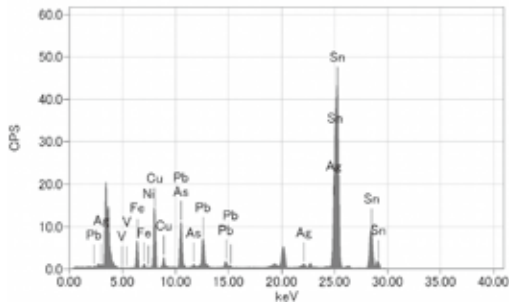


図 81 No.24 青銅鏡片 (破断面)

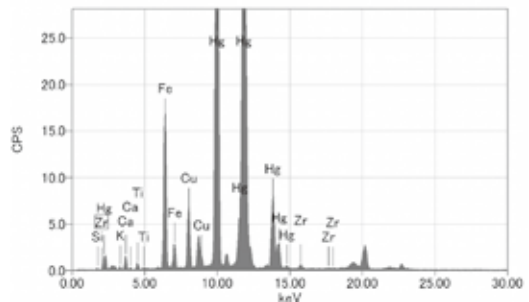


図 82 No.22 顔料付着土塊 (赤色顔料)

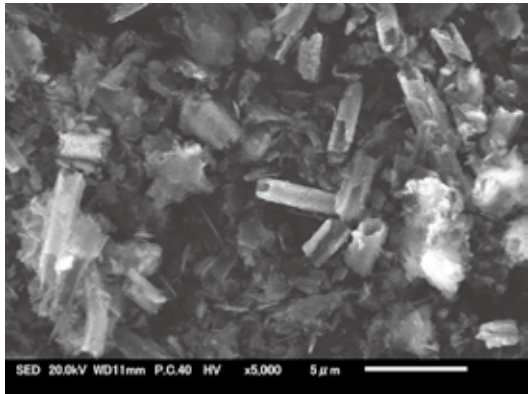
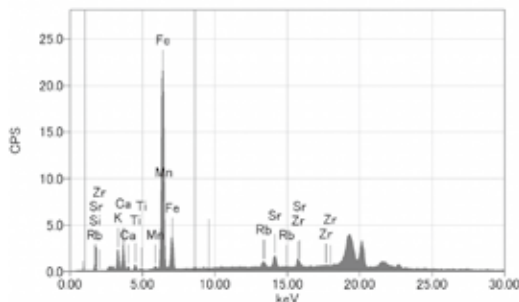


図 83 集石取上番号なし (赤色顔料) (左: XRF 結果、右: SEM 像)

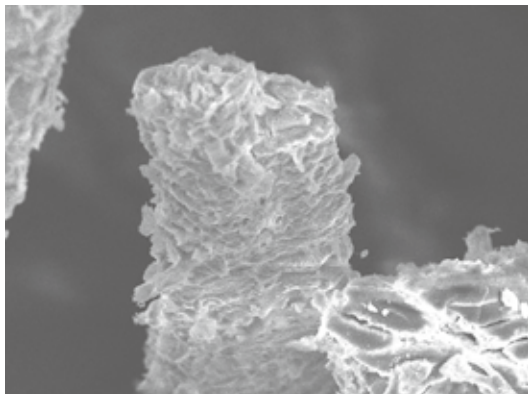
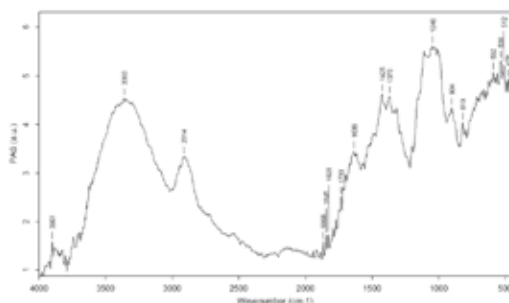


図 84 No.15 平織布 (左: IR スペクトル、右: 繊維断面の SEM 像)

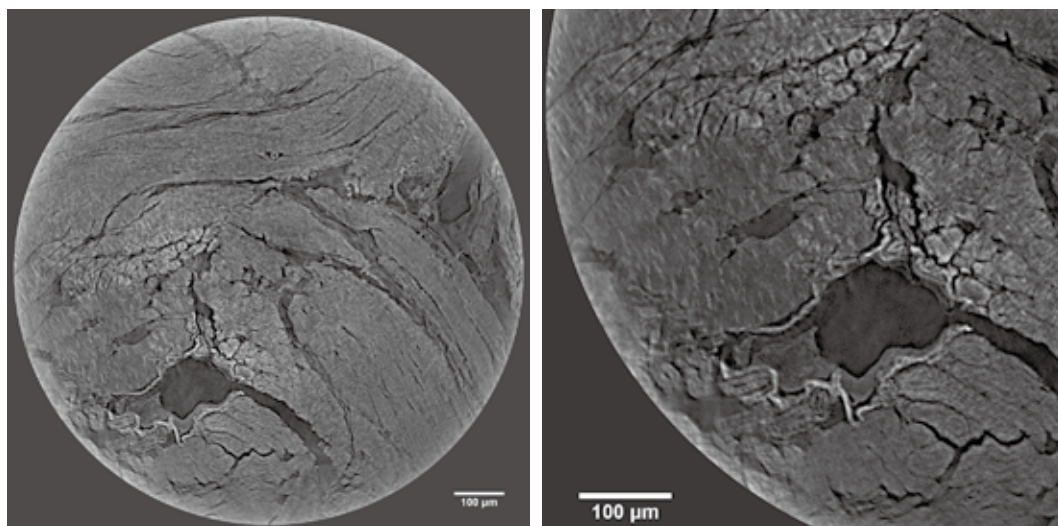


図 85 No.15 平織布のラミノグラフィ像（スライス画像：右は左図の拡大）

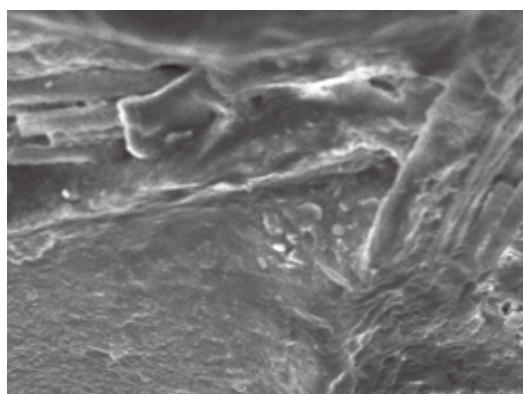
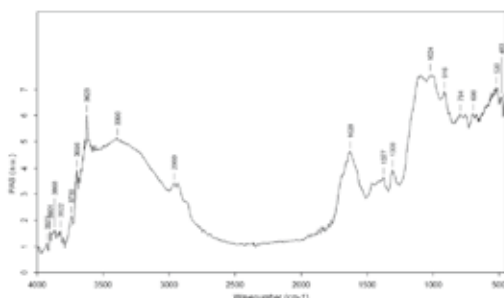


図 86 No.11 平織布（左：IR スペクトル、右：繊維断面の SEM 像）

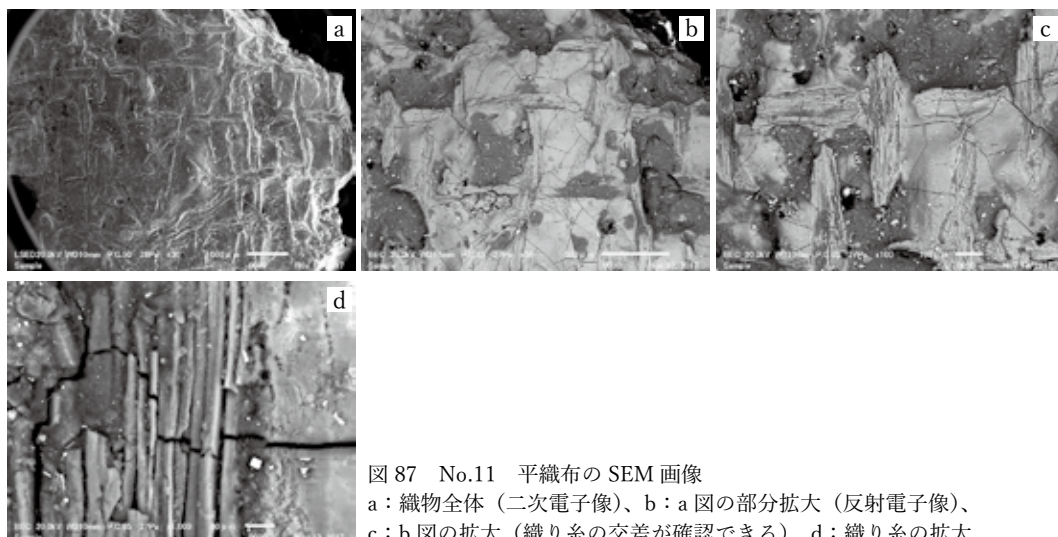


図 87 No.11 平織布の SEM 画像
 a：織物全体（二次電子像）、b：a 図の部分拡大（反射電子像）、
 c：b 図の拡大（織り糸の交差が確認できる）、d：織り糸の拡大

第3節 出土ガラス玉の材質調査

(1) はじめに

ここでは、條ウル神古墳出土資料の中で、ガラス玉の構造および材質に関する調査を実施した結果について報告する。

(2) 資料および調査方法

調査対象資料 條ウル神古墳から出土した1413点のガラス玉であり、そのうち完形品が536点、破片が877点である(表5)。資料はφ約3~5mmの小型のガラス玉が多く、その色調は黄緑色、青紺色、濃青緑色、淡青色、黄褐色、淡黄色から構成される。

調査方法 ガラス玉の構造および材質の調査では、全点のX線透過撮影を実施した。さらに色調、構造ごとに数点を抽出し、デジタルマイクロスコープを用いた観察、ならびに蛍光X線分析による成分分析を実施した。デジタルマイクロスコープ、蛍光X線分析に供した資料は便宜的に識別

表5 調査対象のガラス玉

整理番号	出土位置	地区	内容	備考	
1	石棺蓋上	1	完形：黄緑 (A) 1		
6		20	完形：黄緑 (A) 17、濃青緑 (B) 1、淡青 (B) 1、重層 (C) 2 破片：黄緑 (A) 21、重層 (C) 10、淡青 (D) 14、淡黄 (D) 4		
7		21	破片：黄緑 (A) 5、重層 (C) 6、淡青 (D) 7、淡黄 (D) 1		
8		23	完形：黄緑 (A) 39、濃青緑 (B) 4、黄緑 (B) 2、淡青 (B) 2、 重層 (C) 2 破片：黄緑 (A) 31、重層 (C) 18、淡青 (D) 22、淡黄 (D) 8		
9		24	完形：黄緑 (A) 42、濃青緑 (B) 4、重層 (C) 3 破片：黄緑 (A) 16、重層 (C) 10、淡青 (D) 19		
10		25	完形：黄緑 (A) 8 破片：黄緑 (A) 4、重層 (C) 1、淡青 (D) 8		
11		—	完形：黄緑 (A) 138、濃青緑 (B) 7、淡青 (B) 4、黄緑 (B) 1、 青紺 (B) 1、重層 (C) 6 破片：黄緑 (A) 62、重層 (C) 27、淡青 (D) 20、淡黄 (D) 2、 淡青 (E) 2	9点を観察・分析 (No.11-1~9)	
12		棺身の蓋と接する 面	—	完形：黄緑 (A) 5、濃青緑 (B) 1、淡青 (B) 1 破片：黄緑 (A) 3、重層 (C) 2、淡青 (D) 1	
14		棺内堆積土	1	破片：淡青 (D) 16、淡黄 (D) 7	
15			2	破片：重層 (C) 1、淡青 (D) 8、淡黄 (D) 6	
16			3	完形：黄緑 (A) 16、濃青緑 (B) 1 破片：黄緑 (A) 2、重層 (C) 3、淡青 (D) 14、淡黄 (D) 14、 淡青 (E)	
17	4		完形：黄緑 (A) 3、濃青緑 (B) 1 破片：淡青 (D) 5、淡黄 (D) 3		
18	5		完形：黄緑 (A) 37、濃青緑 (B) 1、黄緑 (B) 1、重層 (C) 1 破片：黄緑 (A) 24、重層 (C) 10、淡青 (D) 37、淡黄 (D) 18		
19	6		完形：黄緑 (A) 2 破片：黄緑 (A) 2、淡青 (D) 1、淡黄 (D) 2		
20	7		完形：黄緑 (A) 143、濃青緑 (B) 8、淡青 (B) 1、重層 (C) 6 破片：黄緑 (A) 123、重層 (C) 44、淡青 (D) 80、淡黄 (D) 37	2点を観察・分析 (No.20-1・2)	
21	8		完形：黄緑 (A) 16、濃青緑 (B) 1 破片：黄緑 (A) 7、重層 (C) 3、淡青 (D) 7、淡黄 (D) 1		
23	—		完形：黄緑 (A) 4 破片：黄緑 (A) 33、重層 (C) 4、淡青 (D) 21、淡黄 (D) 17		

番号を設定した。

表6 蛍光X線分析の測定条件

管電圧	30kv もしくは 50kv
管電流	デットカウントが最適になるように自動で設定
測定時間	300 秒
雰囲気	真空
照射径	φ 1mm

X線透過撮影では、X線照射装置として YXLON 社製 MGC41 を使い、画像化は富士フィルム社製 AC-7 HR system を用いた。なお、撮

影では管電圧および管電流をそれぞれ 120 kV、3mA とし、60 秒間 X 線を照射した。デジタルマイクロSCOPE は HIROX 社製 KH-7700 を用いた。蛍光 X 線分析装置は日本電子株式会社製 JCX-3100R II を用いた。蛍光 X 線分析の測定条件を表 6 に示す。測定時の管電圧はガラス玉の含有元素に応じて、30 kV、50 kV で設定した。測定は各資料に対して 2 カ所でおこない、定性分析を実施した。さらに検出された元素を選択し、標準試料を用いないファンダメンタルパラメーター (FP) 法によって定量値を算出した。なお、定量値は 2 回の測定の平均とした。

(3) 結果および考察

資料全体の X 線透過撮影像を図 88 に示す。X 線透過撮影像では X 線の透過性が低い資料は特に認められず、同質のガラス素材から構成されている可能性が高いと考えられる。

次に整理番号 11 および 20 から抽出した個々のガラス玉に対して、X 線透過撮影像、デジタルマイクロSCOPE による観察、蛍光 X 線分析から検討したガラス玉の状態について以下に記す。なお、蛍光 X 線分析から得られた定量値を表 7、X 線透過撮影像を図 89、デジタルマイクロSCOPE 像を図版 54・55 に示す。

No.11-1 (青紺色) No.11-1 は青紺色を呈し、内部に気泡および黒色の物質が点在している状態が観察された。蛍光 X 線分析の結果、酸化ケイ素 (SiO₂) に加えて融剤の成分である酸化ナトリウム (Na₂O)、酸化マグネシウム (MgO₂)、酸化カリウム (K₂O)、酸化カルシウム (CaO) が一定量含まれていることから、No.11-1 はアルカリケイ酸塩ガラスに分類されると考えられる。K₂O の含有量が高くないこと、Na₂O、MgO₂、CaO を含むことからソーダ石灰ガラスと考えられる。

表7 ガラス小玉の成分

試料番号	実測図番号	色調	濃度 (wt%)															
			Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	SrO	ZrO	Sn	Pb
No.11-1	111	青紺	12.85	4.05	3.15	64.50	-	0.47	2.66	8.71	0.24	0.17	1.67	0.19	0.09	-	-	1.74
No.11-2	106	濃青緑	13.20	4.00	4.66	60.85	-	-	3.18	6.43	0.25	0.09	1.54	2.17	0.06	-	0.66	2.90
No.11-3	107	濃青緑	11.66	3.81	4.07	63.59	-	-	3.20	6.55	0.25	0.09	1.56	1.87	0.07	-	0.70	2.57
No.11-4	109	淡青	13.18	3.97	2.66	63.30	1.53	-	2.90	8.38	0.17	0.04	1.11	1.25	0.07	-	0.36	1.08
No.11-5	110	淡青	12.85	4.50	2.60	66.14	-	-	2.58	8.15	0.16	0.03	1.01	1.27	0.07	-	-	1.10
No.11-6	-	黄褐	15.60	4.34	3.95	56.86	0.60	0.42	4.18	6.22	0.28	0.21	7.08	0.11	0.16	-	-	-
No.11-7	124	黄褐	18.22	4.42	3.68	54.10	0.53	0.35	3.98	6.29	0.29	0.22	7.62	0.13	0.15	-	-	-
No.11-8	-	黄緑	14.21	0.80	5.10	70.40	-	-	0.76	1.13	0.84	0.07	2.59	1.09	0.04	0.22	0.32	2.43
No.11-9	-	黄緑	13.38	0.83	5.12	69.87	-	-	0.77	1.07	0.85	0.07	2.57	1.19	0.04	0.24	0.44	3.58
No.20-1	-	淡黄	10.58	0.85	8.90	65.58	-	-	1.84	2.28	0.87	0.07	3.26	0.06	0.07	0.20	0.32	5.14
No.20-2	-	淡黄	12.64	0.65	9.19	65.86	-	-	1.97	1.76	0.72	0.06	2.50	0.03	0.05	0.14	0.62	3.80

No11-2・3 (濃青緑色) No.11-2 は丸みを帯びた濃青緑色、No.11-3 は丸みを帯びていない濃青緑色のガラス玉である。No.11-2 では内部に黒色の粒子状の物質が点在しているとともに、孔に対して同心円状に筋が認められた。X線透過撮影像では内部にX線の透過性が低い密度が高い粒子が点在している状態が認められており、この粒子は顕微鏡で観察された黒色の粒子と考えられる。一方で、No.11-3においても、密度の高い粒子がわずかに観察された。蛍光X線分析の結果、No11-2・3ともに Na_2O 、 MgO_2 などの融剤の含有量はNo.11-1と同程度であり、ソーダ石灰ガラスに分類されると考えられる。また、スズ(Sn)と鉛(Pb)をわずかに含む特徴が認められた。

No.11-4・5 (淡青色) No.11-4 は丸みを帯びた淡青色、No.11-5 は丸みを帯びていない淡青色のガラス玉である。No.11-2と同様にNo.11-4ではガラス玉内部に黒色を呈した微細な粒子が点在していることが観察され、X線透過撮影像の結果を考慮すると黒色の粒子は密度が高い物質から構成されていると推測される。No.11-5においても黒色の粒子が認められるものの、量が少なく、粒径にばらつきが認められる。蛍光X線分析による成分分析の結果、 Na_2O 、 MgO_2 などの融剤の含有量はNo.11-1と同程度であり、ソーダ石灰ガラスに分類されると考えられる。No.11-5ではSnが検出された。

No.11-6・7 (黄褐色) No.11-6・7は黄褐色のガラス玉で、前者が単珠、後者が連珠になっている資料である。No.11-6・7ともに、小口面の観察では孔に対して同心円の筋が認められ、X線透過撮影像においては同心円の筋に対応する箇所ではX線の透過性が高いことが認められた。二重の層構造を有していると考えられ、内側と外側のガラスの間の空間に銀箔が存在する「重層ガラス」と呼ばれるガラス玉(田村2013)と考えられる。蛍光X線分析の結果、 Na_2O 、 MgO_2 、 K_2O 、CaOの含有量からソーダ石灰ガラスと考えられる。ただし、 NaO_2 含有量は15.60%、18.22%と他のガラス玉に比べてやや高い傾向を示した。

No.11-8・9 (黄緑色) No.11-8・9は黄緑色を呈し、No.11-8は丸みを帯びた形状を有している。X線透過撮影像ではNo.11-8でややX線の透過性が低い状態が観察された。顕微鏡による観察ではNo.11-8において微細な黒色の粒子が点在していることが観察された。また、No.11-9においても、わずかに黒色の粒子が点在していることが認められた。蛍光X線分析の結果、ソーダ石灰ガラスと考えられるものの MgO 、 K_2O 含有量が低い特徴が認められた。また、SnおよびPbが検出されており、Pb含有量は他の資料に比べてやや高い傾向を示した。

No.20-1・2 (淡黄色) No.20-1・2は淡黄色を呈した破片状の資料である。蛍光X線分析の結果、ソーダ石灰ガラスと考えられるものの MgO 、 K_2O 含有量が低く酸化アルミニウム(Al_2O_3)含有量が高い特徴が認められた。

(4) まとめ

本節では、デジタルマイクロスコープ、X線透過撮影法を用いた観察および蛍光X線分析を用いて化学成分の分析をおこない、ガラス小玉の構造および材質について検討をおこなった。濃青緑色、淡青色、黄緑色の資料ではガラス内部に密度の高い黒色の粒子の存在が確認された。また、内部に銀箔を挟む「重層ガラス」が確認された。蛍光X線分析の結果、種々の色調のガラス玉において、すべてのガラスの材質はソーダ石灰ガラスであった。また、それらの融剤の成分では、色調ごとに Na_2O 、 MgO 、 Al_2O_3 、 K_2O 、 CaO の含有量に差異が認められた。

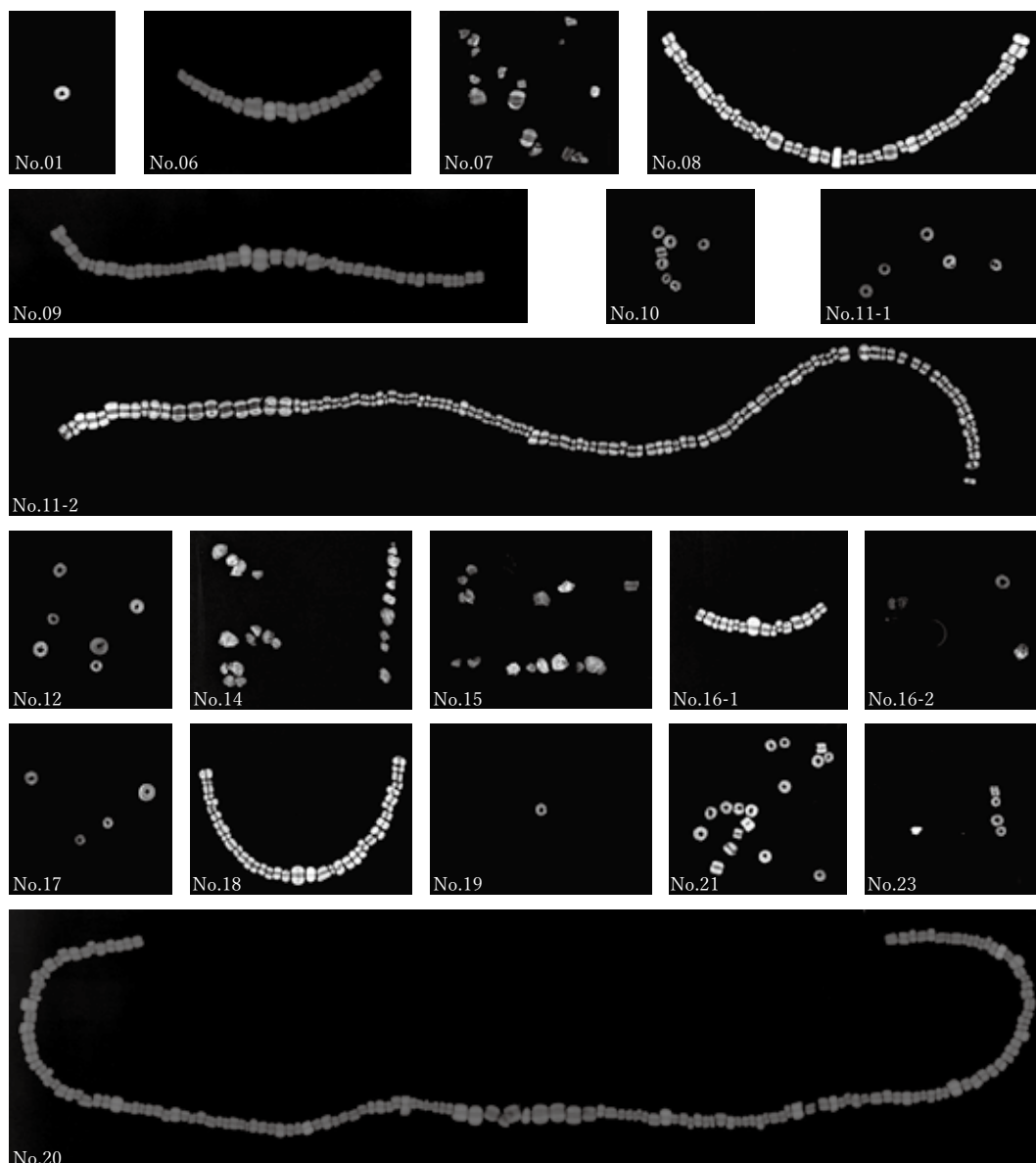


図 88 ガラス小玉の X 線透過撮影像

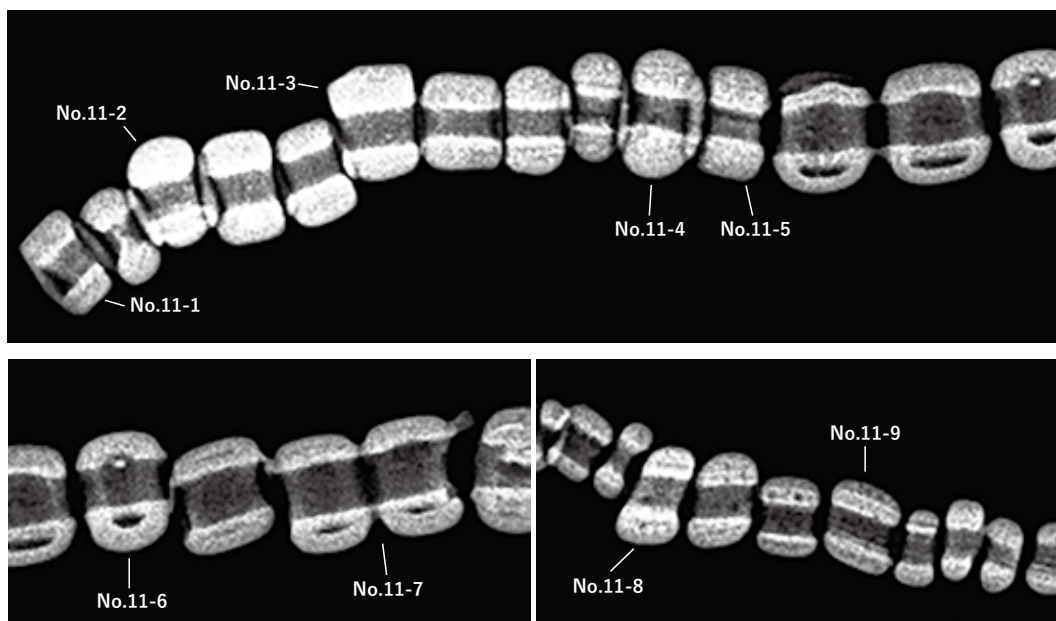


図 89 ガラス小玉（抽出資料）の X 線透過撮影像

第 4 節 條ウル神古墳出土のガラス玉類

(1) はじめに

2002 年に行われた條ウル神古墳の横穴式石室の清掃調査では、家形石棺の棺内および棺蓋上から多量のガラス小玉が収集された。ガラス小玉をはじめとするガラス製品は、地球規模の遠距離交易の対象となった代表的な考古資料で、古代の日本列島においても数多く運びこまれていた点が注目されるようになってきた。また、材質や製作技法が多様で、時期的な変遷も明確であることから、時期区分や財の流通の地域性を議論する上でも不可欠な資料である。今回、回収されたガラス玉類を網羅的に調査する機会を与えられたことから、その結果を報告する。

(2) 対象資料

対象資料は、2002 年に行われた清掃調査で回収されたガラス小玉のすべてである。ガラス小玉は、家形石棺の上面、および内部の各所に分散して確認されている。調査担当者らは、石棺上面に存在したガラス玉類について、石棺内部が盗掘された際に持ち出された土壌中に含まれていたものが遺棄されたと考えている（御所市教育委員会編 2003）。石棺上面から回収されたガラス玉類と石棺内部から回収されたガラス玉類の構成は完全に一致しており、この見解は首肯される。そのため、以下の考察においては、出土位置ごとの区別はしていない。

ガラス玉類は破片が極めて多く含まれ、総数を正確に計数することは困難である。しかし、その構成は比較的単純で、慎重な観察によって、破片に関しても、分類的な帰属を判断することができた。すなわち、製作技法に基づいて A 類～E 類の 5 種類に大別され、それぞれは材質的なまとま

りとも対応しているものと推定された。ただし、この対応関係の有無は以下の材質調査によって検討される。

A類は、通有の引き伸ばし法によって製作されたガラス小玉である。色調に若干の濃淡を認めるが、すべて黄緑色半透明を呈する。銅と錫酸鉛による複合的な着色に特有の色調であると考えられた。完形品 471 点と破片 333 点が回収されている。破片の多くは半欠品程度の大きさを持つので、総数は 600 点を超えるものと推定される。條ウル神古墳出土のガラス玉類の中では最も多く、いっそう粗い推定ではあるが、全体の 8 割近くを占める。遺存状況が良好な完形品から 146 点を抽出して、材質調査を行った。

B類は、変則的な引き伸ばし法と呼称している製作技法で製作されたガラス小玉である。完形品 45 点が回収されている。着色技法の相違を反映すると考えられる色調の相違から、4 種類に細分される。條ウル神古墳出土ガラス玉類の構成を特徴付ける種類であることから、全点の材質調査を行った。

C類はいわゆる重層ガラス玉である。二層構造になったガラス管を連珠法によって加工している。ほぼ完存していると考えられるもの 20 点と破片 139 点が回収されている。ほぼ完存している 20 点は二連の連珠 5 点と単珠 15 点に区分される。構造的な問題から細片化しており、破片から本来の総数を推定することは容易ではないが、細片を多く含み、50 点を超えないと考えている。色調には濃淡を認めるが、すべて黄褐色透明を呈し、外層内面もしくは内層外面に銀箔を残すものを認める。條ウル神古墳出土ガラス玉類の構成を特徴付ける種類であることから、分析が困難なほど小さな破片を除いて、網羅的に材質調査を行った。内層と外層のガラスがともに残存している個体に関しては、可能な限り、両者に対して測定箇所を設定しているため、測定数は 238 点になる。また、産地推定のために、破片 3 点に関してストロンチウム同位体比の測定を行った。

D類は、鋳型法によって製作されたガラス小玉である。破片しか回収されておらず、製作時の徐冷が充分ではなかった可能性がある。錫酸鉛で着色されたと考えられる淡黄色不透明を呈する破片 120 点と銅で着色されたと考えられる淡青色半透明～不透明を呈する破片 280 点に区分される。非常に細片化が進行しており、原形が窺われる個体はほとんどなく、総数が 100 点を超えることはないと考えている。遺存状況が不良であることや、鋳型法で加工されたガラス小玉には材質の混合の可能性が存在することから、比較的大型の破片 11 点を代表として抽出し、材質調査を行った。

E類は、巻き付け法で製作された比較的大型のガラス玉であったと考えられる。ただし、小片が 5 点回収されているのみで、詳細は不明である。そのうち 2 点は接合する。破片 4 点の材質調査を行った。

(3) 材質調査の結果

A類 146 点、B類 45 点、C類 238 点、D類 11 点、E類 4 点について、蛍光 X 線分析法を用い

た材質調査を行った。測定に用いた装置は、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置（エダックス社製 EAGLE III）である。励起用 X 線源はモリブデン（Mo）管球、管電圧は 20 kV、管電流は 100 μ A、X 線照射径は 112 μ m、計数時間は 300 秒とし、真空中で測定した。測定にあたっては、顕微鏡下で新鮮な破断面など風化の影響が少ない場所を選択し、測定範囲の表層を超音波およびエチルアルコールで洗浄したうえで測定した。測定結果は、測定資料と近似する濃度既知のガラス標準試料を用いて補正した理論補正法（Fundamental Parameter method：FP 法）により、検出した元素の酸化物の合計が 100% になるように規格化した。分析にあたっては、整理番号に枝番を付して個々の資料を区別し、以下においてもその枝番を個々の資料名として用いている。しかし、紙幅の都合から個々の資料に関する分析値に関しては提示することができなかった。あらためて報告の機会を持つ予定である。

①出土ガラス玉の分類（図版 56）

前述したように、條ウル神古墳出土のガラス玉は、製作技法や色調のまとまりから A 類～E 類の大きく 5 つのグループに分類することができる。この分類は直接的には肉眼観察によるものであるが、これまでの理化学的手法を用いた材質データの蓄積から、材質分類とも対応することが推定された。ただし、この点は分析的調査を行うことで検証すべき課題である。

今回は、B 類、C 類、E 類は網羅的に、A 類および D 類は代表的な資料を抽出した調査を行ったが、それぞれの分類単位内において、肉眼観察による推定と齟齬をきたすような変則的な資料は認められなかった。

②出土ガラス玉の材質的特徴

これまでの研究によって、弥生～古墳時代の日本列島において流通する主要なガラス製品の材質は鉛ガラス（Group LI、Group LII）、カリガラス（Group PI、Group PII）、ソーダガラス（Group SI、Group SII、Group SIII、Group SIV、Group SV）に大別され、それぞれの材質は玉への加工方法や流入時期の相違を加味して細分できることが明らかとなっている（Oga and Tamura 2013）。そこで、第一に、條ウル神古墳出土のガラス玉について、既設定の材質グループへの帰属の可否を判断する。第二に、分類単位ごとに材質の変異の様相や着色技法について検討を行う。その際の比較対象としては、時期的に近接する飛鳥寺塔心礎出土資料（奈良文化財研究所飛鳥資料館 2016）を主に取り上げ、必要に応じて他の遺跡から出土した資料を追加する。

a . A 類

A 類と判断したものは 146 点の分析を行い、すべてソーダガラスであった。ソーダガラスの中でも、 Al_2O_3 や TiO_2 の含有量が多く、 CaO の含有量が少ないことから、高アルミナタイプのソーダガラス（Group SII）に帰属する（図 90（1）・（2））。着色に関わる成分としては、0.5～1.0% の CuO と、2% 以下の PbO および 1% 以下の SnO_2 が検出される。その特徴的な黄緑色から判断して、銅イオンと人工顔料である錫酸鉛（ $PbSnO_3$ ）による複合的な着色であると考えられ

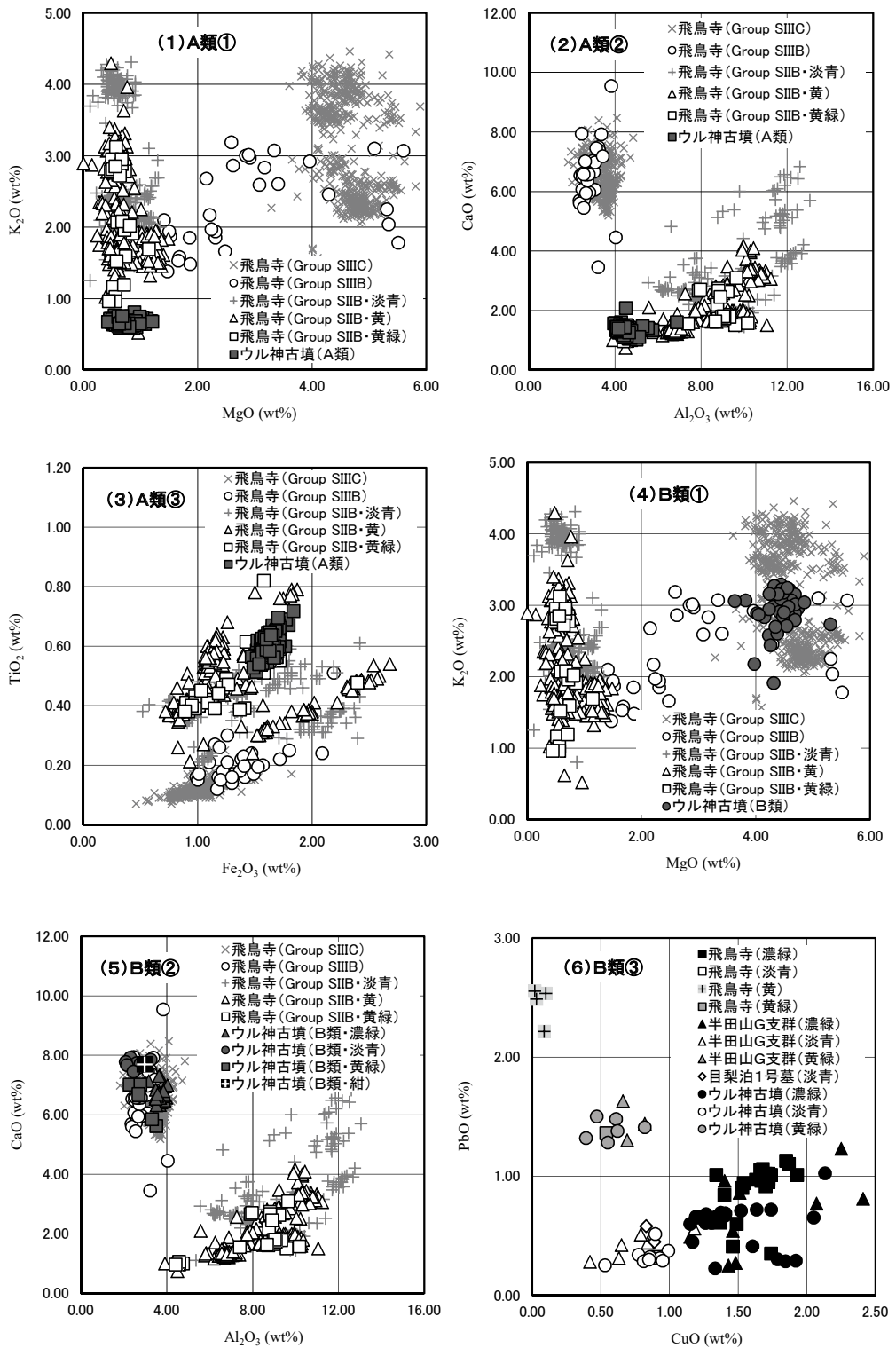


図 90 ガラス小玉の材質と分類 (1)

る。Group SII は、コバルト着色で弥生時代後期～終末期に流入する Group SIIA と、多様な着色技法が適用され、古墳時代前期後半以降に流入する Group SIIB に細分される。條ウル神古墳例は Group SIIB に該当する。

條ウル神古墳の A 類は、非常に材質的な類似性が高い点が特徴である。すなわち、 Al_2O_3 は 4.0～5.8%、 CaO は 1.0～1.6%、 MgO は 0.4～1.2%、 K_2O は 0.6～0.8% の範囲にまとまる (図 90 (1)・(2))。原料である珪砂に付随する不純物であると考えられる Fe_2O_3 や TiO_2 についても、それぞれ 1.47～1.84% および 0.51～0.72% とよくまとまっている (図 90 (3))。すなわち、製作時からのまとまりを維持している可能性が高いと判断される。もう一つの特徴としては、 Al_2O_3 、 CaO 、 MgO 、 K_2O の含有量が高アルミナタイプのソーダガラス (Group SIIB) としては下限に近い点が指摘できる (図 90 (1)・(2))。図示しなかった資料を加味しても、筆者らによるこれまでの分析結果ではあまり一般的ではないものであるが、滋賀県甲山古墳から出土した銅+錫酸鉛着色の Group SIIB の一部が非常に類似した特徴を具備している。Group SIIB は材質的変異が大きく、 Fe_2O_3 と TiO_2 の比率からも複数の原料産地の存在が推定されるが、現状では、そうした多様性を具体的な生産地や流入時期との関係で整理することはできない (Oga and Tamura 2013)。

b. B 類

B 類は出土した完形資料全点である 45 点の分析を行い、すべてソーダガラスであった。 Al_2O_3 は 2.0～4.0%、 CaO は 5.6～7.9%、 MgO は 4.1～4.9%、 K_2O は 2.4～3.3% の範囲にまとまる (図 90 (4)・(5))。 MgO 、 K_2O 、 CaO の含有量が多いことから、植物灰タイプのソーダガラス (Group SIII) に帰属することがわかる。日本列島で出土する植物灰タイプのソーダガラス (Group SIII) は比較的多様である (大賀・田村 2017)。これまで、玉への製作技法や流入時期から、Group SIIIA～Group SIIIC の三つの分類単位を設定しているが (Oga and Tamura 2013)、いずれにも帰属しない種類も存在する。條ウル神古墳例に関しては、製作技法が共通する Group SIIIC と材質の変異が類似しており (図 90 (4)・(5))、Group SIIIC に帰属すると判断することができる。

B 類の 45 点は、色調から青紺色透明を呈する 1 点、濃青緑色透明を呈する 29 点、淡青色半透明を呈する 9 点、黄緑色半透明を呈する 6 点の 4 種類に細分される。全体として材質的な類似性は高いが、仔細に見ると、多少の相違を認めることができる。すなわち、青紺色の 1 点と淡青色の 9 点は他より CaO の含有量が少し多い (図 90 (5))。また、濃青緑色の 29 点は他の色調より Al_2O_3 の含有量が多い傾向が認められる (図 90 (5))。一方、図示はしていないが、 Fe_2O_3 と TiO_2 の含有量は青紺色や濃青緑色の方が淡青色や黄緑色よりも少し多い。ただし、以上のような相違が、添加された着色剤に付随する不純物の影響なのか、製造単位ごとの揺らぎであるのかは明確ではない。

また、B 類の 45 点は、色調ごとに添加された着色剤が異なる。ただし、どの色調からも PbO や SnO_2 が検出されることから、添加された着色剤の種類や材質は慎重に判断する必要がある。ま

ず、青紺色の1点のみはCoOが0.1%程度含有され、コバルトによる着色である。他はすべてCuOやPbOが検出されるが、それぞれの含有量は色調ごとに異なる。すなわち、CuOでは濃青緑色>淡青色≒黄緑色、PbOでは黄緑色>濃青緑色≒淡青色となり(図90(6))、その変異は色調ごとにまとまりを示す。それぞれのまとまりは有意で、他の遺跡から出土したガラス小玉に関しても同様な変異の傾向を示す。材質が異なるガラスを参考にすれば、濃青緑色および淡青色は銅、黄緑色は銅と錫酸鉛の複合的な着色であると考えられる。濃青緑色と淡青色は同じ銅による着色であるが、濃青緑色を呈するガラスのほうが、ややPbOが多い傾向がみられる。PbOの含有量が多いと、銅イオンは濃青緑色を呈するCu²⁺-O-Cu⁺結合子を生成することから、濃青緑色のものは、鉛と銅イオンにより複合的に発色した可能性がある。ただし、淡青色と濃青緑色の個体間でPbOの含有量の境界は明瞭でなく、詳細な発色メカニズムは不明である。また、もう一つ注目される点として、條ウル神古墳例には含まれないが、黄色を呈するGroup SIIICと、黄緑色および淡青色を呈するGroup SIIICは変異がほぼ直線的に配列する。このことから、黄緑色を呈するGroup SIIICは、黄色のGroup SIIICと淡青色のGroup SIIICを混合して製作されたものと考えられる。

c. C類

C類と判断したものからは238点の分析を行い、すべてソーダガラスであった。Al₂O₃は3.1～6.90%、CaOは4.5～6.8%、MgOは3.6～4.7%、K₂Oは2.8～4.4%の範囲にまとまる(図91(7)・(8))⁽⁹⁾。MgO、K₂O、CaOの含有量が多いことから、植物灰タイプのソーダガラス(Group SIII)に帰属することがわかる。着色に関わる成分としては3.14～6.70%のFe₂O₃が検出される(図91(10))。また、分析対象とした個体は外層に由来する破片と内層に由来する破片を区別した。その結果、該当しない個体も少なくはないが、全体としてCaO、K₂O、Fe₂O₃の含有量は内層よりも外層の方が多い傾向が認められた(図91(9)・(10))。Fe₂O₃の含有量に関しては、外層の方が濃い黄褐色に発色しており、着色剤が多く添加されたためと考えられるが、CaOおよびK₂Oの含有量が相違する要因は不明である。

日本列島で出土する植物灰タイプのソーダガラス(Group SIII)としては、Group SIIIA～Group SIIICの三つの分類単位を設定しており(Oga and Tamura 2013)、流入時期や流通量から條ウル神古墳のC類との異同が問題となるのはGroup SIIIBとGroup SIIICである。Group SIIIBは引き伸ばし法で製作されたコバルト着色のガラス小玉が圧倒的に多く、Group SIIICは変則的な引き伸ばし法で製作された特徴的な形状のガラス小玉である点でC類とは異なる。MgOおよびK₂Oの含有量から見ると、Group SIIIBは変異が非常に大きく、ナトロンタイプのソーダガラス(Group SI)との混合が想定されるが、C類にはそのような特徴を示す個体は含まれない(図91(7))。一方、Al₂O₃およびCaOの含有量では、Group SIIIBやGroup SIIICに比べてCaOの含有量が少なく、Al₂O₃の含有量が多い傾向が認められる(図91(8))。現状では、Group SIIIBおよびGroup SIIICのいずれからも区別しておくべきであると判断する。

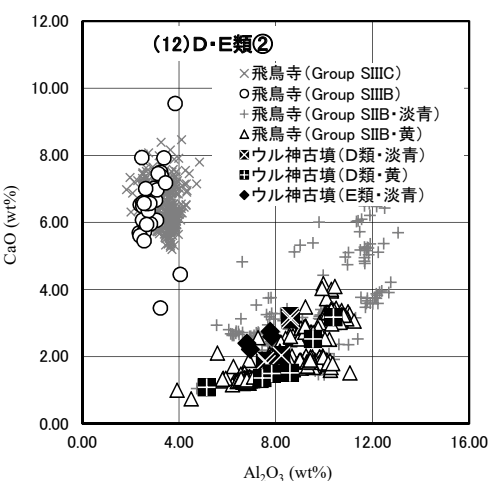
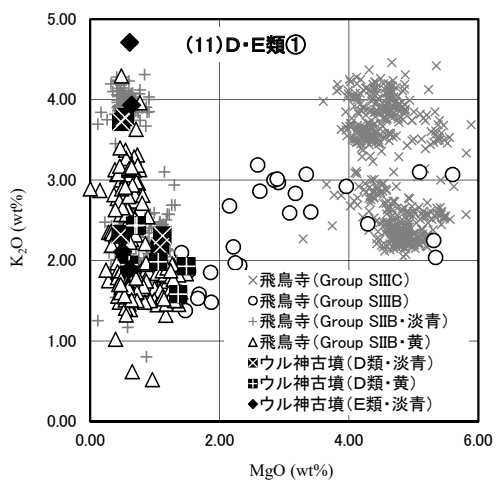
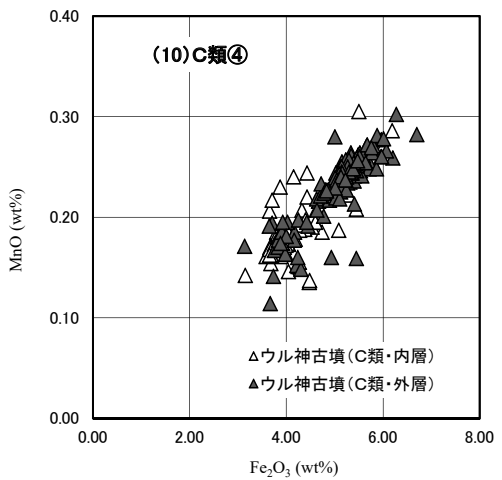
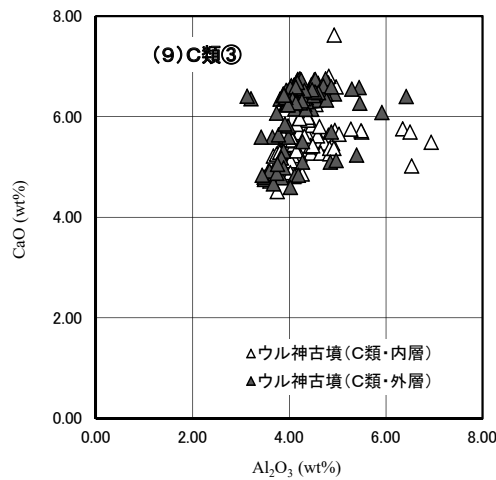
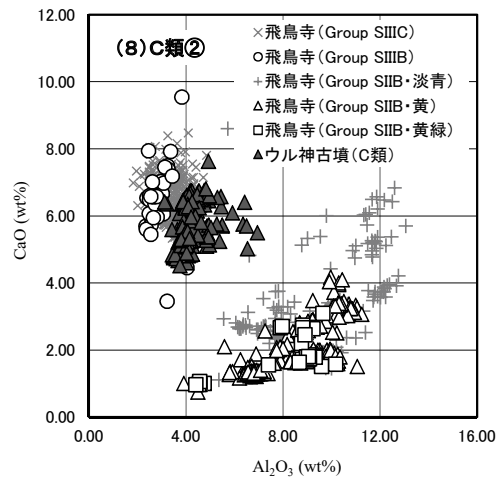
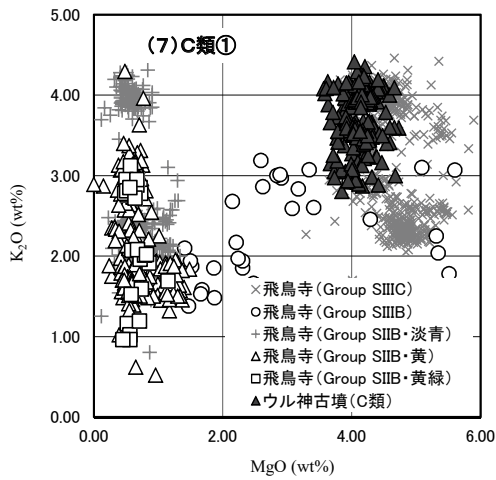


図 91 ガラス小玉の材質と分類 (2)

d . D類

D類からは11点の分析を行った。D類は鋳型で再生されたガラス小玉であるが、すべて小片へと崩壊している。徐冷作業の不足など、製作過程に何らかの不備があったものと考えられる。色調から、淡青色半透明を呈するものと淡黄色不透明を呈するものに二分される。それぞれの分析結果を図91(11)・(12)に示す。

結果はすべてソーダガラスであり、 Al_2O_3 や TiO_2 の含有量が多く、 CaO の含有量が少ないことから、高アルミナタイプのソーダガラス(Group SII)に帰属するものと判断される。鋳型で再生されたガラス小玉においては、材質や着色技法が異なるガラス片が加工時に混合される可能性が存在するが、対象資料においては、そのような事態が生じていると判断されるような変則的な分析値は含まれていない。また、No.20-209-2とNo.20-209-3、およびNo.20-209-4とNo.20-209-5はそれぞれすべての成分に関して非常に類似した値を示す。No.20-209-1～5は石棺内の7区から一括で取り上げられた資料であり、同一個体由来する破片である可能性がある。

着色に関わる成分は、色調ごとに異なる。淡青色を呈するNo.20-209-1～5では0.5～1.0%の CuO が検出され、銅による着色である。0.1%前後の SnO_2 が検出されるのは、銅に付随する不純物であると考えられる。淡黄色を呈するNo.15-2-1～6では1%以上の鉛と1%以下の SnO_2 が検出される。その特徴的な色調から、人工顔料の錫酸鉛(PbSnO_3)による着色であると考えられる。

e . E類

E類は4点の分析を行った。すべて小片である。残存する表面の曲率から、本来は比較的大型の丸玉状を呈していたと考えられる。二次的に製作された可能性があるが、D類のように気泡が充満することはなく、製作技法は不明である。

結果はすべてソーダガラスであり、 Al_2O_3 や TiO_2 の含有量が多く、 CaO の含有量が少ないことから、高アルミナタイプのソーダガラス(Group SII)に帰属するものと判断される(図91(11)・(12))。着色に関わる成分としては0.5%前後の CuO が検出され、銅による着色である。また、No.8-71AとNo.8-71B、およびNo.16-23とNo.11-181Bはそれぞれすべての成分に関して非常に類似した値を示す。直接接合はしないが、色調の類似性から見ても、同一個体由来する可能性を否定できない。

(4) ストロンチウム同位体比による産地推定

産地推定を行う方法の一つに、対象資料に含有されるストロンチウムの同位体比を用いるものがある。ストロンチウムは地殻物質において存在量がそれほど多い元素ではないが、カルシウムと類似した性質を持ち、一般的にはカルシウムを置換するように存在していると考えられる。ストロンチウムには ^{84}Sr 、 ^{86}Sr 、 ^{87}Sr 、 ^{88}Sr の4種類の同位体が天然に存在し、そのうち ^{87}Sr は ^{87}Rb の放射性壊変によって生成されるため、時間の経過とともに増加する。そのため、ストロンチウムの同位

表8 ストロンチウム同位体比の分析結果 体比は地域ごとに変動することが経験的に知られている。

個体番号	$^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$	標準誤差
No.18-042 (外層)	0.717390	0.000008
No.07-004 (内層)	0.716836	0.000007
No.21-019 (外層)	0.717332	0.000006

ストロンチウム同位体比を用いた産地推定は方法的には長い歴史を持っており、日本考古学においても試行されたことがある(馬淵・川上 1984)。しかし、実質的な成果を挙げられるようになったのは近年のことであり、主に生物起源の考古資料を対象とした産地推定に用いられている。一方、ヨーロッパ考古学ではガラス製品の産地推定にも積極的に取り入れられており、ナトロンガラスや植物灰ガラスの産地推定に利用されている(Freestone et al.2003、Henderson et al.2005)。現状では破壊分析を避け難いため、十分なデータが蓄積できているわけではないが、一定の見通しについて公表した(田村・申 2017)。

今回は、條ウル神古墳出土の重層ガラス破片3点(No.18-42(外層)、No.7-4(内層)、No.21-19(外層))について、ストロンチウム同位体比の測定を行った。対象資料の選択では、ストロンチウムの含有量が不足しないように極端に小さな破片は避け、材質分析の結果に問題がないことを確認したうえで決定した。結果は表8に示す。外層の2点はSr同位体比が近似の値をとるのに対し、内層の1点はやや低い値を示した。両者は色調およびCaO含有量などの材質の特徴もやや異なっており、生産地が異なる可能性が想起されたが、Sr同位体比分析の結果からもその可能性が高まったといえる。

一般的に中東地域で出土する植物灰ガラスのSr同位体比は、 $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr} < 0.7090$ である(Henderson et al. 2009)のに対し、本資料は極めて高い同位体比を持つことが分かった。このような高いSr同位体比はこれまでに知られている東地中海から中東地域におけるナトロンガラスおよび植物灰ガラスのいずれにも認められない。筆者らがこれまでに調査したガラスの中では、イ

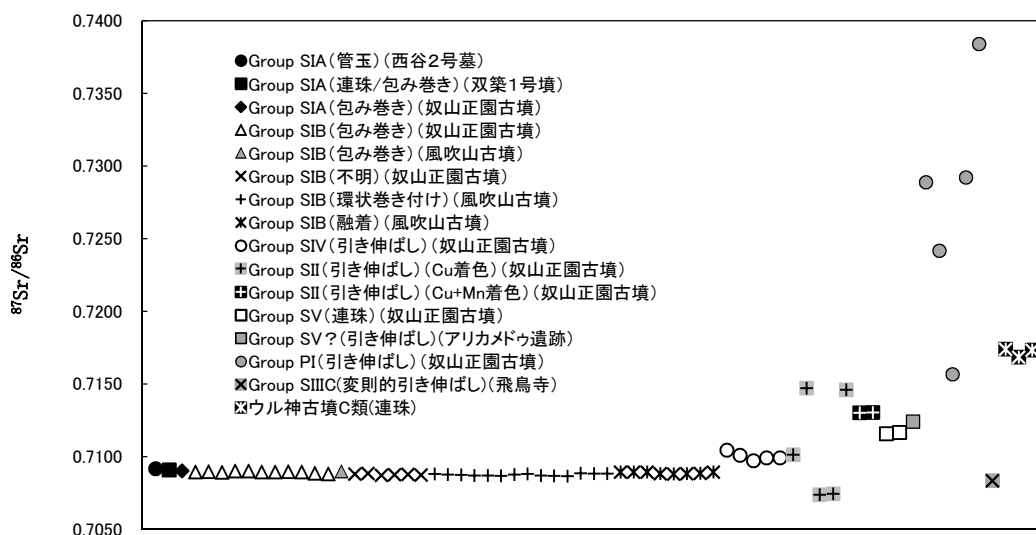


図92 ガラス玉の材質とストロンチウム同位体比

ンドで生産された可能性が考えられる Group PI のカリガラスが同等の高い値を持つ（田村・申 2017）（図 92）。

ところで、パキスタンのペシャワール近郊にある Bara 遺跡では多くの重層ガラス玉の未成品が出土しており、生産遺跡であると考えられている。本遺跡で出土する重層ガラス玉はすべて植物灰ガラス製であるが、中東地域などで出土する一般的な植物灰ガラスと比較すると Al_2O_3 が多い点において区別され、インド・パキスタン地域で生産されたガラスであると考えられている（Dussubieux and Gratuze 2003）。條ウル神古墳の C 類についても他の Group SIII と比較すると Al_2O_3 が多い傾向が認められ、高い Sr 同位体比とも相まって当該地域との関連性が注目される。

(5) 組成的特徴

以上の検討によって、條ウル神古墳出土のガラス玉は、肉眼観察から推定されたとおり大きく 5 つの分類単位から構成されることが裏付けられた。

注目される組成的特徴としては、第一に、各分類単位内においても材質的なまとまりが強く、副葬されるまでの履歴が単純であったと想定される点が指摘できる。A 類は高アルミナタイプのソーダガラス（Group SIIB）に帰属するが、Group SIIB 内に認められる変異の中のごく一部に集中する。D 類に関して、鋳型で再生されたガラス小玉としては圧倒的に流通量が多いコバルト着色のガラス小玉を素材としたものを全く含まず、分析個数が充分とは言えないが、材質が異なるガラスが混合されたものも認められない。

第二に、比較的流通量が寡少な重層ガラス玉がまとまって組成される点が挙げられる。重層ガラス玉は非常に高度な製作技法を適用して製作されている。日本列島へ流入するまで本来の価値が伝達されていないようで、有力古墳に偏った出土傾向は認められない。また、出土が稀と言えるほど出土事例は少なくはないが、欠損品が多出することもあって、見逃されているものも多い。ただし、そのほとんどは数点のみの出土に留まり、まとまった出土が見られる事例は限られる。管見では、10 点程度以上がまとまって出土した事例は、大阪府廿山南古墳や岡山県江崎古墳など、條ウル神古墳を含めても 5 古墳しか存在しない。條ウル神古墳例は総数の推定が特に困難であるが、最多であることは動かない。

第三に、変則的な引き伸ばし法で製作された B 類を含む点である。変則的な引き伸ばし法で製作された植物灰タイプのソーダガラス（Group SIIIC）は、日本列島では最も遅く出現する種類の一つで、出土の普遍性から、時期区分の指標として重視しているものである（大賀 2010a）。象徴的な事例では、奈良県藤ノ木古墳出土ガラス小玉には含まれないが、奈良県牧野古墳および飛鳥寺塔心礎出土のガラス小玉には多量に含まれることから、後期末の T K 209 式期、もしくは 6 世紀末ないし 7 世紀初頭に出現したと考⁽¹⁰⁾えてきた。すなわち、B 類を組成する点は條ウル神古墳の時期比定を行う上で重要な判断基準となる。しかし、この点は條ウル神古墳の築造時期に関する標準的な

理解と微妙に齟齬をきたす。そこで、節を改めて、時期比定論的含意を検討しておきたい。

(6) 時期比定論上の含意

ある資料を時期比定する場合、様々な不確定性が避け難い。特に、條ウル神古墳の場合には、清掃調査に留められているという制約も存在する。そのため、最終的な結論とは言い難いが、判断のための一つの根拠として、ガラス小玉の構成、特に B 類 (Group SIIC) が組成することが持つ時期比定論上の含意について検討する。

條ウル神古墳の時期比定は、内容が明確な要素として、横穴式石室の構造や家形石棺の形状を主な根拠として行われてきた。しかし、仔細に比較すると、その位置付けには論者による一定の相違が認められる。すなわち、位置付けが安定している T K 43 式期の藤ノ木古墳と T K 209 式期の牧野古墳を基準にした場合、藤ノ木古墳を前後する時期まで遡らせる見解 (増田 1996、太田 2011、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2015)、牧野古墳と前後する時期まで降らせる見解 (宮元 2005)、両者に時間的ヒアタスを認め、中間に位置付ける見解 (坂 2017) などが存在する。すなわち、依拠する見解によっては、B 類の出現時期に関する筆者らの判断と微妙に齟齬をきたす可能性がある。そこで、両古墳と相前後する時期に位置付けられ、まとまった量のガラス小玉を出土した事例について、あらためてその構成を目視による観察によって確認した。

まず、平林古墳、三里古墳、烏土塚古墳、沼山古墳、馬塚古墳、河内愛宕塚古墳に関しては、いずれも Group SIIC を 1 点も組成しない。紙幅の都合から詳細な説明を行うことはできないが、各種の色調を呈する高アルミナタイプのソーダガラス (Group SIIB) が主要な構成要素である。烏土塚古墳以外はすべて最も大きな割合を占め、特に平林古墳および馬塚古墳は Group SIIB のみから構成される。また、烏土塚古墳および河内愛宕塚古墳に関しては、鋳型で再生されたガラス小玉が Group SIIB と匹敵するほど組成する。一方、三里古墳および沼山古墳においては、コバルトで着色された紺色を呈する植物灰タイプのソーダガラス (Group SIIB) やナトロン主体タイプのソーダガラス (Group SIV) が加わるが、その割合は低い。

一方、牧野古墳以外で Group SIIC を組成する事例として挙げられる主要古墳は少ない。最初に挙げるべきは、大阪府のシシヨツカ古墳である。シシヨツカ古墳では 1000 点を超えるガラス小玉が出土しており、やはり各種の色調を呈する Group SIIB が 80% 以上となる。ただし、Group SIIB や鋳型で再生されたガラス小玉もそれぞれ一定の割合を占めている。それらの中に、8 点のみであるが、Group SIIC が組成する。シシヨツカ古墳は、出土した須恵器と石室構造の間で、時期的位置付けに齟齬が生じる可能性があるが、須恵器に若干の伝世期間を認め、石室構造を重視した位置付けを妥当と考える (西川 2016)。須恵器は T K 209 式期に比定されることが一般的なもので (安村 2006、横田 2010、森本 2013)、牧野古墳よりは先行しないと判断される。⁽¹²⁾シシヨツカ古墳では、2 点のみであるが、鉛ガラス (Group LIIB) を素材として鋳型で再生されたガラス小玉が確認さ

れる。Group LIIB は上述した古墳では全く出土しない種類であるので、この点は後出する根拠となり得る。⁽¹³⁾ 首長墓とは言えないが、Group SIIC の出現時期を示す可能性がある事例は大阪府の飛鳥千塚4-12号墳である。当該例では、出土したガラス小玉37点がすべて Group SIIC であった。ただし、牧野古墳よりも確実に先行するという根拠を挙げることは難しい。

以上、出土した玉類の検討から、條ウル神古墳の築造時期は藤ノ木古墳などTK43式期に築造されたと考えられている主要古墳よりも後続すると考えられ、牧野古墳よりも段階的に先行すると判断する積極的な根拠は得られない、と結論される。

(7) 結語

本節では、條ウル神古墳から出土したガラス小玉について、考古科学的な調査を行った結果を報告した。ガラス小玉の構成は雑多なものではなく、特定の種類がまとまって組成されるものである。材質的な凝集性も高く、製作時からのセット関係も維持されている可能性が高いと判断した。比較的流通量が少ない重層ガラス玉が多量に出土したことも注目される。また、変則的な引き伸ばし法と呼称している製作技法によって製作されたガラス小玉を含むという組成的な特徴からは、藤ノ木古墳をはじめとするTK43式期に築造された諸古墳よりも後続し、牧野古墳と近接した築造時期が想定されるという時期比定論上の含意を指摘した。こうした判断が、條ウル神古墳を考古学的に評価する上で寄与するところがあれば幸いである。

謝辞 本節の作成においては、奈良県立橿原考古学研究所、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、奈良国立博物館、羽曳野市教育委員会において、関連資料の調査に格別の御配慮を賜りました。文末になりましたが、厚く御礼申し上げます。

第6章 総括

第1節 墳丘復元の可能性 (図93)

第4章で述べたとおり、計4次にわたる範囲確認調査の結果、従来わかっていなかった條ウル神古墳の墳丘に関して様々な情報を得ることができた。ここでは、現在得られている知見を整理し、墳丘復元の可能性について提示しておきたい。

今回の調査の結果得られた墳丘復元に資する知見を列挙すると以下のようになる。

1. 北墳丘よりも北側に墳丘が広がる可能性は低い【1・2トレンチ】
2. 前庭部付近より流出したと考えられる須恵器群により、北墳丘の東側への広がりが限定できる【10トレンチ】
3. 北墳丘・南墳丘ともに、現況の頂部より東側には盛土が多くなされ、西側ではほとんど盛土が確認できない【4・5(延長)・6(拡張)・9(拡張)・12・13トレンチ】
4. 墳丘東側で検出した盛土の平面外形線は、現況の土地区画に並行して南北方向に伸び、そこから北墳丘に向かって屈曲する【6(拡張)トレンチ】
5. 東側は段々畑の下段まで墳丘が広がる可能性は低い【7・11トレンチ】
6. 墳丘南端を画する隍は、直線的に伸びる【9(拡張)トレンチ】
7. 南端の隍は旧地形に沿って西から東へ傾斜しており、9トレンチより西側では削平されている【8トレンチ】
8. 墳丘南側の東西市道より、さらに南側に墳丘が伸びる可能性は低い【3トレンチ】
9. 南墳丘にも何らかの埋葬施設が構築されていた可能性が高い【13トレンチ】
10. 北墳丘と南墳丘は連続したもので、その間を画するような遺構は現状認められない【12トレンチ】

以上の知見から、條ウル神古墳の墳丘はどのように復元することができるだろうか。

9は、北墳丘と南墳丘が全くの別古墳である可能性を示唆するが、3や10の成果から北墳丘と南墳丘は一体的なものである蓋然性が高く、南北に2つの埋葬施設をもつ1基の古墳であると考えられる。

そのように考えた場合、6の知見が墳形の可能性を大きく絞る材料となり、南側の墳端が直線を呈するという事は、それを一辺とする(長)方墳か、それを前方部前端とする前方後円墳の可能性が考えられる。この想定に1・2・5・8の知見を加えると、墳丘の範囲をかなり限定していくことが可能となり、長軸を北西-南東方向にもつ墳丘の姿が浮かび上がってくる。

では、この2つの可能性をさらに絞り込んでいくことは可能であろうか。4の知見が墳丘の本来の形状を考える上で重要な成果と成り得るが、北墳丘に向かって屈曲しているラインを南端の隍へ向けて延長していくと直角に近い鋭角を示し、前方部側辺とも(長)方墳の一辺とも成り得る。そ

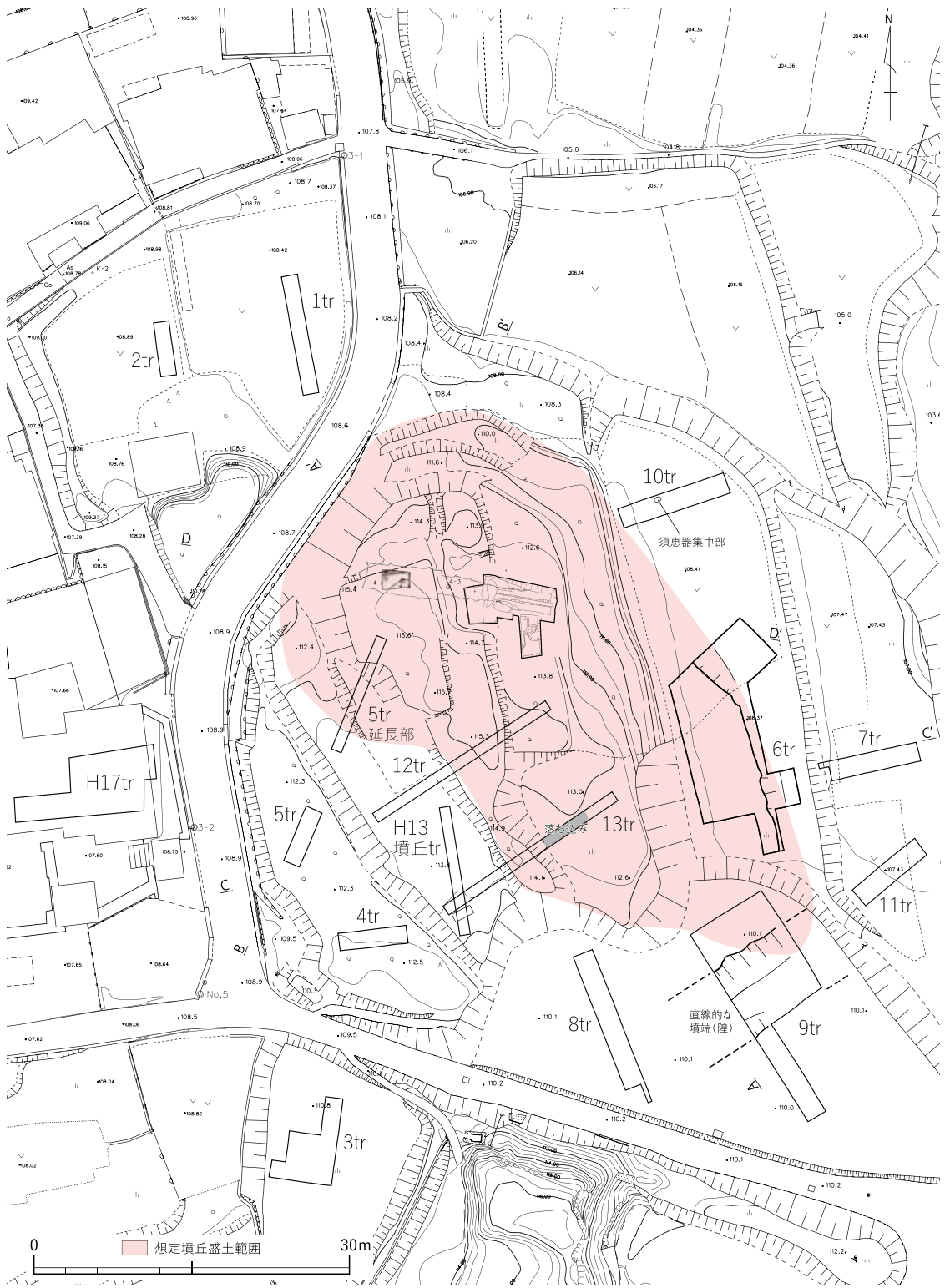


図 93 調査成果と理想墳丘盛土範囲

のため、この知見をもってどちらかに絞り込むことは難しいと言わざるを得ない。

そこで、北墳丘に構築された横穴式石室の開口方向に着目すると、(長)方墳と考えた場合、開口方向が長辺に対して大きく斜交する点が問題となり、前方後円墳と考えた場合、この開口方向がくびれ部を意識した開口方向と解釈できる。

ただし、(長)方墳であっても、横穴式石室の開口方向が斜交する事例も存在するため、上記の点だけをもって(長)方墳の可能性を完全に破棄することもできない。⁽¹⁴⁾ 今後、両可能性を念頭に、さらなる確認調査を行っていく必要がある。

墳丘の各所断面における盛土と地山の関係についてみると(図94)、まだ想定部分が多いものの、短軸方向でみた場合、3の成果のとおり墳丘東側にかなり厚みのある盛土がなされていることがわかる。北墳丘の横穴式石室や南墳丘で検出した埋葬施設の可能性が考えられる落ち込みが、旧地形の尾根頂部より東側に設けられているように見受けられることからすると、古墳築造時の意識自体が、尾根上への築造ではなく、尾根東側斜面における築造であった可能性も想定できる。そのように考えた場合、墳丘の平面形を整った左右対称形に考えることは困難ともいえる。

墳丘復元を行う場合、平面的な墳形だけでなく墳丘の立面観も重要な検討課題となる。今回の調査で得られた墳丘立面観に迫り得る成果は少ないが、6トレンチと9トレンチで検出した盛土の比高差については、注意を払っておく必要がある。いずれも上面がある程度の削平を受けていることが想定されるが、6トレンチの墳丘盛土上面の標高は108.35m、9トレンチの墳丘盛土上面の標高は109.65mであり、そこには1.3m程度の差が存在する。このことは、旧地形の傾斜と同様、

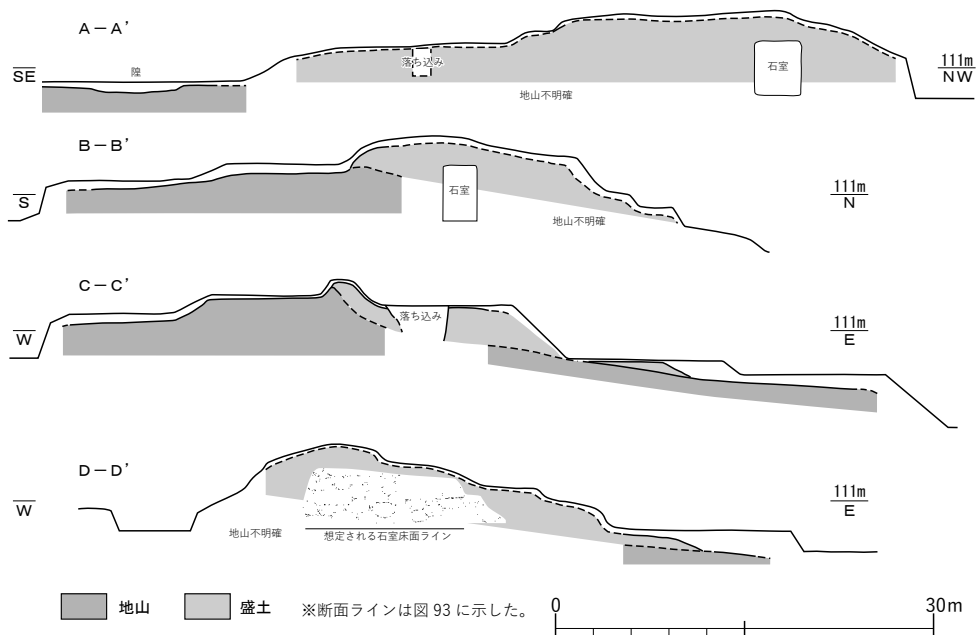


図94 墳丘盛土と地山の関係模式図

南から北へ向けて墳丘が傾斜していた可能性を想定させるとともに、現状では不明確であるものの、築造当初の段築構造を反映している可能性も考えられよう。埋葬施設の開口部などいかに総合的に理解できるか、今後の大きな課題の1つである。

なお、墳丘に伴う外表施設については、現状で明確なものは検出できていない。特に葺石については、いずれの調査区においても転落石を含め全くその兆候は認められなかった。加えて、埴輪列の樹立に関しても今回までの調査で確実な樹立痕跡は認められていない。中世以降の盛土中などに埴輪の破片は比較的多く認められるものの、それらには資料としての形態的なまとまりがあまり認識できず、非常に雑多な印象を受ける。條ウル神古墳に少数立てられた埴輪資料が含まれている可能性を完全に否定するものではないが、大規模な群集墳が築造された巨勢山丘陵の先端部という立地を考慮すると、盛土構築などに際し、周辺古墳から資料が混入する可能性はかなり高く見積もることができる。現状では埴輪の樹立を積極的に肯定する材料は無いとしておきたい。

第2節 横穴式石室の評価と築造時期

條ウル神古墳を特徴付けている最大の要素は、やはり北墳丘内に構築されている横穴式石室である。本節では、條ウル神古墳の横穴式石室の特徴を整理するとともに、既存の研究を参照しつつその時期的な位置づけを行いたい。

まず、條ウル神古墳の横穴式石室の規模がどの程度のものであるのかを整理するため、大和における大型横穴式石室の玄室規模を一覧表にしたものが、表9である。⁽¹⁵⁾これに基づいて他の玄室と規模を比較してみると、長さの7.1 m+という数値は、大王陵と目される橿原市五條野丸山古墳の8.3 mを破格の例外とすれば、大和の中では最長級の数字となる。皇族や有力豪族の盟主が被葬者に想定されている斑鳩町藤ノ木古墳、広陵町牧野古墳、桜井市赤坂天王山古墳、橿原市植山古墳（東石室）、天理市ウワナリ塚古墳などと比較しても、その長大さは卓越している。

しかし、幅の2.6 m+という数値を見てみると、ここでも五條野丸山古墳は4.1 mと例外的な数値であるが、牧野古墳など3.0 m前後の数値をもつ玄室が少なからず存在するなかで、條ウル神古墳の数値はやや小さい部類といえる。

高さの数値を見ていくと、條ウル神古墳の4.2 mという数値は、牧野古墳や植山古墳（西石室）にみられる4 m代後半の数値には及ばないものの、葛城市二塚古墳（後円部）や藤ノ木古墳、赤坂天王山古墳、桜井市越塚古墳などと4 m前後で並んでいる。多くの玄室は3 m前後より小さな数値になっており、條ウル神古墳は高さの点でもより大きな部類に入っていると言える。

このように見ると、條ウル神古墳の玄室は、長さ高さの点で大和の他の玄室と比較しても非常に規模の大きなものであるが、幅に関しては他の玄室に比べてやや狭いものであることがわかる。これは言い換えると、玄室の平面形が他の古墳に比べて非常に細長い形態をしているということであり、後節で述べる條ウル神古墳築造の歴史的意義にも大きく関わりうる特徴と評価できる。

表9 大和の大型横穴式石室一覧

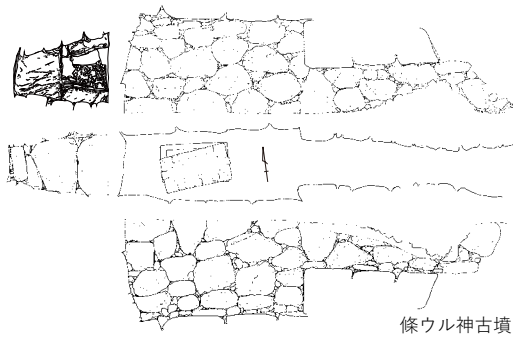
地域	古墳名	玄室			太田 2011 (群)	割抜式家形石棺蓋					須恵器
		長 (m)	幅 (m)	高 (m)		突起型式	全長 (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	平坦面指数	
條	条池南	6	1.8	—	—	1・2	235	142 (120)	47	29	T K 10
	条池北	4.8	2.44	—	—	—	—	—	—	—	T K 43
	條ウル神	7.1+	2.6+	4.2	5	1・2特	278 (267)	145	52.4	37	—
巨勢谷	市尾墓山	5.87	2.6	3	3	0・2	(272)	170 (144)	50	22	MT 15
	権現堂	5.8	2.2	2.0+	4	0・2	(225)	137 (118)	55	24	MT 85
	市尾宮塚	6.3	2.4	2.85	5	?・2	—	132 (116)	49	24	MT 85
	水泥塚穴	5.6	2.95	3.3	6	—	—	—	—	—	—
	水泥南	4.6	2.2	2.5	7	玄 2・2 羨 2・2	玄 (224) 羨 244 (238)	玄 148 (137) 羨 (129)	玄 58 羨 55	玄 43 羨 45	—
	新宮山	6.3	2.5	3	7	2・2	239 (230)	119 (113)	46	33	—
葛城	笛吹神社	6	2.4	2.6+	3	0・2	—	209 (158)	—	19	—
	二塚 (後円)	6.73	2.98	4.1	5	—	—	—	—	—	MT 85
	平林	5.7	3.3	3.8	6	—	—	—	—	—	T K 43
平群谷	椿井宮山塚	4.25	3	3.1	1	—	—	—	—	—	—
	勢野茶白山	4.6	2.5	3.4	2	—	—	—	—	—	T K 10
	柿塚	5.2	3.2	3.3+	2	—	—	—	—	—	—
	烏土塚	6	2.8	4.3	6	—	—	—	—	—	T K 43
	ツボリ山	4.2	2.4	2.45	7	1・2	251 (230)	137 (116)	69	45	—
天理	星塚 2号	4.7	2.3	1.9+	4	—	—	—	—	—	T K 10
	東乗鞍	5.7	2.4	3.3	5	0・2	—	(143)	—	17	—
	石上大塚	6.3	2.65	2.8+	5	—	—	—	—	—	—
	ウワナリ塚	6.85	2.85	3.6+	7	—	—	—	—	—	—
斑鳩	藤ノ木	6.04	2.67	4.28	5	0・2	(230)	133 (130)	54	36	T K 43
	小泉狐塚	4.8	2.2	2.2	5	—	—	—	—	—	T K 43
	仏塚	3.86	2.04	2.65	6	—	—	—	—	—	T K 43
桜井	珠城山 1号	3.4	1.55	1.9	4	—	—	—	—	—	MT 85
	珠城山 3号	4.66	2.14	2.7	5	—	—	—	—	—	T K 43
	赤坂天王山	6.5	3.1	4.2	6	1・2	264 (251)	170 (157)	56	47	—
	越塚	5.3	2.75	4	7	—	—	—	—	—	—
	文殊院東	4.7	2.5	2.5+	7	—	—	—	—	—	—
	コロコロ山	5.35	2.4	2.6+	7	—	—	—	—	—	T K 43
飛鳥	真弓籬子塚	6.5	4.1	4.3	2	—	—	—	—	—	MT 85
	与楽籬子塚	4.2	2.9	4.2	3	—	—	—	—	—	—
	沼山	4.95	2.95	4.25	3	—	—	—	—	—	T K 43 ?
	打上	5.1	2.55	2.5	6	—	—	—	—	—	—
	植山 東	6.5	3.1	2.9+	6	1・2	270 (260)	(156)	62	33	—
	植山 西	5.2	2.5	4.5	—	—	—	—	—	—	—
	都塚	5.3	2.75	3.55	7	1・2	236 (233)	162 (159)	64	31	—
	与楽カンジョ	6	3.7	5.3	7	—	—	—	—	—	—
	五條野丸山	8.3	4.1	4.0+	7	前 1・2 奥 1・2	前 293 (280) 奥 268 (249)	前 144 奥 144	前 65 奥 43	前 35 奥 43	—
他	牧野	6.7	3.25	4.5	7	—	(223)	132	51	37	T K 209

() 内は縄掛突起を除く数値

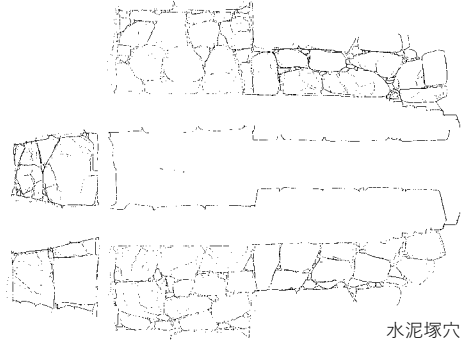
では、條ウル神古墳の横穴式石室の築造時期はどのように考えることができるだろうか。

條ウル神古墳の横穴式石室は、右側の袖石が立石上に扁平な石材をもう1石載せていることから、白石太一郎による横穴式石室編年における「平林式」に該当すると考えられる(白石 1999)。ただし、白石の設定する「平林式」は、玄室の左右側壁が5段前後、奥壁が4段前後のものが多いとされているのに対し、條ウル神古墳は側壁・奥壁共に概ね3段で構成されているため、それらの点は後続する型式である「天王山式」に近い要素ともいえる。⁽¹⁶⁾

横穴式石室の各部位を複数の変異に分類し、その組み合わせによって大型横穴式石室をいくつかの群に分けた太田宏明は、條ウル神古墳の横穴式石室をその中の5群に位置づけている(太田 2011)。5群の石室は、藤ノ木古墳や高取町市尾宮塚古墳、二塚古墳(後円部)などが該当し、袖



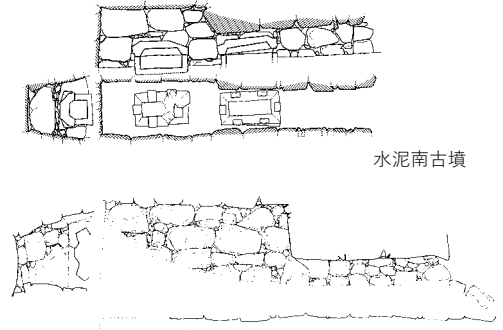
條ウル神古墳



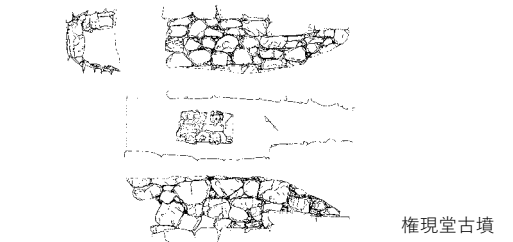
水塚塚穴古墳



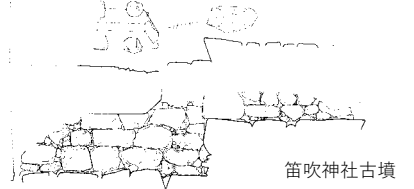
市尾墓山古墳



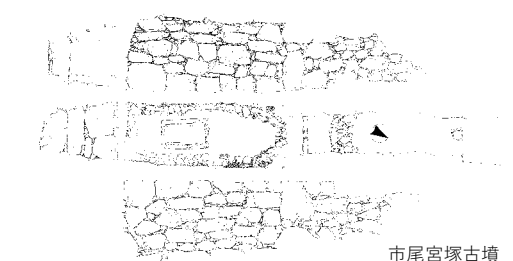
水塚南古墳



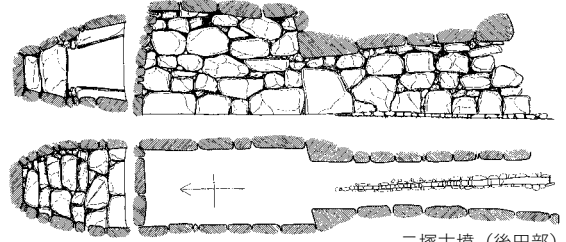
権現堂古墳



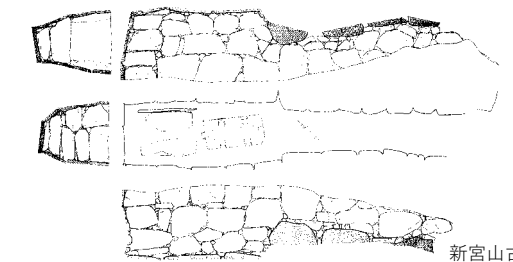
笛吹神社古墳



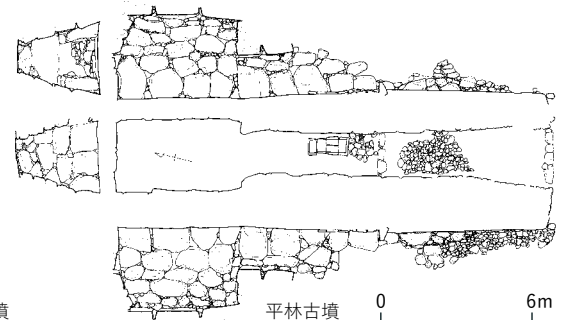
市尾宮塚古墳



二塚古墳 (後円部)



新宮山古墳



平林古墳



図95 大和の大型横穴式石室(1)

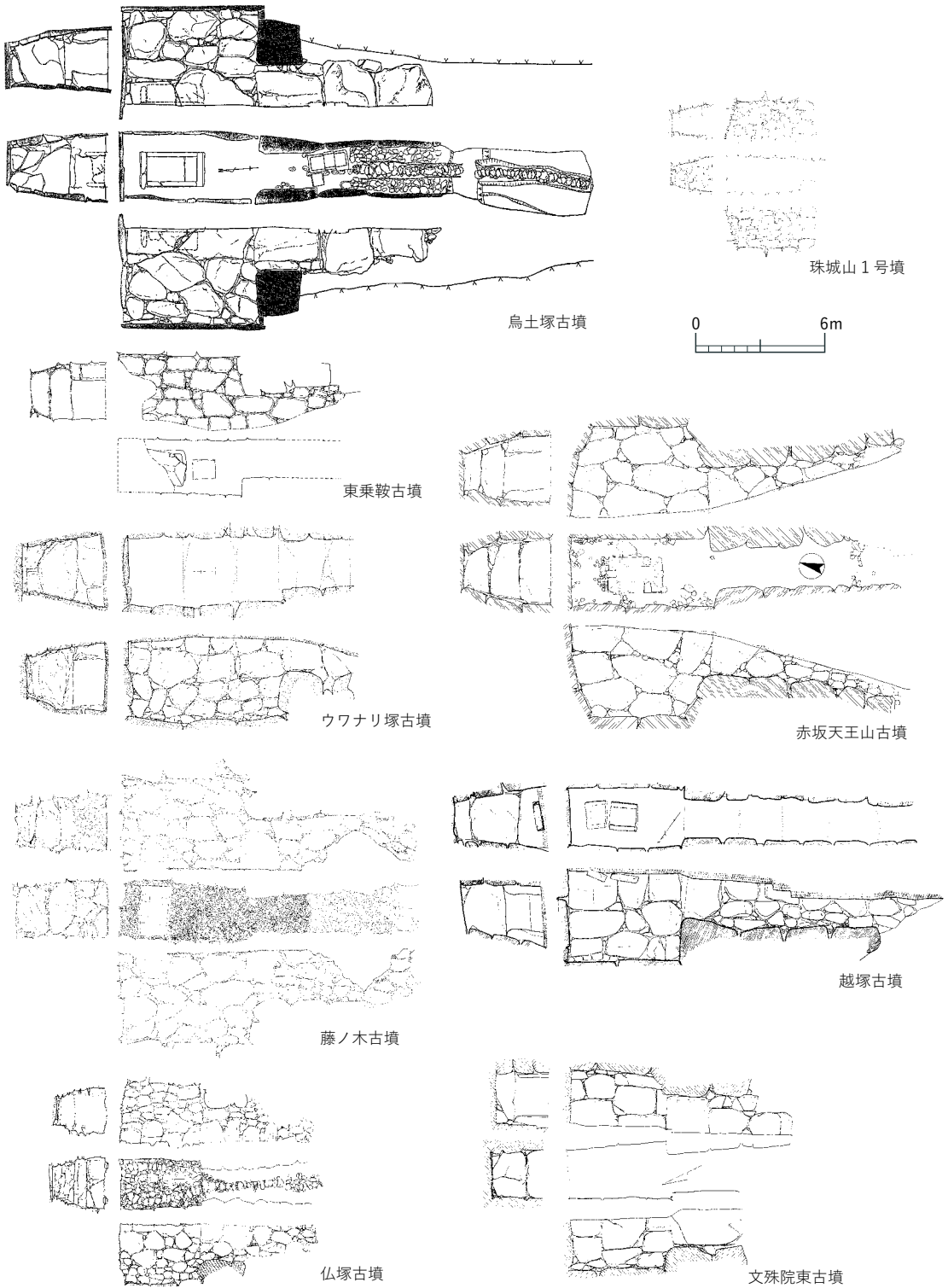


図96 大和の大型横穴式石室（2）

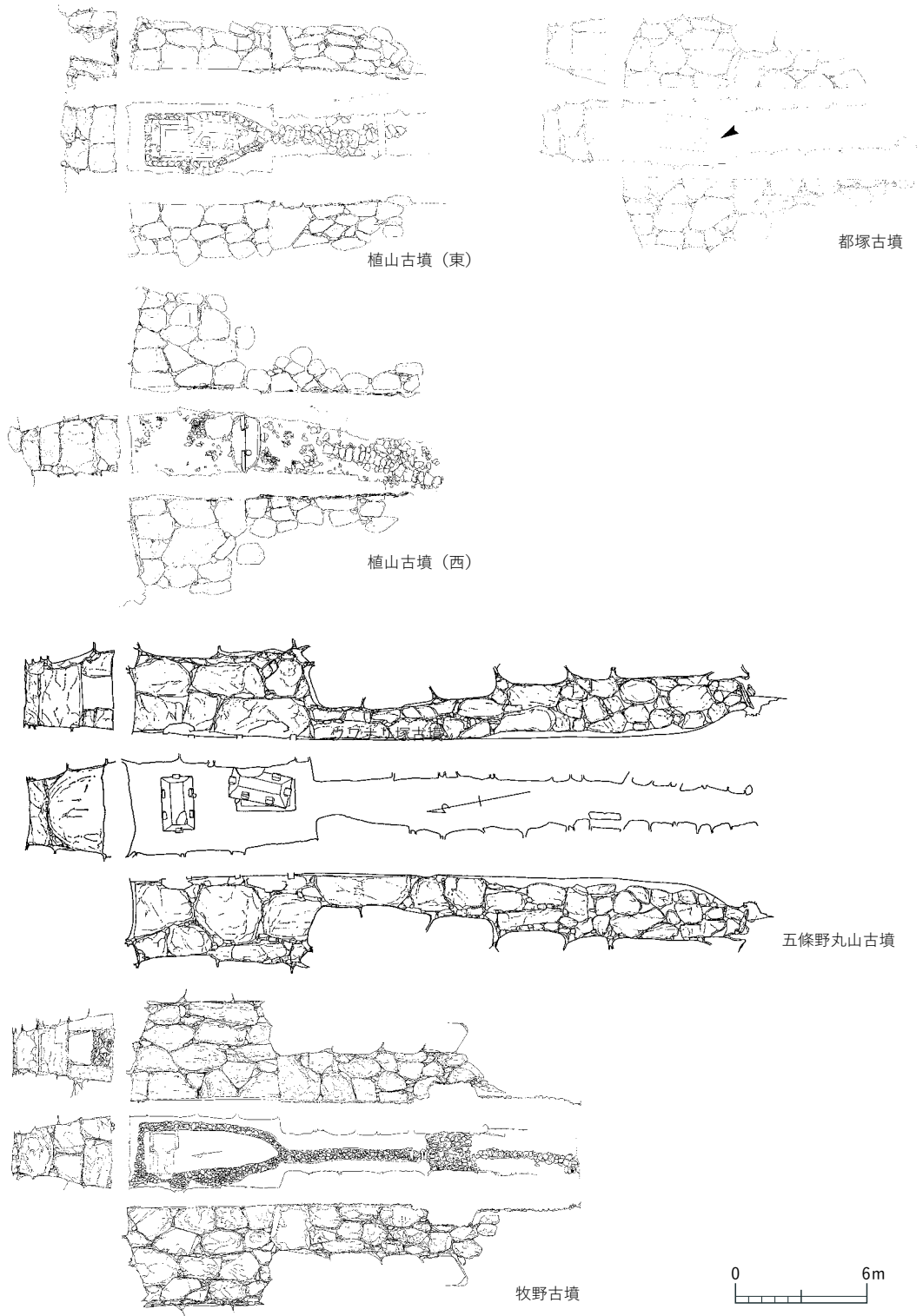


図97 大和の大型横穴式石室（3）

部は天井部を直接支えない立石を採用し（S.3類）、羨道側壁は袖部よりも小型の石材を使用する（S.S.2もしくは3類）一群である。この5群の石室には、玄室側壁や主軸断面形態の違いで個体間の時期差が認められるとされており、扁平な石材をブロック状に横位に据えて比較的目地が通るように積むもの（G.S.2類）と長さが高さが同程度の大型化した石材を用いて床面から天井石まで3～4段にわたって目地を通さないように積むもの（G.S.3類）では後者がより新しく、羨道高に対する玄室高の比率が低いものと高いものでは高いものがより新しいとする。この点では、G.S.3類であり、羨道高に対する玄室高の比率が高い條ウル神古墳は、5群の中でもより新しい時期に位置づけることができる。5群の石室からは、MT85～TK43型式期の須恵器が出土している。

このように條ウル神古墳の横穴式石室は、概ねTK43型式期に築造された石室に近い特徴を有しており、実年代では6世紀後葉頃とすることができよう。

続いて、横穴式石室以外の要素によって、その時間的位置づけの妥当性を確認する。

まず玄室内に納められた家形石棺であるが、和田晴吾は條ウル神古墳の家形石棺を「刳抜1・2型式a類」の変形と推定している（和田1976）。⁽¹⁷⁾編年指標として重視されている蓋の頂部平坦面指数をみると、條ウル神古墳の家形石棺は37となる。これに近い数値をもつ資料は、新宮山古墳や藤ノ木古墳、植山古墳（東石室）、五條野丸山古墳（前棺）、牧野古墳があり、6世紀後葉から末葉にかけての事例が多く、石室から推定される時期と大きな齟齬はない。⁽¹⁸⁾

また、10トレンチで検出した、前庭部より流出した可能性を想定した須恵器群をみると、器種が限定的であり、かつ残存状況も良好ではないものの、三方透かしをもつ長脚二段高坏の存在などは、石室から推定される時期の資料として大きくは問題ないものといえる。

検討しうる材料に限りはあるものの、以上のように考えると、條ウル神古墳の築造時期は、須恵器型式でいうところのTK43型式期頃に比定することができるだろう。ただし、前章第4節においてガラス玉の分析を行った大賀は、B類が一定数存在する條ウル神古墳の組成は、TK209型式期の代表例として位置づけられる牧野古墳などから認められるものであるため、その位置づけについて注意を促している。現時点において、ガラス玉の組成だけをもって條ウル神古墳の築造年代をTK209型式期まで下げて考えることは躊躇せざるをえないが、上述した石室壁体構成や家形石棺にみられるやや新しい要素は、大賀の指摘と触れあうものと評価できる可能性も残されている。條ウル神古墳の、副葬品なども踏まえた厳密な時期比定は、今後の課題としておきたい。

第3節 條ウル神古墳築造の歴史的意義

上記の通り、條ウル神古墳は墳丘に関する情報が未だ不十分ではあるものの、北墳丘に構築されている横穴式石室が古墳時代後期後葉の大型横穴式石室の中でも最大級の規模を備えていることから、大王を含む政権中枢と強い関係性をもっていたものと想定され、当該期の政治・社会状況を考える上で重要な事例といえる。加えて、南墳丘にも北墳丘の横穴式石室とは異なる埋葬施設が存在

する可能性が高く、今後の調査成果によって当該期の埋葬習俗を考える上で希少な事例でもある。

家形石棺をみても、その規模は大王墓と考えられる五條野丸山古墳に納められた石棺に匹敵し(表9)、條ウル神古墳の勢威を量るうえで重要な要素といえよう。

しかしながら、條ウル神古墳の全貌は未だ明らかになっていないとはいえず、その歴史的意義をより具体的に論じるには取り組むべき課題が山積している。そのため以下では、條ウル神古墳築造の歴史的意義を考える上で重要となる「被葬者像」について、今までの見解を整理しておきたい。

既に述べたとおり、條ウル神古墳の横穴式石室は、6世紀代の大型横穴式石室が集中する大和地域の中でも最大級の規模であるため、必然的にその被葬者像についても当時の権力構造の中で優位にあった勢力が想定され、その内容によって條ウル神古墳が当該期に占める歴史的意義は大きく変わってくる。

被葬者像に関わって従前より強く主張されてきた見解として、当時の有力氏族である巨勢氏と結びつける意見がある。巨勢氏は、武内宿禰を祖とする古代豪族の1つで、氏寺である巨勢寺跡が存在するように、御所市から高取町にかけてのいわゆる巨勢谷地域を本拠地としていた氏族と考えられている。巨勢氏に関わる事績は、古墳時代後期の継体大王擁立に関わって文献に現れるようになり、その後は平安時代まで高級官僚を輩出していた名門氏族といえる。

巨勢谷地域には、複数の大型横穴式石室をもつ古墳が存在しており、高取町市尾墓山古墳を嚆矢とし、権現堂古墳、市尾宮塚古墳、新宮山古墳、水泥塚穴古墳、水泥南古墳と、少しづつ時期の異なる大型横穴式石室が連続と築造されている。全てを単一の系譜で理解できるかどうかは即断できないものの、巨勢谷という地理的にもそれほど広がりがない地域に凝集する在り方から、これらを巨勢氏の首長墓系譜とする理解が1つの定説⁽¹⁹⁾となっている。

條ウル神古墳の立地する場所は、厳密には巨勢谷地域から大口峠を越えて奈良盆地へ出てきた位置にあたり、巨勢谷地域の中に含みこんで理解できるかは判然としない。しかし、この條ウル神古墳が巨勢氏と関連付けて語られるのは、横穴式石室のある特徴が巨勢谷地域の横穴式石室と共通するためである。その特徴とは、先にも述べた條ウル神古墳の非常に細長い玄室形態である。

この細長い玄室形態に着目し、巨勢谷地域のまとまりを最初に論じたのは河上邦彦である(河上1979・1992・1995)。河上は、巨勢谷地域の横穴式石室を検討する中で、水泥の2古墳を除いて、狭長であり高さのない玄室に加えて、羨道の天井石が羨門に向かって段々と高くなるように架構していることが巨勢谷地域の特色であると結論付けている。

一方で坂靖は、河上と同様に巨勢谷地域の石室のまとまりを認めているものの、その要素としては、玄室高の低さと奥壁・前壁を緩やかに持ち送るという玄室縦断面形態を挙げており、玄室平面形の長大さは重視していない⁽²⁰⁾(坂2017)。

これらの要素に注目して條ウル神古墳の石室を見てみると、河上が指摘する狭長な点は巨勢谷地域の横穴式石室と同様であるが、両氏が指摘する玄室高の低さの点では巨勢谷地域のような低いも

のではなく、他地域の横穴式石室と比べても高い玄室高となっている。そして、河上が指摘した羨道天井石の様相は、やや羨門に向かって高くなっているようにも見受けられるが、巨勢谷地域の石室と比べると、その上がり方は緩く感じられる。坂が指摘した玄室縦断面形態については、奥壁は緩やかに持ち送るものの、前壁は一石で架構していることもあり垂直に近い様相を呈す。

このように、必ずしも各氏が考える巨勢谷地域の特徴と一致しない條ウル神古墳の石室であるが、藤田、河上の両氏は、長大な玄室平面形を重視し、巨勢氏との関係性を指摘している（御所市教育委員会編 2003）。加えて藤田は、巨勢谷地域の石室の指標と異なって條ウル神古墳の玄室が高い点については、太田宏明の研究を踏まえつつ（太田 2003・2011）、大和地域全体に共通する時期的な傾向と判断することで、條ウル神古墳の石室を巨勢谷地域の横穴式石室の系譜の中に位置づけるとしている（藤田 2016）。そしてさらに、條ウル神古墳の縄掛突起を長辺に 3 対設ける非常に「特異な」家形石棺と、巨勢谷地域の権現堂古墳に納められた石枕を作りつけた「特異な」家形石棺が條ウル神古墳にほど近い糸池南古墳においても認められることを関連付け、二上山白色凝灰岩を用いた石棺製作自体を巨勢氏が差配し、その巨勢氏が被葬者であるからこそ、「特異な」家形石棺がこの條の複数の古墳に認められると考える。この議論の是非は、石棺製作集団の存在形態など波及する問題が多いため、ここで深く踏み込むことはできないが、條の古墳全体に対して歴史的評価を与える意欲的な試みと評価できる。

ただし、坂が近年の研究において、條ウル神古墳の石室を自身の設定する「葛城型」の石室に含み込む考えを提示しており（坂 2017）、決して條ウル神古墳の被葬者に関する議論は、定見を得ているわけではない⁽²¹⁾。條ウル神古墳の被葬者をいずれの氏族とみるかによって、その歴史的意義が大きく異なるものとなることは明らかであり、今後更なる検証を行っていく必要がある。

第 4 節 今後の課題

前節まで、今までの調査成果に基づく條ウル神古墳の評価をいくつかの視点から行ってきたが、ここではそれら評価の是非にも関わる課題点を整理し、今後につなげていきたい。

まず大きな課題の 1 つとしては、より確実性の高い墳丘復元である。第 1 節で述べたように、現状の調査成果では、平面形は前方後円墳ないしは（長）方墳の可能性が高いと考えられる。しかし、その可能性をさらに突き詰めていくためには、北墳丘北限の確定および前方後円墳の可能性の是非を確かめるためのくびれ部の確認がまずもって必要となろう。しかし、現在の條ウル神古墳はその大半が民有地であるため、発掘調査の方法には一定の制約が伴う。そのため、これら課題の解決を目指した追加調査を行うためにも、早急な公有化を図り、調査方法の制約を取り除いた上で改めて確認調査を行っていく必要がある。

また、13 トレンチで検出したもう 1 つの埋葬施設の実態についても、追及していく必要がある。今回の調査では、横穴式石室の可能性を想起させる花崗岩の破片や、刳抜式家形石棺の可能性が考

えられる凝灰岩の破片が出土しており、北墳丘の横穴式石室と規模や時期などについてどのような関係にあるのかは、條ウル神古墳の歴史的な評価を行う上で非常に重要な課題である。

加えて、北墳丘の横穴式石室の再調査についても今後の課題として挙げておきたい。既に1次調査から15年以上の歳月が流れているが、現在もほぼ手つかずの状態です。石室床面の副葬品が現地に残されていることは間違いない。堆積土によってある程度劣化は抑制されていると思われるものの、雨水の浸透などによる堆積環境の変化は繰り返し生じていると想定され、いつまでも1次調査時の検出状態で保たれているという保証は無い。この規模の横穴式石室で、仮に全く荒らされていない石室床面の調査となると、発掘調査後の金属製品の適切な保存など多種多様なコストが必要となり、軽々にそういった調査に踏み切ることが得策ではないが、昨今の異常気象による古墳の損傷事案なども考慮に入れると、條ウル神古墳の適切な保存活用を考える場合に、避けて通れない大きな課題である。

條ウル神古墳の周辺にも目を向けた場合、至近の距離に築造されている巨勢山古墳群条池支群の横穴式石室墳との関係についても、もう少し詳細な比較検討が必要である。条池支群に築造されている条池北・南古墳の両墳については、古くに発掘調査が行われているものの、その成果報告は概報に留まっており（田中1984）、墳丘も含めた詳細を比較できる状態ではない。條ウル神古墳と関係があるのかないのか、あるとしたらどのような関係が想定できるのか、歴史的な評価にもつながる問題であるため、条池支群の調査成果の公開についても條ウル神古墳の課題の1つと捉えておきたい。

第5節 條ウル神古墳の保存と活用

最後に條ウル神古墳の今後の保存と活用に関して触れておく。

既に述べたとおり、御所市は平成24年に「秋津地区史跡整備基本計画」を策定した（御所市教育委員会2012）。この計画は、国史跡である宮山古墳、巨勢山古墳群、並びに重要遺跡である條ウル神古墳を適切に保存し、周辺の良い風致景観を保全するとともに、古墳を中心とする公園的空間として整備することで、県民はもとより広く国民の利用に供することを目的としており、今回の一連の範囲確認調査は、その一環として、まず條ウル神古墳の実態を明らかにするために行ったものである。

條ウル神古墳の周辺地域は、多くが條集落の宅地や農地となっており、今までは開発の波が喫緊の課題となることが少なく、古墳の保存に関して特別な対策を講じる必要性が低かった。また、国見山景観保全地区や農業振興地域、宅地造成工事規制区域でもあるため、土地利用や景観の面で大幅な改変が行われにくい地域である点も古墳の保存にとっては有利な点である。しかし、古墳の西側を南北に縦断する形で京奈和自動車道が開通し、国道309号線の北側には御所南IC・PAが建設されたことで、條ウル神古墳周辺にも少しずつ開発の波が及ぶようになってきている。

條ウル神古墳は、報告のとおり、全国的にみても屈指の規模を誇る横穴式石室をもち、その歴史的重要性については前段で述べたとおりである。残存する横穴式石室の保存をより確固たるものとするためにも、未発掘の石室床面上遺物の保全についても考慮に入れながら、早急な国史跡への指定を図っていく必要がある。

また、條ウル神古墳を含む秋津地区の古墳群は、大型横穴式石室をもつ古墳がまとまる葛地区や掖上罐子塚古墳などがある掖上地区と合わせ、日頃から散策者の絶えない周遊ルート上に位置する。加えて、上述の御所南ICが建設されたことで、秋津地区への自動車によるアクセス性は格段に良くなっており、古墳近傍までのアプローチ道路や各種便益施設を効果的に整備することで、観光分野における活用を期待することができる。

條ウル神古墳という全国的にも注目度の高い文化財をより効果的に活用していくためには、古墳の全貌をさらに追及し、適切な保存を図った上でその成果を分かりやすい形で公開していくことが望まれる。前述の墳形の確定や埋葬施設の再調査などの課題に取り組む際には、後の活用についても視野に入れながら慎重に行っていく必要があろう。

註

- (1) 側壁の左右は、奥壁から玄門方向をみた際の左右で呼ぶこととする。
- (2) 玄門側から奥壁側へ傾斜する斜め方向の目地のようなものが見受けられるが、明確ではない。
- (3) 元興寺文化財研究所へ委託した保存処理の過程で指摘いただいた。
- (4) 図13に掲載した三次元計測画像については、奈良県立橿原考古学研究所にご協力頂いた。
- (5) 以下に記したガラス小玉の材質や製作技法に関する所見は、奈良女子大学の大賀克彦氏よりご教授いただいた。
- (6) 以下に記した石材の種類については、奥田尚氏の鑑定結果に基づく。
- (7) ラミノグラフィ測定は、大型放射光施設 SPring-8 の設備を利用した。大型放射光施設 SPring-8 ではビームライン BL20XU に設置された測定装置を利用し、放射光 X 線ラミノグラフィ測定をおこなった (課題番号: 2017B1339)。試料を BL20XU の高精度ステージに固定し、試料を回転させながら X 線透過像を高分解能 CCD で取得し、得られた透過像をコンピューターによる演算処理によって三次元ラミノグラフィ像に再構築した。試料の回転面と入射 X 線との角度は 30° に設定し、回転のステップは 0.1° 、1 枚あたりの露光時間は 1 秒であった。1 試料あたり 3600 枚の透過像を得た。X 線エネルギーは 37KeV とした。測定視野は 1.04mm であった。
- (8) No.11 - 145 の Al_2O_3 は 6.9%、No.20 - 94 の CaO は 2.1% と集中する範囲から外れるが、偶発的な変異の可能性が高い。
- (9) No. 8 - 64 の CaO は 7.6% と集中する範囲から外れるが、偶発的な変異の可能性が高い。
- (10) 古墳時代後期に関する実年代観を修正したため、現在は Group SIIC の出現時期を 6 世紀後葉まで遡らせて考えている。この点に関しては、別稿で取り上げる予定である。
- (11) 太田 (2011) における横穴式石室の分類は、必ずしも単線的な年代的順序としては提示されていない。しかし、この点を徹底した場合、論者間の比較が不可能となることから、ここでは便宜的にこのように取り扱う。
- (12) シンヨツカ古墳が牧野古墳に後続する可能性は森本 (2013) も指摘している。
- (13) Group SIIC は組成するが、Group LIIB は含まずに、牧野古墳と同じ段階へと位置付けられる資料として飛鳥寺塔心礎出土のガラス小玉がある (奈良文化財研究所飛鳥資料館 2016)。また、古墳出土資料としては、畿外の事例であるが、鳥根県上塩治築山古墳が挙げられる (田村 2018)。
- (14) 著名な例として、橿原市植山古墳西石室が挙げられる。この石室は、石室主軸と墳丘長辺のなす角度が約 60 度を測り、ほぼ直角に開口している東石室とは対照的な有り様といえる (石坂編 2014)。
- (15) 表は、條ウル神古墳との比較を目的とするため、太田宏明の 7 群までの資料を対象とした (太田 2011)。また、地域区分に関しては、河上邦彦の研究を参考とした (河上 1979)。
- (16) 條ウル神古墳の左側の袖石は、右側の袖石と異なり一石で前壁に到達しているが、上部の面が狭いため、隣接する羨道側壁を合わせた 2 石で前壁を支えているように見受けられる。この一石で前壁に到達している点は「天王山式」の特徴に近い要素ともいえるが、やや不完全な一石化と評価できる。こういった不完全な袖石一石化の状況が観察できる例としては、赤坂天王山古墳が挙げられ、牧野古墳の左袖部もそのように捉えられるかもしれない。ただし、これら古墳のもう一方の袖部は、完全な一石化を果たしており、その点で條ウル神古墳とは異なっている。また、明日香村都塚古墳については、左右の袖がどちらも不完全な一石化の状態となっており、これもまた條ウル神古墳とは異なる様相といえる。上述のような特徴をもつ條ウル神古墳は、袖部の左右でやや構造が異なっているといえるが、こういった例としては、赤

坂天王山古墳や牧野古墳に加え、新宮山古墳、五條野丸山古墳などが挙げられる。これらは片側の袖石が完全な一石化を遂げている一方で、もう片側の袖石は立石の上にさらに扁平な石材を積んでおり、「平林式」と「天王山式」の中間的な様相と評価できる。横穴式石室の時期的な変遷を考える上で重視される袖部構造であるが、具に見ると非常に多様な在り方をしており、今後も慎重に議論を重ねていく必要があろう。

- (17) 條ウル神古墳の石棺は、和田晴吾の分類方法に準拠すると「刳抜1・3型式」となるものであるが、類例が無いためか、和田はそのような型式設定は行わず、「刳抜1・2型式a類」の変形と推定している(和田1976)。確かに、和田の研究から40年以上が経過した現在においても、「刳抜1・3型式」に該当する資料は、畿内では條ウル神古墳以外に確認されていない。畿外に目を転じると、山田隆文が、奈良県ハミ塚古墳の家形石棺を考察するにあたり、蓋長辺に3対の縄掛突起を設ける資料の集成を行い、その中で静岡県賤機山古墳や同駿河丸山古墳、鳥根県矢田一群3号横穴や熊本県檜崎古墳2号石棺を「刳抜1・3型式」として挙げている(山田2003)。しかし、藤田和尊が既に指摘しているように(藤田2016)、これら畿外の資料は、九州型家形石棺や舟形石棺の影響を強く受けているとみられ、無批判に條ウル神古墳の資料と同列に扱うことは躊躇される資料群である。そのため、「刳抜1・3型式」が型式として成立するか否かは、今後の資料の増加を待つて検討する必要がある。
- (18) 和田晴吾は、「刳抜1・2型式a類」から「同b類」「同c類」へ分化する変化の流れを考えており、その変化の内容としては、平坦面指数が40を超え、蓋の斜面に付いていた縄掛突起が蓋の垂直面においてくるという点は共通しつつ、縄掛突起の形態が断面正方形へと定型化するものをb類、断面長方形に定型化するものをc類とした。そしてこの分化が達成される時期を6世紀末頃(TK209型式期)と推定している(和田1976)。この視点で條ウル神古墳の石棺をみても、平坦面指数は40を超えず、長辺の3対の縄掛突起はまだ蓋の垂直面までおとってきていない点はa類に近いが、短辺の1対の縄掛突起が垂直面までおとってきている点はb・c類に近い要素といえる。このような長辺と短辺で縄掛突起の位置が異なる資料としては、新宮山古墳、植山古墳(東石室)、滋賀県甲山古墳などが挙げられる。このような資料を、「過渡期」の資料として評価できるかどうかは議論を要するが、條ウル神古墳の家形石棺が「刳抜1・2型式a類」の中でも比較的新しい特徴を有していると考えられることは出来るのではないだろうか。加えて縄掛突起の断面形態については、長辺のものが明らかに長方形を呈するのに対し、短辺のものは正方形を指向しており、b類とc類の両方の特徴が混在している資料とも捉えられる。和田は、a類からb・c類に分化する段階において、使用される石材がb類は二上山白色凝灰岩、c類は竜山石と明確に分離しているとされているが、現状の資料を見る限り、縄掛突起の断面形態が必ずしも使用される石材と一対一で対応するわけでは無いように見受けられ、その評価については今後の課題である。
- (19) 藤田和尊は、新宮山古墳に二上山白色凝灰岩製石棺が採用されていない点を重視し、巨勢氏の盟主墓とは考えず、群集墳である巨勢山古墳群に集められた集団の中のリーダー格の人物を想定している(藤田2016)。
- (20) 坂も、当初の研究では巨勢谷地域の石室の特徴として玄室の長大きさを挙げていたが(坂1999・2009)、後にその要素を地域の特徴からは除外している(坂2017)。
- (21) 玄室側面観をもとに型式分類を行った増田一裕は、條ウル神古墳の石室を主系列である氏分類のB型II類にあて、家形石棺の特徴からTK209型式併行期に位置づける。その上で、その被葬者像としては「立地的に巨勢臣系氏族との関係」を考えつつも、「天王山式石室のプロトタイプの形態をみせることから、皇子クラスの陵墓である可能性」も考慮に入れている(増田1996)。

参考文献

- 秋山日出雄編 1985『大和国古墳墓取調書』財団法人由良大和古代文化研究協会
- 秋山日出雄・網干善教 1959『室大墓』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第十八冊 奈良県教育委員会
- 網干善教 1959『御所市大字室 みやす古墳』『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第十二輯 奈良県教育委員会
- 網干善教 1961a『御所市森脇吐田平古墳群』『奈良県文化財調査報告(埋蔵文化財編)』第四集 奈良県教育委員会
- 網干善教 1961b『御所市古瀬「水泥運華文石棺古墳」及び「水泥石塚古墳」の調査』『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第十四輯 奈良県教育委員会
- 石坂泰士編 2014『史跡 植山古墳』橿原市埋蔵文化財調査報告第9冊 橿原市教育委員会
- 岩本 崇 2015『製作技術からみた龍文透彫帯金具の成立』『五條猫塚古墳の研究 総括編』奈良国立博物館
- 上田宏範・北野耕平・伊達宗泰・森浩一 1962『大和二塚古墳』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第21冊 奈良県教育委員会
- 梅原末治 1922『大和御所附近の遺蹟研究』『歴史地理』第参拾九卷 第四號 日本歴史地理學會
- 近江俊秀編 1993『鴨神遺跡-第2次~第4次調査-』奈良県文化財調査報告書第66集 奈良県立橿原考古学研究所
- 大賀克彦 2002『日本列島におけるガラス小玉の変遷』『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書V 清水町教育委員会
- 大賀克彦 2010a『群集墳築造の二つの契機』『遠山昭登君追悼考古学論集 遠古登攀』『遠古登攀』刊行会
- 大賀克彦 2010b『日本列島におけるガラスおよびガラス玉生産の成立と展開』『月刊文化財』第566号 文化庁文化財部
- 大賀克彦・田村朋美 2017『植物灰ガラスの多様性と生産地に関する考古学的研究』『日本文化財科学会第34回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会
- 太田宏明 2003『畿内型石室の変遷と伝播』『日本考古学』第15号 日本考古学協会
- 太田宏明 2011『畿内政権と横穴式石室』学生社
- 岡田憲一 2011『秋津遺跡第4次調査』『奈良県遺跡調査概報 2010年度』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田憲一・絹島歩・中東洋行 2013『秋津遺跡第6次調査』『奈良県遺跡調査概報 2012年度』第一分冊 奈良県立橿原考古学

研究所

- 岡田憲一・木村理恵 2015「秋津遺跡第7 - 3次調査」『奈良県遺跡調査概報 2014年度』第一分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田憲一・中野咲 2015「秋津遺跡第7 - 1次・7 - 2次調査」『奈良県遺跡調査概報 2013年度』第2分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田憲一・松岡淳平 2012「秋津遺跡第5次調査」『奈良県遺跡調査概報 2011年』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田雅彦編 2013『観音寺本馬遺跡Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第113冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 奥田智子 2018「畿内における片袖式横穴式石室の玄門の変化過程」『古代学研究』第217号 古代学研究会
- 金澤雄太 2015「條ウル神古墳」『大和を掘る 33 - 2014年度発掘調査速報展 -』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 河上邦彦 1978「御所市水泥塚穴古墳」『奈良県古墳発掘調査集報Ⅱ』奈良県文化財調査報告書第30集 奈良県立橿原考古学研究所
- 河上邦彦 1979「大和の大型横穴式石室の系譜」『橿原考古学研究所論集』4 吉川弘文館
- 河上邦彦 1992「大和巨勢谷の横穴式石室の検討」『有坂隆道先生古稀記念日本文化史論集』日本文化史論集刊行会
- 河上邦彦 1995『後・終末期古墳の研究』雄山閣
- 河上邦彦 2001「大和巨勢谷権現堂古墳の測量調査と副葬品（後期大型円墳の意義）」『実証の地域史 - 村川行弘先生頌寿記念論集 -』大阪経済法科大学出版部
- 河上邦彦編 1977『斑鳩・仏塚古墳』斑鳩町教育委員会
- 河上邦彦編 1984『市尾墓山古墳』高取町文化財調査報告第5冊 高取町教育委員会
- 河上邦彦編 1987『史跡牧野古墳』広陵町文化財調査報告第1冊 広陵町教育委員会
- 河上邦彦・亀田博・千賀久編 1976『葛城・石光山古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第31冊 奈良県教育委員会
- 河上邦彦・木下亘編 2004『巨勢寺』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第87冊 奈良県教育委員会
- 岸本直文 2011「横穴式石室の型式は被葬者の活躍期を示す」『考古学研究』第58巻第1号 考古学研究会
- 北中恭裕編 2007『極楽寺ヒビキ遺跡』奈良県文化財調査報告書第122集 奈良県立橿原考古学研究所
- 絹島 歩 2015「秋津遺跡第8次調査」『奈良県遺跡調査概報 2013年度』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 木許 守編 1992『鴨都波 11次 発掘調査報告』御所市文化財調査報告書第11集 御所市教育委員会
- 木許 守編 1996『室宮山古墳範圍確認調査報告』御所市文化財調査報告書第20集 御所市教育委員会
- 木許 守編 2007『巨勢山古墳群VI』御所市文化財調査報告書第30集 御所市教育委員会
- 木許 守編 2008『平成5 ~ 19年度市内遺跡発掘調査』御所市文化財調査報告書第34集 御所市教育委員会
- 木許守・西村慈子編 2015『観音寺本馬遺跡』御所市文化財調査報告書第48集 御所市教育委員会
- 木許守・小泉翔太・村島有紀編 2017『玉手遺跡』御所市文化財調査報告書第52集 御所市教育委員会
- 楠元哲夫編 1978「御所市披上籬子塚前方部周濠発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1977年度』奈良県立橿原考古学研究所
- 黒石哲夫 2018「西日本における横穴式石室の3次元的形態変遷について - 天王塚古墳、大野窟古墳、見瀬丸山古墳の巨大横穴式石室の出現背景について -」『大阪大学考古学研究室 30周年記念論集 待兼山考古学論集Ⅲ』大阪大学考古学研究室
- 御所市教育委員会 1989『ゴルフ場開発事業に伴う 第1回 巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』
- 御所市教育委員会 1990『ゴルフ場開発事業に伴う 第2回 巨勢山古墳群発掘調査成果の現地説明会資料』
- 御所市教育委員会 2012『秋津地区史跡整備基本計画』
- 御所市教育委員会編 2003『古代葛城とヤマト政権』学生社
- 木場幸弘編 2018『市尾宮塚古墳発掘調査報告書』高取町教育委員会
- 西光慎治編 2016『都塚古墳発掘調査報告書』明日香村文化財調査報告書第12集 明日香村教育委員会・関西大学文学部考古学研究室
- 阪本晋通編 2002『鴨都波 16次発掘調査報告 - 附. 平成12・13年度 個人住宅建築に伴う市内遺跡発掘調査 -』御所市文化財調査報告書第27集 御所市教育委員会
- 佐々木健太郎 2012『名柄遺跡 第6次 発掘調査報告』御所市文化財調査報告書第41集 御所市教育委員会
- 佐々木好直編 1999『南郷遺跡群Ⅱ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第73冊 奈良県教育委員会
- 佐藤小吉 1916「権現堂古墳」『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第三回 奈良縣
- 島本 一 1938「琴柱形石製品の新例」『考古學雜誌』第二十八卷 第六號 考古學會
- 十文字健編 2007『ドンド垣内古墳群』奈良県文化財調査報告書第119集 奈良県立橿原考古学研究所
- 白石太一郎 1974「御所市石川古墳群」『奈良県の主要古墳Ⅱ』奈良県教育委員会
- 白石太一郎 1999「終末期横穴式石室の型式編年と暦年代」『考古学雑誌』第85巻第1号 日本考古学会
- 白石太一郎 2010「前方後円墳終末の暦年代をめぐって - 新納泉氏の批判に答える -」『坪井清足先生卒寿記念論文集 埋文行政と研究のはざままで』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会
- 末永雅雄 1932「南葛城郡葛城村西北窪 和田山古墳」『奈良縣史蹟名勝天然記念物調査會抄報』第二輯 奈良縣
- 鈴木一議編 2014『観音寺本馬遺跡Ⅱ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第114冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 関川高功 1989「室大墓古墳外堤部発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報 1988年度』第2分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 高橋健自 1919「南葛城郡名柄発掘の銅鐸と銅鏡」『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第六回 奈良縣
- 伊達宗泰 1960『桜井市粟原越塚古墳』奈良県文化財調査報告第3集 奈良県教育委員会
- 伊達宗泰 1976「ウワナリ塚古墳」『石上・豊田古墳群Ⅱ』奈良県文化財調査報告書第27集 奈良県教育委員会
- 伊達宗泰・岡幸二郎・菅谷文則 1972『烏土塚古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第27冊 奈良県教育委員会

- 田中一広 1984「巨勢山古墳群調査概要Ⅱ」『奈良県遺跡調査概報 1983年度』第2分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 田辺昭三 1966『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 田村朋美 2012「日本列島における植物灰ガラスの出現と展開」『奈良文化財研究所創立60周年記念論文集 文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所学報第92冊 奈良文化財研究所
- 田村朋美 2013「宇津久志1号墳出土ガラス玉の自然科学的調査」『長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選(二)』長岡京市埋蔵文化財センター
- 田村朋美 2018「ガラス玉の考古科学的検討」『上塩冶築山古墳の再検討』出雲弥生の森博物館研究紀要第6集 出雲弥生の森博物館
- 田村朋美・申基澈 2017「Sr同位体比による日本出土古代ガラスの産地推定の試み」『日本文化財科学会第34回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会
- 千賀久 1997「畿内の横穴式石室成立期の様相」『古文化論叢-伊達先生古稀記念論集-』伊達先生古稀記念論集刊行会
- 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊 奈良県教育委員会
- 豊岡卓之 1989「鴨部波遺跡第7次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1988年度』第1分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 奈良県教育委員会 1972『奈良県遺跡地図』第3分冊
- 奈良県教育委員会 1980「新宮山古墳」『奈良県指定文化財-昭和54年度版-』
- 奈良県教育委員会 1982『飛鳥・磐余地域の後・終末期古墳と寺院跡』奈良県文化財調査報告第39集
- 奈良県教育委員会 1999「笛吹神社古墳」『奈良県指定文化財-平成9年度版-』
- 奈良県立橿原考古学研究所編 1990『斑鳩藤ノ木古墳 第1次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2015『大和の豪族たちと藤ノ木古墳』
- 奈良文化財研究所飛鳥資料館 2016『飛鳥寺跡出土遺物の研究 ガラス玉類の考古学的研究』飛鳥資料館研究図録第19冊
- 新納泉 2009「前方後円墳廃絶期の暦年代」『考古学研究』第56巻第3号 考古学研究会
- 西川寿勝 2016「蘇我氏の墓域に関する諸問題」『日本書紀研究』第31冊 日本書紀研究会
- 西崎辰之助 1916「條ノ古墳」『奈良縣史蹟勝地調査會報告書』第三回 奈良縣
- 丹羽恵二編 2007『国史跡 珠城山古墳-第4・5次調査及び史跡整備報告書-』桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書29集 桜井市教育委員会
- 橋本輝彦編 2018『赤坂天王山古墳群の研究-測量調査報告書-』公益財団法人桜井市文化財協会調査研究報告第1冊 公益財団法人桜井市文化財協会
- 坂靖 1999「大和の横穴式石室-岩屋式成立以前-」『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズVII 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 坂靖 2009『古墳時代の遺跡学-ヤマト王権の支配構造と埴輪文化-』雄山閣
- 坂靖 2017「蘇我氏の遺跡学-飛鳥と渡来人-」『古代学研究』第212号 古代学研究会
- 坂靖編 1994『平林古墳』當麻町埋蔵文化財調査報告第3集 當麻町教育委員会
- 坂靖編 1996『南郷遺跡群Ⅰ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第69冊 奈良県教育委員会
- 坂靖編 2000『南郷遺跡群Ⅳ』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第76冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 廣岡孝信 2002「北窪遺跡」『奈良県遺跡調査概報 2001年度』第三分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 廣岡孝信 2006「二光寺廃寺」『奈良県遺跡調査概報 2005年』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 廣岡孝信・十文字健 2005「北窪遺跡2004-第1次調査 伏見遺跡2004-第1・2次調査」『奈良県遺跡調査概報 2004年』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 福尾正彦・徳田誠志 1993「畝傍陵墓参考地石室内現況調査報告」『書陵部紀要』第45号 宮内庁書陵部
- 藤田和尊 1987「御所市・小林遺跡の調査」『季刊明日香風』第23号 財団法人飛鳥保存財団
- 藤田和尊 1991「奈良県御所市名柄遺跡」『日本考古学年報』42(1989年度版) 日本考古学協会
- 藤田和尊 2002a「奈良県御所市 條ウル神古墳の調査」『考古学ジャーナル』第490号 ニューサイエンス社
- 藤田和尊 2002b「巨大な横穴式石室と石棺-奈良県條ウル神古墳-」『季刊考古学』第80号 雄山閣
- 藤田和尊 2016「葛城縣における蘇我氏と巨勢氏の考古学的動向予察」『塚口義信博士古稀記念 日本古代学論叢』塚口義信博士古稀記念会
- 藤田和尊編 1985「巨勢山境谷10号墳発掘調査報告」御所市文化財調査報告書第4集 御所市教育委員会
- 藤田和尊編 1987「巨勢山古墳群Ⅱ-御所市みどり台総合開発事業に伴う発掘調査Ⅰ-」御所市文化財調査報告書第6集 御所市企画課
- 藤田和尊編 1994「橿原遺跡Ⅰ」御所市文化財調査報告書第17集 御所市教育委員会
- 藤田和尊編 2002「巨勢山古墳群Ⅲ」御所市文化財調査報告書第25集 御所市教育委員会
- 藤田和尊・尼子奈美枝編 1992「鴨部波 12次 概報」御所市文化財調査報告書第12集 御所市教育委員会
- 藤田和尊・木許守編 1999「台風7号被害による室宮山古墳出土遺物」御所市文化財調査報告書第24集 御所市教育委員会
- 藤田和尊・木許守編 2001「鴨部波1号墳 調査概報」学生社
- 藤田三郎・松本洋明 1989「大和地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ 木耳社
- 藤原知広 2009「空中写真の検討による條ウル神古墳の復元」『古代学研究』第184号 古代学研究会

- 堀井甚一郎 1965 「自然地理」『御所市史』御所市役所
- 前園実知雄・関川尚功・中井公 1978 「御所市朝妻廃寺発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1977 年度』奈良県教育委員会
- 前園実知雄 1981 「御所市朝妻廃寺発掘調査概要」『奈良県遺跡調査概報 1979 年度』奈良県教育委員会
- 増田一裕 1996 「畿内大型横穴式石室の技術的展開と歴史的動向」『日本考古学』第 3 号 日本考古学協会
- 松岡淳平 2011 「中西遺跡第 16 次調査」『奈良県遺跡調査概報 2010 年度』第二分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 松田真一 1997 『奈良県の縄文時代遺跡研究』財団法人由良大和古代文化研究協会
- 松田真一・近江俊秀・清水昭博 1993 「御所市高宮廃寺について」『青陵』第 83 号 奈良県立橿原考古学研究所
- 松本洋明編 1988 『十六面・薬王寺遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 54 冊 奈良県教育委員会
- 馬淵久夫・川上紀 1984 「ストロンチウム同位体比の土器・瓦の産地推定への応用」『古文化財の科学』第 29 号 古文化財科学研究会
- 宮元香織 2005 「大和における横穴式石室について－大和盆地における古墳時代後期の動向－」『古代日本と東アジア世界』奈良女子大学 21 世紀 COE プログラム報告書 Vol. 6
- 本村充保 2009 「観音寺本馬遺跡－京奈和自動車道（観音寺 I 区）－」『奈良県遺跡調査概報 2008 年』第三分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 本村充保・中野咲 2013 「中西遺跡第 18 次調査」『奈良県遺跡調査概報 2012 年度』第一分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 森浩一・網干善教・伊達宗泰 1977 『新沢千塚 126 号墳』奈良県教育委員会
- 森岡秀人・西村歩編 2006 『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター
- 森本徹 2013 「喪葬儀礼の変化からみた終末期古墳」『歴史研究』第 50 号 大阪教育大学歴史学研究室
- 安村俊史 2006 「河内の終末期古墳再検討－シシヨツカ古墳を中心として－」『喜谷美宣先生古稀記念論集』喜谷美宣先生古稀記念論集刊行会
- 山田隆文 2003 「家形石棺について」『天理市 ハミ塚古墳発掘調査報告書』奈良県文化財調査報告書第 102 集 奈良県立橿原考古学研究所
- 山本 彰 2002 「横口式石槨の出現と被葬者－河南町シシヨツカ古墳の調査で考えたこと－」『大阪文化財論集 II』大阪府文化財センター
- 山本 彰 2003 「河南町シシヨツカ古墳が提起する問題」『古代近畿と物流の考古学』学生社
- 横田真吾 2010 「横口式石槨墳の再検討－大阪府平石古墳群の変遷と画期－」『大阪大学考古学研究室 20 周年記念論集 待兼山考古学論集 II』大阪大学考古学研究室
- 米川仁一・菊井佳弥 2010 「秋津遺跡」『奈良県遺跡調査概報 2009 年度』第三分冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 和田晴吾 1976 「畿内の家形石棺」『史林』第 59 卷第 3 号 史学研究會
- Dussubieux, L. and Gratuze, B. 2003. Nature et Origine des Objets en Verre Retrouvés à Begram (Afghanistan) et à Bara (Pakistan). in Bopearachchi, O., Landes, C., Sachs, C. (Eds.), De l'Indus à l'Oxus: Archéologie de l'Asie Centrale: Association Imago, Musée de Lattes.
- Freestone, I. C., Leslie, K. A., Thirlwell, M., Gorin-Rosen, Y. 2003. Strontium Isotopes in the Investigation of Early Glass Production: Byzantine and Early Islamic Glass from the Near East. *Archaeometry*, 45-1.
- Henderson, J., Evans, J. A., Sloane, H. J., Leng, M. J. 2005. The Use of Oxygen, Strontium and Lead Isotopes to Provenance Ancient Glasses in the Middle East. *Journal of Archaeological Science*, 32-5.
- Henderson, J., Evans, J., Barkoudah, Y. 2009. The Roots of Provenance: Glass, Plants and Isotopes in the Islamic Middle East. *Antiquity*, 83.
- Oga, K. and Tamura, T. 2013. Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical Compositions, Chronologies, Provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in the Yayoi-Kofun Periods (3th Century BCE – 7th Century CE). *Journal of Indian Ocean Archaeology*, 9.

図表出典

図 3 秋山編 1985 より転載

図 4 西崎 1916 より転載

図 95 下記の文献より一部改変して使用

市尾墓山古墳：河上編 1984、権現堂古墳：河上 2001、市尾宮塚古墳：木場編 2018、新宮山古墳：奈良県教育委員会 1980、
 水泥塚穴古墳：河上 1978、水泥南古墳：網干 1961b、笛吹神社古墳：奈良県教育委員会 1999、二塚古墳：上田ほか 1962、
 平林古墳：坂編 1994、烏土塚古墳：伊達ほか 1972、東乗鞍古墳：千賀 1997、ウワナリ塚古墳：伊達 1976、藤ノ木古墳：
 奈良県立橿原考古学研究所編 1990、仏塚古墳：河上編 1977、珠城山 1 号墳：丹羽編 2007、赤坂天王山古墳：橋本編 2018、
 越塚古墳：伊達 1960、文殊院東古墳：奈良県教育委員会 1982、植山古墳：石坂編 2014、都塚古墳：西光編 2016、五條野
 丸山古墳：福尾・徳田 1993、牧野古墳：河上編 1987

上記以外は該当部分の執筆者が作成。

圖 版



1. 條ウル神古墳と金剛・葛城山（東から）



2. 條ウル神古墳の現況（3次調査時、南西から）



玄室と家形石棺



1. 玄室玄門部



2. 玄室奥壁



1. 玄室奥壁と右側壁 下半



2. 玄室奥壁と左側壁 下半



1. 玄室左側壁（奥壁端）上半 2. 同下半 3. 玄室左側壁（奥壁寄り）上半 4. 同下半



1. 玄室左側壁（中央部）上半 2. 同下半 3. 玄室左側壁（玄門寄り）上半 4. 同下半



1. 玄室左側壁と前壁



2. 前壁



3. 玄室右側壁と前壁



1. 玄室右側壁（玄門端）上半 2. 同下半 3. 玄室右側壁（玄門寄り）上半 4. 同下半



1. 玄室右側壁（中央部）上半 2. 同下半 3. 玄室右側壁（奥壁寄り）上半 4. 同下半



閉塞部（東から）



家形石棺



1



2

1. 家形石棺 正面（玄門から） 2. 家形石棺 蓋上堆積状況（玄門から）



1



2

1. 家形石棺 正面（奥壁から） 2. 家形石棺 蓋 北西隅



1. 家形石棺内部（奥壁側から） 2. 家形石棺内南東隅拡大（奥壁側から）



1. 家形石棺玄門側短側辺試掘坑内遺物検出状況（上が石棺） 2. 前庭部東西アゼ北壁土層断面



1. 1 トレンチ第1 遺構面
(北から)



2. 同第2 遺構面 (北から)



3. 同第3 遺構面 (北から)



1. 1 トレンチ第1遺構面
SK1～3 (東から)



2. 1 トレンチ
a - a' 土層断面 (北から)



3. 2 トレンチ完掘
(北西から)



1. 5 トレンチ完掘 (南から)



2. 5 トレンチ延長部完掘
(南西から)



3. 5 トレンチ延長部墳丘盛土土層断面 1



4. 同 2



1. 10トレンチ第1遺構面（東から）



2. 同第2遺構面（東から）



3. 同サブトレ内須恵器出土状況（南東から）



4. 同サブトレ内須恵器出土状況（南上から）



1. 10トレンチ
北壁土層断面1



2. 同2



3. 同3



1. 6トレンチ第1遺構面
(東から)



2. 同第2遺構面(南東から)



3. 同北壁土層断面(盛土東端)



1. 6トレンチ北壁墳丘盛土土層断面1



2. 同2



3. 同3



4. 同4



5. 同5



6. 6トレンチ南壁土層断面



7. 6トレンチ12層瓦器出土状況(南西から)



8. 6トレンチ55層土器出土状況(東から)



1. 6トレンチ拡張区
墳丘盛土上面検出状況
(南から)



2. 同(北から)



3. 6トレンチ第2北拡張区
第1遺構面(北東から)



1. 6トレンチ第2北拡張区
第2遺構面（南東から）



2. 同南壁土層断面



3. 同南壁墳丘盛土土層断面東半



4. 同南壁墳丘盛土土層断面西半



1. 6トレンチ第2北拡張区
サブトレンチ北壁土層断面



2. 同サブトレンチ北壁墳丘盛土土層断面西半



3. 同サブトレンチ北壁墳丘盛土土層断面東半



4. 同北壁土層断面



1. 6トレンチ南拡張区
南壁土層断面



2. 7トレンチ第1遺構面（東から）



3. 同第2遺構面（東から）



1. 7トレンチ第2遺構面
(北東から)



2. 同 SD12 土器出土状況
(南から)



3. 同 SD14 土層断面
(南東から)



1. 9トレンチ第1遺構面
(東から)



2. 同第2遺構面 陸
(南東から)



3. 同東壁墳丘盛土土層断面
(南東から)



1. 9トレンチ 隍埋土
(南西から)



2. 9トレンチ拡張区
第1遺構面 (南東から)



3. 同第2遺構面 (南東から)



1. 9トレンチ拡張区
第2遺構面（南西から）



2. 同A'' - A''' 墳丘盛土
土層断面（南から）



3. 同A' - A'' 墳丘盛土土層断面1



4. 同2



1. 9トレンチ拡張区 A' - A'' 墳丘盛土土層断面 3



2. 同 4



3. 同 A'' - A''' 墳丘盛土土層断面 1



4. 同 2



5. 同墳丘盛土上遺物出土状況 (東から)



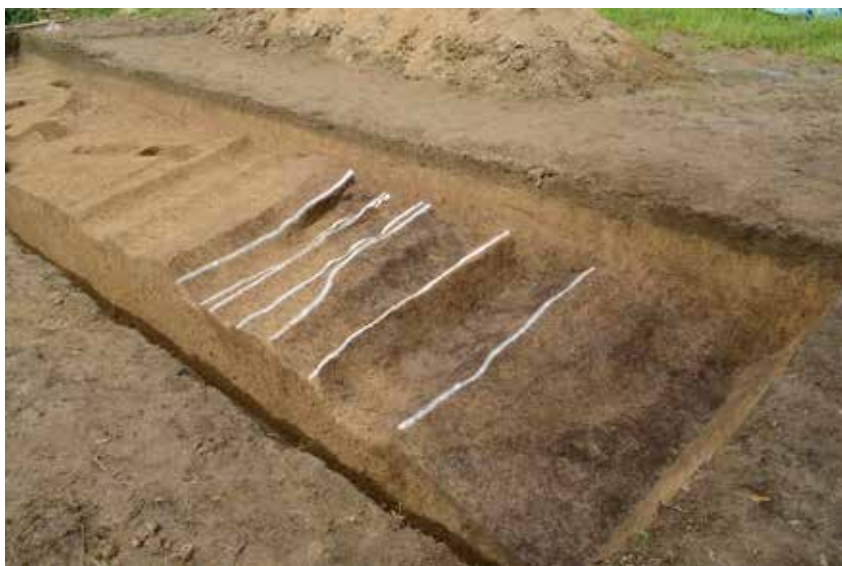
6. 同墳丘盛土内(B - B' サブトレ)遺物出土状況(南から)



1. 11トレンチ第1遺構面
(東から)



2. 同第1遺構面西半
(南東から)



3. 同第2遺構面(南東から)



1. 11トレンチ第2遺構面
(南から)



2. 同第3遺構面(南東から)



3. 同SD15土器検出状況
(南東から)



1. 8トレンチ完掘
(南東から)



2. 3トレンチ第1遺構面
(南から)



3. 同第1遺構面拡張後
(南東から)



1. 3トレンチ第2遺構面
(南から)



2. 同SD21断面(南から)



1. 4 トレンチ完掘
(北西から)



2. 12 トレンチ西半完掘
(南西から)



3. 同東半完掘 (北東から)



1. 12トレンチ南壁墳丘盛土土層断面 1



2. 同2



3. 同3



4. 同4



5. 同5



6. 同6



1. 13トレンチ西半完掘
(南西から)



2. 同東半完掘(北東から)



3. 同落ち込み検出状況
(東から)



1. 13トレンチ落ち込み検出状況
(北東から)



2. 13トレンチ北壁墳丘盛土土層断面1



3. 同2



4. 同3



5. 同4



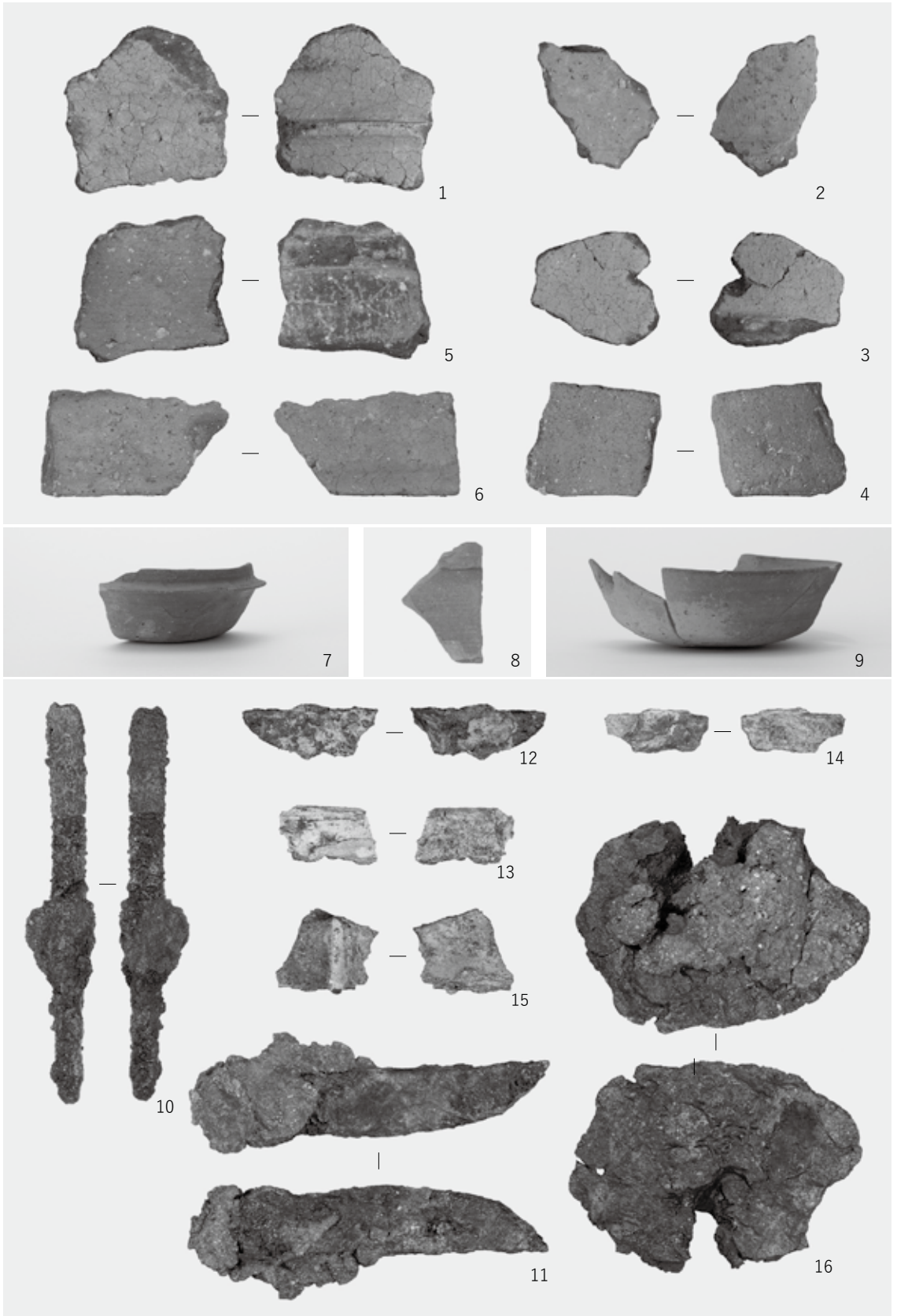
H13 墳丘トレンチ完掘（南から）



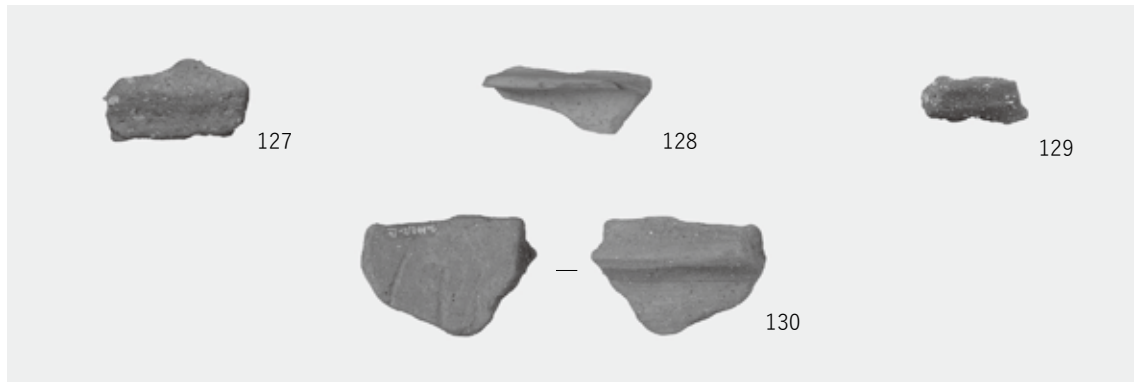
1次調査出土遺物(1)(S≒1/1)



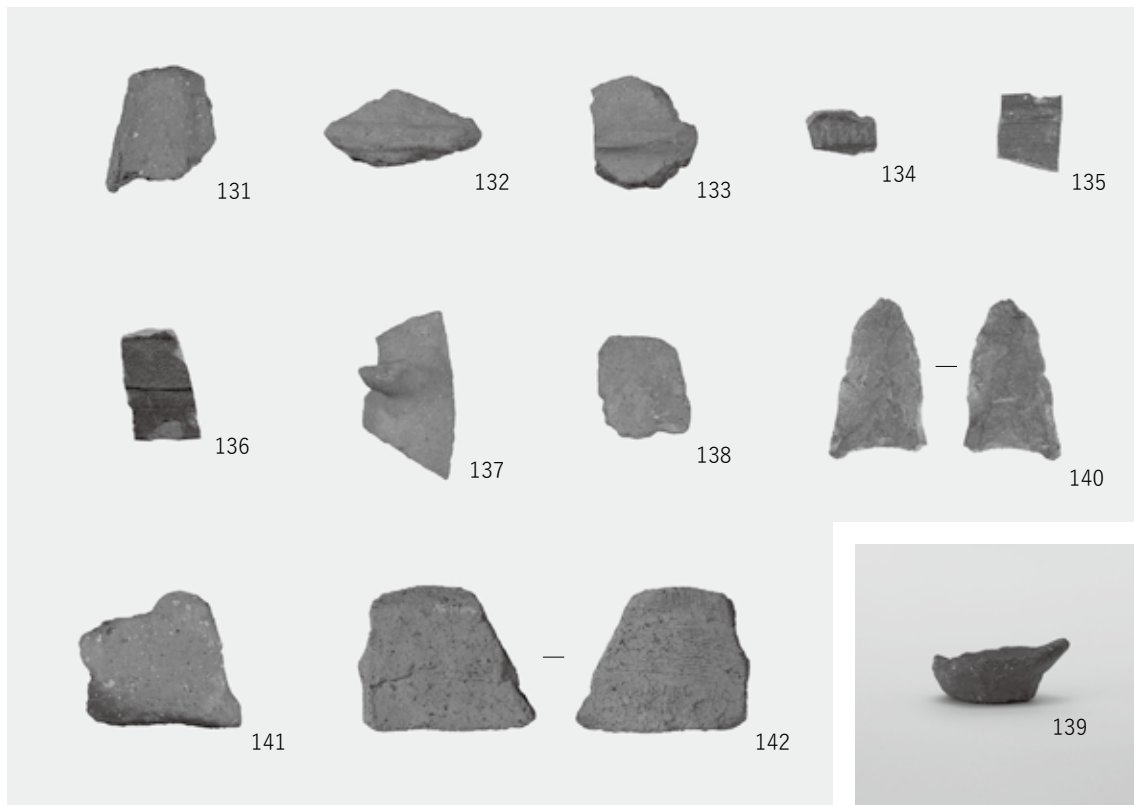
13 トレンチ落ち込み出土石材 (S ≒ 1/6)



1次調査出土遺物(2) (S≒土器・埴輪1/3、鉄器1/2)



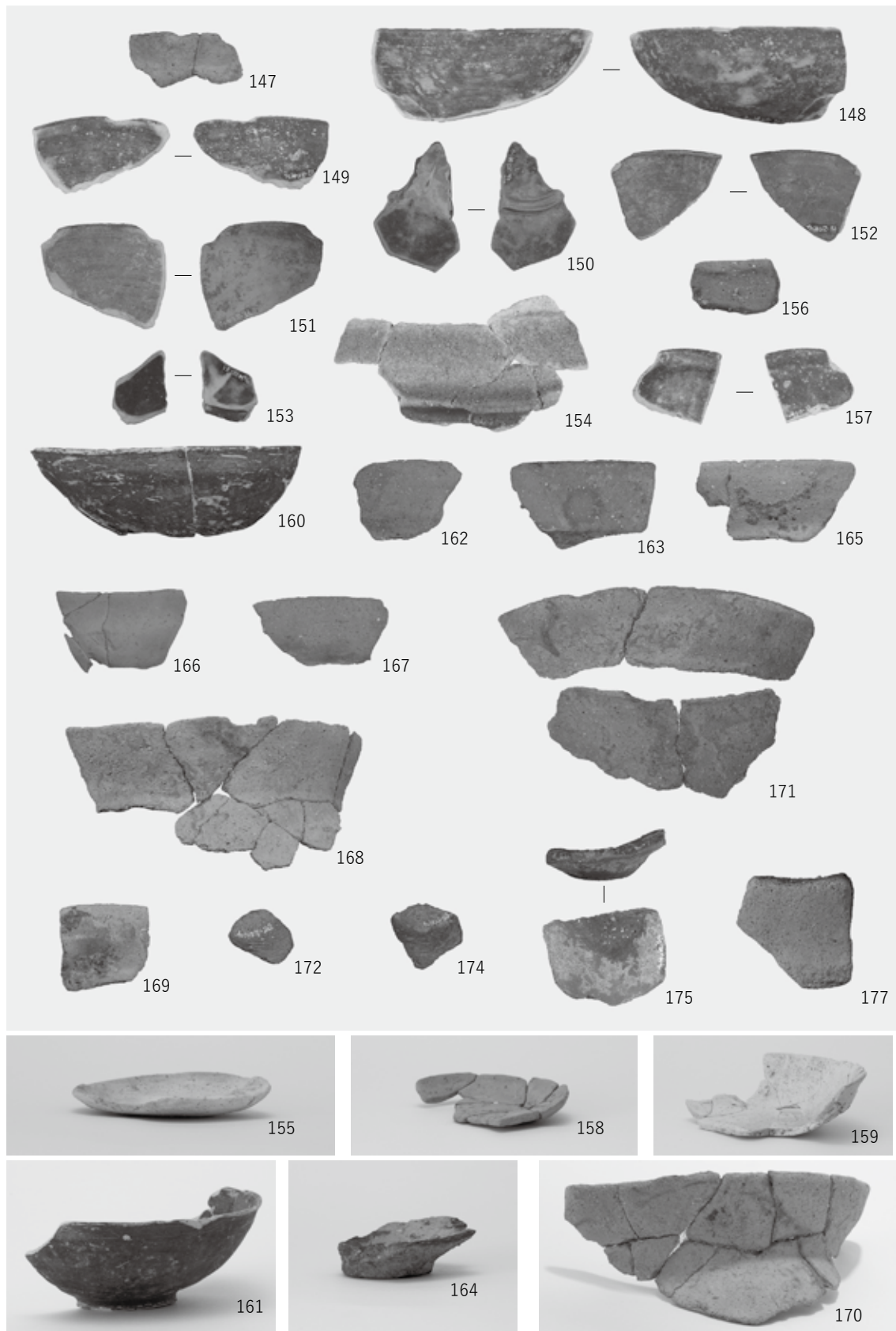
1. 1トレンチ出土遺物 (S ≒ 1/3)



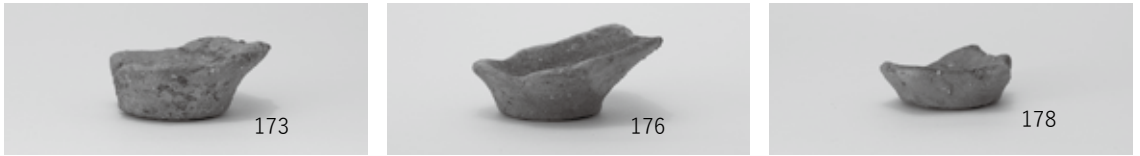
2. 10トレンチ出土遺物(1) (S ≒ 土器・埴輪 1/3、石器 1/1)



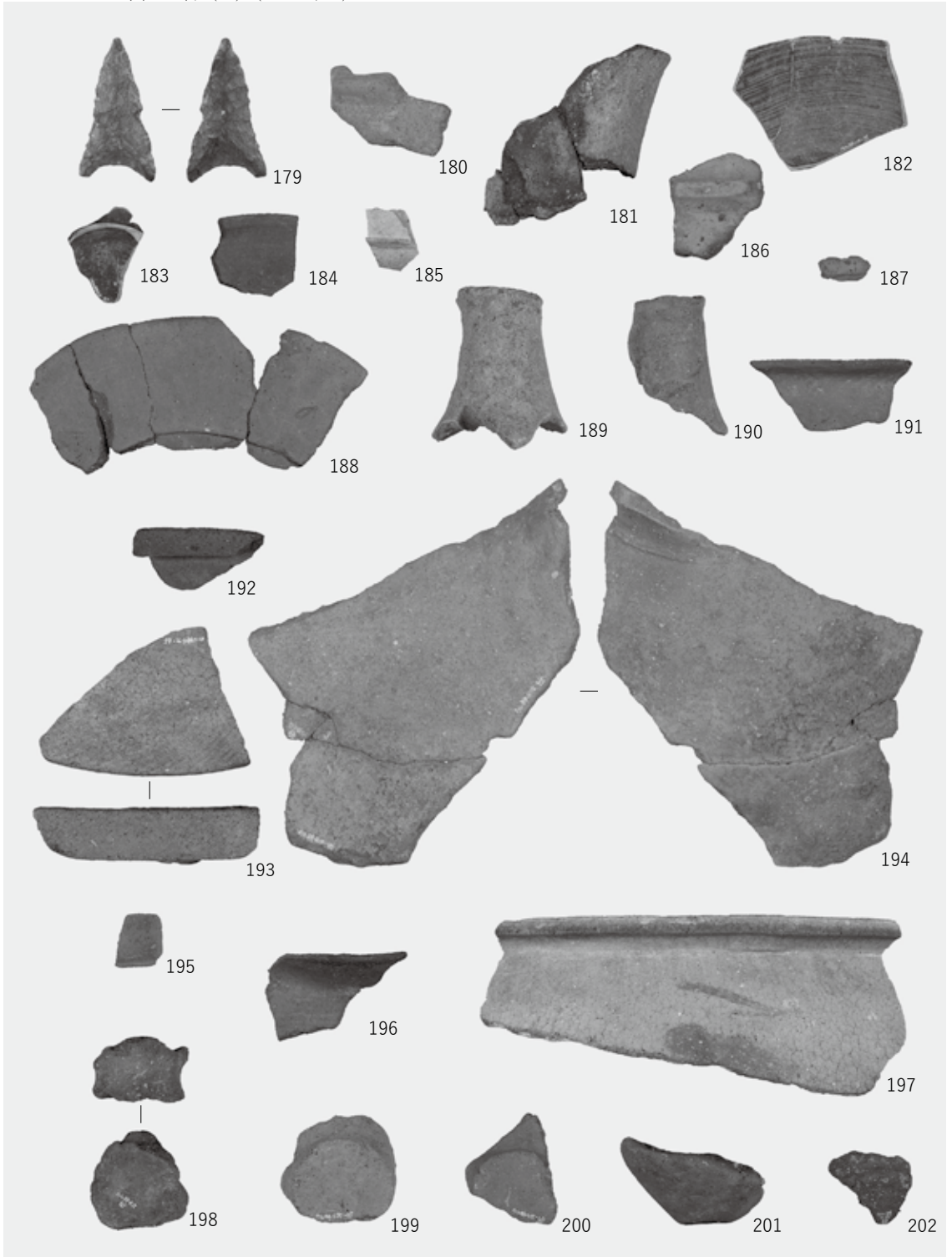
10 トレンチ出土遺物（2）（S ≒ 1/3）



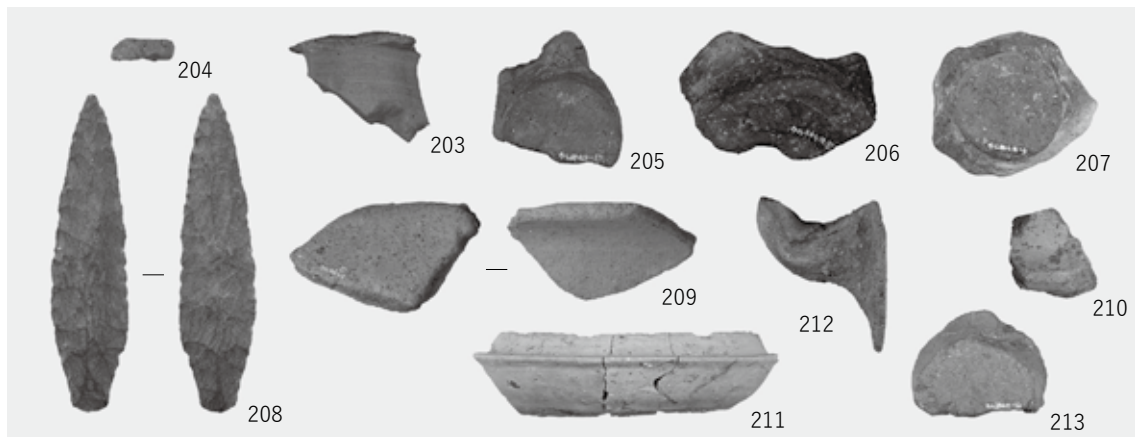
6トレンチ出土遺物(1) (S≒1/3)



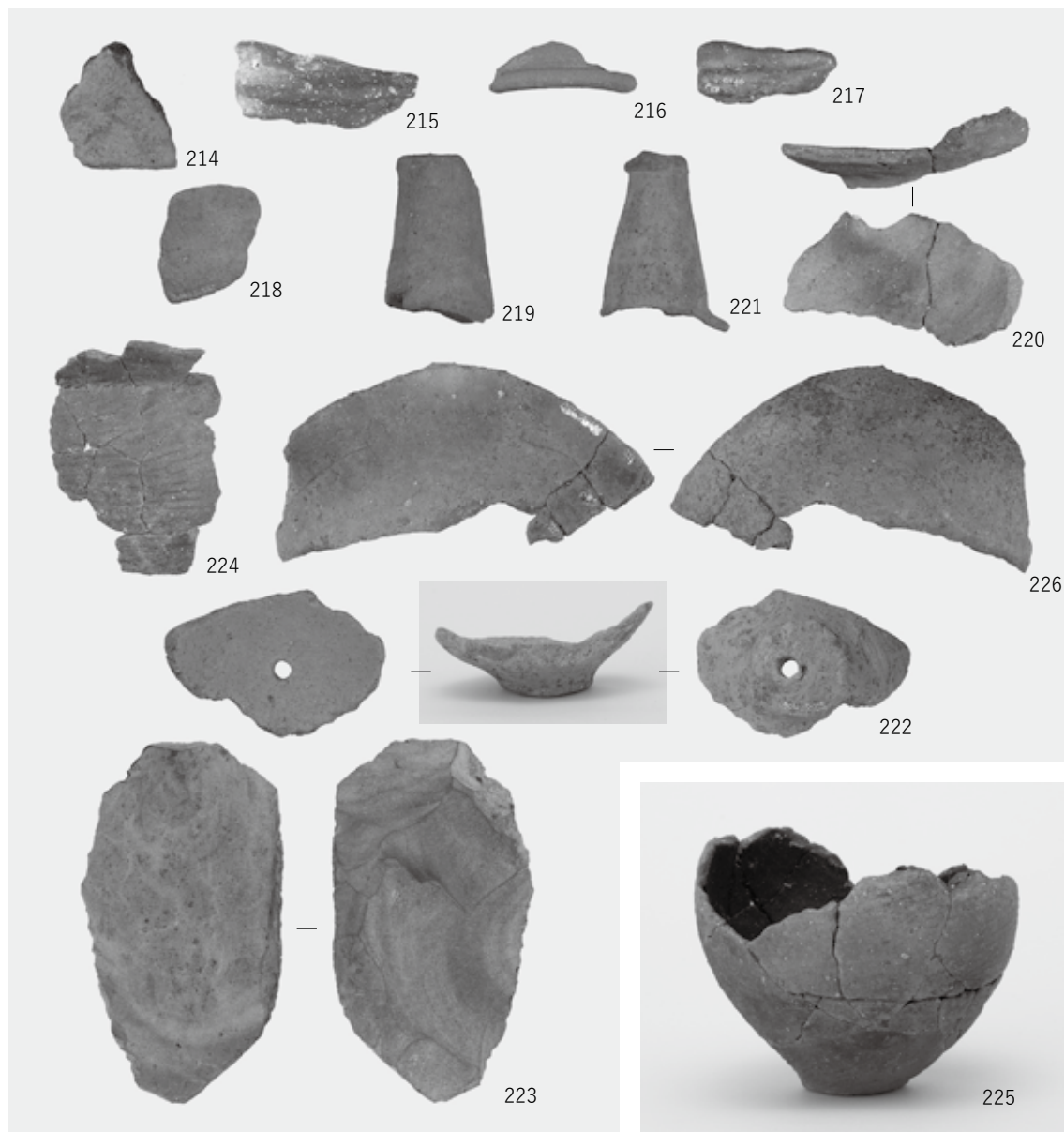
1. 6トレンチ出土遺物(2)(S≒1/3)



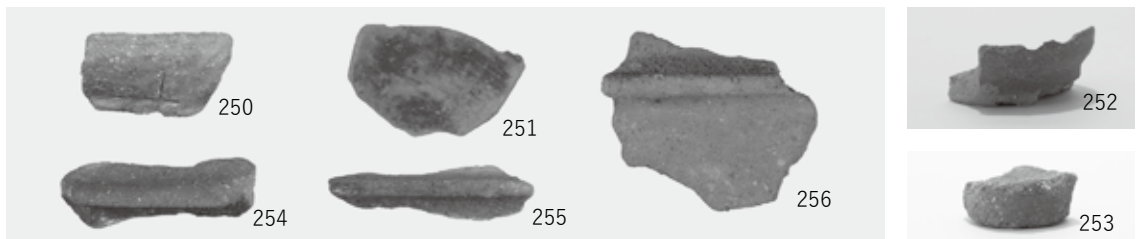
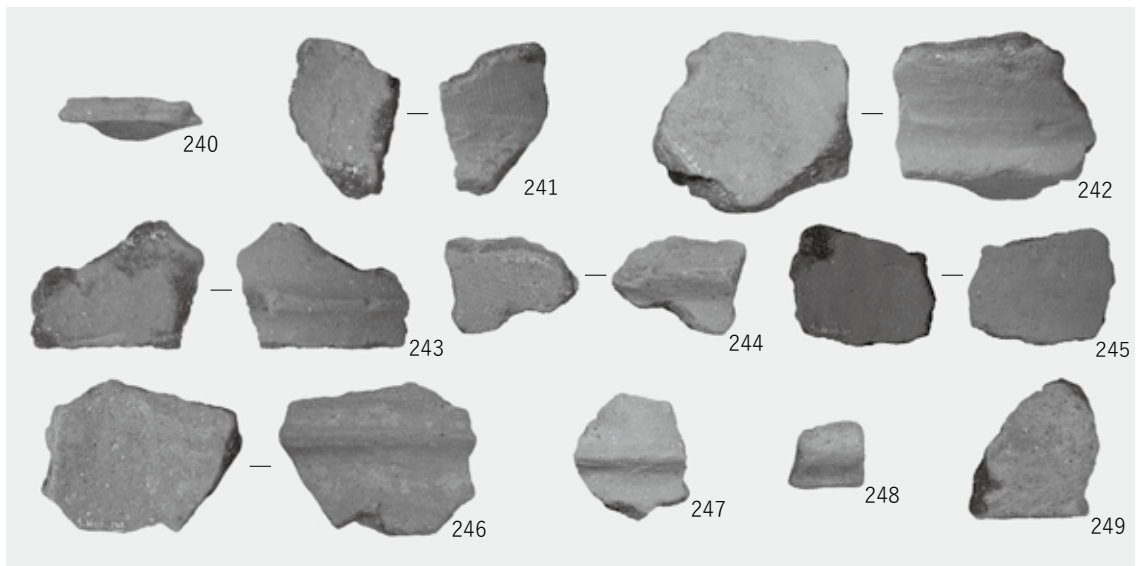
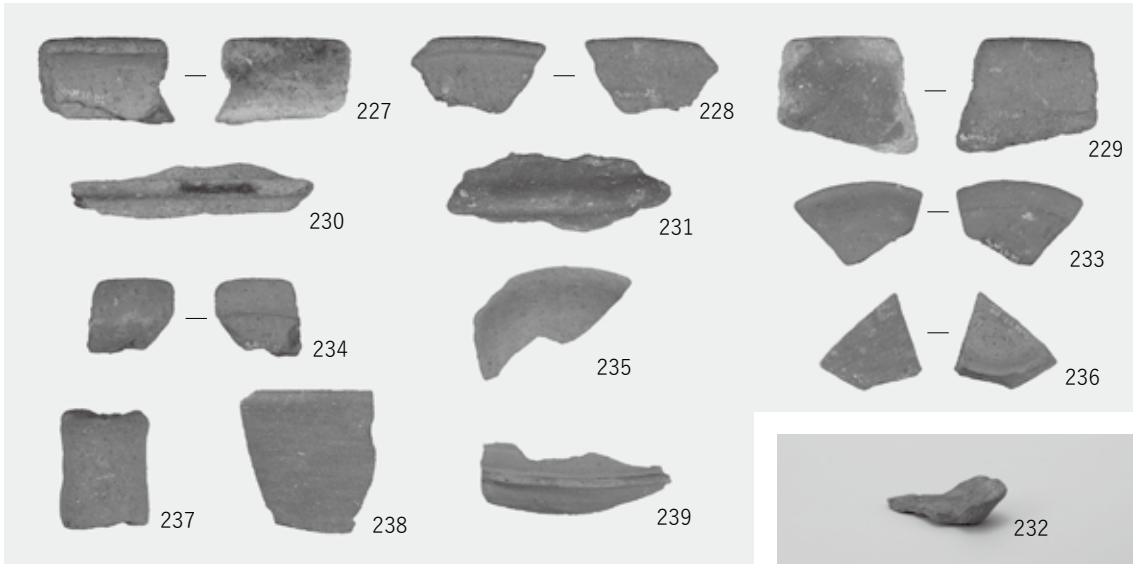
2. 6トレンチ拡張区出土遺物(1)(S≒土器・埴輪1/3、石器1/1)



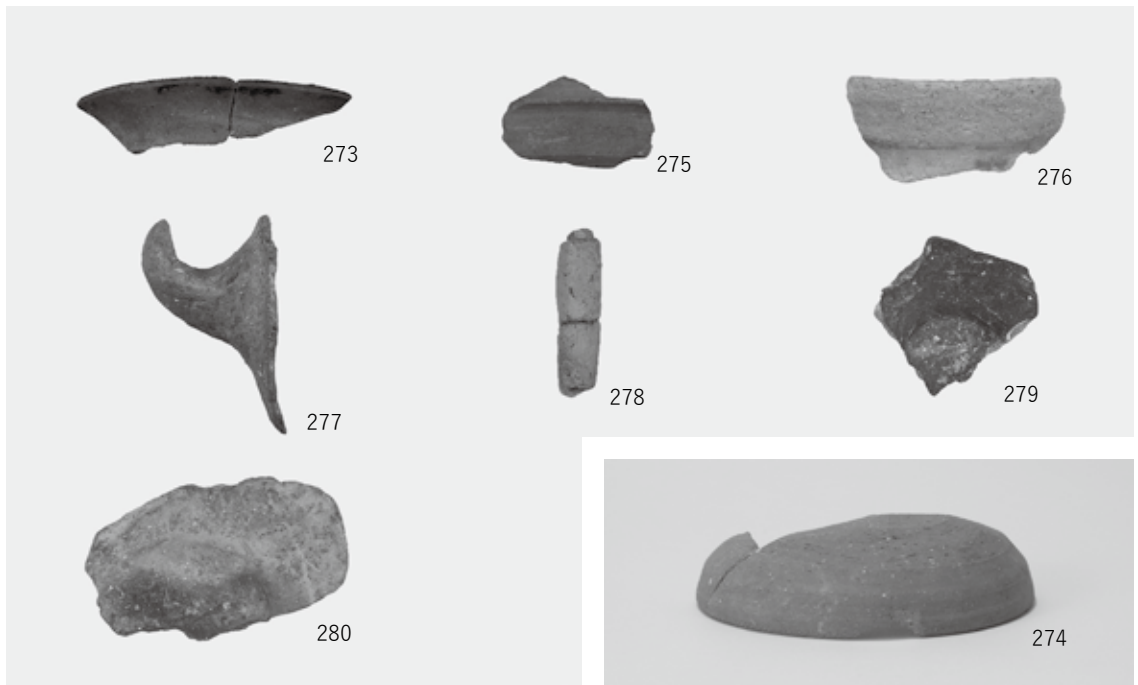
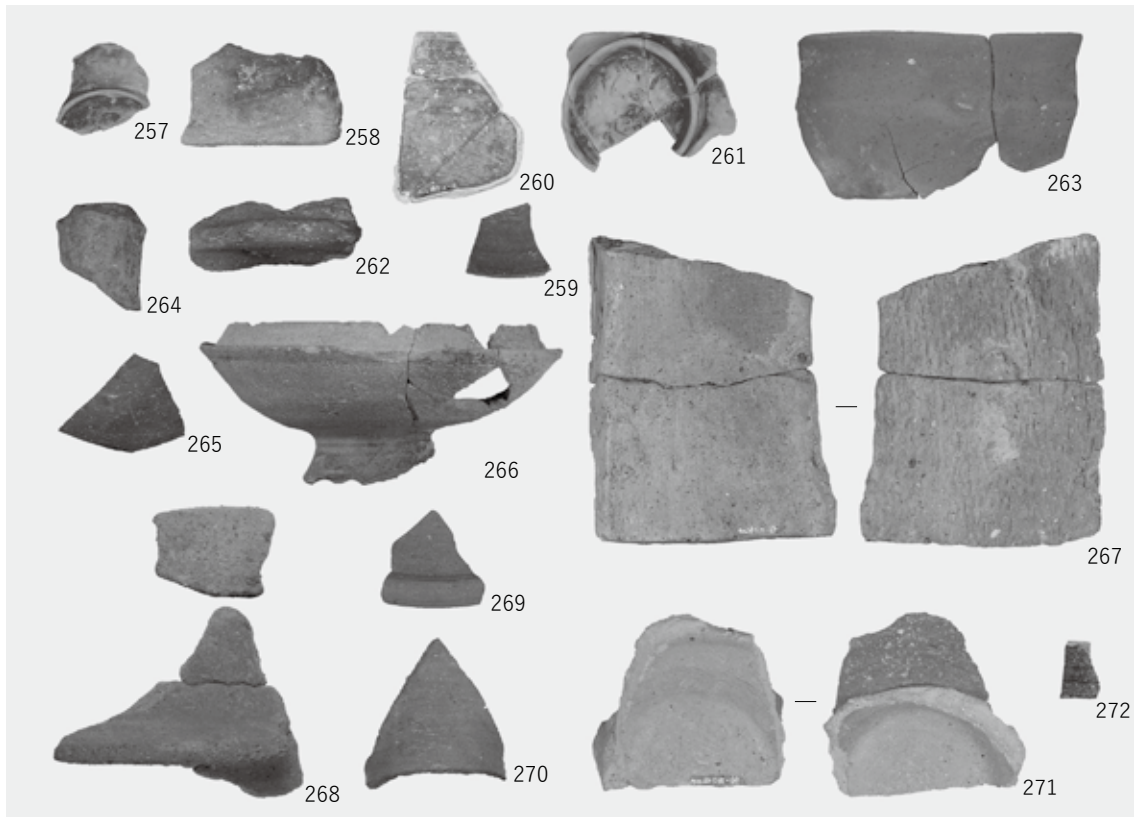
1. 6トレンチ拡張区出土遺物(2)(S≒土器1/3、石器1/1)



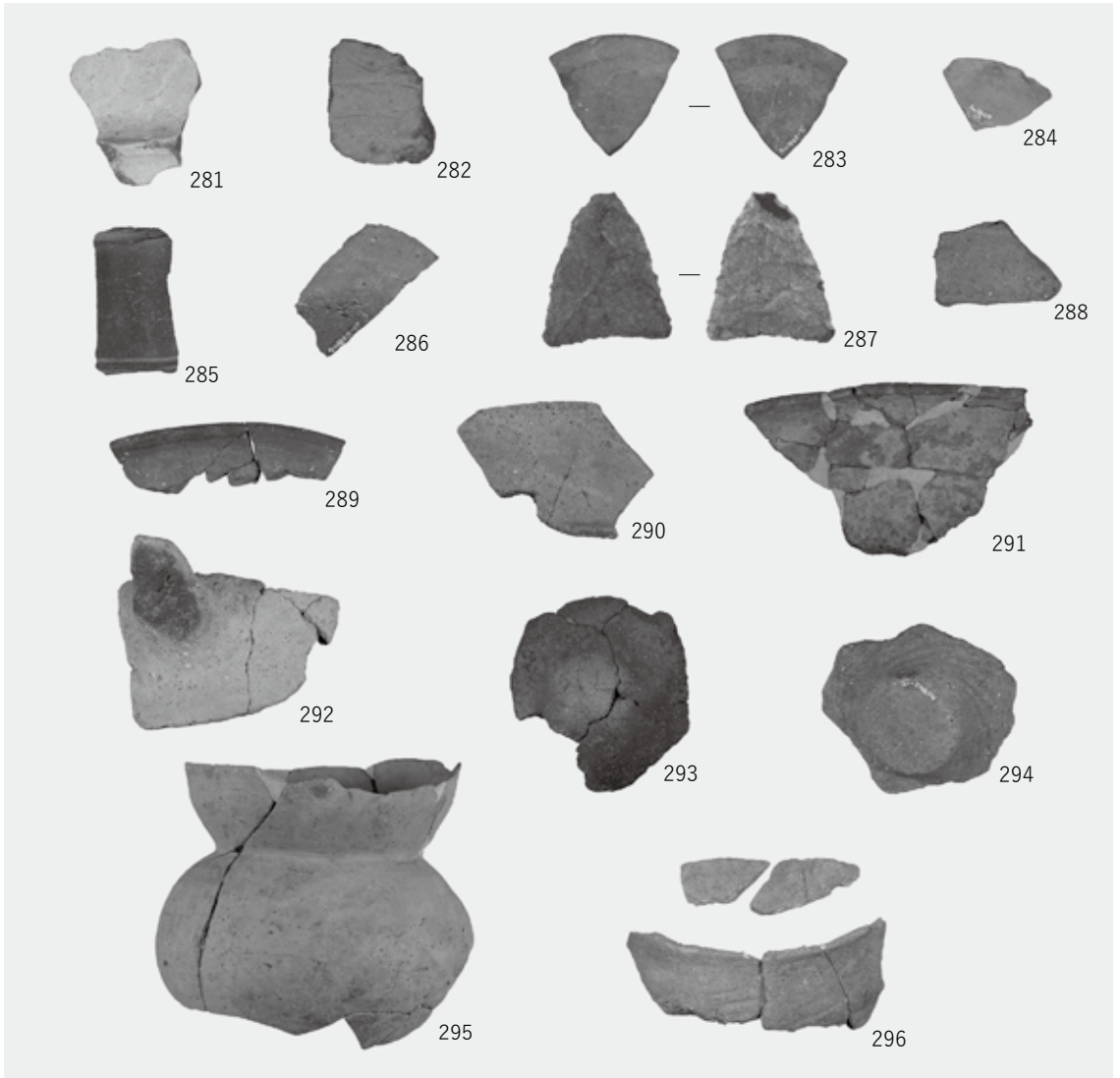
2. 7トレンチ出土遺物(S≒土器1/3、石器1/1)



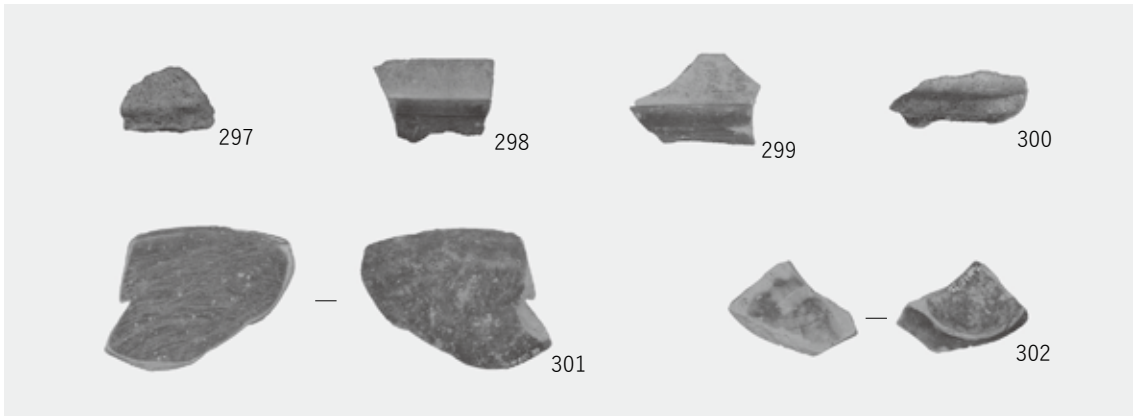
9トレンチ出土遺物 (S ≒ 1/3)



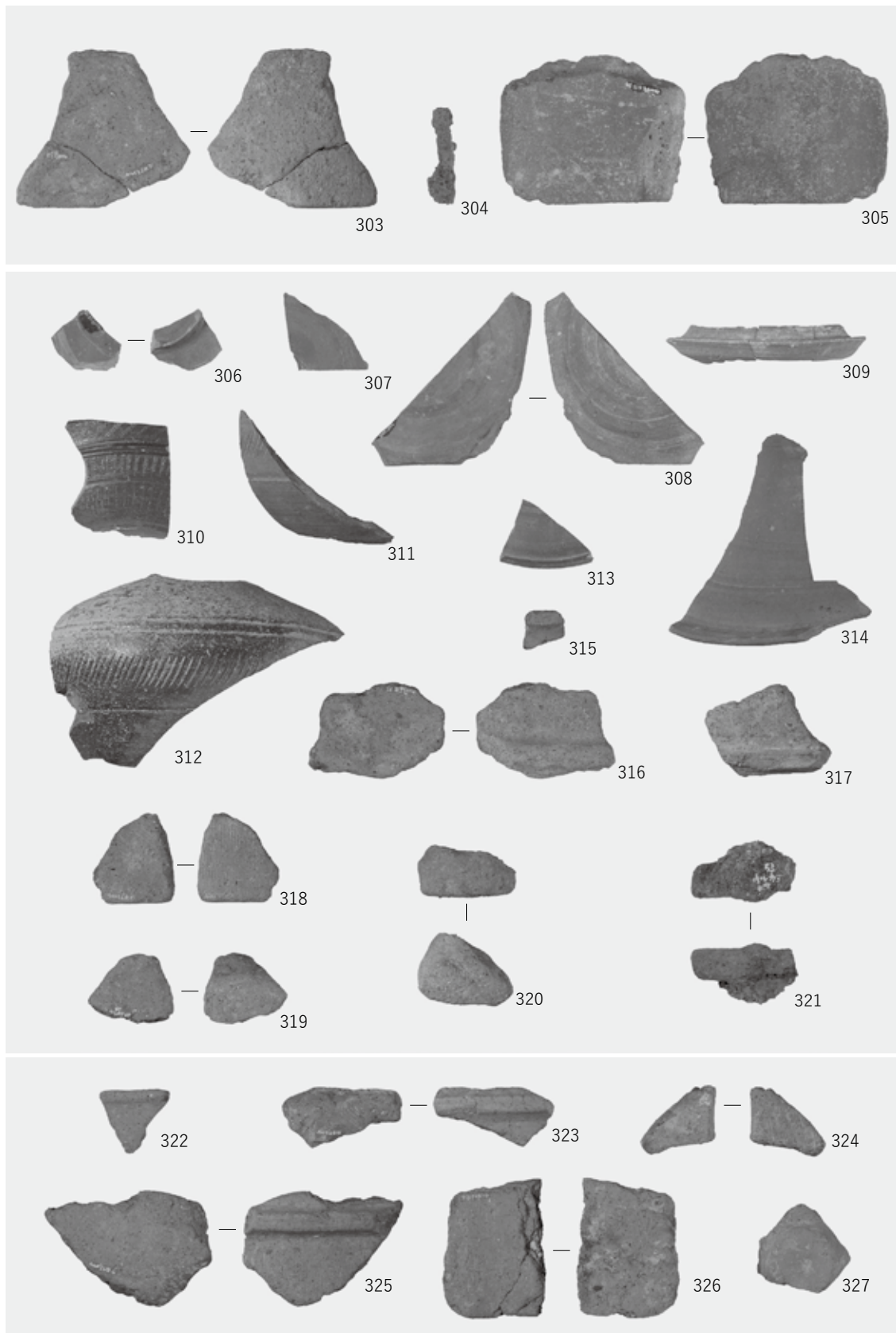
9トレンチ拡張区出土遺物 (S ≒ 1/3)



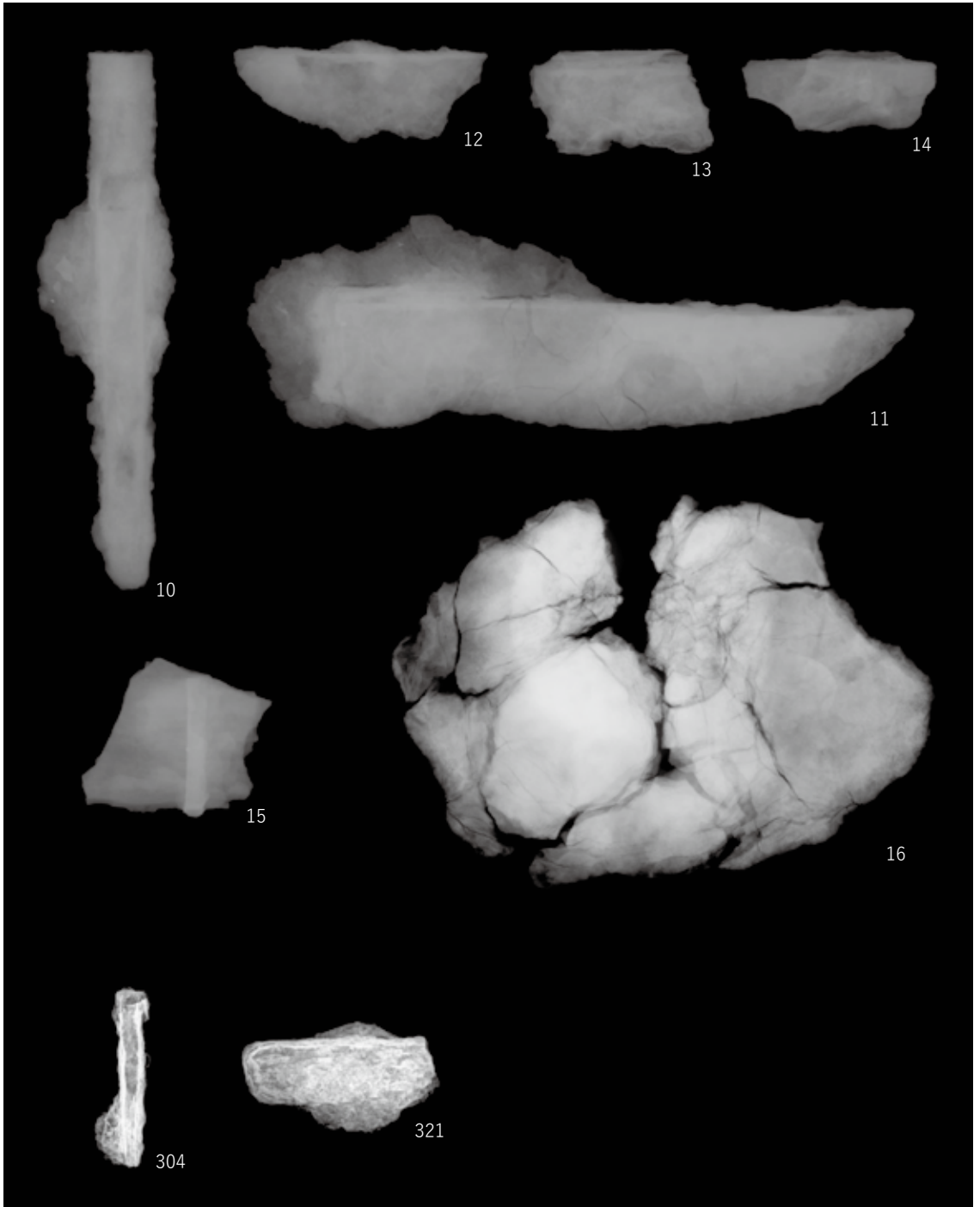
1. 11トレンチ出土遺物 (S≒土器1/3、石器1/1)



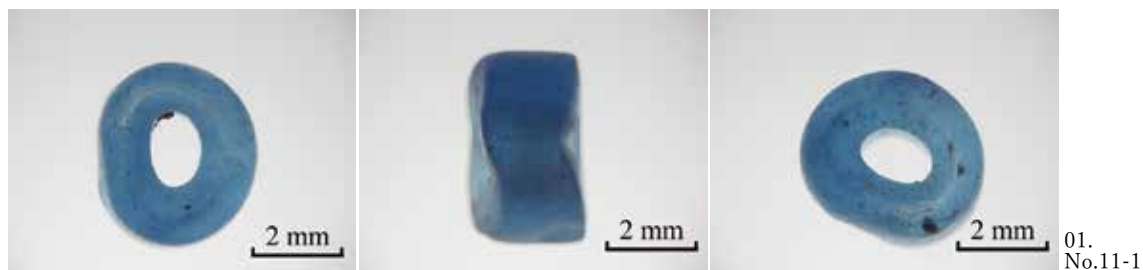
2. 3・4・8トレンチ出土遺物 (S≒1/3)



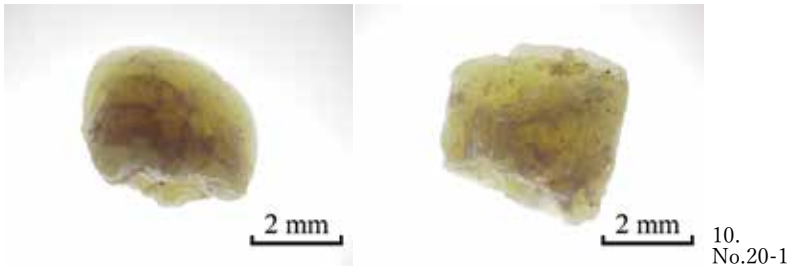
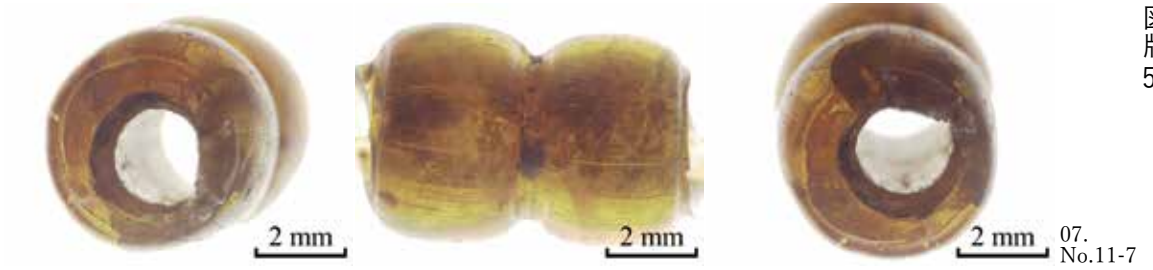
13 トレンチ出土遺物 (S≒土器 1/3、鉄器 1/2)



出土鉄製品 X線透過撮影像



ガラス小玉のデジタルマイクロスコブ画像（1）



ガラス小玉のデジタルマイクロスコープ画像（2）



01.No.09-011
図番号：42



02.No.09-036
図番号：60



03.No.09-047
図番号：71



04.No.20-109



05.No.18-029



06.No.20-071
図番号：97



07.No.08-027



08.No.09-028
図番号：94



09.No.11-003
図番号：107



10.No.06-012
図番号：115



11.No.08-002
図番号：116



12.No.11-005
図番号：110



13.No.20-106
図番号：102



14.No.11-152



15.No.11-001
図番号：111



16.No.20-082
図番号：122



17.No.20-085
図番号：123



18.No.11-007
図番号：124



19.No.11-010
図番号：125



20.No.11-011
図番号 126



21.No.09-027



22.No.09-053



23.No.20-086



24.No.11-013



25.No.09-051
外層外面



26.No.09-051
内層内面



27.No.09-051
内層内面拡大



28.No.11-169
外層外面



29.No.11-169
外層内面



30.No.11-169
外層内面拡大



31.No.20-209-1



32.No.20-209-4



33.No.15-002-1



34.No.08-71 A



35.No.11-181B

01～05：A類 06～15：B類 16～30：C類 31～33：D類 34・35：E類

報告書抄録

ふりがな	じょううるがみこふん						
書名	條ウル神古墳						
副書名	範囲確認発掘調査報告						
シリーズ名	御所市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第56集						
編著者名	金澤雄太(編)、藤田和尊、奥田尚、奥山誠義、柳田明進、大賀克彦、田村朋美						
編集機関	御所市教育委員会						
所在地	〒639-2277 奈良県御所市室102番地 TEL 0745-60-1608						
発行年月日	2019年3月22日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間/面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号				
じょううるがみこふん 條ウル神古墳	ごせし 御所市 じょう 大字 條	29208	16-B-318	34° 26' 35"	135° 44' 39"	(1次) 20020110 ~ 20020329/70 (3次) 20131003 ~ 20140328/212 (4次) 20140801 ~ 20140911/156 (5次) 20150302 ~ 20150330/100 (6次) 20160526 ~ 20160714/50	範囲確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
條ウル神古墳	古墳	古墳	横穴式石室・墳丘盛土・隄・落ち込み		須恵器・土師器・埴輪・鉄刀・鉄刀子・鉄鉈・金銅製冠・ガラス玉	大正年間に確認されていた大型横穴式石室の存在を再確認。墳形は確定できなかったものの、墳丘規模は60m級である可能性が高い。また、横穴式石室南側の墳丘にも埋葬施設の可能性がある落ち込みを検出した。	

奈良県御所市

條ウル神古墳

— 範囲確認発掘調査報告 —

御所市文化財調査報告書 第56集

平成31年(2019年)3月22日

編集・発行 御所市教育委員会

御所市室102番地

印刷 株式会社 笹田印刷所

御所市今住16-3

